裏現実紅殺戮 愛情は狂言

B-零 ａｓｕ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
裏現実紅殺戮　愛情は狂言

【Ｎコード】
Ｎ８０７７Ｎ

【作者名】
Ｂ一零　ａｓｕ

【あらすじ】
闇の中で蠢く裏現実の世界。
紅色に染まった不吉を呼ぶ黒猫、血塗れの少女は殺戮者。
招くのは愛なのか狂言なのか――紅にまみれて笑いましょう。

裏現実紅殺戮（うらげんじつべにさつりく）　第弐章　愛情は狂言

一時の正常

愛とはなんだ？
そんな疑問はばかばかしいと、あたしは思う。
愛情とはまず、親からもらうはず。
だけど、一体、どれが親の愛情だったんだろう。
当たり前にしてくれたこと？それはなに？何だったの？
あたしにはわからない。
あたしには愛がわからない。
本当に愛を与えられたのかさえ、あたしは疑問に思うくらい。
愛を感じてない。
告げられる「愛してる」も「大好き」よりも好きが大きい程度の気持ちを伝えている。その程度にしか、思ってなかった。
愛なんて自愛だ。
友愛も家族愛も恋愛も慈愛も、全部まとめて自愛だとも思ったことがある。
でも。
皮肉なことに。
あたしは血塗れになってから、愛を知った。
愛を視た、愛に触れた。
心地よくて歯痒くて微笑ましいもの。
それを――――奪われた。
奪われたのに、黙っていられない。
見過ごせるわけなかった。
　長い長い廊下を歩く。
わかってる。あたしがやっているのは、復讐だ。わかってる。
わかってるんだ。

でも、あたしは、殺すしか能がない。アイツを殺さなきゃ、百人の人間を殺すだろう。

わかってる。

復讐なんて、バカげた行為なんでしょう？

だって。

あたしだって、奪う側なのだから。

怒りを覚えるなんて矛盾している。そう言いたいんでしょう？

　ピピ。赤外線を踏みつけた。長い廊下に、耳障りな音が響く。

――――ピピピピピ。

不快な音に表情を歪ませて、睨み付ける。

――ピピ。

「んっ………」

　なんて耳障りな音なんだ。

眠りから覚めて音の出所に手を伸ばす。てっきり目覚まし時計かと思ったが違う。早起きする予定のないあたしに目覚まし時計はない。掴んだのは、四角いもの。視界を黒くする髪を掻き上げて確認すれば、紅い携帯電話。

そう言えば、アラームをつけた気がする。今日は予定があるからだ。でも気だるい。

あと数分だけ眠っておこう、と寝返りをすれば目の前に男の人が眠っていた。

男の人、とはあまりにも他人行儀だ。

白瑠さんが眠っていた。

気持ち良さそうに「むにゃむにゃ」と口の中を動かしてあたしの枕

を奪って抱き締めている。
　通りで枕の感触がないわけだ。
何故この人はあたしのベッドに潜り込んでいるんだろう。気付かなかったあたしもあたしだ。一生の不覚。
とりあえず、ベッドを出ようとしたが。無理だった。
あたしの脚を枕代わりに寝ている男の人、じゃなくて藍さんがいる。
　通りで脚が重いわけだ。
何で二人してここに寝てやがんだ?苛々と考えたあとに、散らかったゴミを見て思い出した。
ポテトチップスにさきいかに色々なおつまみの袋に食べ残し、それからお酒の缶が転がっている。
……そうだ。飲み会やってたんだった。
昨夜は多無橋さんからの依頼をやり遂げて、そのお祝いを白瑠さんがやろうと言い出して、何故かあたしの部屋でおっ始めて、そのまま潰れたのだろう。

「おはようございます、椿さん」
「……幸樹さん…」

ぽっかーんとした。
白瑠さんが寝ぼけたフリをして抱き付こうとしたので避けて、藍さんを蹴り落とせば部屋に幸樹さんが入ってきた。

「酷い!変態二人と一緒に置き去りにしたの!?」
「何を言ってるんですか?さっきまで私も一緒に寝てましたよ。シャワーを浴びると起こして伝えたじゃないですか」
「え…?そうなの…?」
「そうですよ」

記憶にない。

幸樹さんはくすくす笑い、あたしに身を乗り出す。
「ネクタイを締めてくれませんか」と。
あたしはベッドに座ったまま幸樹さんのネクタイを締めた。
すると、抱きつきを交わされて拗ねてた白瑠さんがあたしの腰に抱きついてきたので思わず悲鳴をあげる。

「きゃ！やめてください！白瑠さん！」
「んひゃあー、いいじゃんー、朝のハグー」
「僕も！」
「させるかっ！！」

放すどころかギュッと締め付ける白瑠さん。ベッドから落ちた藍さんも抱き付こうとしたが直ぐ様叩き落とす。
グーでもよかったが綺麗な顔を殴る自信は流石になかった。

「皆起きたことですし、朝食にしましょう」

幸樹さんはネクタイを整えてそう言う。
幸樹さん、今日は表の仕事か。
外科医である笹野幸樹さんが作った朝食を一同と摂って、仕事へ行くのを見送った。
あたしは出掛ける準備を済ませてから、リビングの一人用ソファに腰を降ろす。

「ん？あれ…つばちゃん出掛けるの？」
「ええ、そうですよ」

一人で大きなソファに横たわって独占している白瑠さんに訊かれたので平然と返す。怪しまれては家を出れない。

「何の話をしてたんです？怪盗がどうのって聞こえたんですけど」
何処に行くのかと訊かれる前に、向かいにいる穀田藍乃介さんに話を振る。
「有名な怪盗が今、活発に動いてるって話をしたんだ。例の有名人集団の一人さ」
藍さんが言うのは、今裏現実で謎めいた動きを見せている集団のこと。
名の売れた殺し屋に、情報屋、狩人、そして――吸血鬼が、集っていると言う。
あたしが裏現実に入った時期からその噂はたっているが、集った理由は未だ謎。未だにその集団で何かを行動はしていない。
「怪盗……って泥棒ですよね？」
「うん。でも本人は怪盗って名乗ってるらしい」
その集団の情報は、どんな腕利きの情報屋でもあまり掴めないらしい。ほとんどが腕利きの殺人鬼ならばそれほどのリスクがあるのだから簡単ではないだろう。
しかし個人の情報ならば、藍さんにも掴める。
泥棒ではなく怪盗と名乗る裏現実者。有名人ならば、それ相応の腕なのだろう。
「活発って、盗みですよね。例の集団の為に何かを盗んでると？」
「それはわかんない。宝石とかを盗んでるだけみたいなんだよねー」
「その数が多すぎなんだから、活発なんだよぉ」
白瑠さんも会話に入ってプチケーキを加えた。

「那拓遊太（なたくゆうだい）は狙った得物は必ず盗む主義らしいよ」
「那拓？」
あたしは思わず聞き返した。
「那拓なんですか？那拓って……ほら……プライドが高い人なんでしょう？そんな那拓が集団に所属してるんですか？」
「プライドは高いけど……なんだろう、それくらい正常じゃない集団ってことじゃないのかな」
那拓。裏現実者の言わばスペシャリスト。プライドの高い家系の名前。
以前、藍さんに危険だからと関わっちゃいけないと言われた名前だ。
裏現実に生きる家系。
選りすぐりの実力を持つ那拓は、有名だ。そして“危険人物”とも称されている。一人の那拓の存在が、那拓を“危険人物”と認識させた。確か名前は、那拓爽乃（なたくそうだい）。
那拓がいると言うならば、その集団はただの暇潰しで集っているわけない。
藍さんは言った。味方でもヒヤヒヤする奴らだと。
「あれ？僕、つーお嬢に那拓はプライド高いって話したっけ？」
黒縁眼鏡の中の眼が丸められてきょとんと首を傾げられる。藍さんからは訊いてない。
だけどあたしは「ええ」と頷いた。
「那拓まで集めるなんて、何企んでるんでしょうか」
「知らないよぉ、そぉんなぁの」

独り言のつもりが白瑠さんが返してきた。その表情は不機嫌を通りすぎて無表情。
また爆喰いをしている。プチケーキを掴めるだけ口の中に押し込んでいた。
どうもこの話題になると不機嫌だ。
その集団の、恐らく中心であろうリーダーが一番気掛かり。
彼が気掛かりで藍さんや幸樹さんは情報を掴む度に話題に出すのだ。
あたしの頭に“ひねくれた策略家”とインプットされた彼は、あたしが知る限り裏現実で最も名が知れて恐れられている白瑠さん、頭蓋破壊屋、スカルクラッチャーを、唯一逆撫でできる存在。
にやにやといつも笑っている白瑠さんが、“ひねくれた策略家”の存在を思い出すだけでも笑みを無くす。貴重な存在とも言えると同時に、那拓なんかよりも要注意人物だ。
白瑠さんと策略家の仲が悪くて、集団の結成は白瑠さんに喧嘩を売る可能性がある——とかないとか。
幸樹さん曰くその時は白瑠さん個人にしか被害はこないから大丈夫だというが、仮にもあたしは白瑠さんの弟子であるのだから、行動するべきだろう。
師匠の敵は弟子の敵。
——とか正当な理由を用意して白瑠さんがぶちギレて策略家にからかわれてるという珍景を見たいだけだったり。
白状な弟子だ。

「あー……んー……」

すると藍さんが気まずそうに俯いた。何かを言おうと迷っている様子。
あたしはやっと“ひねくれた策略家”の名前が聞けるかと思って藍さんに「なんですか？」と問う。

前回のこの話題のあとに策略家の名前を訊いたら白瑠さんにギラリ、睨まれた。睨みだけでこの人頭蓋骨を粉砕できるんじゃないかと思った一瞬。
幸樹さんと藍さんも白瑠さんを気にして策略家の名前を出さないから、なかなか知る機会がなかった。

「お嬢、出掛けるんじゃないの？」

気を取り直して、にぱっと笑顔で藍さんは言う。

「出掛ける前に僕達のランチ作って！」
「フレンチ！フレンチがいい！つばちゃん！」

ランチと聞くなりバッと白瑠さんは起き上がった。機嫌が途端に回復したもよう。さっきまでプチケーキを食べてたくせに。
なんか話を逸らされたな。
あたしがいちゃあ話しづらい話なのだろうか。…気になる。
とりあえず、あたしは簡単に外出ができるチャンスを捨てないように、ランチを作ることにした。

「じゃあ、あたし、出掛けますが……携帯電話に盗聴機も発信器もつけてませんよね？」

テーブルに並べた途端に席についた白瑠さんを余所に支度をして、最終確認であたしは紅色の携帯電話を藍さんの目の前につき出す。
幸樹さんから貰った携帯電話。疑り深くなるのは当然。

「まさか！つけてないってば、お嬢！」

何度も訊いたがつけてないと答えられる。

「貴方がメールや電話をハッキングで把握してたりしていませんよね…？あたし、そんなことされているなら、即刻にこの家を出ていきます」
「してないしてない！幸樹にも白瑠にもするなって言われてるからしてないよ！」

ぎーろー、と睨みながら問い詰めれば必死にブンブンと藍さんは首を横に振る。
穀田藍乃介さんはハッカーだ。ネット上で殺し屋と依頼人の仲介者もやる。
白瑠さんを見れば、じっと此方を見ていた。
家を出る、のは嫌らしい。
だから真面目に嫌なときにそれを持ち出す。もしもハッキングかなんかであたしのメールが覗かれてたならば、外出なんて出来なかっただろう。再び拷問開始されかねない。
それにしても、何故藍さんはちゃっかりランチまで食べようとするんだろうか。
同居人じゃないのにもう三日泊まっている。まぁ、藍さんがいるから白瑠さんを置いて、出掛けられるのだから文句は言えない。

「本当ですよね。じゃあ、いってきます。白瑠さん、おかわりはキッチンですけど、ランチなんだから十二時になってから食べてくださいね」
「はぁーい。いってらっしゃい、椿ちゃん」
「いってらーお嬢」

白瑠さんはいつもの笑みを浮かべて手をあげ振った。藍さんも胸を撫で下ろしてあたしを見送る。
策略家の名前も、その目的も、那拓の身内から聞き出してみよう。

あたしは家を出掛けた。

「白瑠。怒らないでくれよ、これは確証のない噂だ」

あたしの知らないところで黒が蠢いているとも、微塵も気付かず。

漆黒の、闇が――。

「紅色の黒猫を――捜してるらしい」

道場にあたしは来ていた。

木の匂い。道場らしい匂いがする。

あたしが物珍しく見ていれば、胴着と袴に着替えた那拓蓮真（なたくれんま）君が来た。

「似合ってるね」

「ファッションじゃないだろ」

そう言ってあたしに一つの竹刀を投げ渡す。あたしはパシッと片手で受け取る。

柄を握ってブンッと宙を切り裂く。

「大丈夫なの？君の家に入っちゃってても」

「大丈夫。この道場を使うのはぼくの兄貴がぼくを鍛える時だけだ」

「……ふぅん」

ここは那拓の家だ。危険人物の那拓の家。なんかの名家のお屋敷みたいに大きな家だ。庭は広々と茂っているし、高そうな旅館みたいに高級感がある。
家の隣にこの道場が在る為、家の者にはバレないそうだ。家には使用人がいそうだなぁ、と思った。
早速、那拓遊太について訊きたいが今日は蓮真君に剣道を教わる約束だ。
まずそれを済まそう。

「いいのか？着替えなくて。生憎、防具はないけど」
「いいよ、汗臭いし」

道場のど真ん中に二人で向き合って対峙をした。
にや、と問う蓮真君は剣道では自分の方が強いと思って言っているようだ。
だからこそ教えてもらう。
あたしは同じ調子で返した。
バシンッ。
竹刀と竹刀がぶつかり合う音が響く。
これでもあたしは短剣を使って人殺しをしているのだから、容易く負けてはいられない。
流石に短剣と竹刀の長さが違うため、扱いはイマイチだ。
危険人物と称される男に鍛えられてるだけあって一撃一撃が重い。
ばし、と竹刀が叩き落とされる。次の瞬間、蓮真君の竹刀が頭目掛けて振りおろされた。
思わず目を瞑ろうとしたが寸止めで竹刀は停まった。

「面」

勝ち誇った微笑。

くるり、と竹刀を振り回して蓮真君は離れた。

「紅色の黒猫様から一本とれるなんて、感激だ」

「……歳上をおちょくると痛い目みるよ」

「二歳しか離れてないじゃん」

「それがなんだ！」

「いや、ぼくの台詞…」

くるくると手首を回しながら思い出したように蓮真君は「そういえば」と洩らす。

「お前の身代わりに捕まったやつ、順調らしいな。まさかあの店員が偽者だったなんて、驚きだ。ぼくは彼女を視界にいれてなかった」

“レッドトレイン”の半分の犯人に全てを罪を被らせて警察に突き出した、偽者。

ニュースでは誘拐されたことになっているあたし、山本椿は事実上殺害されたことになりそうだという。順調らしい。

警察内部がどう思っているのかまではわからない。

藍さんのお得意のハッキングで警察のファイルを盗み見しているが、わからないこともある。

例えば――あたしが生きていると言う刑事がいるとか。

例えば――コイツは犯人じゃないと言う刑事がいるとか。

篠塚さんのことが気になって気になって仕方ない。動いているのか動いていないのか。

正直、山本椿（あたし）を目撃した情報が一つでも載っていたなら、全てはぶち壊しになる。水の泡だ。

それを恐れて、気が気じゃなかった。

たった一人を捕まえる為に出した死者は、少なくない。

しかし。

思ったよりはいい収穫した。
蓮真君とこうして会えるのも、あの偽者を追ったからだ。

「ん？なんだよ、椿。思考中か？」

きょとんと首を傾げた蓮真君。次の瞬間、サッと身を屈めて蓮真君の左脚を蹴っ飛ばす。
「なっ！？」と完全に不意を突かれた蓮真君はバランスを崩して倒れる。
ドタンと音がしたと同時にあたしは蓮真君の上に股がり、そして首元に竹刀を突き付けた。

「一回、死ーんだ」

そう驚きで一杯の表情の蓮真君にニヤリと笑いかける。

「っ…！今のは卑怯だ！」
「えっへへー。殺しに卑怯なんてなぁいよ。要は殺した方が勝ちだもん」
「……今は剣道やってんだろ」
「その剣道だって殺しに使うでしょう？」

そういえば押し黙った。
勝った。
あたしは愉快になって笑う。

「……いつまでぼくの上にいるつもりなんだよ」
「あ、ごめんごめん」

すっかり蓮真君の腹の上に座ってしまった。座り心地がよかったか

らつい。
横に移動した瞬間に、蓮真君が竹刀をブンッと振り回してきた。
そんなの、お見通しだった。
パシッと竹刀で受け止める。

「君の眼がやるって眼をしてたよ」
「…ちっ」

脚をバネに飛んであたしと距離を取った。そして体勢を整えて構える。

「ふっ……。君の剣道の実力が殺し屋であるあたしに通じなきゃ、君は殺されるよ」

あたしも立ち上がり、竹刀の先を蓮真君に突き付けて言う。

「お前、ぼくに剣道を教わりにきたんじゃなかったのかよ」

ごもっとも。

「なんか飽きた。こうしよう、何回相手を殺せるかを競おう」
「飽きたって、何一つぼくは教えてない。……わかった。剣道でぼくに勝てないからだな？お前、負けず嫌いなんだろ」
「ええい！勝負をするのかしないのか！？」

図星だったり。
年下になじられてたまるか。さっきの「一本」でかなりプライドがズタズタなんだ。
……はて。いつからあたしにプライドがあったのだろうか。不思議だ。

「するかよ。紅色の黒猫なんかをぼくごときが殺せるかよ」

意外にも、そう蓮真君は呆気なく首を振って竹刀まで降ろした。その目に闘争心はまるきりない。

「今、面一本とったじゃん。真剣だったらあたし死んでたよ。君とあたしは一回ずつ死んだ、さぁ勝負だ！」

「勝手に殺すなよ…」

クールなんだよなぁ。この子。

ぶー、つまらん。

「それでもプライドの高い一家の末っ子か！？」

「これでも末っ子ですがなにか」

涼しい顔をして蓮真君はその場に座り込んだ。

あー、もう。わかったわかった。あたしの負けです。

「ちゃんと教わりますから、教えてよ」

「……はいはい。教えてさしあげましょう」

しゃがんで手を合わして頼めば、蓮真君は微笑んで立ち上がった。

「あ、タンマ」とあたしは今から始めようとしたが水をさす。

「どうせなら真剣でやろうよ。二つある？」

「……ぼく、まだ死にたくないんだけど」

嫌な顔をされた。

「嫌だな…いくら殺戮者のあたしだって友達を殺したりしないよ…」

ショック受けたじゃないか。

「さっきみたいに押し倒して喉切りそう」

「……。いや、でもね、師匠とサーベルとかでやりあうけど、そんなことないよ！」

「明るく言っても今の間が不吉だから、嫌だ」

ハッキリと断られた。

なので真剣ではなく竹刀で剣道を教えてもらうことにする。

稽古は二時間やった。

「さっき言ってたお前の師匠だけど、兄貴なんだよな？」

「ん？うんーまぁ……」

兄貴と言えば兄貴。

兄妹ごっこでお兄ちゃんと呼んだが、都合でお兄ちゃんと称してるだけだって言おうかな。

でもあたしに血の繋がった兄がいないからそれくらい予想ついてるだろう。蓮真君のことだ。彼は賢い。

師匠でお兄ちゃんと言えば、まだ白瑠さんが頭蓋破壊屋だと話していないな。

話そうかなぁ。別に話さなくてもいいが、こちらばかり情報を奪うのは悪い。

「ねぇ、蓮真君。お互いお兄ちゃんの話をしよう。あたしのお兄ちゃんは頭蓋破壊屋なんだ。ところで那拓遊太って蓮真君のお兄さんだよね？」

「……」

沈黙されてしまった。
向かい合ったまま沈黙された。
はだけた胴着から汗に濡れたやや引き締まった胸板が見える。おお、そそる。

「ところでいい身体してるね」
「連続で“ところで”を使うな。お前今早口でとんでもないことを告白したな。最初の“ところで”で上手く流したつもりかよ。つうか二回目の“ところで”はなんだ。しっかりしろ。疲れてんのか？昨日仕事だったんだっけ。悪いなこの日にしかこの道場使えなくてさ。ほら、水分摂れよ」

いっぺんに突っ込まれた挙げ句に心配されてスポーツドリンクを差し出された。
…優しい子だった。
モテてるんだろうね…。
お姉さん、妬いちゃう。

「お前がそんな嘘をつくわけないしな…。一緒にいたお兄さんが――あれが頭蓋破壊屋か。まさかお目にかかるなんて。しかも、師匠なんだろ？おいおい。お前ってとんでもないな」

少し面白そうに笑みを浮かべる蓮真君。思ったほどの反応ではなかった。
あたしが紅色の黒猫だとわかった時も冷静だった。最近の若い子はわからいわ。

「彼があたしを裏に引き込んだの」
「はぁん…なるほどね。煙ないとこに噂は立たない。頭蓋破壊屋が

いて紅色の黒猫は有名になったんだっけ」

『頭蓋破壊屋に並ぶ存在の紅色の黒猫』

そんな噂があるから紅色(あたし)の黒猫も一応有名なんだ。

頭蓋破壊屋あっての紅色の黒猫と言っても過言ではない。…過言であってほしかったり。

頭蓋破壊屋なんて知ったら大抵青ざめてたっていうのに、この子は本当にクールだ。殺し屋に襲われてもあたしに協力してくれた。

殺戮者だというのにあたしとメール友だし、家に招くし（道場だけど）。

「どうしてまた遊太の兄ちゃんの名前が出たんだ？」

「あ…やっぱり、君のお兄さんなんだ」

「ぼくの一つ上の兄貴さ」

「へえ……。ほら、最近妙な動きをしてる有名ばかりが集まる集団がいるじゃない」

「あー、あれね」

「その一人にいるじゃん、那拓遊太さん」

そう言ったら、蓮真君は眼を丸めた。

「遊太の兄ちゃんが……例の集団にいるのか？」

意外と言わんばかりに蓮真君は聞き返す。

「え？知らなかったの？そうらしいけど……怪盗で、最近活発に盗んでるって」

「……どうりで兄貴が最近機嫌悪いわけだ」

少しの間だけで理解したのか蓮真君は肩を竦めた。

「ぼくの情報源って、大抵は兄貴――爽乃兄貴からもらうんだけど、兄貴って遊太兄ちゃんを嫌ってるから遊太兄ちゃんの情報はこないんだ」

どうやら色々複雑な事情が絡んでいるらしい。
胡座をかきながら蓮真君の話を聞くことにする。

「遊太の兄ちゃんは自由人でさ、やりたいことをやる主義なんだ。怪盗はそのやりたいこと。自由奔放ってやつ。数年前から家に帰ってきてないんだ」

家出っ子だった。
「おれは怪盗王になってやる！」みたいに家を飛び出したのかな。
…なんて。
自由奔放、か。
那拓家の問題児、てところなんだろう。それでしっかり者の長男であろう爽乃さんが怒っている。そんな感じか。

「そんな遊太兄ちゃんが兄貴は嫌いなんだよ。へえ、兄ちゃん元気なんだ、よかった」

その顔は少し嬉しそうだった。
懐かしそうにほんわかと微笑んだ。
あ。この子。遊太っていうお兄ちゃんが好きなんだ。

「数年前から会ってないの？」
「いや、半年前に会いにきた。爽乃兄貴が煩いからこっそり。そんときに色々自慢話聞いたり、盗んだもんもらったりした。たまに来るんだよ、ごくたまに。気が向いた時に、な」

「へー…。家族が嫌いってわけじゃないんだね、そのお兄ちゃん」
「嫌いってわけじゃないな、きっと。兄ちゃんって昔からぼくを可愛がってくれててさ、昔から“やりたいときにやれ”っていつも言ってた」
笑顔で蓮真君は語ってくれた。年相応の子供っぽい笑顔だ。
いい兄弟。
それが、いい、関係なんだろう。
いい兄弟関係。
幼い頃の蓮真君を想像しながらも微笑ましい仲いい兄弟を描いてみた。ほのぼの微笑ましい。
「いいな……そんなお兄さんがいて」
微笑ましい気持ちに包まれて、ついつい、あたしはそう呟いてしまった。
「いるじゃん、椿にも」
「あたしが言ってるのは――」
産まれる前から、頭を撫でてくる兄という存在が居て欲しかった、なんだ。
そんなことを、言う必要なんてない。
「“殺したいときに殺せ”っていうお兄ちゃんなんて嫌じゃない」
「あー……確かに。何？頭蓋破壊屋は噂通りの人格なわけ？」
苦笑して同感してくれる蓮真君は訊いた。白瑠さんの人格。
「噂って？」とあたしは訊く。
頭蓋破壊屋の噂はほとんど聞いていないんだ。本人と最初からいる

し、幸樹さんと藍さんから聞いただけ。

「ぼくが周りから聞いたのは、“白の殺戮者”」

白の、殺戮者…？
それは初めて聞く。

「“虐殺の道化師”に“狙われた者は頭を失くす”とか…それなりにイカれてる殺戮者だってこと聞いてるさ」

藍さんも狙われたら最期みたいなことを言っていた気がする。
虐殺の道化師、は多分笑いながら手足をむぎとるところからきてるんだろう。
先日、標的の邪魔なボディーガードを任せたら、暇潰しに人間解体をしていた…。笑いながら…。
噂通りの人間だ、あの人。
…当然か。
裏だけの人間。常に裏の人間。
常に裏だけの殺人鬼。

「うん……そんな感じの人だよ」
「うわ、まじかよ」

からかうように蓮真君は笑った。
そんな殺人鬼の弟子があたしだ。文句あるのか。

「白の殺戮者ってなに？由来は？」
「ん？知らないのかよ、お前の師匠のことなのに」
「君だってお兄さんのこと知らなかったじゃない」

ムッとしてあたしが言えば蓮真君は苦い顔をして「怒んなよ」と言った。

「“黒の殺戮者”が在っての“白の殺戮者”。黒がいるから白なんだろ」

「黒…？」

「黒の方も知らないのか？これは知らなきゃまずいだろう。師匠の敵だぜ」

からかうどころか真顔で蓮真君は言った。

敵、で思い出すのは“ひねくれた策略家”。師匠を怒らす唯一の存在。

「例の集団の一人」

「それなら聞いた。師匠はその人がすごく嫌いだって。集団のリーダーらしいね」

「そう。そいつが“黒の殺戮者”だって呼ばれてる。頭蓋破壊屋と対になる二つ名をつけられてるだけあって、そいつも相当なイカれた奴だってさ」

「どんな感じに？」

「頭蓋破壊屋並に」

「…もっとまともに説明してよ」

「簡潔な説明だけどな」

まさか訊くまでもなく蓮真君からひねくれた策略家のことを話してくれるとは。

対になる二つ名がついているような仲なのか。

ますます二人が会うところが見てみたい。危なくないなら接触してみようかな。

「どっちかって言うとこうゆう殺し屋の情報は椿が知るべきじゃな

いのか？」と蓮真君は文句を言ってきた。
「裏に入ったばかりだもん」とあたしは返す。
「ぼくは今現在表側の人間だけど」と学生の蓮真君は言う。
そういえばこの子は裏現実者であっても表は学生で裏は無職なんだっけ。

「危険人物一家の末っ子のくせによく言うわね」

そう言えば蓮真君は膨れっ面で黙り込んだ。あたしの勝ちぃ。
可愛いとからかえば竹刀の先で足を小突かれた。

「噂じゃあ椿みたいに真っ赤な血を浴びるのが大好きらしい」

攻撃の仕方を変えてきやがった。別にそんな皮肉を言われてもあたしは怒りません。

「頭蓋破壊屋が脳味噌をぶちまけるなら、黒の殺戮者は身体中の血液全てをぶちまける奴なんだって」
「……似た者同士ね」
「そうなんだろうな」

苦い顔であたしが言えば、苦い顔で蓮真君は笑った。

「そんな二人が仲良かったらとんでもないわね」
「そりゃあ狙われる側は至極最悪だろうな」

冗談混じりに二人して笑う。
「それで」と一頻り笑ってから話題を変えてみた。

「蓮真君は何になるつもりなの？」

表は学生、裏はまだ無職だということを思い出してあたしは訊きたくなったので訊く。

「将来の夢の話？」

「そう。殺し屋になるのか狩人になるのか情報屋になるのかハッカーになるのかはたまた怪盗になるのか。裏の役職はそれくらいしか知らないけど、どうなの？」

あー、そっちの話か。

と、蓮真君はつまらなそうな顔をした。

「さーな。なりたいときになりたいものになる」

ちょっと言葉を選ぶように考えたあとに、蓮真君はそう微笑を浮かべて答えた。

そっか。

あたしは素っ気なく頷く。

「殺し屋になりたくなった時のために天下の紅色の黒猫さんに殺しを教わりたい」

「教えるようなことじゃないけどね。人間、簡単に殺せるもの」

誰にも教わらなくても、人間は人間を殺せる。凶器が持てるなら幼児にだって殺せるんだ。

「簡単でも、殺せない奴もいる」

簡単に殺せる、のはそうだ。突発的に殺ってしまった殺人。カッとなって殺した、殺人がほとんどだ。

殺せと命じられて殺せるのは殺し屋を名乗るやつくらいだ。
そんなやつになれるのかどうか。
殺人を躊躇わずにできるのかどうか。
――殺人を躊躇わない方法を教えてくれ、と言うことだ。

「……生憎」

あたしは言う。

「人を殺せない奴なんか、あたしは理解できない」

と微笑んで答えた。

「言ったでしょう？あたしは殺戮中毒者。躊躇ったりしない」
「ぼくでも？」

間をいれない問いだった。
あたしがそう言うのを待っていたかのようだ。
蓮真君は真っ直ぐにあたしを視る。

「さぁ……。今はもうちょっと友達でいたいから。殺す気はないよ」

茶化すように笑ってあたしは答えた。

長居はできなかった為、その休憩を最後に那拓家をあとにした。
剣道も経験したし、聞きたいことは聞けたので満足だ。
ひねくれた策略家の名前は流石に知らなかったようだったから、秀介辺りに聞くとしよう。秀介ならきっと黒の殺戮者を知ってるだろうから。
裏現実の鬼。鬼の狩人。殺し屋などを狩る用心棒。

秋川秀介（あきかわしゅうすけ）。
それなりに最強で腕利きの狩人なのだが、頭蓋破壊屋の白瑠さんには及ばないらしく、遊ばれている。
秀介は白瑠さんの敵ではない。
そうなると、黒の殺戮者の最強さが気になるところだ。
…黒の殺戮者、か。

「おっかえりぃー！つーばちゃん！」

家に帰るなり、玄関で待ち構えていた白瑠さんに出迎えられた。

「どうしたんですか…？玄関で待ち構えてなんかして」
「んー、つばちゃんが帰って来ないかと思って」
「…発信器をつけてたんですか」
「いや、つけてないよ」
「盗聴器ですか」
「ううん」
「……？ならなんであたしが帰ってこないと思ったんです？」
「なんとなくぅ」

にこにことした笑顔の白瑠さん。なんだか、妙な違和感がする。
ふと、白瑠さんの背後に置かれた二つの短剣が目に留まった。
それに気付いた白瑠さんが一言。

「一戦やろう！」

……。
とりあえず、あたしは。

「藍さんは？」

状況分析をすることにした。後ろの扉を逃亡際にすぐに開けられるよう足を挟んでおく。

「帰ったよぉ」

「……なんで、また」

「さぁ」

こりゃまずいぞ。

この人怒っている。笑いながら怒ってやがるぞ。

出掛けてる最中に一体何があったと言うんだ？

藍さんがうっかりひねくれた策略家の名前を口にしたのか？それで逃亡？

何してくれてんだ！あのロリコン野郎！

…いや、でも…八つ当たりをするような人じゃない、よな。

「ねぇねぇ、つーちゃん！やろぉう」

……八つ当たりをする人、らしい。

滅多に怒らないだけで八つ当たりをする人、なのかもしれない。

仕方なくあたしは短剣を受けとることにした。

リビングに向かって白瑠さんと対峙する。ついさっき蓮真君と戦っていたというのに。

竹刀よりは慣れた長さの短剣をくるり、と回す。

「それで」と口を開く。

「何を怒ってるんですか？」

「えー？怒ってないよ？」

質問をしたと同時に白瑠さんが動いて、短剣を振り下ろしてきた。

反応に遅れていたら間違いなく斬れていたぞ。
短剣を盾に防ぐ。
　怒ってんじゃん！
容赦ない斬撃が振られる。前回同様に押されていく。
ナイフ使いの殺し屋としては押されたくはない。プライドってもんがある。だからあたしにプライドっていつからあるんだ。
本気を出して斬りかかろうとしても、実力が上である師匠にかすり傷一つつけられない。
攻撃をする暇を与えずに斬りかかる。一見、あたしが押しているようだが、白瑠さんは全く余裕だ。笑ったまま一つ一つあたしの斬撃を防いでいく。
防ぎながらソファを飛び越えたから、あたしも飛び越えて腕を振るう。
無我夢中になっても、やっぱり。初めて会った時から思っていた。
　この人には敵わない。
　この人の敵じゃない。
　この人を、殺せない。

「……っ！」

突っ込んだら安易に避けられ、挙げ句に足を引っ掛けられてあたしはベッドの上にダイブ。
いつの間にかあたしの部屋にまで、来ていたらしい。
前回同様じゃないか。
直ぐ様起き上がろうとしたが、もう遅く――仰向けになったところで白瑠さんが股がり首に短剣を添えられていた。
突き付けられた短剣。
ただ笑みで見下ろしてくる殺し屋を――殺戮者を、無表情に見据えた。
動かず、足掻かず、ただただ見据える。

そんな眼が気に食わなかったのか。
白瑠さんから笑みが一瞬だけ消えた。
でもすぐに、チェシャ猫の笑みを浮かべて白瑠さんは短剣を退ける。
「椿ちゃんさぁ、君ってぇ」とのんびりした口調で言った。

「俺に殺されたいの？」

それとも。

「俺が殺さないと思ってるの？」

そんな問いにあたしは。

「……――――」

あたしは。

戸惑ってしまった。

どっち、なんだろう――――って。

一時の正常（後書き）

どうも。
前編ではとんでもない誤字誤植が多くてすみません。篠原さんって誰だよ、彼は篠塚刑事です！ごめんなさい！ミサがリサとか…。誤字誤植が多くならないよう心掛けます。…心掛けるだけ。
今回は『愛』がテーマです。何故かヒロインの周りには異性しかいないのが最大の謎です。皆さん解いてみてください。…答えはありません。
シリアスでダークのはずなのに何故かギャグで騒がしい『裏現実紅殺戮』をよろしくお願いします！

「何言ってるんですか、白瑠さん。あたしが不要なら殺しくださいと頼んだでしょう」

あたしは、そう答えた。

白瑠さんは、そっかとだけ頷いて退いて「夕飯作ろう」と笑顔で部屋を出る。

あたしは暫くベッドの上にいた。

不要なら殺してくれと、前から言ってる。だから、白瑠さんに殺されても構わないと思っているんだ。

こんな頭を粉砕してくれるなら礼だって言う。

でも。何故だろう。

白瑠さんはあたしを殺さないだろうと、何処かで思っている。

どうしてだろう。

それは多分。白瑠さんにはもう情が移っているからだと思うから。

あたしが蓮真君と秀介を殺せないのと同じ理由だ。

翌朝はぐっすり眠れてすっきりした目覚めをした。背伸びをして、残りの眠気をとってベッドを降りて顔を洗う。

リビングに来て、きょとんと首を傾げた。

いつも用意してあるはずの朝食が、テーブルの上にない。

あれ、どうしたんだ?

休みでもちゃんと朝食を作ってくれているのに、帰ってきてないのか?

あたしは幸樹さんの部屋に向かった。いないと思ってノックをせず

に開く。
幸樹さんはちゃんといた。
ベッドの上に幸樹さんはまだ眠っている。幸樹さんでも寝坊はするのか。
あたしは起こそうと近寄ったが、机の隣にある棚に目がいって留まる。
彼の妹の写真が――――ない？
この前見たときはあったはず。なんでないんだろう？
と、思ったがただ写真立てが落ちていただけだった。
あたしはそれをしゃがんでとる。
写真に写るのは笹野咲さん。純白のワンピースが似合いそうな女の子が笑っている。
殺された女の子。
兄を裏に引き込んだ妹。

「何してるんだい？」
「ひゃあ！？」

耳元に息とともに吹きかけられてあたしは悲鳴を上げで震え上がった。
振り返れば、幸樹さん。
髪を掻き上げて微笑んでベッドからあたしを見下ろしている。
何も悪いことをしてないのにギクリとしてしまう。

「おはよう、ございます」
「ふふ、男の部屋に入るなんて。いけない子ですね」

ちゅ、と耳に幸樹さんはキスした。ぴっきーん、と硬直。
そんなあたしをクスクスと笑いながら写真立てを取り棚に戻す。
欠伸を洩らす幸樹さんの着ているＹシャツはボタンがつけていなく

はだけている。
蓮真君と違うこれまた大人のお色気を醸し出した雰囲気にあたしは動けない。
　あたし、この人が苦手だ。
どんな女の人も落とすだろうこの人が苦手だ。
いや、だって、あたしも一応、女ですから。

「あー、寝坊してしまいました…。お腹空きましたか？」
「いえ、大丈夫ですよ。幸樹さんも寝坊するんですね」
「昨日はオペで患者を殺してしまいましてね…」
「……」
「ああ、間違いました。患者を助けられなかったんです」

疲れたように溜め息を吐いて額をさする幸樹さん。
裏は殺し屋。表は医者。
裏は命を奪い、表は命を救う。
表裏一体の人間。

「かなり瀕死な状態で運ばれたので仕方なかったと割り切れますが……その数が、ね」
「数？」
「テレビをつければわかります。ニュースになっているでしょう」

大事件が起きてかなりの患者が運ばれたみたいだ。
幸樹さんの部屋を出てリビングのテレビをつけてニュースを探した。
やっていたのはホテルの火事のニュースだ。
物凄い爆発で泊まっていた人間もそのホテルの従業員もかなりの数が怪我を負ったらしい。

「火傷ですか？」

「ええ。あと無理に飛び降りて骨を折った患者もいました。色んな病院に運ばれたらしいです、私の病院には十五人運ばれ死んだのは十人です」
「……幸樹さんの病院とずいぶん離れてますよ」
距離が離れている。これは助けられない可能性が多くても仕方ないのではないだろうか。
医者じゃないあたしに慰めの言葉なんてかけられない。
「おや？慰めてくれるんですか？なら抱き締めてください。その方が効果的ですよ」
そう言って幸樹さんはあたしの肩に凭れた。うっ……。
あたしは躊躇したが、幸樹さんの頭を包むように腕を回した。
恥ずかしさを紛らわす為にニュースを見て思考する。
死亡者は、二十一人。
レストランの厨房が爆発して引き起こした大火事だとかで詳しいことを調べている最中だそうだ。
最近の日本は危なすぎる、とキャスターがそう意見を述べる。あたしも同感だ。
まぁ、最近どころか遥か昔からこの血塗れの人殺しが蠢く裏の世界が存在してるが。
きゅるるる。
お腹が鳴った。誰の、とはあえて言うまい。
「ご飯、作りますね」と幸樹さんは小さく笑いながら立ち上がった。
紅潮しつつも手伝おうと立ち上がったら。
「ぎゃああ！？なんで気配消してそこにいるんですか白瑠さん！」
真後ろに白瑠さんがいた。じぃーと黙ってソファに隠れてあたしを

見ていたらしい。ホラーか！ビビったわ！

「ずぅるぅいー。どうしてこうくんには抱き付いて俺に抱き付いてくれないのぉ？」

「えぇーと……」

「日頃の行いのせいでしょう」

だらだらと“抱きつき”の話を白瑠さんにされている最中に幸樹さんは一人で朝食を作った。

それを食べてから裏の仕事についての話をする。また大仕事をするそうだ。

白瑠さんが乗り気なだけ。

今度は情報一つも漏らさずに回収して挑もうという話をした。

前回、白瑠さんの大仕事をしてあたしが大怪我を負ったことを気にしているようだ。かなり三人は悔やんでいた。

そういえば、とあたしは思い出す。

あたしに怪我を負わせた弥太部矢都（やたべやと）は、白瑠さんを怒らせていたような。

この人の地雷はイマイチわからない。ひねくれた策略家はその地雷の位置を知っているようだがあたし達はどうもわからないのだ。

藍さんはそれを心が狭いからと言っていたがそれこそイマイチわからない。

心が狭いなら地雷は踏みやすいだろうが。

そう思っていれば藍さんがやってきた。噂をすれば。

「お嬢！再会のハグー！」

「あれ、ラトアさん。いらっしゃい」

「え…まさかのスルー！？」

藍さんと一緒に項垂れたラトアさんが来た。

「ああ…邪魔する」とソファにどすんと座るラトアさんはサングラスとフードをつけて完全に紫外線防御をしている。

「おや？ラトアが呼んでもないのに来るなんて珍しいですね。どうしたんですか、今日は」

確か今は藍さんの家に泊まっていると言っていた気がする。藍さんの家は、家と言うよりアジトだが。
幸樹さんは陽射しを遮る為にカーテンを締め切って電気を付けた。

「仕事の話を持ってきた」

フードだけを外してラトアさんは言う。

「ラトアさんからの仕事？」
「ああ、仕事だ」
「お嬢お嬢、先ずは僕の話から聞いてよー」

ラトアさんとは逆側にある一人用ソファに腰を下ろして藍さんは口を尖らせる。

「え？なんです？皆して仕事の話ですか？」
「大丈夫大丈夫、僕の話は殺しの話じゃないよ」

ラトアさんのソファの肘掛けに座って首を傾げた。仕事＝殺しじゃないのか？

「多無橋氏が、お嬢を食事に招待したいんだって」

……。

沈黙した。
脳内に浮かぶのは人のいい笑顔を向ける悪魔。
幸樹さんと別の意味で苦手な人。

「断ってください」
「断って」
「お断りください」

ほぼ同時に三人の声は重なった。
あたしと白瑠さんと幸樹さんだ。
目を丸めて顔を合わせる。絶妙なハモリでした。

「だよねー。やっぱり断っておくね。相当つーお嬢が気に入ってるみたいだ、最近仕事は全部お嬢名指しだよ」
「らしいねぇ。つーちゃんの十一月の仕事の二つはそうだもん」

藍さんに白瑠さんが返す。相変わらずにこにこ。
多無橋さんにはあたしもムッとする相手だが白瑠さんはそんな彼にも変わらない態度なんだよな。
二人して玩具であるあたしを取り合っているようなものなのに、どうも白瑠さんは“形だけ”相手しているよう。

「なんで食事に誘うんですか…」

映画でよく見る高そうなレストランを思い浮かべつつもあたしは青ざめる。残念ながらあの人と会話を楽しむなんて行為はしたくない。
あの人は他人をおちょくるのが趣味に決まっている。絶対にお断りだ。

「つーお嬢に紅色のドレスを着せたいとか」
「セクシーなドレスが見たいとか」
「それは貴方達でしょ」

キラッと眼を輝かせる藍さんと白瑠さんを一蹴する。

「単に食事をしたいか、或いは直接話したい仕事があるのかもしれません」

幸樹さんはまともなことを言った。直接話したい仕事？それは気になる。

「……やっぱり行きます」

ちょっと迷ってからそう言えば、二名から嫌な顔をされた。

「兄としては、許可できませんね」
「だめだよぉ、だめだめ。デートなんて」
「お兄ちゃんの言う通りにしなさい。……ぐふふ」

幸樹さんも入って反対した。

「藍さんの妹になった覚えはありません。変な妄想してにやけるのもやめてください…」と藍さんに釘を刺す。

「仕事なんですからいいじゃないですか」
「単に食事に誘ってるだけかもしれませんよ」
「どうして十代の餓鬼を誘うんですか…」
「いい年頃じゃん」

未成年に手を出すなんて犯罪だよ。あえて言わないけど。言えない

けど。

「いつに食事をしよって多無橋さんは言っているんです？」
「今夜だって」
「えー！今夜は俺と添い寝する約束だよ！」
「いつそんな約束したんですか！」
「私とデートの約束ですよね」
「二人して出鱈目をつかないでくださいよ！」
「オレがついていけば問題ないのだろう」

デートはともかく、なんじゃ添い寝って。
ぎゃあぎゃあ口論していれば、ずっと黙って聞いていたラトアさんが口を開いた。

「本人が行きたいと言ってるなら行かせればいいだろう。もしもの時はオレが盾になれば安心だろ。何か可笑しな雰囲気ならば強制して連れ帰る。それでいいだろ？お前達は過保護か」

呆れたようにラトアさんは言う。言われた過保護組は口をぽっかーんと開ける。まさかラトアさんに言われるとは思いもしなかったらしい。

「うひゃひゃひゃひゃ！」
「うお！？」

どこから出したのか、ナイフを白瑠さんが取り出して哄笑しながらラトアさんの心臓目掛けて放つ。
左隣に座っていたあたしは驚いて離れる。

「ぐっ…何しやがる、貴様ぁ」

「ひゃひゃひゃ、いやあ面白くて面白くて、つ・い」

語尾にハートマークをつける白瑠さんは超笑顔。心臓からナイフを引き抜くラトアさんは超怒っている。
多少の出血が見られた。ナイフについてる血は紅。吸血鬼も紅い血のようだ。

「やめてくださいよ、白瑠さん。そうやって遊ぶのは。大丈夫ですか？ラトアさん」
「そうですよ、白瑠。家を血塗れにするのはやめてください」
「えー、つーちゃん血塗れ好きじゃーん」
「だからと言ってラトアさんを刺す意味がわかりません」

ラトアさんが怒り任せに投げ返す前にあたしはナイフを取り上げた。
言いつつもナイフの紅に見とれていたりする。

「つーちゃんラトアに優しい…」
「お嬢ラトアに優しい…」
白瑠さんと藍さんはつまらなそうに唇を尖らせた。

「いやだって…趣味あうし、自由にさせてくれるお兄ちゃんだし」
「ラトアだけお兄ちゃんって認めるの！？僕は！？」
「いや、ラトアさんは親戚のお兄さんで、藍さんは近所の変態です」
「身内にはいらない！？せめてお兄ちゃんとつけてよ！」
「ねっ、幸樹お兄ちゃんいいでしょ？」
「僕もお兄ちゃん攻撃を受けたいー！！」
「藍、黙らないと出入りを禁じますよ」

一人騒ぐ藍さんを幸樹さんは冷たくあしらう。
あたしは落ち込む藍さんなんて無視をして幸樹さんと白瑠さんをし

ゃがんで見上げた。

「おやおや、行きたいんですか？椿さん」

「仕事の話じゃなかったら行こうとは思いません。仕事の話じゃなかったら即帰りますよ。ラトアさんもついてるならいいでしょう？お兄ちゃん」

ねっ？とせがむ。

そうすれば、こしょこしょと顎を白瑠さんに撫でられた。

玩具、よりペット感覚なのだろう。あたしの存在は。妹、よりペットだ。絶対。

「んーじゃあしょうがないなぁ。今回だけだよぉ？」

「そうしましょう」

折れたのは二人だった。

ひゃっほい！二人に勝ったぞ！

「お願いしますねっ、ラトアさん！」

「おう」

「あれ？ラトアさんも話があるんじゃなかった？」

「オレの話はあとででいい」

ふぅん、そっか。と頷く。

実はラトアさんの仕事も気になっていたりする。が、ラトアさんと二人きりのお出掛けが楽しみだったり。

蓮真君と同じノーマルだから、この人。

ノーマルはいい人。ノーマルは癒される。ノーマルは不快じゃない。

ノーマル大好き。

「で？お嬢の服装はどうするの？」

復活した藍さんがピカンと眼を光らせて話を持ち出した。

「え？ドレスの話ですか？」

「セクシーなの駄目だよぉ、反対」

「何もドレスじゃなくてもいいでしょう」

「えー、椿お嬢のドレス見たかったなぁ」

「依頼者相手にそんなサービスは不要でしょう」

ドレスなんて着れるか。却下されて胸を撫で下ろす。また藍さんが用意するつもりなんだろうが、露出の多いドレスなんて御免だ。

「じゃあタイトだね！」

「へ？」

きっらぁーん、とるんるんな笑顔で白瑠さんは身を乗り出した。タイト？とあたしは首を傾げる。

あたしは溜め息を溢した。重く長い溜め息を吐く。

「どうせこうなるんだ…全く、家出しようかな…」

「そんなことを呟いたら監禁されるぞ」

呟けばラトアさんが忠告した。

夜になってレンタカーでラトアさんが運転して待ち合わせ場所に向

かっている最中。
あたしの格好はスーツ。レディーススーツ。紅色のスーツ。

「普通の格好にしてくれればいいのに」
「普通の格好では入れないレストランなのだろ」
「あたしっていつも武器を軽量に持つと痛い目を見るんですよ」

また一つ溜め息をつく。
タイトスカートだしあまり武器を入れられていない。腕に短剣、タイトスカートの中にナイフ。
何とも動きにくいヒールを履かされてしまい、ナイフは三つだけ。

「マシンガンに囲まれても命だけは助けると誓ってやる」
「せめて傷一つ、と言ってくださいよ。嘘でいいから」
「吸血鬼は嘘を吐かない」
「おや、好意が膨らみますねぇ」
「吸血鬼好きだな、お前は」
「ええ、すっごく。何かアクションの入った吸血鬼映画ってありません？新作の」
「それならアメリカで一足先に公開してる映画がある。お前の好みにあうかもしれん」
「まじですか？題名教えてください、日本で公開するのを待ちます」
「アメリカに行けばいいだろう。仕事のついでに」
「英語弱いんです」
「お前幾つだよ…」
「十八です、ラトアさんは？」
「答えるもんか」

思った通りラトアさんとほのぼのと趣味の合った話が出来た。
吸血鬼が吸血鬼映画が好きなんて傑作だが話が合うならよろしい。

吸血鬼映画が好きな友達って一人もいなかったんだよな、あたし。
ラトアさんはそれなりに打ち解けてくれたらしく口元に笑みを浮かべたまま話をしてくれた。

「あ、今月に公開するラブストーリーの吸血鬼映画なんですけど一緒に観に行きません？」
「ん？ああ、あれか。確か小説からヒットしたものだったな。全米では大人気の」
「そうそう。日本でヒットしないのが本当残念です。…で？一緒に行きます？一人で行くつもりだったんですけど、ほら観終わったあとに楽しく思い返しながら話とかしたいし」
「そうだな。一緒に行ってやる。ただし夜にな」
「やったー！」

映画観賞に行く約束も果たした。やったね。一人寂しく行かなくて済んだ。
ラトアさんとなら楽しんで観れる。

「あ、ラトアさん。一つお訊きしたいんですが、“黒の殺戮者”をご存知ですか？」

二人きりなので、名前を出せないひねくれた策略家の話題を出してみる。
そしたらラトアさんは怪訝な顔をした。

「そりゃあ……当然に知っている」

それがどうしたんだ？とあたしをチラリと見る。
意外にも安全運転をしてくれる吸血鬼さん。観に行く吸血鬼映画の吸血鬼みたいにスピード狂ではないらしい。

寧ろスピード狂は白瑠さんだったりする。

「いえ、ただ名前を知らないかなぁと思いまして。白瑠さんとは宿敵の仲らしいし、藍さんも幸樹さんは名前を出そうとしないから聞けなくて。名前を言っちゃいけないあの人でも名前はあるんでしょう？」

白瑠さんの前では訊けないが、常に白瑠さんがいるから二人には訊けず仕舞い。だから今、ラトアさんに訊いた。

「本名を知る必要があるのか？」

ラトアさんはそう問う。

「知っていても損はないでしょう？」

「……どうだか。お前はクラッチャーの弟子なんだから知る必要などない。黒の殺戮者という通り名を知っているだけで十分だろう」

「弟子だからこそ知っておくべきなんじゃないんですか？何も黒の殺戮者だって名乗るわけないし」

「アイツはそう名乗るんだ」

はっきりとラトアさんは断言した。

あれ？そうなんだ。あ、普通殺し屋は通り名を使って仕事をするか。

「心配しなくても弟子だからと言ってアイツがお前に自己紹介する日など来ないだろう。自らクラッチャーの元に来ない。アイツらは仕事が被った時にたまたま会って取り合うだけだ」

仕事。殺しの標的。

つまりはプライベートで会うような仲ではないってことか。

「あたしとの仕事が被って会う可能性はありますよね？」
仕事で被るなら白瑠さんと仕事を続けていけば会う可能性があるだろう。
「まるで会いたがっている口振りだな。やめとけ、ろくなことにならないぞ」
「何故です？幸樹さんは冷酷な人ではないと言ってましたが」
「……言いたくはないが。クラッチャーがオレにナイフを刺すように、アイツもオレを怒らせるんだ。恐らくお前もアイツにそんな扱いを受けることになるぞ」
ちょっとラトアさんを哀れんだ。
そんなことを言わせてごめんなさい。
「なんですか？白瑠さんが二人いると考えるべきですか？」
「嫌だが、そんな感じだ。二人は奇しくも似た者同士だからな」
似た者同士。
白の殺戮者が脳味噌をぶちまけるなら、黒の殺戮者は身体中の血をぶちまける。
ぶちまけるのが好きな似た者同士。
今までの情報からして、あれか、ひねくれた策略家は全くの同類――というか鏡のように似た者同士なのではないか？
あたしと白瑠さんは同類だと思っていたが、ひねくれた策略家は同類の中で一番白瑠さんに似た人物なのかもしれない。
会いたい気が、しなくもない。
白瑠さんと同類なら、あたしとも同類。同じ殺戮者。イカれた殺戮者。

車は停止した。目的地についたのだ。待ち合わせのホテルの近くに停めたのはラトアさんが付き添いに来たのを見られないため。あたしが先に降りてラトアさんは車を適当な場所に置きにいった。慣れない高いヒールで一人ホテルに行けば、多無橋さんは出口に立って待ち構えていた。
短髪の人が良さそうな笑みを浮かべた眼鏡の男。秘書もボディーガードもつけずに一人で立っていた。

「やぁ、椿ちゃん。ドレスを着てくると期待したんだが残念だ。まぁ、来てくれただけ嬉しいがね。大人っぽくてセクシーだよ、その格好」
「……どうも、多無橋さん。本名で呼ぶのはやめていただけないでしょうか」
「ああ、これは失礼。黒猫ちゃん」

明るく話し掛けてきたが不快に思って言えばすぐに笑って謝り多無橋さんは呼び直す。
苦手なんだよなぁ、この人。
藍さんのお得意様だから断りにくいから回される仕事を引き受けているが、どうも腹黒そうなので関わりたくない。
早速、ホテルの一階にあるレストランへと誘導された。
ラフな私服では入店を断られそうな高級感溢れるレストランだ。三ツ星かな。
こんな店じゃあ落ち着いて食べれそうにない。率直に話だけ聞いて帰ろう。
席について「何を食べるかい?」と問われたので首を振る。

「いえ、あたしはただ話を聞きに来ただけなので結構です」
「話なら食べながらでいいじゃないか」

「食べながらじゃなくとも聞けます」
「遠慮しないで」
「仕事の話がないのなら、帰らせていただきます」
そういえばメニューを見ていた多無橋さんはクスリと笑った。
「仕事の話があると思って来たのかい？」
「Ｉさんには聞かれたくない話があるのかと思いまして。ないなら失礼します」
立ち上がれば笑ったまま多無橋さんは手を上げて制止の指示をする。
「君は仕事以外では会ってくれないのかな？」
「ええ、必要ないでしょう」
冷たく答えても多無橋さんの笑みは消えず、クスクスと笑い声が漏れる。
「冷たいね、ふふ。まぁ来てくれただけでも感謝しよう。仕事の話はちゃんとある、腰を降ろしてもらえるかな」
嘘ではないだろうと思い、あたしは腰を降ろした。
「来たのは仕事の話が気になったからかな？それとも師匠さんが行けと命じたのかい？」
「前者ですよ」
「そうかそうか。とりあえず料理を頼もうか、魚がいいかな？寿司は好きかい？ここの寿司は絶品なんだ」
「……生物は苦手なんです」
「そうなのかい？好き嫌いはよくないなー。鳥はどうだろう？好き

かい？」

仕方なくあたしは「好きです」と頷いた。しつこいな、この人。
もう帰りたい。仕事なんてどうでもいいから帰りてえ。面倒くせえ。
多無橋さんはウェイターに注文をしてからあたしと向き合う。

「黒猫ちゃん、偽者の件はお疲れ様。見事目論み通りにできたね」

一々不快な言葉を選んでくる人だ。
「その話をする必要はないでしょう」と返す。

「そんなつれなくしないでくれよ、傷付くね」

ボロボロに傷付いてくれるならあたしは喜ばしいのだが。微塵も傷付いてないし、逆に楽しんでいるだろう。

「どうやって追い詰めたのかを是非聞きたいんだ」
「……」
「…残念だね。気になって夜も眠れなかったんだけどなー」

……帰りたい。

「赤ワインでよかったかな？君に赤が似合うからつい」
「……構いません」

もう何でもいい。つか、帰ろうかな。本当は仕事の話なんてないのかもしれない。
そう思っていれば、やっと多無橋さんは本題に入ってくれた。

「君は世間をよく知ってるかな。つまりは裏の、だけど」

「……いえ、あまり」
「そうか。なら知らないかもしれないな。指だけがなくなっている死体を」

裏現実での話。
指だけがない死体。
白瑠さん達からは聞いていない。あたしは横に首を振るう。

「大事な取引相手が指だけ無くして死体で発見されたんだ。とても困ってしまってね、取引相手が持つブツまで持っていかれちゃったんだ」

肩を竦めて多無橋さんは困った素振りをした。表情はかなり困ってなさそう。

「相手はブツを狙う者ですか？」
「それは定かじゃない。どうにも無差別で殺られただけ、の可能性が高いんだ。指なしの死体は他にもあってね、多分連続猟奇殺人だと思われる」

そこで料理がきて、美味しそうな鳥料理が目の前に置かれた。美味そうなんだけどなぁ食欲ねぇよ。

「指を集める趣味のそいつを殺って、ブツを回収してほしいと？」
「簡潔にはそうだ」
「どうしてＩさんに通して話さなかったんです？複雑な事情でもあるんですか？」
「単純な事情ならある。君個人にやってもらいたいんだ」

あたしは眉間にシワを寄せた。単純な事情じゃなくて単純な私情じ

ゃないのか。
つまりはIさんこと藍さんにも知らせず、師匠こと白瑠さんにも協力を煽らずに、一人でやれとのことだ。

「多無橋さん。あたしを過大評価しないでください。仕事は師匠とやりますから」
「過大評価かどうかは、君が遂行できるかどうかで決まるさ」

たった一人でやるように話を進ませようとしてやがる。
この人は何かとあたしを試したがるのは何故だろうか。
試すってことはそれなりに無茶な仕事になるだろうことは安易に予想できる。

「お断りします。前も言いましたが一人で仕事をするのはまだ早いですから」
「しかし、いつかは一人でやるのだろう?この仕事を機に一人でやってみればいいじゃないか」
「それは師匠が決めることです」
「君はいつも師匠さんの意見に従うのかな?君にとって師匠さんはそれほどの存在なのかい?」

もうそっぽを向いて帰ろうとしたが、多無橋さんはその名を口にした。

「頭蓋破壊屋ならば、偉大だね」

一口サイズに切ったチキンを口に入れて、そう微笑む。
前会った時には、白瑠さんを頭蓋破壊屋だと知らなかったはずだ。
藍さんが話したのだろうか。別に隠す程でもないことだ。
しかし、それでは話が可笑しくなる。

「何故あたしなんです？クラッチャーさんなら確実に遂行するでしょう」

若い、まだ成り立ての殺し屋よりも、超有名の殺し屋に依頼した方がいいに決まっている。

「そんなの、つまらないじゃないか」

…訊いたあたしが悪かった。

この人は、あくまであたし指名。

紅色の黒猫を指名しているのだ。

新しく見つけた魅惑の玩具のような、お気に入りなのだろう。

あたしは一息ついてからチキンを一口、食べた。

「大事なブツならば、確実に遂行できる殺し屋がいいはず。失敗しても構わないのですか？」

「失敗は困る。大事なブツなんだよ、ほんと。Ｉには秘密にほしい……ふふ、とある貴重なプログラムが入ったメモリカードなんだ。君がちゃんと遂行すると信じているよ」

身を乗り出して、そう囁いた。

藍さんには話せないプログラム？それこそ、藍さんに話して危険度などを訊かなくてはいけないニオイがする。

どうにもくさいぞ。何かを隠していないか？この人。

「指切り魔の実体は…？調べはついたんですか？」

「いやいや、それは無理だ」

……は？

掌を見せてお手上げのポーズをする多無橋さんは「そう嫌な顔をしないでくれ」と言う。

「あたしに……自分で探せと言うんですか？」

「偽者を探し出したじゃないか」

「っ、それはあたし一人の力ではありません。尚更」

「情報ならこちらが全て集めて提供しよう。仕事の条件は一人で遂行すること、他言しないこと」

あたしの台詞を遮って多無橋さんは勝手に話を続ける。

あたしが反論しようとすれば「嗚呼、それから」と付け加えた。

「“付き添いの彼”には口止め料を支払うよ」

顔を近付け、指差す。

あたしのずっと後ろにあるバー。あたしは振り返らない。カマかもしれない。

だって。あたしは一度も付き添い（ラトアさん）の彼の姿を確認していない。

幸樹さんにもラトアさん本人にも注意をされていたからだ。

眼を向けるな。探すな。

ラトアさんだって、バレるような監視はしないはず。

だから、カマのはずだ。

「いけないな。Ｉと一人でくると約束させたのに…これでは針千本を飲んでもらわなくてはいけなくなる」

藍さんは言っていた。一人でくる約束だから。絶対にラトアさんに気付かれてはいけない。

仲介者である彼は信頼がモットーだ。

唇を噛む。藍さんに何かをやるつもりなのか？と睨み付けた。

「冗句だよ。君がこの仕事を引き受けるならそれでいいんだ」

人の良さそうな笑みで、軽い調子で脅してくる多無橋さん。

「引き受けましょう」

ほぼ考えずにあたしは答えた。選択肢はそれしかない。

藍さんのお得意様を潰すわけにもいかないし、敵に回すには怖い人だ。

とても殺したい。殺してしまいたいが堪える。

「それは有り難い」

にっこり、とぬけぬけと彼は笑いかけた。それから懐から一つの携帯電話を差し出す。

「これで連絡を取り合おう。盗聴されないように細工してあるから、バレないように持っていてくれ」

「…了解。では失礼します」

あたしはそれを掴んでさっさと出ようとしたが、その手を多無橋さんに掴まれた。

「乾杯がまだだ、黒猫ちゃん」

そう笑いかける。

あたしは仕方なく、赤ワインの入ったグラスを手にした。

「紅色の黒猫に」と多無橋さんはグラスをカラーン、とぶつける。

あたしは黙って一口、飲んだ。

飲んですぐに席を立って後ろを振り返った。そこにはこちらを見ているラトアさん。
彼も立ち上がって、一緒にホテルを出た。

「なんでバレたんです？」
「知らん。言っておくがオレはへましていない。背を向け聞き耳を立てていただけだ」
「あたしだってラトアさんを探しませんでしたよ」
「お前、まさか引き受けるつもりなのか？」
「引き受けると言ってしまいました。藍さんのためです」
「おい、そんなんじゃ今後そうやって無理矢理仕事をさせられる羽目になるぞ」
「もう二度とあの人と食事をしません」

早歩きでホテルを離れてふと気付く。握った瑠璃色の携帯電話。

「盗聴器……ついてませんよね？」
「盗聴防止がつけられているならついてないだろ」
「……まぁ、悪口くらい聞かれても構いませんが、発信器は嫌ですね」
「依頼人はあくまで仕事をやらしたいんだろ。家を突き止めたりしないだろう。念のため電源を切ればいい」

そっか。あたしは電源を切った。更に念のために発信器がないかとラトアさんが確認する。ないそうだ。
連絡時は家じゃない場所でとればいい。

「もしかしたら単にお前と直接連絡できる手段を設けたかっただけ

かもしれんぞ」

ラトアさんは嫌なことを言った。

「指切りの殺人鬼など、聞いたことない」

不機嫌なまま家へと帰宅。

上着を取りソファに投げ捨ててどっかりと座って、一言。

「お腹すいた！」

それに呆れながらも幸樹さんは夕飯を用意してくれた。

「レストランにいったはずなのにどうしてお腹を空かせて帰ってきたんです？」

「くそ不愉快な会話をして仕事の話がないと言われたので帰ってきたんですよ」

「なーるぅ。ラトアぁ、どうだったのぉ？」

「特に何もない」

あたしは怒り任せに答える。ラトアさんはこれでも仕事のことは伏せてくれるらしい。ただし絶対にバレるなときつく言われている。

――バレたらどうなるかわかってだろ？

意味深な発言で浮かぶのは、笑顔のお兄ちゃん二人。背筋が凍る。

だから怒り任せに愚痴った。さもなきゃ気付かれる。ひたすら怒っていればいい。

偽者が出てきたあの時みたいに。

「なんなんですか！？あの多無橋さん野郎は！殺していいですか！

？」

「お嬢、ご飯粒飛んでる。てか殺しちゃだめだよ！彼は大企業の社長さ、んでもって裏でもやり手な裏社長なんだ」

あたしが飛ばしてしまったご飯粒をさりげなく食べていく藍さんに拳を振り落とす。

「裏の大企業の社長はみんなああなんですかぁ？」

「多無橋氏はー、ふえ、なんかしたの？」

「あの人の態度が気に食いません…殺し屋をおちょくるのが裏現実なんすか？」

「いやあ……僕あまり依頼人と会わないからよくわかんないなー」

「たまにいるんだよぉ。こぉ肝が据わったって感じかなぁ？生まれつき裏現実者にゃありがちだよ、ひゃひゃ。つーちゃんは対等に渡り合えるようになんなきゃだねえ？」

藍さんの頬を伸ばしていれば、白瑠さんが隣に座って笑いかけた。あんな人間が他にもいるなんて嫌だ。あたしも肝が据われるだろうか…。

「それで？その多無橋さんとはどんな会話をしたんですか？」

幸樹さんがお茶を淹れてくれたコップを置いて訊いた。

「あたしの話です。偽者の件とか……ちょっとだけ交わして帰りました」

唇を尖らせながらあたしは肩を竦める。疲れさは真実なので、三人に伝わって笑われた。

幸樹さんには頭を撫でられ、白瑠さんには顎を撫でられる。

顎を撫でられる…。
なんかカンに障ったのであたしは白瑠さんの指に噛み付いた。
指。指切り。
指切り殺人鬼。
かぷり。
指を噛んだ仕返しに、白瑠さんは頬に噛み付いてきた。
えーと。どうしたものか。え？自業自得ですか？微妙な空気が流れてんですけど。

「ツボ！僕もお嬢に噛まれたい！」
「噛み殺すぞ」

カシャン、じゃない。今すぐ今撮ったやつを消しやがれ。
すると、かぷり。
反対側の耳に幸樹さんが噛み付いてきた。流石に冷静に考える暇はない。
何故なら、あたしは。
耳が弱いんです。

「んきゃああ！？」
「うひゃっ」

幸樹さんを避けようと離れたが、逆には白瑠さんが頬に噛み付いたままのため、必然的にぶつけた。痛い。

「いひゃーい、つーちゃん」
「だ、だって…だってぇ…」
「あー、耳がイイトコだもんねぇ？つーちゃんは」
「うっ」
「おやおや、真っ赤になって……可愛いですねぇ？」

操の危機！
面白がっている二人に挟まれてしまった。どうにかこの状況を切り抜く方法を考えて、見付ける。

「し、仕事ですか？幸樹さん」

そう訊けば止まった。もうちょっと近付いていたらナイフを出すとこだ。
「ええ、そうです」と離れる幸樹さんの格好は仕事用の黒いジャケット。
ああ、だから休みだったのか。

「じゃあ、行ってきますね」
「いってらっしゃい」
「いってらー」

そういつも通りに全員で幸樹さんを見送って夕食を平らげた。
そのあとに慣れないヒールで足が疲れたと言えば、藍さんがマッサージをすると名乗り出たが大半は猥褻行為に近かったり。にやにやしながらぐふふと笑って足を揉むのを、訴えてもいいだろう。涎を垂らすな。
それからホラー観賞をしようとラトアさんと仲良く話していたら白瑠さんがナイフを片手に乱入。
うひゃひゃひゃ、と笑う白瑠さんと頭にナイフが刺さったままでぶちギレたラトアさんの鬼ごっこが開始された。
白瑠さんに吸血鬼と殺し合えばホラーを味わえるじゃん、と言われたが生憎あたしはラトアさんを刺すなんてことしない。だから即答しておく。
幸樹さんが帰ってくるまで起きていようとしたがラトアさんが帰る

と言い出したので諦めて寝ることにした。藍さんと白瑠さんと三人では居たくないので。

あたしが寝るなら自分も帰ると藍さんはラトアさんと帰った。白瑠さんにおやすみのハグをねだられたが丁重にお断りしてあたしは部屋に入り、自分のベッドに潜って眠りについた。

翌朝の目覚めは最高とは言い難いものだった。ピピピと鳴り響く不細工なアラーム音を消して起き上がる。たらりと垂れる髪を掻き上げてうんざりした溜め息を溢す。

寝たい。が、幸樹さんが作った朝食が台無しになる。

気だるい身体で這うようにベッドから降りて部屋を出てリビングに出た。

「……あれ？おかしいな…」

リビングのテーブルを見て、あたしは首を傾ける。

昨日と同じで何も置かれていないテーブル。早起きし過ぎたか？と壁の時計を見たが、八時前。

書き置きがないところを見ると、昨日と同じで寝坊か？

まさかと思い幸樹さんの部屋に入る。幸樹さんはいた。

二日連続で寝坊なんて…。

裏の仕事が長引いてしまったのだろうか。とりあえず一言声をかけて起きなかったら寝かせておこう。そう考えて近付けば、顔色が悪いことに気付く。

冷や汗が出ていたから風邪なのかと思ったが、あたしは足元にあった血塗れのガーゼを踏みつけて悟った。

掛布団を引き剥がせば、露になる。

包帯で巻かれた腹部はまだ乾いていない血が滲んでいた。

「参りましたね」

目を覚ました幸樹さんの第一声はそれだった。微笑んでそう言う。

「表の仕事に続いて裏の仕事まで失敗をするなんて……参ってしまいますね」

疲れたように溜め息を溢す幸樹さんは本当に参っていそうだった。
失敗。仕事を、失敗した。
殺しを、失敗したのか。

「あたしが殺ってきます。住所は？ターゲットは？」

あたしが口にしたのは、その言葉だった。驚くほど冷静に、そう言葉を発する。
もう少し、ショックを受けるとばかり思ったがそうでもない。

「結構ですよ…。私の仕事なんですから」
「その怪我では無理でしょう。隠れられたら殺せません、そうでしょう？」
「…いいんですよ。失敗したと藍乃介に連絡しましたから」
「あたしが引き継ぎます」
「そんな必要ありません。何を熱くなっているんだい？君が引き継ぐ必要性があるんですか？」

幸樹さんはあたしを見据えて言う。
熱くなって、熱くなってなんかない。
ただ。ただあたしは。

「幸樹さんに怪我を負わせた奴を見てみたいだけです」

そう言えば、一瞬呆気にとられた幸樹さんが吹き出して笑った。
「そうですか。じゃあ藍に連絡するといい」と言う。
あたしはすぐに幸樹さんの携帯電話に手を伸ばして藍さんにかけた。
が、藍さんが出る直前に手の中から携帯電話が消える。

「もぉしもーし。さっき幸くんがやった仕事、俺が引き継ぐよぉ」

振り返れば白瑠さん。
少しの間会話をした白瑠さんは携帯電話をあたしに返した。
てっきり、あたしと一緒に行くのかと思ったのだが。

「じゃあ、つばちゃん。幸くんの看病よぉろぉしく」
「えっ？ちょ、あたしが幸樹さんから引き継ぐって」
「つばちゃんにはまぁだ早いから――――だぁーめ」

鼻の先にニッコリと白瑠さんに言われた。唖然としてしまう。
幸樹さんの仕事は、あたしにはまだ早いのか？
まさか、白瑠さんに止められるなんて夢にも思わなかった。
いくら幸樹さんが怪我をして失敗したからって、あたしを連れていきもしないなんて。
唖然と言葉を失っている間に、白瑠さんは行ってしまった。バイクが轟く音は遠くにいき、やがて消えていく。

「そんな……難易度の高い任務なんですか？」

「私を撃ったスナイパー。弥太部火都なんです」

驚愕の答えを聞いた。

弥太部火都（やたべかと）。あたしが前回の大仕事て不意打ちを喰らった弥太部矢都の兄。

「……でも、あの時…。後ろから不意打ちを喰らっただけで…。あたしじゃあ勝てない相手なんですか？」

「弟より弥太部火都の方が実力が上の狩人です。一発で仕留めることを得意とする飛び道具使いですからね……正面から戦って勝てる自信は私にはありません」

そうだった。聞いたことがある。弥太部は飛び道具使い。

弥太部矢都も飛び道具を駆使して頭蓋破壊屋と戦っていた。

スナイパー。幸樹さんは遠くから、射撃された。その怪我だ。

白瑠さんが許さないわけだ。あたしは弥太部矢都に一発で仕留められたのだから。どうせ、兄である弥太部火都にも仕留められる。

今度は、確実に息の根がとめられる、と思ったんだろう。

あの時、あたしの心臓を射抜かれなかったのは、幸いだった。

「……なにか、食べますか？」

沈黙した直後にあたしはそう幸樹さんに問う。

幸樹さんは林檎をすりおろしてくれとあたしに頼んだ。すりおろし林檎を作る前に冷や汗で風邪を引く前にタオルを渡した。

こうなると、本当にあたしが一人で仕事をやるのはまだ早いと思う。

白瑠さんが付き添うのは、矢都みたいなイレギュラーの乱入に対応するため。

仕事の難易度は途中で変更される。

多無橋さんにしっかりとそれを云おう。断らなくては。
少なくとも、あたしは、白瑠さんの許可なしで死ぬつもりはない。
あの人が悪戯に救った命。落とすならあの人が飽きて手放す時だ。
断ろう。

「幸樹さん。ちょっと買い物に出掛けてきます。大丈夫ですか？」
「問題ないです。…けれど何を買いに行くんですか？」
「インスタントのお粥ですよ。あたしが作っては身体に毒ですから」
力なく笑ってみせれば、ベッドの上の幸樹さんはクスリと笑って「いってらっしゃい」と言った。
あたしはいってきますと応えて、瑠璃色の携帯電話を忘れずに家を飛び出した。
あたしが向かったのはスーパーじゃなくて、駅。丁度快速の電車が来たのでそれに乗って着いた駅で降りて、携帯電話を開く。
電源をつければ、不在着信が一つ。――それからメールが二つ在った。
“発信器などついていないから安心して電源をつけてくれ”
一通目のメールはそう書いてあり、二通目は指切り殺人鬼の情報が記されていた。
わかっているだけでも被害者は二十五人。毒殺、刺殺、銃殺、絞殺、と手口は一見バラバラだが全員手の指が切り落とされて持ち去られていた。
十中八九、犯人は指収集が趣味だろう。或いは指を食べているのかも。
そんな冗談混じりの多無橋さんの意見が一番下に載せてあった。
追記のように添えられた文字に、携帯電話をへし折りたくなった。
――“警察も追っている。担当の一人に君は見覚えがあるんじゃないのかい。篠塚刑事だ。君を護衛したことがあるはずの、刑事さんだよ”

ダンッ！

階段を蹴り飛ばす。叫びたいのを堪えて呻き、その場にしゃがむ。

まるで運命の悪戯。

なんでまた、この人の名前が出るんだ。あれっきりのはずだった。

血塗れの電車が解決すれば、これっきりのはずだったのに。

きっとこの情報は警察内部からにも抜き取ってきたものなんだろう。

くそう。

知らなければ、すぐに断りの電話をかけたと言うのに。

何を迷ってるんだ？

「そこのー…おー嬢さん」

何を迷ってるんだよ。

篠塚さんと関わってはいけない。それがあの人のためだ。

「どーか、したの？お嬢さーん」

「煩い。構うな」

なんともやる気ない聞き覚えのある声にあたしは苛立ちをぶつける。

駅のホームにしゃがむあたしを心配して声をかけたんだろう。

ぶっ殺すぞ。

そう思ったが駅で殺すと血塗れの電車の続きと騒ぎになってしまう。

堪えろ。

ふと気付く。なにかに気付く。なにかの違和感。あれ？

違和感に顔を上げれば、声をかけた人があたしに顔を近付けていた。

初めてなのに見覚えのある顔。

「こーんなとこに蹲っちゃって…どした？」

そう問う男。見覚えがあるに決まっている。治ったはずの傷が、疼

く。
この傷をつけた――弥太部矢都に似た顔だから。

「っ！」

思わず、背中に手を伸ばした。
だが、そこには何もない。
―何もない（、、、、）。
カルドも短剣も、何もない。武器は、何一つないのだ。あれほど外出時には武器を携えろと言われていたにも関わらず、あたしはミスした。
買い物と電話が目的だった為に、武器を持つことを忘れてしまったのだ。
無防備に近いほど、痛い目を見る。丸腰ならばどうなる？
――――…カチャリ。
耳元に、そんな音が聴こえて凍り付く。こめかみに、銃口が突き付けられている。
今の素振りがいけなかった。
武器を取ろうとした素振りを見て、悟った彼は銃口を突きつけたのだ。
あたしと目の高さを合わせるために彼はしゃがんで首を傾げた。

「お嬢ーさん。おれをー、知ってるん？」

弟と同じく、やる気ない軽い声で――弥太部火都は問う。
なんで。
なんで。
こんなことになるんだ。
白瑠さんが彼を殺しに行ったのではないのか？なんで彼はここにいてこうなってしまう？

なんでこうなるんだ！
厄日かよ！！
幸樹さんは怪我するし白瑠さんにはまだ早いと言われるし多無橋さんは問答無用で指切り殺人の情報を送るし篠塚さんは指切り殺人を捜査しているし、そして弥太部火都に出会した。

「目につくのに…銃なんて出して平気なんですか？」

刹那だけ考えて、あたしは言う。いくらなんでも駅で銃声を轟かせば人がくる以前に目撃されても可笑しくない。隣のホームに人がいる気配がする。撃たない。
そう思ったのだが――カチ。
トリガーが引かれた。

「平気」

ぴちゃ。
血飛沫ではなく――あたしの頬に水が飛んできた。
水、だ。ただの水。
もう一度トリガーを引けば、ピューと水が銃口から出た。
あっけらかん…。
あたしはガクリと項垂れた。
返してくれ、あたしの緊張。絶対に寿命が縮まった。
そうだ。あたしじゃないんだから裏現実者が公の場で裏の顔を見せるわけがない。
弥太部火都は、あたしの反応が気に入ったのか少しだけ笑った。

「おーれ、弥太部火都。お嬢さんは？」

水鉄砲をしまってから弥太部火都はあたしに手を差し出す。名前を

問われても、名乗れる名前がない。
紅色の黒猫、は殺し屋であり、彼は殺し屋を狩る者。
山本椿、はある意味有名だからあれ？聞いたことがあるなと思われてしまう。
頭をフル回転して結局あたしは。

「笹野…椿」

幸樹さんの名前を借りた。
名乗って気付く。この人は幸樹さんを撃った人だ。名前を知っていたら、狩られる。

「んー…。知らないなー。狩人？殺し屋？会ったことあるっけ？」

あたしの手を引いて立ち上がらせた弥太部火都は、首を傾けた。幸樹さんの名前は知らなかったらしい。

「ない……けど」

殺し屋で弟の最後の獲物だった。それだけだ。
んなことを答えれば今度は本物の銃を突き付けられるに決まっている。

「それって、裏の名前？」
「……」
「警戒してるの？おれ、君と同じ丸腰だよ。まー、今のは嘘だけど……仕事じゃないから戦うつもりはない」
「……殺し屋の、紅色の黒猫」

そんなに武装してないのは確かだし、仕事ではなさそう。あたしだ

って今、誰かを殺す仕事をしていないのだから狩人に襲われる筋合いはない。
つか、この人白瑠さんと戦う予定ではなかったのか？

「…？……聞いたことないな」
「えっ？」

初めての反応をされて、面食らった。

「えっ？し、知らないの？」
「うんー、知らない。有名なの？」

……頭蓋破壊屋並みに。と言ったら大袈裟か。
大袈裟なのは紅色の黒猫の噂をしている周りなのか。単に情報に疎いこの人だけが知らないだけなのか。
裏にも紅色の黒猫を知らない人間がいることが知れただけでも、あたしは救われた気がした。
今知っちゃったけど。

「貴方の弟と会ったことがあるんです」
「ん？矢都のこと？」
「彼の、最期の獲物でした」
「へー、そうなの」

ぶっちゃけたら、弥太部火都はなんとも軽い反応で頷いた。

「……。あたしの仲間が殺しました」
「ふーん」
「あたしをボウガンで射って」
「んー」

「駆け付けたあたしの仲間に」
「バラバラにされて八つ裂きにされて頭潰されたんだろ。知ってるけど」
知っていてそんな反応？
「貴方の弟……よね？」
「おれの弟……だけど？」
「……。よくもおれの弟を！矢都の仇！って言わないの？」
「んー……言わない」
言わなかった。
ゆるりと首を振る弥太部火都。
「変わってんな、お嬢さん。殺し屋なのに今どき仇なんて。矢都は危険な仕事を自分からやったんだし、お嬢さんを襲って殺されたのは自業自得。おれが無念を晴らす筋合いはないさ」
なんとも、冷たい兄だと思った。最初だけ。
でもそれが、定義なのかもしれないと思い直した。
殺し殺されの裏現実。
仲間でも身内でも、殺されても、恨めやしない。人殺しが人殺しを恨むなんて逆恨みに等しい。
例えば、那拓家だ。初めから裏現実に生きている一族。
裏現実のスペシャリスト。プライドの高いナルシスト。
敗けは恥。死は敗け。
敗けた者は、一族の恥。
「……ごめんなさい…。あたし、てっきり…」

言葉を詰まらせる。
脳裏に浮かぶのは、幸樹さん、それから白瑠さん。
その二人がなんだって言うんだ？

「じゃあ貴方は……とある仕事で、たまたま、弟を殺した連中が、依頼者を殺しにきても、仇は討たないと？」
「…？仕事なら別だろ。狩人だから、殺さない方が多いからこてんぱんにするだけだ」
「……殺さない、の？」
「ん。おれはあまりしない。まー、矢都は殺しまくって変な癖ついてたけどなー」
「……女の殺し屋をおやつにする癖かしら？」
「餌食になったの？」
「その前に彼は死んだ」
「よかったね」

自分の弟が死んだというのに、よかったね、だって。おやつにされなくて良かった。本当、よかったよ。

「……それで、貴方。ここで何をしてるの？」
「え？休暇を楽しんでるだけだけど」
「……昨夜の仕事は？」
「もう終わった。……なんで知ってんの？」

終わった。のか？
狩人の仕事はイマイチ知らないが、どうやら昨夜だけで用心棒は終わったようだ。なるほどね。どうりで白瑠さんと殺しあっていないわけだ。
なんて運がいい奴なんだろう。

「昨日殺し屋撃ったでしょ？あたしのお兄ちゃんなの」
「へー。すごい偶然だね。いや、君はよくもお兄ちゃんを！って仇討ちに来たわけ？」
「まさか。弥太部火都と会う予定はあたしにはなかったわ」
苦笑しながらあたしは首を振るう。冗談が言える奴か。どうやら弟と違い、またもやノーマルタイプの人間と知り合えたらしい。
「ねえ、良ければ友達になってくれない？」
すっかり警戒が緩んであたしはそう言った。火都はきょとんとしたが、やがて手を差し出す。
「よろしく、椿」
「よろしく、火都」
手を握りあった。
そのあと、駅を降りて二人で買い物に行く。
なんでも火都は休暇を満喫して、のんびりとふらつきたかっただけらしく付き合ってくれた。
買い物を済ませたあとは、友達らしく友好に別れた。
「じゃあ次会う時は、仕事が被らないことを祈ろう」
「そうね。また会いましょう」
そう言って、あたしは電車に乗る。
それから瑠璃色の携帯電話でメールを送信した。
“連絡は後日”
それだけ。すぐに電源を切ってポケットにしまった。

奇しくも矢都の兄である、火都と会って機嫌は最高だ。思わぬ収穫をした。
これは好奇心擽られる収入だ。
指切り殺人鬼そっちのけでこっちにいきたいのは山々だが、やはり面倒事を片付けるのが先だろう。
しかし、面倒事が終われば楽しい事が待っているとわかればモチベーションは違ってくる。

「容赦しねーぞ！指切り魔！」

あたしはゲンキンな奴なのだ。

家に帰れば、先に、白瑠さんが帰っていた。
その光景は、あたしの思考を停止するには十分だった。
真っ赤な、真っ赤な血を浴びた白瑠さんはリビングのソファの肘掛けに腰を降ろして、ニコリとあたしに笑いかける。

「おかえり、椿ちゃん」

そういつものように無邪気なフリをして笑いかけたが、あたしにはわかった。
怒っている。
この人。

「どこいってたのかな？」

眼が笑ってない。眼が怒ってる。

「俺。幸の看病をしろって、言ったよねえ？」

え、だって。お粥を買いに行くって、幸樹さんに…。
なんで白瑠さんは怒ってるの？
なんで血塗れなの？
あたしは悪い想像をして、幸樹さんの部屋を開けた。
幸樹さんはいた。生きてた。
ベッドに横たわっているし、起きてあたしに「おかえりなさい」と言った。

「遅かったですね」
「すみません…。白瑠さんに言わなかったんですか？お粥を買いに行ったって」
「言いましたよ。聞いちゃくれません」

そんなに怒っているのか？
あたしは白瑠さんを振り返った。
無表情であたしを見つめていた彼はやがて、ニッコリと次は完璧な笑みを浮かべてみせる。

「つーちゃん、ハグして」

幼児が母親に抱っこをせがむように、白瑠さんは座ったまま両手を広げた。

「……嫌です」

断ったら怖いが、引き受けたら引き受けたらでなんか恐ろしい。

「えー……」

唇を尖らせてギロリと鋭い眼で睨まれた。断った方が怖かった。

「ほら、えっと、血塗れだし……洗ったらどうですか？」
「……そぉだねぇ」

白瑠さんは案外、従ってくれた。
てっきり「血塗れが好きでしょ？」とかなんとか言うと思ってたのに。一体なにが？

「弥太部火都ではなく、“彼”が居たそうです」

あたしが質問する前に、幸樹さんが答えてくれた。

「帰ってくるなり、ぎゃあぎゃあ愚痴り、椿さんが居ないと気付いて落ち着きなく歩き回っていましたよ。“彼”と遭うといつもああなんです。不機嫌過ぎると街一つ消えてしまうかもしれませんから、抱きつきくらい許可をしてあげてください」

ニコリと微笑む幸樹さん。後半は脅しだろうか。
冗句だよね？いくら白瑠さんだって街一つ分の人間を殺すなんて……。
……気が向けば有り得そうだ。

「…ん？“彼”って誰です？」

意味深に名前を伏せられたその“彼”が誰だかわからず聞き返した。
口にして思い出す。
いつもそんな口振りで、幸樹さんは“彼”と称していた。
ひねくれた策略家こと黒の殺戮者。

「黒の殺戮者と……会ったんですか？白瑠さんは」

「……どうしてその名を知っているんですか？」

幸樹さんは目を見開いてあたしが口にした名前に驚いた。

あたしは。

「きゃああ！」

「！？、なんですか！？」

「二人が殺し合うところが見たかったのに！無理矢理行けばよかった！！」

せっかくの機会がぁあ！

あたしは頭を抱えて嘆いた。

超見たかったのに！二人の対話！白と黒の戦い！

「白瑠さんが血塗れってことは黒の殺戮者は死んだんですか？うわぁあ！もう見れない！？」

「…とりあえず、傷に響くので大声を出さないでください。殺せてたら白瑠は不機嫌になってません」

「あ、そっか。…すみません」

我に返ってとりあえず謝罪した。

貴重な存在だったからつい叫んでしまった。近くにいるなら会いたいものだ。

殺せてたら、有り得ないくらいご機嫌になってるだろう。

それにしてもあの血はなんだ？ターゲットの返り血を浴びる趣味は白瑠さんにないし（だからと言ってあたしにあるわけではない。断じて）ぶっかけられたのか？

確か黒の殺戮者は部屋を体内の全ての血をぶちまけるんだっけ？

「標的は誰が殺ったんです？」

「…この話はしない方がいい、と言えば察しがつくでしょう？」

言葉を失って、唖然とする。

白瑠さんが、敗けた？

仕事、失敗したのか？

まじかよ。

獲物を横取りして、血をぶっかけて、生きて帰ったのか？ひねくれた策略家は。

何てやつなんだ。

「いいですか？絶対に“彼”の話はしてはいけません。その名前を出すのも、いけませんよ？椿さん」

「白瑠さん怒ります？」

「監禁されたくなければ言わないように」

……監禁…。

何故に監禁？

「少なくとも、例の集団が解散するまでは口にしてはいけません」

「？、何故ですか？」

「それは……」

幸樹さんは何かを言いかけて、口を閉じる。

その何かをあたしに言うことをやめたようだ。

名前を言ってはいけない人の名に監禁というトラップが発動されるのは何故だろう。例の集団だって、別に関係ないんじゃないか？

「弥太部火都も、例の集団の一人だからです」

「……あ？」

「どうやら弥太部火都は集団のリーダーの獲物だから身を引いた、

ってところでしょう。きっと二人だけであのビルの人間を殺戮したでしょうね」

嗚呼、なるほど。

だから火都はあそこにいた。リーダーである黒の殺戮者の“獲物”だから、仕事を切り上げて休暇を満喫していたんだ。

黒の殺戮者がリーダー。

火都が集団の一員。

「うきゃああ！？」

「……またですか？今度はなんです」

「うわぁぁ！あたしのばかああ！！」

黒の殺戮者に会えなくても身内（仲間）に会えてたじゃないか！話題に出せばよかった！

火都なら名前を知ってただろうに！

連絡先交換するんだった！

「つーちゃん」

白瑠さんの声に振り返れば。

あろうことか、全裸で濡れたままの白瑠さんが抱きついてきた。

「ぎゃあぁぁあ！！」

「よく叫びますね」

あたしが白瑠さんを蹴っ飛ばせば、幸樹さんはため息のように呟いた。

とりあえず、白瑠さんのご機嫌を取るために致し方なく抱きつき

を許可する。
　服を着ろと言えば白瑠さんはズボンだけをはいてソファで人形よろしくあたしを抱き締めた。上半身、裸なんだが…。
　可笑しいなぁ、幸樹さんと身を売らない約束をしたはずなのになぁ。何でまた抱きつきを許可して機嫌を取らなくちゃいけないのだろうか。
約束。指切り。指切り魔。切られた指。

「なにか考えてる？椿」
「え、いや……」

いきなり呼び捨てにされてあたしはぎょっとする。あれ？この人が呼び捨てなんて珍しい。

「髪、拭いてください。濡れます」

あたしが。濡れたままで放置された脱色した髪から雫が垂れてくる。首や肩に落ちてきてあたしが風邪をひきそうだ。
「ん、拭いて」と白瑠さんは首筋に垂れた雫を舐めて言った。
……子供か。その前に何してんですか、アンタ。
　このまま舐められるなんて嫌だからあたしは白瑠さんの方に身体を向けて肩にかけてあるタオルで髪を拭いた。
顔を合わせているから白瑠さんの表情はよく見える。
怖いくらい、無表情。
暗い瞳。あたしの目じゃなくて首を見ている。首に見とれて、見つめていた。
　どうかしてる。この人。なんか。今、不安定だ。どうしたんだろう？
親指で傷跡をなぞる。自分でつけた、消えそうにない傷。
見つめて、撫でる。たまにする仕草。もう癖かもしれない。

白瑠さんは、顔を近付けて、傷に唇を重ねた。クチャリと音が聴こえる。

「……なんです？白瑠さん」

とりあえず、行動の意図を訊いてみた。顔の見えなくなった白瑠さんから返答はない。

だだ、抱き締められた。

「えぇ、と……大丈夫ですか？白瑠さん？」

そう訊いても、白瑠さんは応えない。

獲物をとられたダメージが大きいのだろうか。落ち込んでる？あたしは慰めるべきなのか？

下手に名前を出せないので、頭を撫でてみた。まだ湿っている髪と一緒にくしゃくしゃと撫でれば、ギュッと抱き締められる。

上半身が密着して、ちょっと息が詰まった。

「鼓動…」

暫くして漸く白瑠さんは口を開く。

鼓動？ってあたしのか。そりゃあそうだ。あたしの左側に耳を当てて抱き締めているのだから、密着でドクドク乱れた鼓動がよく聴こえてるだろう。

「椿ぃ」

白瑠さんはあたしを呼ぶ。

「この鼓動」

そして、答えた。

「俺」

ゆっくりと、口にする。

「止めるつもりなんて、ない」

白瑠さんにしては珍しく遠回しに、眼も合わせず、あたしに言った。
鼓動を止める気がない。
心臓を止める気がない。
あたしを殺す気がない。
そう答えた。
あたしは何も言えなかった。

「黒の殺戮者に会いたいと思ってるんですが、だめですか？」

鬼の居ぬ間にあたしはベッドの上の幸樹さんに訊いた。
何を言っているんだこいつ、的な目を向けられてしまう。

「何故です？会う意味がわかりません」
「ただの好奇心ですよ。そんなにだめなんですか？」
「…当然です。彼は危険です」

それを聞いてきょとんとしてしまう。

「この前はあたし達に被害はないって言ったじゃないですか」
「……それは彼の目的に邪魔でなければの話です。白瑠と顔を合わせればお遊びの死闘を始めますが、私達がもしも“彼”の障害物になるようならば……容赦なく一捻りでしょう」
レベル１００に例えてみれば、白瑠さんは１００。幸樹さんが５０辺り。
黒の殺戮者は１００だろう。
幸樹さんも、あたしも及ばない。
「でも、障害物になるわけじゃないでしょ？」
そう笑って言ってみたが幸樹さんは答えない。何も答えてはくれなかった。
「この話は終わりにしましょう。そろそろご飯を作る時間ですよ、椿さん」
そう話を無理矢理閉じられて、部屋を追い出されてしまう。
「知らぬ間に、障害物になってる…？」
ご飯を作りながら、考えがそこにいきついて呟く。
そういえば、藍さんがあたしに聞かせてくない話を白瑠さんにしてから白瑠さんが怒っていた。
あたしは知らぬ間に、黒の殺戮者の敵になってしまったのか？
それなら白瑠さんが怒っているのもわかる。幸樹さんが話したがらないのもわかる。
何かを隠してる。藍さんも知っているに決まっている。

「あたしだけ仲間外れ？」

ダンッと包丁を振りおろす。

あたしのことなのに、本人に黙っているのか？イジメかよ。

いや…もしかしたら単に白瑠さん本人に喧嘩を売って戦争を始める気なだけかもしれない。

それにあたしを巻き込まないため。その可能性もある。

「……火都に訊こうか…」

幸い、火都はあたしを知らない。知っても話をしてくれそうだ。あくまで友達なんだから。

たまに思う。友達は利用製品だと。……しょっちゅう思ったり。

火都と直接の連絡先を知らなくても、火都の連絡先を知ってるであろう人物の居場所は知っている。

「……」

その人に会う前に、先ずは面倒事を片付けなければならない。

指切り殺人鬼。

手段を選んでいる場合ではない。

「探偵ごっこしない？」

ある人物を呼び出して、あたしはそう気軽に誘った。

学校帰りの学生服の那拓蓮真君。

初めは意味が通じていないのか意図を読んでいるとこなのかきょとんとしていたが、やがてニヤリと笑った。

「事件かい？ホームズ」
「これは面白い事件だぞ、ワトソン君」

あたしはにっと笑って見せた。
夕方の公園で、あたしは説明をする。一人で殺人鬼を見つけてある物を手に入れなきゃいけない仕事であると、知っている限りの今の情報を、話した。

「お前っていつも楽しいことしてんのか？ぼく殺し屋になりたいかも」

軽口で蓮真君は言う。
「いつもこんなことしてるわけじゃないわ」とちゃんと否定しておく。

「わかってる。遊太の兄ちゃんなら喜んでやったに違いない」
「君は乗り気じゃないの？」
「その仕事。単独でやるってのが条件なんだろ。いいのか？ぼくが手伝って」
「あら、単独で遂行するのは殺しのことよ。探し出すまでは誰かの手を借りるわ」

あたしはそうしれっと言って見せた。屁理屈だろうが別にいい。あらゆる手段を使うまでだ。
「お前信用なくすぞ」と蓮真君は苦笑して洩らした。
しかし、急に笑うのをやめてあたしを見上げる。

「ぼくなんかより、お兄ちゃん達に話してやるべきじゃないのか？偽者の件だってぼくは役に立たなかったしね」

「お兄ちゃんに言ったらまじ軟禁される……だから黙ってるんだよ。今……色々あってさ」

ラトアさんとはバレるなと約束してるし幸樹さんは怪我で動けないし白瑠さんはピリピリしてる。

白瑠さんと二人きりになるのはこの一週間避けてきた。だから、話す気は更々ない。

「じゃあ、あの鬼は？」

「鬼？」

「ストーカーだよ。狩人だし、警察と繋がってるし、何より好意があるんだから頼めば引き受けてくれるだろ」

嗚呼、秀介のことか。

確かに秀介は警察にコネがあるから情報はおろか殺人現場に入れる可能性がある。

警察と関わるなんてあたしにとってリスクが高い。

「考えてなかったな……秀介君とは連絡先交換してないから、無理なの。つか、密かさに秀介君と会ってるってバレたらやばいんだよ」

「ふーん、だからぼくってわけか。でもそれならストーカーよりぼくの方がやばいんじゃないの？」

那拓だから。

「死ぬ気で君のことだけはバレないようにしなきゃ」

「はは、頼む。お兄さんに殺されたくないからな」

「……」

「？、どうかした？」

「いや……別に」

秀介に頼まない理由は他にもあったりする。
今会ったら、今手を差し伸べられたら、すがってしまいそうだから、嫌なんだ。

「……あそこが最期の居場所だと思ったのにな…」
「ん？何？」

ただの独り言だ。何でもないとあたしは首を振った。
二人で指切り魔を追う為の手順を話し合うことにした。前回とは違い犯人が足跡を残しているわけでもない。

「連続殺人事件なんだし、先ずは被害者の共通が何なのかを調べよう」

某イケメン高校生探偵みたいに真剣な眼差しで蓮真君は言う。仕草とかいちいち格好いい。
手掛かりは被害者になり。
連続殺人事件ならば共通があるはず。
しかし、メールの情報には被害者が発見された場所と殺害方法くらいしか記されていない。
情報網が他にないため、あたしは多無橋さんに電話することにした。
コール四回目で多無橋さんは電話に出た。
「もしもし、誰かな」と明らかに笑っている声で第一声を発する。

「紅色の黒猫です。連絡が遅れて申し訳ございません。お聞きしたいことがあります」

あたしは勝手に話を進めて淡々と言った。隣で息を潜めた蓮真君が黙って見守る。

多無橋さんのなんかわからない言動を無視して被害者の共通点はあるかと訊いた。

「それなら調査済みだ」

一週間が長過ぎたのか、もう調べてくれていたらしくすんなりと話してくれた。

「複数の被害者の知人によれば、被害者は指が綺麗だったそうだ」

……なんか手掛かりになりそうにない共通だった。

「顔もそれなり整った被害者らしいよ」

「外見じゃなく、もっと犯人にピンとくる共通点はないんですか？例え、ネイルサロンに通っているだとか。それなら指先をようく見れるし」

「しかし、黒猫ちゃん。被害者には男も半分いるんだ、例のブツの持ち主だって男だしね。それに手なんて街中をすれ違うだけでも見れるだろう」

確かに、そうだが。共通点がないと見付けるには時間がかかってしまう。

目的であるブツを、犯人が取っといている可能性は低いのだから。辿り着けるような情報が欲しい。…なんて。

そんな情報があるならばもう多無橋さんは云うしそもそもあたしに探してもらう必要なんてない。指切り魔の居場所を見付けてそして一人で殺せと依頼するだろう。

「それじゃあ…一番新しい殺人現場に行きます。詳細を送っていただけますか？」

「ああ、いいよ。新しいと言ったら三日前だね」

三日前。

放置してる間に新たな被害者が出たらしい。

電話を切って数分で新しい情報を記したメールが届いた。

「椿、あとで被害者の発見現場を全部入れてメールで送ってくれ。地図で記したらわかることもあるだろうから」

「そこまでしてくれるの？頼むね」

一緒に画面を覗く蓮真君は妙に積極的だ。もうこの件を任せてもいいかもしれない。過言だけど。

「綺麗な指を持つ人間なんてどれくらい居ると思う？」

「さぁ、知らない。指が綺麗なんて思ったことない」

「あたしの周りは綺麗な人ばっかだけどな……。ピアニストとかギタリストとか、それも共通にならないのよね」

「楽器を弾く人間は指が綺麗なのか？」

「イメージ」

「綺麗な指ってどんなの？」

どんな指って問われても……。

「細りと長くて血色のいい指？」…かなぁ。

「椿のは綺麗な指に入るのか？」

「んなわけないじゃん。若干平均より掌が大きいだけで細くないもん。蓮真君は剣道をやってるから……おお、おっきい」

「お前こそ、短剣で生首作るくせに小さいな」

「生首なんか作ったことないよ」

「ん？やけにすべすべしてて柔けーな。ぷにぷにする」

「うひゃ揉むなよ擽ったい。男って骨が浮き出てるよね」

手を繋いでもみもみしながら互いの手を観察。年下なのにあたしより大きい。それは男女の差ってやつだろう。指は長いし焼けていない肌。綺麗な手だろう。

あたしはせいぜい爪が綺麗なところしか長所は見当たらない。

「綺麗な指、ね。そんなものを集めてどうするんだ？どうせ腐るだろ」

「腐らないように保存するんじゃない？それか……アクセサリーにするか…食べるか」

指を食べている人間を想像して手を繋いだまま顔を合わせて青ざめる。流石にそれは気持ち悪い。無理。

人喰い族とか人間の親指をアクセサリーにして首に垂らしていそうだ。

猟奇殺人は何かを求めての殺人のこと。奇妙な趣味での殺人。

今回は指集めの趣味。

綺麗な指を求めている、ということにしよう。ただの殺人狂で獲物を仕留めた戦利品なのかもしれない。

殺し屋ではない可能性は大。

しかし裏の人間も殺されているところを見れば裏現実者なんだろう。

警察が知っている被害者はあくまで数人だけ。あとは上手く始末されているそうだ。

手掛かりは警察よりあたし達が掴める。

だから。この場合。

篠塚さんの心配をすることはないんだろうと、思う。鉢合わせすることだって、ない。

でも、心配する。

あの人はいつも危うい。

あたしに遭うし、頭蓋破壊屋に遭うし、偽者にだって遭う。
遭うにも関わらず殺されないのは運がいい。
でも、運はいつだって、見捨てる。
知らなくていい裏の現実を、見ることになってしまう。あの人は表の人間なんだ。
それが心配でたまらない。

「椿？お前、何か悩みでもあるのか？」

思考に夢中で話を聞いてなかったあたしを我に戻す蓮真君。

「え…いや、別に」
「嘘つけ。お前わかりやすいんだよ、眼がどっかを視てる時は何か思考してるんだろ。集中しろよ」
「ん……ごめん」

蓮真君は重たい溜め息を吐いた。
かと思えば、顔を近付けてあたしの眼を覗く。それから微笑を浮かべた。

「聞いてやるから話せ。ほら、ぼく達、秘密の友達だろ？」

そう言った。秘密の、友達ね。
間違いではない。正しくないとは言えない。

「自殺、を考えたことある？」

少しだけ、気分が楽になってあたしはそう口を開く。
蓮真君は怪訝な顔をする。

「そりゃあ……一度や二度、ばかなことで死にたくはなったけど…。それが？」

「……なんか、疲れを感じるの、最近」

違う。あの日。あの台詞を聴いてからだ。

「責任を……多分…押し付けて――――」

そこまで言ってあたしは言うのをやめた。止めた。

「ううん。何でもない。今のは忘れて」

あたしは首を振って話を戻した。

明日。一番新しい発見現場に行く為に予定を話して、家に帰った。

その夜、些細な事件が起きる。

遊びに来ていた藍さんのパソコンを覗けば、幼女やら中学生のあからさまに盗撮された写真が映し出されていて、正真正銘至極究極にドン引きをしていたあたしの後ろに立っていた。

いつ家に入ってきたのかさえわからない吸血鬼であるラトアさんが――――今夜はやけに妖しく色気を放っていて、吸血鬼らしい――――あたしを見下ろして言う。

「椿お嬢――――デーどに行こう」

吸血鬼が――――赤面をしてデートの誘いを噛んだ些細な事件。

自殺他殺志願

――死にたいと思う。
悲願するのは日常茶飯事だった。
あらゆる全てを全部根こそぎ捨てたいそう思うのは、ありがちな現実逃避。
全てを嫌い全てが嫌になった。
死んでしまいたい。そのくせ、自分を殺せない。
だから誰かに殺されてしまいたいと、思っていた。
ぐちゃぐちゃに跡形もなく消されてしまいたいと、思う。
こんな思考さえも木っ端微塵に粉砕して消え去って欲しい。

「……」

デートの誘いをしてきて噛んでしまった吸血鬼を見上げてあたしは沈黙する。
ポーカーフェイスは、いつも崩されるが今は面白いことに崩れている。紅潮して今にもこの場から逃げ出しそうだ。

「ええ、いいですよ」

わけがわからないがここで断ると、あまりにも可哀想過ぎるため縦に首を振った。
男の顔を立ててやるのは女の役目だ。
吸血鬼のイメージを壊す赤面だけれど、吸血鬼らしい格好だけで許

してやろう。
ヴィジュアル系と言っても通用できそうな黒いズボンに黒いYシャツに黒いジャケット。茶髪は軽くオールバックにされていて、整った顔付きが露にされている。赤面を覗けば吸血鬼らしい妖艶があって素敵だ。
デートの誘いを断る理由なんてないじゃないか。
彼が逃げ出す前に立ち上がれば、震えた手を不器用に差し出された。
映画のチケット二つ。
ワォ！この前話した映画じゃないか！

「行く！今すぐ行きましょう！！ありがとうラトアさん！」

あたしは抱き付いてはしゃいだ。やけに硬いのはラトアさんが硬直しているせいかな。
直ぐ様家を出ようとしたが、違和感に気付いて、足を止めた。
……あれ？あれれ？
あたしは振り返りたくない後ろを振り返った。

「いってらっしゃい、お嬢」
「いってらぁしゃーい」
「いってらっしゃい」

ソファにいる藍さんも、テーブルの席についている白瑠さんも幸樹さんも、笑顔で見送る。
ラトアさんだから平然と見送れるのだろうか。白瑠さんならナイフを取り出しても可笑しくはないというのに、ニコニコの笑顔だ。
とりあえず――あたしは――――。

「いってきます」

そう言ってラトアさんを連れ出した。
　移動手段は予想できていなかった。てっきりレンタカーでいくのかと思っていたが、ラトアさんは予めあたしに許可を得てからあたしを抱えて、文字通り夜の空を飛んだ。
蝙蝠になるとか羽を出すとか、そんな空想をしたのだが単なる脚力でのジャンプだった。
屋根から屋根へと飛び移る。
浮遊時間が長い。どんだけ高く飛んでんだ。吸血鬼かっけえ。

「静かだな」

ビルの屋上に一度足を着いて止まるラトアさんが口を開く。気を失ったと思い覗いたのだろう。
硝子細工みたいな瞳と眼を合わす。

「高いとこは怖いか？」
「高いとこは大好きですよ。ジェットコースターだって大好きです」
「何故黙っている」
「考えてるんです」
「何を考えているんだ」
「何故ラトアさんがあたしをデートに誘ったかを」

あたしは強引にラトアさんの腕から降りた。歩き出して下がよく見える端へとまで行く。

「映画を観る、それだけだろう。約束したではないか」
「そう、約束しました。しましたけど、あたし、ラトアさんと二人で映画鑑賞がすんなりできるなんて思いませんでした」

あたしの予定では、こっそり、ラトアさんと出掛けて観るつもりだ

ったんだ。
夜中を抜け出そうと企んだりもした。

「あの過保護なお兄ちゃんが、ましてやデートを許可するなんて…夢にも思えませんよ」

下を眺めていたら目眩がしてきた。いくら高いところ好きでもこの高さを風を受けながら立って眺められない。楽しみにしている映画観る直前で好んで死ぬようなマゾではない。
あたしはラトアさんと向き合って、たたみかける。

「あたしを連れ出さなきゃいけない理由があるんでしょう?それでラトアさんは頼まれた。デートに誘って連れ出してくれって。丁度映画に行く約束もあったから、計画はあまり考えなくて済んだでしょうが……上手く騙せるとでも思ったんですか?ラトアさん」

「……」

ラトアさんは苦い顔で黙り込んだ。何かを迷うように視線をあちらこちらと泳がす。

「わかってますよ。どうせ、アレのことなんでしょう」

すんなり自白してくれなさそうなのであたしはそう言って肩を落とす。

「知って、いるのか?」
「ええ。あの人達は上手く隠してるみたいですが…バレバレですよ。なんであたしに隠したがるか理解できません」

ここで大袈裟な溜め息を吐く。

「仕方ないだろ。切羽詰まった状況なんだ。お前が大事なんだろう」
ラトアさんはやれやれと言った感じに息をつく。
切羽詰まった状況？それほど深刻なのだろうか。
「それならそれであたしに話してくれてもいいじゃないですか！」
あと少し。ラトアさんが喋ってくれれば、仲間外れにされている秘密がわかる。
「それぐらい、理解してやれ」
ラトアさんは眉間にシワを深く刻んで言う。
「オレだって―アイツ（、、、）に関わりたくなどないが戦争をするならばクラッチャーに加戦する。お前を―アイツ（、、、）が―」
戦争だって？切羽詰まっている？そこまで知らないとこで大事になっているのか。
肝心なところで、ラトアさんは言葉を止めてあたしを凝視した。
「お前……知って、るんだよな？」
「ええ、知ってますよ」
「…一体何をだ？」
「…あたしに隠していること」
ズカズカとラトアさんは近付いてあたしの首を掴んだ。

「それはなんだ？」

首を掴まれたことに驚いて思わず息を飲む。

「嘘だな！貴様何も知らないな！」

バレてしまった。

「オレにカマをかけたな！」

「だってラトアさんも加担してるなんて、ムカついたんだもん！」

「ムカつきでオレを裏切り者に仕立てあげようとしたのか！」

「裏切り者じゃん！あたしと秘密を守ってるかと思えば少女一人を仲間外れにして大の男達がコソコソコソコソ！酷い！」

「秘密を守ってるだろうが！どこが裏切り者だ！莫迦者！」

「でもでも！アイツって黒の殺戮者でしょ！？」

ラトアさんは更に顔をしかめた。

ぱっとあたしの首から手を話す。

「何故そうだと思う？」

「今度はカマじゃないです。白瑠さんが不機嫌は黒の殺戮者と会ってからだし幸樹さんは彼の話題をするなとまで言いました。…戦争をやるんですか？あたしが何かまずいことをしたんですか？今夜白瑠さん達は何をする気なんですか？」

あたしは問い詰めた。ラトアさんは表情を変えないままあたしを凝視する。

自分の失態に唇を噛んでから舌打ちをした。

「この事は黙っていろ。口にもするな触れるんじゃない。知らない

フリを続けていろ。さもないと例の指切り殺人のことをバラすぞ」

長い沈黙のあとに言われたのは脅しだった。

「なにそれ!?ずるい!裏切り者!その手を使うのはあたしの方なのに!」

「何故だ!?バラされて困るのは貴様だろ!」

「そっちだって困るでしょ!」

「いいからこの件は兄達に任せてお前は黙って指切り殺人鬼を追っていろ!今なら気付かれずに済む!」

ラトアさんはびしっと言った。

「それが最善だ。お前が下手に動けば――死人が出るぞ」

死人が出るのはいつものことだ。だからそれは脅し文句にはならないはずだった。

だけど脳裏に浮かんだ腹から出血した幸樹さんを思い出して、身が鋤くんだ。

「……上映時間が迫っている、行くぞ」

腕時計を気にしたラトアさんがあたしを抱えるために腕を伸ばす。

あたしはそれをガシリと掴んだ。

「待って。知らないフリをするから、だからせめて教えてよ!あたしのせいなんでしょ!?」

「お前のせいじゃない!!!」

お前のせいじゃない。

即座に真っ向から否定をされてしまった。されてしまった。
あたしの、せいじゃない。

「そう……ですか…。すみません」
「……怒鳴ってすまない。行こう」

俯いたあたしの頭をポンポンと叩いてから紳士的な仕草であたしを抱えてラトアさんはまた飛んだ。
浮遊感を味わいながら思ったことは山のようにあって波のように押し寄せてきたけれど、あの電車でのことを思い出してあたしは考えることを放棄した。

映画観にはギリギリ間に合ってジュースやポップコーンを買って席につけば上映が始まった。
そのあとは映画の中に入った気分で物語に集中する。
吸血鬼と人間の純愛ラブストーリー。うぶな恋に禁断で危なかっしい物語に釘付けになる。ラブストーリーなのに妙に緊迫した危機が迫りくるアクションが入っていて楽しめる。
ふと、あたしは吸血鬼と恋したかったんだと思い出した。
吸血鬼に愛されるヒロインになりたいと、願ったことがある。
愛される。愛されるような人間なのだろうか。
愛。愛か。
愛って、本当になんだろう。
ばかだと笑ってしまう疑問まで浮かんできたから忘却した。
一緒に「愛してる」と見つめてきた秀介も、忘却の彼方にやる。
ふと、一緒に劇場を出たラトアさんに目をやる。上映が始まってから一言も口を開いていないラトアさんは難しい顔で腕時計を見つめていた。

「流石に、純愛ものはつまらなかったですか？」

それなりにアクションが入っていて緊迫感を存分に味わったのだが純愛テーマは、ましてや人間と吸血鬼の恋がテーマなんて欠伸が出てしまうだろうか。

「いや、面白かった。しかし現実は騒ぎになるほど禁断ではない」
「それって吸血鬼と人間のカップルがいるってことですか？」
「ああ、珍しくないことだ。まぁ大抵…人間の恋人は取っ替え引っ替えしているがな。あの吸血鬼のように一人を真っ直ぐに狂ったように愛せやしない」
「狂ったように？ラトアさんは狂ったようにしか見えないんですか」
「怒るなよ、イケメン男優を貶しているわけじゃない。大袈裟に表現しただけだ。訂正しよう。周りが見えないほど、愛せやしない」
「怒ってませんよー。それは純愛だからじゃないからでしょ。こう……苦しいくらい愛してる！と食べたいくらい美味そう！みたいな。ラトアさんはあります？好きだけど食べてしまうかもと思った恋」
「ないな。別にそれほど人間を食物として意識はしていない。血を吸わずに愛すなんて苦じゃないだろう」
「え？ステーキが目の前に置いてあるようなもんじゃないんですか？」
「間違いではないが、要は外見の問題だな。美しく噛みつきたくなる首筋ならまだしも、生きてる豚にお前は噛みついたりしないだろ？」
「まぁ……そうですね。じゃあ現実の吸血鬼は食欲制御に苦労はしてないんですね」

二人で立ち話。

「いや……喉が渇いているなら否応でも噛み付きたくなる」

茶化した風でなく、ラトアさんは真面目に言って一言呟いた。

「喉が渇いたな」

あたしはそうでもない。さっきから会話を挟んでコーラを今飲み終えたのだから。

上映前に買ったがラトアさんの分だけない。ラトアさんには必要ないからだ。

「お前はどうなんだ？」

「は？喉は渇いてませんが」

ついでに言えばポップコーンでお腹は満たされている。

「違う。吸血鬼と人間のカップルが珍しそうな口振りだったから、何か偏見でもあるのか？」

「いいえ。ただ。偏見ならどうしてそれが禁断なのかが解せませんね。豚じゃないですけど、見た目は人間同士なんだし」

「ふん、禁断が売りなんだから許してやれ」

「そうですね。……まぁ、あれですね、現実の吸血鬼に会いたくなりましたね」

「ん？なんでだ？目の前にいるだろう」

ラトアさんはまた腕時計を確認した。時間が気になるのだろうか。

「吸血鬼はラトアさんしか会ってませんし……どうせなら純愛してる吸血鬼と人間のカップルに会ってノロケが聞きたいです」

あたしは笑って言ってみせた。はて、ノロケを聞いてどうすんだか。

「ふん、純愛ね。しているか疑問だな。……そうか、オレ以外には会ったことがないのか……」

鼻で笑いのけてからぶつくさ言うラトアさん。

「裏に入る前までは、吸血鬼と純愛がしたいと夢見ていましたからね」

「ふん、映画の影響を受けすぎだな。……まぁ、純愛をする相手ではないが、一人この辺に吸血鬼がいるから紹介してやろう」

あたしはきょとんとした。

時計を気にしていたラトアさんは夜空のにおいを嗅ぐような仕草をする。

その吸血鬼のにおいでも嗅いでいるのだろうか。犬みたいだ。

「本当ですか？嬉しい、正直ラトアさん以外の吸血鬼と会えないかと泣きそうだったんです」

「泣いてみろ。ほら、行くぞ」

ラトアさんは紳士的にあたしの手を軽く握って引いて歩き出した。

映画館を出て、人気のない道にいって、あたしに向き合う。

「食事するが、構わないだろ？」

「…グロくないなら…構わないですが」

「グロくなどない。お前が血塗れにした者の血をもらうだけだ」

「は？」

ラトアさんはあたしの肩に手を置いた。

「人を殺していないんだろう？」

あ。忘れてた。そういえば一週間も仕事をしていなかったから、人を殺してない。
「オレ達の食事ついでに殺っておけ」とラトアさんはあたしを抱えあげた。

「…言っておくが、黒の殺戮者の話を持ち出しても意味ないからな」

釘を刺すのも忘れない。

「アイツはきっと何一つ喋らないからな」

降り立ったのは屋上。
そこに一人の少年がいた。
あまりにも小さく、小学生並の身長。髪は水色かかった白銀で輪郭を包んで外につんつんと跳ねていた。
服装はサイズの合わない白いYシャツを着ている。

「久しいな。紹介する、紅色の黒猫だ。コイツはハウンだ」

殺し屋の名前で紹介された。
まぁこれから殺しをやるっていうのだから仕方ない。
ハウンという名の少年は無言だった。
ただ口を一文字に結んだままあたしを見上げる。

「無口なんだ」

ラトアさんはそう説明した。無口にもほどがあるだろう。一言ぐら

い言ってくれよ。
　あたしはしゃがんで目線を合わせた。しゃがめば丁度目線が合うのだ。
見つめてみた。
ラトアさんと似た不思議な瞳はただの硝子のように生気はなく、ぼんやりとあたしを見つめ返す。まるで張り合うように見つめ合う。
互いに無言そして微動だにしない。
ただただ無意味に張り合って見つめあった。口を開いた方が敗けだ！

「いつまでそうやっているつもりだ」

敗者ラトア。

「いやぁ、可愛いッスね。あたし胸射止められました。抱き締めてもいいですか？」
「本人に訊け。…ふん、お前の好みがわからないな」

ハウン君に直接訊いたが相変わらず人形のように無表情で黙っている。
頷くとか首を振るとかどれかしてほしいものだ。

「ポセイドンは確か…二十にもなっていない男だったな。見掛けたことがあるが……先程の男優とは似つかないし人格も違う」

ポセイドン――狩人の鬼――秋川秀介。
忘却の彼方から引き返してきて、また思い出してしまう。

「別に……彼は…タイプではありません」

嘘だったり。美少年は大半タイプだ。蓮真君だって秀介だって、顔

も声も好き。文句あるかこのヤロウ。
それに。秀介に気持ちが揺れていたり、する。
不意に。突然だった。
眼を離した隙にハウン君が腕を伸ばしてあたしを抱き締めた。
驚いたが、もう胸がキュンッとして、抱き締め返す。超可愛いんですけど！
やけに冷たい肌。小さくて柔らかさがない身体。香水なのか、肌から甘い香りがする。
――――と。そこで、いきなり腕からハウン君が消えた。

「こやつは貴様の一餌（、）ではないぞ、ハウン」

ラトアさんがハウン君の襟を掴みあたしから引き剥がしたのだ。ぷらーと小さい身体はラトアさんの片手で浮いている。ハウン君の口はポカーンと開いていて二つの牙が見えた。
おや？もしかしてあたし食べられようとしていたのかな？

「仕事なんだろ。混ぜてくれ」

それだけで会話は成立したらしい。最早会話と言っていいものなのか。
ハウン君が引き受けた殺しの仕事の標的は今立っているビルの中にいるそうだ。多弁でもないラトアさんから詳しい説明はない。勿論文字通り無口のハウン君からも説明なんてない。
要は殺しだ。吸血鬼に言わせれば食事。
もう忘れずに常備している短剣を右手に、吸血鬼二人の後をついて歩いていった。
電気のついていない廊下を歩いていけば、一つの扉の前に立ち止まる。社長室のようだ。
そこでラトアさんから無言の指示が下る。

自分が囮になるからお前が殺せ。だそうだ。
あたしとハウン君は扉の隣に立ち構える。
　コンコン。
ラトアさんがノックしたあとに飛び屋根に張り付いて、弾丸の雨を避けた。
銃弾で穴だらけになった扉が蹴り開けられる前に壁に横たわりラトアさんは死んだフリをする。
蹴り破って出てきたマシンガンを持つ男を短剣で切り裂く。
それから、咆哮が響いた。
吸血鬼が牙を剥き出して獣のように飛び付く。

「……」

どうやってこうなったんだろう。
数分もしない内に片はついた。標的であろう男を少年である吸血鬼は“食事”中だ。
もう一人の吸血鬼もまた食事中。
あたしが首を掻き切ってまだ息のある男の首に噛み付いて生き血を啜っている。
視ているのは、現実の吸血鬼の食事だ。血塗れの部屋。あたしが既に息の根を止めたのは二人。部屋には五人の男が武装して待ち構えていたが圧勝だった。
ラトアさんは二人目を食事中。
あたしはただただぼんやりと吸血鬼の食事を見た。
　んー思ったより良くはない。
人間が人間を食っているのと変わらない。
人間。指。指切り。うえっ。
　食事を終えたのか、口元を赤色に濡らしたままあたしを見上げて立ち尽くすハウン君と目が合う。
口元だけ赤に塗られた、白い少年。

白いだけで、別に、似ていないのに。
　ハウン君は死体を踏みつけてあたしの前まで歩んできた。あたしは首を傾げてしゃがむ。
何か言ってくれるのかと思った。が、違った。
ただ見つめあったあとに、ハウン君は顔を近付けて頬に唇を重ねる。
ざらついた舌が頬を舐める。くちゅうと、頬についた血を舐めていた。
ああ、そう言えば返り血を浴びていたんだ。毎度のことか。
小さな手でハウン君が頬を撫でて血を味あう。
　…犯罪のにおいがする。
あ、そっか。小学生だもん。
……殺人現場のせいかな？
大いに混乱中。

「お前はまるで吸血鬼だな」

ラトアさんも終えたらしく、口元を拭いて言った。

「血を求めてる」

それに同意するように、ハウン君はコクリと頷く。
血を、求めてる。
真っ赤な、血を求めてる。
真っ赤な血を求めている、獣。

「吸血鬼に、成りたかったんです。あたし」

あたしは笑うよう心掛けて、そう言い返した。

腕時計を確認したラトアさんはハウン君に挨拶をしてからあたし

を抱えてやっと帰宅。
家には誰もいなかった。留守だ。
訊いても教えてくれないだろうから、訊くことはしなかった。
「ところで」とラトアさんは口火を切る。どうやら今晩はあたしを見張るらしい。家に上がり込んでソファに腰掛けてあたしに問う。

「指切りはどうなったんだ？」

血を洗い流してびしょ濡れになりつつあたしは答えておく。

「明日動くつもりです。出掛けても平気でしょうか？」
「恐らく、奴らも朝は寝ているだろうな」

朝まで帰ってこない可能性があるということか。

「無闇に突っ込んだりしないだろうな？」

ラトアさんは目付きを変えて問う。

「大丈夫ですよ、まだ居場所が掴めてないんですから」

どいつもこいつも、過保護だな、本当。
寝坊しないようにあたしは直ぐに自分の部屋に入った。着る服と持って行く武器を用意しておいてから、布団に潜って眠りにつく。
起きたらラトアさんは居なくて、代わりに朝食が在った。あたしの分だけ。
もう二人は、済ませたようだ。部屋にいる気配がする。

「……」

あたしは一人で朝食を摂ってから、支度を始めた。
二人が起きる前に家を出てしまおう。
赤いチェックのスカートを履く。ベルトにカルドを通して、それが隠れる黒のフード付きジャケットを着る。
ジャケットの裏にはナイフ三つ。袖の中は短剣。
髪はドライヤーでセットして決める。

「つーちゃん……おめかししてどこ行くの？」

そんなあたしの格好を見て、ソファの肘掛けに肘を乗せその上に顎を乗せて林檎を器用に食べていた白瑠さんがポロリとその林檎を落とす。それくらい驚いたらしい。
いつもスカートは頑なに断るからだ。

「いえ、ちょっと」

決して蓮真君との二人きりのお出掛けに嬉々として浮かれているわけではない。

「そういえば白瑠さん、昨日は何してたんです？出掛けてましたね」
「んー？んーまぁねぇ。いってらっしゃぁい、椿ちゃん」
「はい、いってきます」

遅くなっちゃだめだよぉ。
それだけ言って白瑠さんはそそくさとあたしを見送る。
そんなに知られたくないわけか。
あたしはさっさと行くことにした。
家を出て、溜め息を一つ。
待ち合わせ場所は駅。
今日初めて彼の私服を見ることになった。黒のチャック付きパーカ

ーに白の襟付きシャツ。デニムを履いて、肩にはいつも持ち歩いているバットケースをかけている。

「よお」
「よーす」

軽く挨拶を交わして電車が来るのを立って待つ。

「正直、お前と電車に乗るの怖い。血塗れにするなよ」
「安心したまえ、もう二度とレッドトレインは作らないから」

冗談を交えて話していれば電車が来た。それに乗り込む。時間帯のせいか、空いてて席が空いていたがあたしと蓮真君も座らず、扉の横に向き合って立つ。

「アレは平気なのか？お前中毒なんだろ、一週間仕事してないって言ったろ」
「あー、それなら昨日二人殺った。安心して、噛み付かないから」

殺戮衝動。殺戮中毒。
そうゆう意味でも、あたしは吸血鬼みたいなんだろう。血を求めている獰猛な獣。人間じゃない。貪る獣。
ガタンゴトン。
揺れる振動を感じながら流れる景色をぼんやりと見つめた。

「どうかした？」

蓮真君が移動してあたしの隣にくる。揺れに倒れないよう吊革を掴んで踏み留まりながらあたしの顔を覗く。

「大丈夫かよ、椿。なんかあるなら話、聞くけど」

蓮真君はそう言う。

昨日の発言を気にしているのだろう。誰だって、気になるのだろうな。普通。

「精神、大丈夫？」

鼻が触れるほど顔を近付けて、蓮真君は問う。この癖を直してくれないだろうか。

「多分、大丈夫」とあたしは答えておく。

「他殺志願者なの、あたし」

「他殺…？」

「うん。あー…誰かあたしを殺してくれないかな、って」

あたしは自嘲の笑みで蓮真君に向けて答える。

「自殺志願と…また違うの？」

「一緒だよ、死を望んでる。死ねば楽なんだろうなぁ、て思う。死んだら、どうなんだろうね？魂みたいな綺麗なものがあるとは思ってないから逝き場所があるとは到底思えないんだよね。とりあえず、何も考えなくて何も感じなくなれるのは、死かなって。でも自分の喉や腹にナイフを刺す気はないの。臆病でしょ」

流れる景色に眼を戻して、そう呟く。

「殺してもらう約束だったんだ」

ガタンゴトン。呟かないと車内にあたしの声が響いてしまう。

「いや、あたしが勝手にそう約束させたの。もしも、あたしが不要なら、貴方の手で殺してくださいって。言っておいたの。どうせ死ぬなら、こんな思考をする頭を粉々に粉砕して欲しいから」

頭を粉々に粉砕。それだけで誰に頼んだか、解るだろう。

「でも、断られちゃったの」

コト、と額を冷たいドアに当てる。

「あたしの心臓、止めるつもりはないんだって」

この鼓動、俺、止めるつもりは、ない。
そう云った白の殺戮者。
笑いもせず、あたしと眼を合わさず。
白い白い、狂った殺人鬼。
あたしの命を破壊してくれない白い殺人鬼。

「責任を押し付けてたんだ。あの人に。あたしの手によって死ぬ人間皆、彼があたしを殺さないからって。責任を擦り付けてたんだ。その責任が、断られて返ってきた。じゃああたしの死因はどうすればいいんだろう？なんか…凄い、疲れが出ちゃって…疲れちゃったみたい…」

眼を閉じれば、そのまま、眠れそう。眠りに落ちたまま、二度と目覚めなければいいのに。

ぐいっ。

強引に肩を掴まれて引っ張られた。蓮真君じゃない。蓮真君の横から手が伸びてきた。

あたしの後ろに在った座席に座っていた誰かが立ち上がり、あたしを力の限り抱き締めたのだ。
この痛いくらいの抱擁。温もり。

「ばかっ！んなこと考えるな椿！」
「しゅ――――シュウ」

秋川秀介。
秀介の匂い。温もり。鼓動。それに包まれる。

「死ぬなよ、殺されるな、殺されることを願うな！許すかよ！生きてくれよ！誰にも、椿を殺させたりしない！どんな殺し屋でも片っ端からこの俺が潰してやる！」

変わったりしない。
忘れてた。殺してと叫んだ時もこうやって抱き締めてくれたんだ。
殺せない――死なせない。はっきりと強く言った。
あたしが好きだから。大好きだから。好きなんだって。あたしを愛しているんだって。
どうしようもなく、殺戮者で殺し屋のあたしが、好きな狩人。獲物を愛した狩人。

「秀介……」

あたしは笑って名を呼ぶ。

「電車の中で叫ぶのはやめなさい」

真面目に注意をした。
「…すみません」と秀介はこちらを見る乗客者に謝罪して頭を下げ

る。
　ごつん。といきなり蓮真君がまた顔を近付けてきたかと思えば、頭突きを喰らった。グラリと脳味噌が揺れる。
「先ずは死ぬことを諦めろ。そしたら頭蓋破壊屋に殺されるのも簡単に諦められるだろ。責任なんて、最初かないだろ？一人で思考の迷宮に入るな、お前は考えすぎなんだよ」
ぐりぐりとあたしが擦る額を親指で押す蓮真君はそう微笑んだ。
　胸が、ギュッ、と痛む。
　すると、ばしん。蓮真君の手が秀介によって叩き落とされる。
ぎろり。睨み合う二人。
あたしは、吹き出して笑う。
「慰めてくれてありがとう。二人は優しいね、本当。優しい」
「！…優しさじゃない！俺のは椿の――愛だ！！」
「秀介君。迷惑だから飛び降りて」
「走行中の電車から！？」
薄い笑みのまま言ったら秀介はショックを受けた。
　出来ると思うよ。
　ほら、ナマハゲだし。
なんて言ったら涙目になった。
　変な目で見られるので隣の車両に移って、座席に座る。左右からの、無言の威圧感が重い。
　さて、どうしよう。
まさかこの二人が再び顔を合わすことになろうとは、思いもしなかった。どうしよう。どうしたらいいんですか。
「よし、自己紹介からしよう。こちら、秋川秀介くん」

「椿。なんでそいつといるの？」
「それで、こっちが奈乃宮くん」
「椿。電車一度降りない？」

……。

互いに無視しやがってる。
あたしがハウン君とただ無意味に見つめあうように、秀介と蓮真君もただ無意味に睨み合う。秀介にはちゃんと威嚇という意味があって蓮真君はただ睨み返してるだけだろうが。

「それにしても今日は可愛いな！椿。この前のゴスロリもよかったけどこれからデートしにいくみたいに……」

あたしが拗ねて黙り込めばパッと秀介は無邪気な笑顔をあたしに向けて褒めてきた。が言葉を止める。
そういえば、秀介と会う格好でまともだったのはあの夜の病院の以来だ。病院服に白瑠さんに借りた服にゴスロリ。今日は普通の格好。
秀介の視線は蓮真君に戻される。
いやなよかん。

「てめえっ！表出ろ！！」
「あ？やんのかコラァ！」
「ヤンキーか！！」

秀介が蓮真君の胸ぐらを掴んだ。蓮真君も反応して胸ぐらを掴む。
あたしは素早く二人の頬に突っ込みの平手を喰らわす。
いい加減に静かにしなさい！ナイフを出すぞコラ！

「椿ぃ…！なんでこいついるんだよっ？なんで一緒にいるんだよっ！？」

「えっとぉ……」
「デート」
わなわな震える秀介があたしに詰め寄る。この煩い子が騒がない返答を考えていれば、蓮真君が答えた。
その返答は間違ってる。
「浮気!?」
「君と付き合ってないから浮気とは言えません」
「キスしておいて、んな殺生な!」
「窓突き破って降りなさい」
「命令!?」
そこで蓮真君が大きな溜め息を吐いた。
「アンタさ、椿に気持ちを押し付け過ぎなんだよ。椿の気持ちを聞いたことあんの?」
「あぁ?部外者がすっこんでろ餓鬼。気安く椿椿って呼んでんじゃねえよ」
「頼むからあたしの疲れを増幅させないでよ……」
蓮真君に続いてあたしは溜め息を吐いて頭を抱える。頭痛が起こりそうだ。
「椿……大丈夫かよ?ちゃんと休んでんのか?」
直ぐにあたしを心配して顔を覗く秀介があたしの髪を上げて額に手を当てる。
「無理して仕事してねーよな…?無茶、すんな。疲れをちゃんとと

らねーと、肩を揉んでやる」

ニッと秀介は笑いかけてからあたしの肩を揉む。

「俺が疲れをとってやるから。なっ？」

癒される可愛い顔のにへらとした笑み。ついつい、つられて笑ってしまう。

見兼ねて蓮真君があたしを小突いた。

「あ、大丈夫だから。肩は凝ってないし」

「そう。……で、こいつも裏現実者なわけ？」

むすっとした顔で秀介が蓮真君を見る。あの話を聞いていたなら、そうわかってしまうか。

「うん、一応」と頷いておいた。ややこしくなるのは御免だから那拓という名は伏せておこう。

なんだか気に入らないという眼で刹那睨んでいたが、気を取り直してあたしに向き合った。

「クラッチャーと何かあったのか？」

そう話を戻す。

白瑠さんとのこと。

「別に、何もないわ」

「何もないわけないだろ」

「厳密に言えば、それだけ。最近機嫌が悪いのよ、あの人」

それだけなんだ。機嫌悪くて、あたしに抱き付いて笑いもせずに、

殺さないと云った。白瑠さん。

「それって黒の殺戮者が原因？そういえば昨晩会ったぜ」

「え……？」

昨晩――昨晩だって？

「ドクターもいて、黒もいたな。なんだか一悶着あったが、俺が割って入ったらさっさと撤退しちまったよ」

「え？黒の殺戮者と一緒にいたのっ？」

「え？知らなかったのか？」

秀介はきょとんとした。

「なんか喧嘩してたみたいだぜ。獲物を取り合っていたわけじゃなくて――てっきり、白と黒が決着つけるかと思ったんだけど」

「お前はよくその喧嘩に割って入れたな。邪魔者の何者でもないじゃん」

腕を組む秀介に蓮真君は突っ込む。

白と黒の殺戮者。

裏現実でトップとも言える名を轟かせる因縁の仲の二人の決着に割り込むとは度胸があるのか単なる馬鹿なのか。

「白だろうが黒だろうが狩るのが俺の仕事だ！」

噛み付く勢いの彼の肩を掴んで静かにさせる。

「どうして？なんか話してた？二人は」

「俺が駆け付けた時は派手に暴れてた、クレーターだらけだったぜ

？俺が入るなりピタリと止めたさ。クラッチャー側はさっさと退散、黒はにこやかに挨拶して帰った」

クレーターだらけの現場。頭蓋破壊屋と遊びと称しつつ殺し合ったにも関わらず、にこやかに挨拶できる器の持ち主。

白瑠さんと同じで普段はへらへらしている人物なんだろう。

とにかく。裏はとれた。

白瑠さん達は、黒の殺戮者に会いに行ったんだ。何しに行ったかはわからないが一悶着殺し合った。

今朝の機嫌からして最悪な状態、というわけではないのだろう。

一晩あたしを仲間外れにして行なった秘密は、とてつもなく大事だったらしい。

秀介が割って入る前に話を終えて何か解決でもしたのか？

あたし絡みのはず、否あたしが関わってはまずい“何か”が解決したのかもしれない。どうなんだろう。

いっそ、藍さんを拷問してみようか。なんて、半分冗談。…半分は本気。

「ん？どうした？椿」

「……別に」

あ、そういえば。

秀介に黒の殺戮者の名前を訊くつもりだったんだ。

訊いてみれば、秀介は困ったように首を傾げた。

「んー、それなりに黒の殺戮者と会うけど……本名を呼んだことねえから…。無理、忘れた」

少し難しそうな顔で思い出そうと心掛けてくれたが即座にその行為を破棄。

初めから彼の名前は脳内にインプットされていなかったらしい。

「頭蓋破壊屋の本名だって俺、知らねぇもん。つか忘れた。黒の方はプライベートだって黒の殺戮者って名乗ってるから……つか、クラッチャーに訊いた方が早くね？アイツは知らないわけないだろ」

「……」

答えてくれるならば、君に訊いたりしない。

そうか。秀介も知らないのか。

じゃあ誰が彼の名前を知っているというのだろうか。誰が彼の名前を教えてくれるんだ。

本名を名乗らないなら、本名を知る人間は少ないだろう。下手をすれば火都も知らないかもしれない。

一体、誰が彼の名前を教えてくれるんだろう。

「黒の殺戮者、ね。アイツは妙に憎めないんだよなぁ」

「ん？」

「殺し屋で不愉快な奴だけど…なんだろうな、吸血鬼だからかな…

……嗚呼、椿と似てるからかも。ほら、血塗れになるの好きらしいから、アイツも」

秀介は会話を繋げる為か、そんなことを言い出す。冗句を言って笑いかけるのはあたしの顔に笑みを戻すためなんだろう。

蓮真君にも似たようなことを言われた気がする。

俺は椿大好きだから発言はあたしも蓮真君も無視。

「今吸血鬼って言った？」

「へ？うん」

「黒の殺戮者は吸血鬼なの？」

あたしも蓮真君もそこに食い付いた。

「知らなかった？吸血鬼だぜ」

当然だろと言わんばかりに秀介は答えた。

「ん、クラッチャー達は教えてはくれなかった？まぁ…あれだよ、吸血鬼だろうが人間だろうが関係ないだろ。手間か楽か。クラッチャーは一体何を教えてるんだ？」

呆れたように秀介は話をそっちに移す。

手間か楽か。

息の根を止めるのが、楽かそうじゃないか。

吸血鬼は楽に殺せやしない。

白瑠さんが教えてくれること。

「……スカートとニーソの間がそそる、ということを教わった」

「……」

「……」

「冗句だ。頼むから見ないでくれる？」

なんか不意に思い出してウケ狙いで口にしたら二人はあたしの下半身に目を向けた。あたしは例の間をなんとかスカートを伸ばして隠す。

あたしが悪かった。

「吸血鬼、か。どおりでね。よくあの人を怒らせて喧嘩をして生きていると思ったら…へえ」

吸血鬼。血塗れ。そうだ。身体中の血液をぶちまける、で気付くべ

きだった。
ラトアさんも親しげな口振りだったし、ハウン君に訊く前に釘を刺したのも理解できる。
　吸血鬼だから。
吸血鬼は数が少ない。
吸血鬼は多分、友達と呼べなくとも知り合いの域なのだろう。
話すのも嫌々そうだったのは、同族意識。同族の話を安易に話したくはなかったのだろう。

「椿？」
「おい、大丈夫か？」

またあたしが黙り込んでしまい、心配して二人が顔を覗いた。
うわあっ両側に美少年。

「大丈夫よ、飛び降りたりしない。バラバラになりたくないもの」
「椿：俺に二回ほどバラバラになれって言ったの？さっき」

とりあえず自殺志願で情緒不安定だというのは否定しておこう。

「ところで」

秀介はまた口を開く。どうやら沈黙させたくないらしい。
気まずいのだろうか。
あたしが一番気まずい。
：いや、想い人のデートに割って入るのは流石に気まずいのだろう。

「これから仕事？」

……。
全然デートだと認めていなかった。爽やかな笑顔で訊きやがった。

「この前会った時より武装してるな」
「……君は透視能力があるのかい」
「さっき抱き着いた時に背中に三本と一本、腕に二本」
「……ほう、君はあの短時間に確認する暇があったんだね。何が愛だど阿呆」

あたしは秀介と心の距離を置いた。うんと遠く。

「違う！強く抱き締めたらわかったんだ！愛だ！」
「もう黙りましょう。血塗れにすんぞ」

提案は無言のまま受け入れられた。
血塗れが効いたらしい。
電車であたしが血塗れと言うのはいい脅し文句で効果覿面のようだ。
　なんか秀介の愛を疑いたくなったぞ。
形振り構わず「愛している」と言われるせいだろうか。
愛で正当化していようにしか思えないのは何故だろう。
正当化、ね。

「……」

ガタンゴトン。
沈黙の電車は、好きだ。
静寂が好きだ。静かはいい、落ち着く。
疲れ。うん。それなら電車に揺られて眠れば疲れがとれるかもしれない。
　かぷり。

「……」

かぷり？一瞬理解ができなかった。

左隣の秀介があたしの耳に噛み付いてきたのだ。唇で挟んでいる。

秀介は当然、知っている。彼が一番最初にあたしの弱いところを見付けたんだ。

勿論、わかってやっている。

すぐにあたしは悲鳴をあげようとした。

しかし、ここは電車の中。あたしまで騒いでいられない。

ぐぅと悲鳴は堪えた。

さっきからあたしの手を握っている秀介の手に爪を食い込ませたが効いていないのかあたしの耳を弄ぶ。

唇であたしが敏感に反応する耳を甘噛みするのは飽きたのか、あろうことか舌を這わせやがった。

耳元でクチャリといやらしい音がしてざらついた舌が舐めあげ、吐息を吹き掛けて擽る。

「ふっ……っ……」

声を我慢できなくなった時に丁度電車が停まり、ドアが開いたので掻き消された。

それでも秀介には聴こえたのか、それとも震えに気付いたのか、満足そうに笑うのが解った。その振りかかる息にも反応する。

もう意識が飛びそう。

堪えたが湿った舌に朦朧としてきて声らしい声も出やしない。

「は――――ぁ――――」

もう限界だ。

ギュッ。
あたしは左手ではなく、右手を握った。蓮真君の手を握って助けを求める。
直ぐに蓮真君は気付く、秀介の頭を叩いた。それでやっと解放される。
二人が口論を始める前に、あたしは乗り込んでくる人々をすり抜けて電車に降りた。
そして堪えていた悲鳴を上げる。

「んにゃああ！」

耳を必死にこすった。
うわっ！擽った！うひゃ！痒い！秀介！お前まじでぶっ飛ばす！
と、睨みつけるために振り返ったら、ドアが閉まった窓ガラスに秀介と蓮真君が映っていた。映っていたというより、見えたというべきだろう。
そしてそのまま、電車は走り出してしまった。

「……」

えーと。あれか？
あたしがギリギリ電車を降りたせいで二人とも降り遅れたのか。それとも口論で忙しかったのかしら。
どちらにしても降り遅れたのは事実。
蓮真君と降りる予定の駅だったのだが、さてどうしよう。
生憎あたしは駅のホームで待っている姿を覚えられてはまずい顔だ。
悪くて警察沙汰、よくて幽霊沙汰。
殺人鬼に浚われて遺体も見付からない哀れな女子高生の怨念が駅に出没。とか都市伝説にされちゃいそうだ。
……嫌だ。

至極嫌だ。
ということであたしは蓮真君にメールを送って駅から離れることにした。

「なんでてめえが椿のアドレスを知ってんだよ！！」

空耳で、秀介の声が聴こえた気がして振り返る。空耳だ。
あの二人を、二人きりにするのはとても嫌だったが仕方あるまい。
電車の中で喧嘩してないといいけど。喧嘩以外することがなさそうだ。
二人きりで一体どんな話をするんだろうか。
それはそれで気になったり。
あー、でも秀介ならあたし関連のことしか話さなそう。或いはこれから何をするかを問いただすか。
蓮真君は蓮真君でストーカーはやめろと説得してくれるかもしれない。あの子は優しいから。
優しい、二人。
最近の美少年は皆優しいのかしら。
蓮真君の優しさは、友情、とでもいうのだろうか。秘密の友達。
秀介の優しさは、愛情。愛、か。
それでは、白瑠さんの優しさはなんだろう。
あたしを気まぐれに救い、裏現実に引っ張り込んだあの人。
問えばなんと答えるんだろうか。
狂ったように笑う白い殺戮者は、なんと言うんだろう。

「……ん？おや？あたしは何処に行くんだっけ？」

駅を離れたはいいが、目的地がわからず足を止める。
地理は苦手だ。住所だけではたどり着けやしない。
何故ならあたしはO型だからだ。O型は道に迷っても人には訊かな

い特性があるのだ。……のだ。
地図があれば辿り着けるのだが、それは蓮真君が持っている。
携帯電話でちゃんとした地図を探してみようかな。んー。
あたしは携帯電話を弄りながらとりあえず歩いてみた。
　それにしても、まさか黒の殺戮者が吸血鬼だとは。裏現実者は人間でも吸血鬼でもどちらでも同じだと考える傾向があるのか？
吸血鬼に恐れている裏現実者に会ったことがないからすると、そうなのかもしれない。吸血鬼を殺すのは手間だ。
それになんだか絶滅危惧種らしいし。
そういえばあたしは吸血鬼の生誕について聞いていない。…いや、多分訊いたら「じゃあ君は人間の生誕について知りたいのかい？犬の生誕について聞きたいかい？」と返されそうだ。
社会や生物の話はやめよう。勉強してないんです、真面目に。
　吸血鬼――か。
血を吸う獣。蝙蝠。白い肌。牙。ぞっとする美しさ。魅了される瞳。
吸血鬼は好きだ。白黒の映画での吸血鬼だって観ちゃうだろう。最新のある程度ビデオ店にレンタルしている吸血鬼物の映画はほぼ観た。
吸血鬼が好きだ。美しく、奇怪で、魅力的で、妖艶。吸血鬼に会いたかった。吸血鬼になりたかった。
　少なくとも、血塗れになりたくて、吸血鬼に成りたがっていたわけじゃない。
　一種の、現実逃避だったんだろう。
今では、実現したそれに憧れても、現実逃避なんて無理だが。
現実逃避、か。どの現実のことだろうか？
表現実か？裏現実か？
表からの逃避に裏に居座っているだけなのかもしれない。
――――なんて。
こんなこと考えたくもない。
表に待ち構えているのは処刑の電気椅子か開かずの扉がついた白い

病室のどれか。或いは、境界線を越える前の退屈な日常。
どれも嫌な現実だ。
それなら、ずっと――――。
リビングでの食事を思い出して、忘れようと振り払う。

「ずっと――――なんて」

それこそ、現実逃避だ。
きっとくる。
今まであたたかい場所にいた代償が。痛みが。苦しみが。
強烈なそれが、襲い掛かる時が、くる。
それは今からかもしれない。
間違いなく。
すぐそこまできてる。
あれは予兆だ。
きっと、滅茶苦茶になるだろう。
そして思い知らされる。
居場所なんて、何処にもない――――と。

「っ…」

考えるのはやめよう。
まじで自殺しそうだ。
目的を忘れては駄目だ。

「……目的ってなんだっけ」

まじで忘れてしまっていた。
あ、そうそう、指切り死体の発見現場に行くんだ。
白と黒。

二人の仲を昔から知っているわけじゃないから、今回何があったかなんてわからない。
しかし。
隠しているのがムカつく。
隠す必要があるのか？
因縁の対決ならばあたしに話してもいいだろう。仮にも、仲間なんだから。一応、師弟関係なんだから。
連れてってもらえなくても、精々膝を抱えて膨れっ面するだけだ。
そんなあたしの反応なんて見え透いているだろう。
そんなあたしを宥める手なんて幾らでもあるにくせに、どうして教えてくれないのだ？
あたし絡み？
自分絡みなら否応でも立ち上がるあたしの性格だと、皆口を閉じているのか。
しかし、あたしが狙われている、そんな噂があるなら真っ先に秀介が教えてくれるはずだ。
その線は薄い。
もっと他に、でかい問題があり。
あたしではあまりにも危険すぎる。話すのもいけない。知ることさえも許されないかもしれない問題。
例えば――あたしでは呆気なく死んでしまう、とか。
それならば。
白瑠さんが殺さないと言ったのも、わかる。鼓動を止めるつもりはない。殺すつもりはない。死なせるつもりも――ないのだろう。
否。それは。
あたしの思い込みだ。

「秘密にすんならちゃんとバレないように秘密にしやがれってんだ！！」

足元にあった石を蹴っ飛ばした。
隠している事実だけを知っているからこんなやきもきをしているんだ。苛々する！
これも白瑠さん達の演技の無さのせいだ！
バレバレなんだよ！上手く隠せコノヤロー！
……て、隠す自体しなければ悶々と悩まずに済んだんじゃん。怒るとこ間違ってる。
最近口調悪いの、出てくるなぁ。ストレスだよね、原因。
コン、カンッ。
蹴り飛ばした石はごみ捨て場に落ちていった。そこから、一匹の鼠が這い出る。
……鼠。
ちょろちょろと鼠はあたしの横を歩いていく。ついつい、あたしはそれを追った。
ちょろちょろ。コンクリートを這っていく鼠のあとを歩いていく。
暫くして、ハッと気付く。
何故あたしは鼠を追っているのだろうか。
珍しい遭遇につい……。決して黒猫だからの反応ではない。断じて！鼠をいたぶろうと追ったのではない！あたしは動物大好きだ！動物愛護の殺人鬼だ！
……嘘です。猫は撫でるのとじゃれるのが大好きで、鶏と豚と牛は食べるの大好きです。

「……っ！？」

ぎょっとする。
踵を返そうとして、ぎょっとしてしまい硬直した。
鼠は、珍しい。棲む家によっては出てくるだろうが、あたしにとっては珍しい。
灰色の鼠を見るなんて、野良猫が息の根を止めて運んでるとこを目

撃して以来だ。
一匹なら、まだしも。
無数に群れを成している鼠なんて初めて見た。何匹いるんだ？十や二十？もっとか？
鼠って、群れで巣に住んでるんだっけか？
あたしはしゃがんで、鼠の群れが這いり込む小窓を見た。
鼠の群れはその中に消えていく。
しゃがんだまま、ちょこちょこと近付いて覗く。真っ暗だが、鼠の棲みかになったような悪臭はない。
　好奇心ｏｒ仕事。
真っ黒くろすけを目撃した気分だ。見つけたことないけど。
ということで好奇心をとるあたし。
錆び付いてスライドしにくい窓を力付くで脚力も使って抉じ開けた。

「泥棒も楽しそうだよなぁ」

と呟きつつ不法侵入。廃虚っぽいが不法侵入は不法侵入。
さーて、鼠をいたぶろうか。…あ、違った。鼠を追ってみよう。おーう。
人の気配はしないので、こそこそしなくても良さそうだ。
足元に眼をやって鼠を探した。おや？いないぞ。
暗くてまともに視えないが、確かにいないことはわかる。蠢く気配が全くない。
どこか別の穴があってそこから別の部屋に行ったようだ。じーっと視ていけば目が慣れてきてぼんやりと視えてきた。
　埃だらけの棚がいくつかあり、段ボールも転がっているところをみると倉庫らしい。
ビルっぽい建物だったから倒産した会社かなんかだろう。
ドアに辿り着いてノブを回す。鍵がついていても可笑しくはなかったがついてはいず開く。

明かりのない廊下を鼠を探しつつ歩んでいった。途中で部屋を見付けたら入ってみよう。
鼠が集るような死体があったりして。うおお、むごっ。
吸血鬼の食事ならまだしも、人間の肉を食っていく光景なんて嫌だ。
指切り魔が人食族疑惑を思い出して吐き気がした。
あー…そう言えば、あたし指切り魔を捜すんだった。何鼠を追い掛けてるんだろう。
そこで携帯電話が鳴った。蓮真君だろう。やっと駅から降りたか、或いはあたしより先に現場に来てしまったのかもしれない。

「もしもしー、椿？」
「ん？秀介？」

電話口から聴こえたのは蓮真君の声ではなく、秀介の声だった。
小さく蓮真君の怒鳴り声がするから恐らく秀介が無理矢理奪ったのだろう。

「指切りの殺人鬼なら、俺詳しい情報集めてやるぜ」
「え？」

あたしはきょとんとする。
なんで秀介が指切り魔のことを知っているんだろうか。蓮真君が話すわけないだろう。

「同じ駅で降りたから変だと思った。餓鬼についてきてみれば、俺の目的地と丸かぶり！追ってんだろ？」
「……君も追ってるの？なんでまた…よく知ってるね」
「まーな。てか、指切りは今有名だぜ？あ、狩人の中では有名なんだよ。つか、狩人ぐらいしか知らないだろうな。なんでまた椿が知ってるのかよくわかんねーけど」

狩人には有名？
そうか。狩人には狩人の情報網があるんだろう。
ブラックリスト。
狩る獲物の名前が上がるリスト。連続殺人鬼のソイツは標的になったんだろう。
やっぱり、秀介に頼るんだった。
ん、でも、あれだな。
秀介に会ったら、すがってしまうかと思ったが、そうでもなかった。
蓮真君がいたからかな。

「指鼠ってんだよ、通り名」
「……ゆび……ねずみ…？」

思わず、声を潜める。

身を低く壁に手をついたまま立ち尽くす。

「そう。本業は殺し屋だ。無茶苦茶な奴でさ、表で爆発事件あったじゃん、あれ、指鼠の仕業なんだよ。たかが一人の為にホテル爆発。そんな指鼠の副業は猟奇殺人鬼だ。一人を気が向いた殺し方で殺して指をとるのが手口。指集めが趣味とか」
「……」
「ん？椿、どした？もしもーし」
「あ、の…さ。すぐそっちいくよ、現場にいるんでしょう？」
「おう、わかった。来てくれたらすぐにでも犯人の居場所、掴めるよ。殺人現場はそう離れてないから“何処か”に連れていき“何処か”で殺している可能性は大だ。隠れ家かなんかが近くにあるはずだよ」
「……わかった。じゃあ……喧嘩しないで、待っててね」

気持ちいい返事をして秀介は電話を切った。
指――鼠。
鼠。
なんだこれ。どんな偶然だ？なんつー偶然だよ。
ホテル爆発事件――幸樹さんと見たあのニュースだろう。偶然見付けた鼠。
否、偶然じゃない。偶然が重なったものを偶然とは呼べない。
必然。
あたしは、結局、指切り魔と遅かれ早かれ遭うべきだったんだ。
気持ち悪いが、運命を感じると言わせてもらおう。
いや、まだ早い。
偶然、鼠を追い入ってきたこの建物が、たまたま指鼠の隠れ家だったら、言わせてもらおう。
運命の人、とは死んでも言わないが何らかの縁はある、らしい。
それを確認しよう。
その時だ。足元に何か蠢いたのを感じて下を視たら、パッと明かりがついた。
視界に、あたしとは別の足が在る。
顔を上げれば、一瞬。
一瞬だけ、顔を見たが振り下ろされた何かに頭を叩き付けられて廊下に倒れる。

「不法侵入」

男の声。

「いっけないんだーあ」

なんとか起き上がった。

押さえた頭部がぬるっとする。

「指、切らなきゃ」

あたしが顔をあげる前に男が――指鼠が足を振り上げてあたしの胸を蹴った。

「ぐっ…っ！！」

頭部に続いてのダメージによろめいてしまう。駄目だ。最初の一撃だけで気を失っても可笑しくない。

視界が、定まらない。

意識が、はっきりしない。

「うっ……ぁあ！」

それでも。防衛本能が働いて反撃を開始させる。

しかし、意識が朦朧のせいだ。ナイフを取り出すのを忘れて腕を振るう。

猫が毛を逆立てたような攻撃は届かない。安易に受け止められてしまう。

――ドスン。

「っぐは！」

溝に膝が叩き付けられた。

倒れることは許されず、腕を引っ張られ壁に叩き付けられる。

動けず、あたしは崩れるように、倒れた。

仰向けに倒れたあたしを、指鼠は容赦なく踏みつける。

ガツンとドスリと低い音を響かせた。骨が折れるような音まで聴こ

える。
起き上がる動作はおろか指一本動かすこと出来なかった。

「あー、だめだめ。手に傷がついたら台無しだ」

そう言って腕を踏みつけられ、脇腹を蹴っ飛ばされる。
ボコボコにされた。
ボコボコになぶられた。
意識が数秒、途切れてしまうくらいダメージを喰らった頃に、攻撃は止んだ。

「さて、何で殺そうかな」

指鼠がそう独り言を漏らすのが聴こえた。
ズルッと引き摺られて何処かの部屋へと運ばれたらしい。
意識がハッキリした時には、指鼠の姿はなかった。
あたしは椅子にロープで縛り付けられていた。身体中が痛い。内蔵までやられてたらどうしよう。嗚呼、くそういてえ。

「運命を感じるぜ……鼠野郎」

吐き捨てて、改めて指鼠がいないことを確認する。
項垂れた顔を上げたら、胸部から痛みが走った。肋骨が折られたか。
右肩は脱臼しているようだ。
よくも痛め付けやがったな。
さてどうするか。静かに呼吸をして確かめる。背中にちゃんとあった。カルドもナイフも。武器は没収されていない。恐らくあたしが武装してるなんて微塵も気付いていないのだろう。
足を上げてブーツからナイフを取り出す。身を屈むと痛みが走るが堪えて腕を肘掛けに縛り付けるロープを口に加えたナイフで切った。

左手を解放して、次は右手。簡単に椅子から立てた。

「……あ」

椅子から立って、横に在った棚に眼を向けて気付く。
気持ち悪くなった。
棚にあったのは、指。
ケースに入れられた指が、ぞろりと並べられていた。
十本の指が入ったケース、それと何か指輪や髪の毛がおまけに入っていた。
ケースの下に写真が在る。多分、持ち主の写真だろう。
なるほど、ね。
この部屋で、殺したのだろう。この部屋が殺害現場。
棚とは逆の壁際にはなんだか解体に使いそうな器具がぶら下がっていた。
部屋の隅には何かの残骸に鼠が集っている。
もう少し起きるのが遅かったら鼠に噛まれていたかもしれない。

「くそ……痛い」

立つのが辛い。
殺したいのは山々だが、誰かを殺す気力も体力もない。
先ずは、目的のものを確保しよう。
多無橋さんの取引相手の顔は知らないが、ブツがどんな形状かは聞いていた。
だから直ぐにどのケースに取引相手の指が入っているか、わかった。
ブツが在ってよかった…。ボコボコにされた甲斐があったってもんだ。
大きな指輪。黄色の宝石が嵌められた指輪。
ケースを開けて、その指輪をとった。

「んじゃあ……撤収させて戴きますか」

ボロボロだし。

でもこれで帰るのは癪だ。あたしはチラリと後ろを振り返った。残骸に集る鼠に、大事に保管されている指の数々。

「ふ……」とニタリと笑みを浮かべる。

あたしが鼠なんかに痛め付けられて終わる運命なんて、認めてやるもんか。

表で警察が追っている被害者なら顔は知っている。それ以外のケースを全部、棚から落とした。

ぱきんと硝子は割れて弾く。残骸に誘われたのか、鼠達がすぐに集ってきた。

激しく音を立てたにも関わらず駆け付けないところをみると不在のようだ。

壁を伝ってあたしは先程の部屋に向かった。

無我夢中で抜け出して、さっき見掛けた懐かしい公衆電話にズルズルと行って入る。警察。警察に通報してやろう。これも仕返しだ。

「……」

警察で思い出す篠塚さん。

秀介だと白瑠さん達の耳に届きそうだから、警察。

ちょっと、考えた。

秀介にすがらなかったけど、篠塚さんなら、どうなんだろう。

カチ、とボタンを押す。

暗記しまった携帯番号を押していった。少ししてコールが聴こえる。

三回目で、電話に出た。

「もしもし」

懐かしい、声が耳元から聴こえて。気が緩んだのかその場に崩れるように座り込んだ。
その音が聴こえたのか「もしもし！？」と篠塚さんが声を上げる。
この声、懐かしい。
本当、懐かしい。
思わず、安堵の笑みを漏らす。それまで聴こえたらしい。

「……？…もし、もし？」
「匿名で、通報します」

あたしはそこで応える。

「連続殺人鬼の居場所を知っています」

そして、住所と男の特徴まで教えた。話し終えたから受話器を話そうとした、その時。

「椿……？」

そう、呼ばれた。
声、まで覚えててくれたのか。なんて人なんだろう。
こんな一被害者の皮を被ったあたしなんかを覚えてるなんて、全くお人好しだ。
頬に血が伝ったから拭いたら、それは自分の涙だった。

「篠、塚…さん」
「っ！……椿！椿なんだな！椿！」

優しい声があたしを呼ぶ。

涙も嗚咽も堪えようとした。
篠塚さん、と呼ぶ声が震えて涙声になる。

「生きてたんだな！」
「……生きてます、よ。図々しくも凛々しい花ですから」

心配と安堵の声の彼に、自嘲しながら言う。

「生きちゃってるんですよ、あたし」

生きちゃってるの。
生きてしまってる。

「凛々しく、真っ赤にまみれて、咲いてますよ。まだ、ポックリ落ちてません」
「つ…ばき？どう、したんだ？無事なのか？」
「全然、ボロボロです」

自分の血で血塗れでボロボロなんだ。頭はズキズキ痛いし息をする度に胸部も腹部も肩も痛い。
いつだったか。病室で篠塚さんに言われたことがある。あたしは死なない、と。あたしは凛々しい花――椿花なのだから。
はは。誰も。
誰も死なせてくれないのか。
白瑠さんも秀介も蓮真君も――篠塚さんも。死なせてくれない。

「いま、今っどこにいるんだ！？」
「いいから聞いてください、篠塚刑事」

あたしは強く言った。

「篠塚さん……あたしを、助けてください…」

ポロポロと涙が落ちる。

悲鳴みたいな弱々しい声は喉をチクチクと刺激する。喉に何かを詰まらせたみたい。病室で首の怪我を治してた時より、痛いかもしれない。

口にして、一気に冷えた。

冷めた。凍るように、冷めた。

何を馬鹿なことを言っているんだろう。頭よりこの首を粉砕してもらった方がいい。

泣くんじゃない。

何を泣いているんだ。

これは、全部。まるごと。根こそぎ。自分のせいだ。自業自得。他人に助けを乞うのは、許されない。

「――――嘘です」

あたしは淡々とした口調を作り上げていう。

「あたしは被害者じゃない、加害者なんです。あたしが真犯人なんですよ、篠塚刑事。貴方は５６人を殺した殺人鬼を気遣って、心配して、笑いかけて、頭を撫でたんです。傑作でしょう？」

冷たく淡々と嘲笑うように貶すように吐き捨てた。

嗚呼、違う。違う。

こんなこと言うつもりじゃなかった。

謝ろうとした。

その時、プツリと電話は切れてしまった。

篠塚さんが切ったんじゃない。公衆電話が切れたんだ。

「――――ぷっ、ははは っ」

笑い出したら身体中が軋むように痛みだした。痛。

そう、だった。

そうだったんだ。

あたしは、真面目に。

誰かに助けを乞うことが出来なかったんだ。

助けを乞うたところで誰にも何もできないものを一人抱えなくてはならなかった。その癖が、今でもこびりついているんだ。

だから、白瑠さんに、まともに言えない。

勝手に殺してくれると思った。

５６人を殺した最初の殺しのあと、誰にも助けを求めてなかった。

求めるつもりは微塵もなかったんだ。

病室に見舞いに来た元友人達にだって、求めやしなかった。

誰も、助けては、くれない。

誰も、助け、られない。

誰が助けてくれると言うんだ。救って欲しいのは、あたしの心だ。

凍えた心。

凍ってしまった心を一体、誰が救ってくれるんだ。

「もしもし」

あたしは自分の携帯電話で電話をした。

「今すぐ、迎えにきてくれませんか？すぐです」

場所を、伝える。

「警察が来る前に迎えに来なきゃ、串刺しにしますよ――――ラトア

さん」

助けて。

なんて、言えなくて。

ただその一言を言えなくて。

あたしは、生きようとして、殺されようとしてる。

秘密、弐

頭から唇からポタポタと赤い雫が掌に落ちていく。
あたしは、眼を閉じた。
お迎えは早かった。
もう夕方で太陽が沈みかけているからだろう。
電話で起こされて不機嫌に文句を並べながら、来たラトアさんに多分抱えられてその場をあとにした。
覚えていない。記憶はもう朧で夢でも見ているようだったから。
夢ならいいのに。

「……え…？」

目が覚めたら、真っ白な――病室だった。
見覚えのある病室。
起き上がると、壁際にパイプ椅子に座っているクセがついた黒い髪に草臥れたコートの――篠塚さん。
な、なんで？どうして？
首には、包帯。
あとの怪我がない。
眠っているらしい篠塚さんを起こさないように、ベッドから降りようとした。
あたしの指が自分の影に触れた途端。
影は真っ黒に染まり、白い床を塗り潰すようにそれが広がった。
驚いてベッドに倒れる。
その音に起きたかもしれないと篠塚さんを見た。けれど篠塚さんはそこにはいない。
何処にもいなかった。そこにいた形跡がまるでない。

篠塚さんがいない。
息が、乱れる。
黒はどんどんと白を呑み込んでいく。
それはあたしの乗っているベッドまで黒色にした。
触れても、何ともない。
だがら床に足をつけてこの病室から逃げようとした。
だけど、扉はおろか窓すらない白い壁。逃げ道が、どこにもない。
黒は床を一色に染めるだけでは飽きたらず壁をも黒くする。
混ざって灰色になるんじゃなくて、白が黒を呑み込む。
部屋中の白が、消えていく。
首の包帯さえも、真っ黒。
黒。真っ黒。闇。暗闇。
息が出来ない。
呼吸が苦しい。
痛い。苦しい。
白が、消える。
首が、痛い。
肩が、誰かに、掴まれた。

「おい、起きろ！」
「っ！？」

荒い呼吸。過呼吸になりそうなほど小刻みに震える。喉が、痛かった。渇いてる。
夢、だった。ラトアさんに起こされた。
暗くても黒い部屋ではない。蝋燭が照らされる灰色の部屋はコンクリート。
あたしはソファに横たわっていた。

「魘されてたぞ」

「……すみ…ません、うっ痛い」

身体中が痛い。特に胸部と腹部。

「内臓は無事だが痣が酷いだろう。肋骨が折れてるがお前が気を失っている間に固定しておいたから寝返りしても平気だ。肩は外れていたから戻したぞ」

「はぁ……どうやってとは訊きませんが、何故先程からクチャクチャと貴方はあたしの手を舐めているんですか」

平然と報告しながらあたしの手を平然と舐めているラトアさんにツッコミを入れるのは間違ってるかもしれないが訊いてみた。

「ん、ああすまん。お前だって空腹を感じてたらステーキをつまみ食いするだろう？」

「血を流すあたしはステーキですか。美味しいですかぁ？」

「ん、美味だ」

軽い調子で言ったのに、真面目に答えられた。

美味しいだって。

喜んでいいのかな。

「頭の傷は血が止まってる、手当てをするが……お前の携帯電話が鳴っていたぞ」

「え？今、何時ですか？」

「九時だ」

うげっ…。渡された携帯電話を開けば、十三という不吉な数字の数の不在着信があった。

一番上に白瑠さん。次に幸樹さん。そのあとに競うかのように交互

に蓮真君と登録していない番号が表示されていた。
どうせ秀介なんだろう。
蓮真君には帰っていいとメールを送ったはずなのに。
蓮真君の登録名は“末っ子”だ。
二人は後回しにして、あたしは白瑠さんに電話をすることにした。

「えーと、二人には連絡してません、よね？」
「一緒にいると連絡しておいた。ハウンと一緒に遊んでるからあとで電話させると」
「ハウン君？」
「ここはハウンの家だ」

あーなるほど。通りで生活感のない部屋だと思った。これは藍さん並だ。あの人生活感ない。
逆に吸血鬼はその方がいいのだろうか。
そうなると口実が簡単に考えられた。コール前に深呼吸。
コールしたら予想通り即座に電話に出た。

「つぅばぁきーちゃん」

暢気な声で明るく呼んでくる声。

「白瑠さん」
「なぁんでこんなに遅いのぉ？ご飯、冷めちゃうよ」

ご飯。夕飯。夕飯前ならセーフだったのに。

「すみません、連絡し忘れちゃって。昨日ラトアさんに紹介してもらったハウン君と遊んでて」
「ん、聞いた。それよりいつ帰ってくるの？」

「あー、それなんですけど。ハウン君の家に泊まっちゃ、だめですか？」

電話口から沈黙が返ってきた。ちょっと、怖い。

「もっと遊んでいたいんですよ。ねっいいでしょう？夜中遊ぶだろうから、ラトアさんとは吸血鬼物のＤＶＤ観るから。…ねぇ、お願いしますぅ」

あたしは猫なで声で頼み込む。今楽しいと弾んだ声はきっと伝わっただろう。

沈黙のあとに「ふふふふ」と不適な笑いが聴こえてきた。

「うひゃっ、ひゃひゃ。仕方なぁいなぁーあ。もう、ほぉんとぉ吸血鬼だぁい好きだねえー椿ちゃん。うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――ラトア殺す。代わって」

「ラトアさんごめんなさい、代わってください」

「何故謝る？」

あたしは直ぐ様ラトアさんにパスをした。怖い。めちゃ怖かった。

受け取ったラトアさんは電話越しで怒り出す。

お泊まりの許可は貰った、よね？仕方ないな、と言ったし。

なんで白瑠さんはラトアさんと仲良しなのが気に入らないんだろう。

そういえば最初から吸血鬼好きと言ったら不機嫌だったような…？

黒の殺戮者が吸血鬼だからか？

ソファ越しではラトアさんは見えない。離れて口論していく。迷惑かけちゃったな。

疲れが酷すぎてあたしはまた眠ろうとした。

少しして、額をざらついた舌に舐められ起こされる。

血を舐めとったのだろう。ラトアさんかと思ったが、目の前にいた

のはハウン君。
白銀の吸血鬼（ヴァンパイア）少年。

「おはよう、つばき」

覚束無いような口調で、白銀の少年は挨拶した。驚いた。初めて、ハウン君が口をきいてくれた。

「おはよう、ハウン君」

あたしは微笑み返して言う。
ちょっとだけ、ハウン君は微笑み返した。

「今晩は泊まる許可が出たが……少なくともあと二日は顔の怪我は癒えないぞ」

ラトアさんは電話を終えたのか戻ってきて携帯電話を返してくれた。
顔？ああ、唇切ったんだ。あとの怪我は服で誤魔化せる。なんとか顔の傷だけでも治ってもらわなくちゃ。
口実を考えてあと二日は顔を合わせないようにしよう。
仕事はともかく、ボコボコにされた事実は知られたくない。知られたらまじ監禁されかねない。
満面の黒い笑顔の幸樹さんが脳裏に浮かんで悪寒を感じる。
死ぬ気で三日間会わないようにしよう。なんならラトアさんに文字通り身体を張ってもらえばいい。うん。そうしよう。

「誰にボコられたんだ？」
「え、あれ、言ってなかったっけ？鼠を見つけたんです。指鼠」
「指鼠？殺し屋のか？」

……知ってた。
あたしは指切り魔が指鼠だと話して、殺し損ねたがブツは手にいれた、と報告。

「ふん。オレがブツを届けに行ってやろうか？」
「いえ、あたしが自分で行きます。殺せなかったので、失敗です」

殺し屋の仕事は殺し。殺せなかった。だから失敗。
失敗だ。
初めての失敗だ。

「ふん、失敗…か。自分で行くなら好きにしろ」

他にも何か言いたいことがなりそうだがラトアさんは口を閉じる。
あたしは瑠璃色の携帯電話を取り出して多無橋さんに電話をした。
が、留守電だった。
……いいよ。三日後に連絡してやる。ふんだ。
と投げ出した矢先に電話がかかってきた。

「あーごめんごめん。取り込み中だったんだ」

その言葉は嘘じゃないらしい。繋がった途端に銃声が聞こえた。こわ。

「なんだい？黒猫ちゃん」
「お会いしたいんです。直接お話ししたいことがあります」

間をいれず雑談をさせる前に簡潔に用件を入れた。

「ふむ…きっと喜ばしい話を持って会いに来てくれるんだろうね？

黒猫ちゃん」

わざとムカつく言葉を言っているならばあたしは一度この人を刺さなきゃいけないと思う。

「今から、はどうだい？」

「……すみません、明日はどうですか？」

流石に今から向かえば倒れかねない。腕から点滴の管が延びているところをみると血が足りないのかも。

もしかしたら寝ている間に吸われてたりして。骨を治されても起きなかったのならばあり得る。

「わかった。君の為に一日空けていこう」

「一時間もいりません。直ぐにすませますから」

要らねーよ。一日アンタと居るなんてどんな厄日だ。

残念がる声に待ち合わせ場所を聞いてさっさと電話を切った。

「ラトアさん、明日暇ですか？車動かしてもらえませんか」

「ふん、たまたま空いているから引き受けてやろう」

ラトアさんはどうしてこう可愛いんだろう。多無橋さんと違って。

「よし、ＤＶＤ観賞しましょう」

「それは本気だったのか。お前怪我してるんだから寝ていろ」

「やだな、夜は長いだろう同志。日が昇るまで観ようぜ」

「はぁ…お前は吸血鬼に成るべきだったな…」

溜め息を吐かれた。

ラトアさんは苦労人だ。貴方なしではこの物語は始まらなかっただろう。戯言です。

「藍乃介のところに戻る、ＤＶＤがそこにあるからな。ついでに服を借りてきてやる」

「え…細やかな苛めですか？」

ついでに苛めを告白されてしまった。藍さんは恐らく自分の服よりコスプレ服を持っているだろう。それをあたしの為に持ってくるとほざくのか。

なら貴方はあたしの敵だ！！

「落ち着け、違う…お前に奇怪な服を着せる趣味はオレにはない。お前に着せるために普通らしい格好がいくつも在った。それのどれかを持ってくる」

ゴスロリが奇怪なのか。いや、ゴスロリは奇怪なんかじゃない。あたしは好きだよ。吸血鬼の女の子に着せたいよ。

甘ロリの方かな。はたまた露出の多いエプロンドレス。

そのままラトアさんは出掛けた。あたしとハウン君だけが残る。

「ここにずっと住んでるの？」

コーヒーテーブルに腰掛けたハウン君に訊けば、小首を傾げられた。その表情は無表情だが仕草が可愛い。

いやもう全体的に可愛い。

「あーえっと、いつからここに住んでるの？」

質問を変えてみた。日本語が弱いのかな、理解ができていないよう

だ。
そしたら「おぼえてない」と短く答えられた。覚えていないほどここに住んでいるのか、或いは全く数えていないのか。

「喉が渇いたから、飲み物を持ってきてくれないかな?」

そう頼んだら、ハウン君はきょとんとした。
それから自分の首に爪を立ててむしるように掻いたのだ。血は吹き出して白い手は真っ赤になり、その手をハウン君は差し出した。

「いや……あたし、仮にも人間だから」

あたしが悪かったのだろう。喉が渇いたと言ったのだから。
それは冗句だったらしくにぱっとハウン君は笑った。
吸血鬼の血を飲んでもあたしは美味しいと感じないだろう。そして吸血鬼の血を飲んでも吸血鬼にはならない。
ハウン君の首はもう治っていた。片手の血を舐めとりながらもう片方の手でハウンはあたしの額に触れる。
額というより頭。ラトアさんが手当てし忘れた頭部にゆっくりと触れる。
痛みが走る。そりゃあそうだ。
しかし次第に痛みがなくなる。まるで治ったかのように。
ハウン君は唇に触れてからその手を舐めて血を拭き取った。
触れて確認してみれば、傷が。何処にもなかった。痛みも傷跡も、ない。

「え?治……したの?」

ハウン君はコクリと頷いた。
吸血鬼の血にそんな能力があるのか?聞いていない。いや、でも

怪我を治せないとは言っていない。
吸血鬼に噛まれても血を注入しても吸血鬼になれないことだけは聞いていた。
そもそも生誕だって知らないのだから、何か特別な能力があっても可笑しくはないだろう。
　んー。すごく興味深い。
礼を言えばハウン君は視界からいなくなった。
あの子に訊いても答えてはくれなさそうだ。多弁じゃないし。
ラトアさんに聞こう。
それにしても、ふう。ポケットから指輪を取り出して見る。
指鼠はこの価値を知らなかったみたいだが、一体何のプログラムの入ったメモリーなんだろう。
取り出し方はわからないし、触らぬ神に祟りなしだ。疑問に思うだけでポケットに戻した。
不意に物音も気配もなくハウン君が目の前に立っていることに気付く。手には缶ジュース。要望通り飲み物を持ってきてくれたようだ。
何故トマトジュースなんだ。そこは突っ込まないでおこう。
　飲もうと起き上がれば、ラトアさんも戻ってきた。早。

「服が血塗れだ、好きなものに着替えろ。それから、どれから観る？」

藍さんのとこから持ってきたであろう服をあたしの隣に置いてＤＶＤを選ばせる。
白黒のドラキュラまである。すげえ。
「これから観たい」とあたしは女吸血鬼が映ったものを選んだ。
ラトアさんがセット中にあたしは服を見る。案外まともだったのが心底驚きだ。
黒のボーダーワンピに決めた。ラトアさんが着せたのかＹシャツを

着ていたのでそれを脱いで上からワンピースを着る。
そこで誰の溜め息が落ちた。
ハウン君だったら面白かったが当然ラトアさんだ。

「吸血鬼を男として見ていないだろうが性別は男だぞ。それなのに目の前で着替えるとは…ハウンに押し倒されても知らんからな」
「やだなぁ、吸血鬼だって男としてみてますって。てか、ハウン君が押し倒すわけないじゃないですかぁ、ねえ？」
「うん」

吸血鬼の二人の前だからこそ着替えたわけじゃないけど。ソファから動けそうになかっただけだ。
キャミソールは着ていたので異性の前で裸になったわけじゃない。
ハウン君に振れば頷いてくれる。
そうすれば、ラトアさんはぎょっとした。

「……ハウンが喋った」
「そりゃあ喋るでしょう」
「十年ぶりに聴いたぞ」
「大袈裟な」

クララが立った？
ん。いや、事実なのかな。
ラトアさんめちゃ驚いている。そうだよね、十年ぶりに声を聴いたら吃驚だろう。

「さっきから喋ってくれてますよ、あ、怪我を治してもらいました。吸血鬼は怪我を治す能力があるんですね」

あたしは頭を指差した。

「怪我まで治したのか」と信じられないという顔をするラトアさん。
「吸血鬼全員が使える能力ではない。ハウンくらいだな」
「え、そうなんですか？」
あたしは無言で見上げてくるハウン君に眼を向けた。
「これは秘密だぞ。まあ…知ったとこで誰もハウンを捕まえやしないか」
「どうゆう意味ですか？」
「我々吸血鬼の歴史を知らんのか？」
「存在することは白瑠さんに聞いたけど、吸血鬼好きだって言ったらそれ以上教えてくれなかった」
ラトアさんは呆れた。あたしだって呆れてますとも。
肩を落としてソファの席を空けろと手を振ったが、あたしは怪我人だ！と言い張って座らせない。
横たわって観たいもん。
「じゃあ頭退けろ、膝を枕代わりすればいいだろ」
膝を犠牲にしてまでソファに座りたいらしい。
くい、とハウン君に手を引っ張られた。上目遣いで見上げてくる。
ん？なんだ？と首を傾げれば「ひざ、まくら、する」単語をただ繋げたように言った。
「んー、いいよおう」
えへっと笑って許可をする。
ということで、ハウン君の膝に頭を置いて横たわる。あたしの足元

にはラトアさん。不服そうだった。足を置くのは失礼だから肘掛けに足を置く。

「吸血鬼の生誕も聞いてないんだな？」

「ええ、是非とも教えてください」

溜め息を吐いてからラトアさんは話し出した。

「大昔。とある人間が悪魔に魂を売った。その人間が初めの吸血鬼だそうだ。その吸血鬼は完全なる不死身だったらしい、噛むだけでも人間を吸血鬼にできた。“初めの吸血鬼”が吸血鬼にした吸血鬼、言わば“二世の吸血鬼”も噛むだけで人間を吸血鬼にすることができた。その二世に噛まれたのが俺達だ、オレ達三世は人間を吸血鬼に出来ない」

悪魔に魂を売った、人間の成れの果てが吸血鬼？

話の腰を折らないようにただあたしはラトアさんの話を黙って聞いた。

「三世であるオレ達は誰も最初の吸血鬼は見たことないし、奴が悪魔とどんな契約を交わしたかも知らん。恐らく悪魔と奴しか知らなかっただろう。一世紀前のことだ。仲違いでもしたのか奴と悪魔が争った。奴は死に悪魔は二世の吸血鬼が息の根を止めた。それが始まりだ――吸血鬼と悪魔の戦争だ」

人間と人間が戦争していたように、吸血鬼も悪魔と戦争？

耐えきれずあたしは口を開く。

「悪魔ってなんです？吸血鬼に続いて悪魔までいるっていうんですか？じゃあ狼人間もいるし天使もいる？」

「狼人間にも天使にも会ったことがない。だが悪魔には会ったことがある。オレ達は生きるために戦ったからな」

狼人間と天使はいないらしい。

「数は吸血鬼の方が上回っていた。しかし次第に吸血鬼は減っていったんだ。先ず先に悪魔達は二世を狩った、戦力を増やさまいとな。奴が殺せたように悪魔達は人間を殺すように吸血鬼を殺せる。悪魔が吸血鬼の不死を与えたのだから、治癒能力は発揮できなかった。首を跳ねるだけで殺せたんだ。そして――二世は死んだ」

吸血鬼を生み出す吸血鬼は、死んで永久に吸血鬼は生まれることがなくなった。

「悪魔から身を隠して生きるしかないと三世のオレ達は考えた。そこで、とある男が提案した。人間に助けを乞う、とな」

「人間に？」

「取引をしたのだ。人間も悪魔よりは吸血鬼を選んだのだろう、共存をすることを約束して共に悪魔と戦うことになった。そして悪魔は戦争に敗けたのだ。オレ達生き残った少ない三世の吸血鬼は裏現実で生きることになった」

最後は省いたように締め括られた。

「それ、まじっすか？冗談じゃないですよね」

「ああ、勿論。真実だ」

「人間が自分を食う、ましてや不死身の吸血鬼と共存を簡単に認めるとは思えないです」

「簡単ではなかったろうな。だから“アイツ”はオレ達に言わず交渉したんだ。『自分の身体を好きなように実験していい』という条

件を人間に持ち掛けた」

あたしは黙った。

ラトアさんの表情は眼は苛立ちに満ちていたのだ。ハウン君を見上げた。無表情に俯く眼は何かを込めていたようにも見える。

「“アイツ”は言わなかった。何十年も実験体にされていた、オレ達は何十年も知らずにいたんだ。知ったオレ達はやっと解放された“アイツ”に問い詰めた。“アイツ”はなんと言ったと思う？」

――――あれ、バレた？

ラトアさんの言う“アイツ”はそうヘラヘラと答えたそうだ。

とても不快そうに憎たらしそうにラトアさんは歯軋りをした。

「…じゃあ、昔に実験、して…人間が不死身に成れないと解ったのは……その吸血鬼が実験体になったからですか？」

「嗚呼、実験体に身を売ったのは歴史上“アイツ”だけだ。傑作だったぞ、アイツは全ての臓器まで提供して体内を掻き回されたんだからな」

皮肉に嘲る。

それでもその吸血鬼はヘラヘラと笑っていたのか。何十年も、身体をいじり続けられたにも関わらず。

臓器を取り出されたなんて、生き地獄だったはず。死ねない身体だった。

それでも笑う。仲間の為に、身を売った吸血鬼。

「その……吸血鬼は……」

「……――――黒の殺戮者だ」

やっぱり、と思った。
黒の殺戮者。そう名乗る吸血鬼が、身を売ったのか。
ラトアさんが以前“アイツ”と呼んでいた時と口振りが同じだったからそう感じていた。
白の殺戮者と黒の殺戮者が戦争するなら、白に加担すると言ったラトアさんだったがどうにも苦渋の選択に見えたのはそのせいか。
黒の殺戮者は、吸血鬼を救ったのだから。
黙って一人だけ身を売った彼を、許せないが怒りを覚えているが、それでも救われた事実がある。複雑だろう。

「余計なことまで話してしまったな……クラッチャーはそれを話したくなかったのだろう。告げ口するなよ」

ラトアさんは一息ついて、黒の殺戮者の話を終わりにする。あまり、聞いてはいけないだろう。

「悪魔は？全員を殺したんですか？」
「ほぼ、殺した。しかし、まだ生き残りがいるだろう。いないとは断言できない。見つけ次第始末する」
「裏現実の秘密ですか？吸血鬼は存在する、悪魔は存在する」
「そうなる。まぁ、どうせ、お前が悪魔と出会すことはないだろう。出会す人間なんて、相当運の悪い奴だ」

ふん、と鼻で笑うラトアさん。
吸血鬼全員と会っても、悪魔一匹に会うことはないだろうとラトアさんは言い退けた。本当に悪魔は数少ないようだ。ほんの、ちょっと。

「それで？ハウン君の血はどうして治癒があるんですか？」
「最初の吸血鬼が二世に与えた能力だ。ハウンは二世から引き継い

だ。他にも特別な能力を持つ吸血鬼がいたが、戦争の最前線に立たされたから能力持ちは一握り。ハウンがその一人」

ふーん、とあたしはハウン君の髪の毛を指で絡める。

「さて、話はこれくらいに観賞時間としよう」

「きゃんっ」

伸ばしていた足をパシンと叩かれた。叩くことないだろう。

「ん？なんだ、そんな声を出して。素足を晒すから恥ずかしくないのだろう？」

「ひゃ、ちょ、触っていいなんて言ってません！」

がしりと鷲掴みにされる。足首ならまだしも太ももを掴むな。

ラトアさんはニヤリと笑い、そしてはむっとあたしの太ももに噛み付いた。

牙を立てたのではなく、甘噛み。

「やめい！」あたしは額を叩いて離させる。

ダメージなんてない彼は、ふんと鼻で笑い退けた。

「こうやって遊ばれて楽しんでるのだろう？」

「楽しんでません、ただ遊ばれてるんですよ」

「遊びに飽きて食われないようにな。いつか最後まヤられるだろう」

不吉なことを言いやがる。

いや、意地悪なことだが事実でもある。特にあの白瑠さんはやりかねない。

あたしはプイッとそっぽを向いた。

宣言通りＤＶＤ観賞を日が昇るまでした。白黒のドラキュラ伯爵

に吸血鬼アクション映画。他にもホラー映画を観て、そのあと吸血鬼と共に眠る。なんて可笑しい。それこそホラーだ。傑作だ傑作。

あたしが目を覚ましたのはその昼過ぎだった。

そういえば、空腹だ。

吸血鬼は寝てることだし、腹を満たすために食べにいこう。そう起き上がれば腕を掴まれた。

テレビも蝋燭もついていないから誰だか見えなかったが、小さい手。ハウン君だろう。

「おはよう、つばき」

「おはよう、ハウン君」

「たべる、か？」

「ん？」

何かをハウン君があたしの唇に押し付ける。受け取ってみれば、何か包みみたいだ。開いて匂いを嗅げば、何だかわかった。

あたしの好物チーズバーガーだ。どうやらあたしが人間だってことを忘れず買ってきてくれたよう。

お礼を言って平らげた。

それから蝋燭をつけて今度は日が沈むまでハウン君と遊んだ。

電話が鳴った。白瑠さんかと思ったが違う。

知らない番号。しかし見覚えがあった。

「はい？」

「椿、篠塚刑事が入院した」

秀介が早口で簡潔に告げる。

「指鼠の隠れ家を見付けてそこで鉢合わせをして……撃たれたんだ。

命に別状はないが、意識が戻ってない」

あたしの。

あたしのせいだ。

きっと、焦って一人で向かったんだろう。

これは間違いなく、あたしのせい。

「警察は俺が追い払うから、安心して見舞いにこい。現場の近くの病院だから」

「いかない」

「えっ？」

「行かない」

「椿？なんで」

「行かない」

あたしはそれだけを言った。

警察は指鼠を取り逃がしたらしい。それだけを聞いて電話を切った。

――――指鼠は、捕まっていない。

夜になってラトアさんに車を運転してもらい多無橋さんに会いに行った。

ホテルを用意され、そこで会うことに。多無橋さんと、そして秘書の女の人の二人だけだった。

「こんばんは、秘書さん」

「こんばんは、黒猫様」

挨拶をされて戸惑っていたが秘書さんは深々と頭を下げる。この人はあたしを怖がっているから多無橋さんの愚痴を言い合う飲み会に

はきっといけないだろう。

「やぁ、黒猫ちゃん。待っていたよ、座りたまえ」

ソファに座っていた多無橋さんにそう言われたがあたしは立ったまま彼の前に指輪と瑠璃色の携帯電話を置いた。

「おや。もう手にいれたのかい、流石仕事が早いね」

「仕事は失敗しました」

笑顔でその指輪を手にする多無橋さんに正直に話す。

「殺し損ねました」

はっきりと言った。

厳密には殺せずボコボコにされたがそこまで正直になるつもりはない。

「おや……そうなのかい。それは残念だったね、初の一人仕事だったのに。でも人間そうやって生きていくから、これからも頑張ってね」

殺しは二の次。やはり気にせず多無橋さんは優しげに笑う。指輪さえ手に入ればそれでよかったようだ。

「それでは失礼します」

「ん？報酬を受け取るのを忘れているよ、黒猫ちゃん」

「失敗をしましたので受け取れません」

「律儀だねぇ。ブツを手に入れたんだ、成功でもあるさ」

「あたしは殺し屋です。殺せなかった仕事は失敗ですよ」

あたしは譲らず背を向けて帰ろうとしたが多無橋さんは笑いながら引き留めた。

「それなら、プレゼントだけ与えよう。受け取ってくれ」

そう言ってあたしに投擲した。反射でキャッチしたのは、指輪の石から取り出したメモリカードだ。

「プレゼント？必要なプログラムなのでは？」

「必要というより、貴重なプログラムだよ。元々、君にプレゼントするつもりだったんだ」

奪われたプレゼントを贈る本人に探させたのか。お前実は悪魔だろう。

「結構です、使い道はないでしょうから」

「まぁ、見てみるといい。面白いからさ」

にっこりと多無橋さんはそう言う。くれると言うならば、貰うか。身体中痛くてこれ以上立ち話をしたくはない。

「また、会おう。黒猫ちゃん」

「……機会があれば」

その機会がないことをあたしは祈ろう。

ラトアさんが運転する車に戻れば「電話が鳴っていたぞ」と文句を言われた。助手席に置いておいた紅色の携帯電話に不在着信がある。白瑠さんだ。

「怪我は治ったんだ、帰れ」
「えー！まだハウン君と遊びたいですよ」
「過保護な兄達が煩いだろう！帰れ！」

本気で叱られた。
とばっちりを喰らうからって叱られた。

「やぁーだぁー。あたし、黒の殺戮者の件が終わるまでハウン君とこにいるぅ」
「…聞いてないのか？」
「ん？」
「それなら、一応一件落着したんだぞ」

聞いてない。
秘密にしてるから話してくれるわけがないだろう。

「え？もう、二人がぶつかることがない、ってことですか？」
「違う。ほら、オレが仕事の話があると言っただろう？あの話は海外でな、クラッチャーに海外にいけばいいと提案したんだ。クラッチャーは乗ったぞ」

乗ったのか。そしてまたあの人は知らないとこで勝手に仕事を決めたのかよ。
サプライズが好きなのか？
あたしを驚かせるのがそんなに好きなのか。
あー次の仕事は海外かぁ。絶対あの人当日に言うよな。

「それで昨日の朝、機嫌よかったんですか。納得です」
「アイツに会わないのが最善策だから」

くわぁと大口開けてラトアさんは欠伸をする。
黒の殺戮者と会わない方が最善策。
会わない方が白瑠さんは機嫌がいい。朝から林檎を食べるほど、機嫌がよかった。

「いいな?絶対に黒の殺戮者の話をするんじゃない。知らないフリをしろ」

隠していることを知らないことにしろ。
あたしは仕方なく「はぁーい」と唇を尖らせながら返事した。
あたしのせい、ではないのだろう。あたしは関係ない。知らなくていい。
知らないフリをしよう。

顔の怪我は消えたので家に帰宅。クラウンがなかったので、幸樹さんがいないことはわかった。じゃあ白瑠さんしかいないのか。

「おっかぁえりーつーちゃん」

リビングには不機嫌じゃない白瑠さんが待ち構えていた。

「あれ、血のにおいがするね」
「ハウン君の食事に付き合ってたので。シャワー浴びてきます」

吸血鬼程ではなくとも鼻が敏感な白瑠さんのことだから気付くことはわかりきっていたので回答は予め用意しておいた。
さっさとシャワー室に逃げ込もうとしたら。

「それで何回ヤったの?」
「……。すみません、よく聞こえませんでした。え

？何も言ってない？ですよねえ、幻聴ですね」

あたしは頑張って超笑顔で対抗してみた。

「うっひゃひゃーじょーだんだよじょーだん。何して遊んだのぉ？」

「ＤＶＤとかトランプとか色々ですよ」

「殺人ごっこは？」

「してません」

効果はなかった。

あたしはさっさと浴室に行った。

熱い水を流しながら、腹を見れば酷いアザだらけ。折れた肋骨を治すために切った傷は縫ってある。ここは矢が貫いた傷。

抱き着く白瑠さんと医者である幸樹さんにはバレないようにしなきゃ。

ザァと落ちる熱い水。白い箱の中。一息ついた。

白と黒の部屋。

篠塚さん。

病室。

病院になんて、本当嫌いだ。

翌朝は三人揃って朝食を摂ってだらだらと休日を過ごした。

幸樹さんに爆発事件は指鼠の仕業だと話したかったがそうなると情報源を問い詰められるのでやめておく。

海外行きとなると幸樹さんは来ないのだろうか。それを訊きたいが白瑠さんが話すまで待たなくては。

海外行き、か。

行く前に弥太部火都に教えてもらったあそこに行く機会を見付けなくてはならない。

あたしはその為にボコボコになったのだから。楽しみだったんだか

ら。
　そう言えばと、思い出す。
多無橋さんがプレゼントと称してくれたメモリー。
面白いから見ろと言ってた。プログラムの知識なんてわからないが面白いのなら興味がないこともない。
ん、見てみよう。

「幸樹さん、パソコンお借りしてもいいですか？」
「いいですよ」

ソファから降りて許可をもらったので部屋に入ってノートパソコンを取る。自分の部屋に行こうとしたら。

「おや？私達の前では見れないものでも見るんですか？」
「おやぁおやぁ、えっちな動画でも観るのかなぁ？」
「仕方ありませんね、喘ぎ声だけは聴こえるようにあげてくださいね」
「お兄ちゃん達、いい加減にしないと非行に走るよ」

ニヤニヤと幸樹さんと白瑠さんのいつもの猥褻発言に怒鳴る気力もない。
しかし、殺し屋であるあたしの非行ってどんなのだろう。疑問だ。
二人がそれ以上気に留めなかったのであたしは自分の部屋に入り、ベッドの上に乗った。
ノートパソコンを起動させてからアクセサリーと一緒に置いた例のメモリーをとる。
　黒いメモリーカード。
面白いプログラムとは一体なんだろう。あたしにわかる面白さならいいが。まぁ、どうせ暇潰しだから何でもいいけど。
パソコンに入れて、直ぐにファイルを開いた。

画面は真っ暗になる。
ただ、一面の真っ黒。
エンターキーを押してみたが画面は変わらない。壊れてるのかな。
そう思っていたら、画面に変化が表れた。
七色の線が走る。
画面の液晶が乱れるかのように波打つ。それから白い亀裂が、ピシピシと音を立てた。
何かの動画なのかと思った。その時だ。
バイオリンかギターの弦を無茶苦茶に弾いたような引っ張って爪を立てて奏でたような音が部屋の中に響いた。これ以上ないくらいの大音量。慌てて音量を下げようとしたが下がらない。耳を塞いでも聴こえてくる音。脳味噌を攻撃するようだった。

「っあぁぁあ！！」

耐えきれず悲鳴を上げる。それでもテレビのノイズのような騒音に掻き消されてしまう。
引き裂くように響く。滅茶苦茶な曲みたいだ。

「つばちゃん？」
「どうしたんです？」

二人が駆け付けた。駆け付けるのが遅いだろう。

「音が、下がらなくって」
「音？」
「何押しても、止められないっああ！」
「椿さん！？」

あれ？可笑しい。二人は戸惑った顔をしていた。まるで音が聴こえ

ていないみたいだ。どうして？
音が増して痛みを感じてきた。

「メモリーの、中身を見たらっ……音が……うああ！」
「椿ちゃん！」
「椿さん、私の目を見てください。その音は幻聴です、しっかりしてください」
「頭が痛いっ！！」

幻聴だって？こんなにもはっきり聴こえるのが幻聴なのか。頭が痛いほどの騒音だというのに。
あれ…。でも、こんなにも煩いのに二人の声が聴こえるのは、どうしてなんだ。

「神経攻撃のウイルス？」
「恐らく」

ウイルス？
嗚呼、藍さんがあたしをラチる時に使ったやつか。
あの種類のやつなのか。
白瑠さんは直ぐにパソコンの電源を切った。

「まだ、聴こえるっ！！」
「椿さん、落ち着いてください。私の目を見てください。それは幻聴ですから無視を…椿さん？椿！」
「椿！椿しっかり！」

顔を押さえ付けられ、幸樹さんの眼を見るように固定される。幸樹さんの眼を視た。
だけど。

視ていられなくなった。視界が定まらなく、顔を下げてしまう。
白瑠さんが耳から手を剥がそうとする。身体が、震えた。びくりと痙攣を起こす。

「頭っ、痛い！痛い！音を、止めて！！」
「椿！こう！なんでまだ苦しんでるの！？」
「これは……まさか……そんな…」
「いやあぁぁあ！！」
「白瑠！ラトアを連れてきてください！叩き起こして今すぐ連れてきてください！」
「はぁ？まさかっ…！」

悲鳴を上げて踞る。二人が声を上げるのを聴いていられなくなった。
片頭痛よりも痛い頭痛が走る。
音は続く。頭の中で暴れている。痛みも騒音も。
長い爪が頭蓋骨に入って掻き乱してるようだ。
痙攣は規則正しくびくびくっと身体を震わせる。

「椿。今、ラトアを連れてきます。いいですか？何が聴こえるのかを教えてください」

幸樹さんがあたしを起き上がらせる。顔を見れない。
白瑠さんはラトアさんを迎えにいったようだ。

「騒音よっ！！」
「どんな音なのかを…詳しく答えてください。これは必要なことです」
「はっ…はっ……バイオリンの、弦をっ、爪で、引っ掻くような…ブンと…。あとは雑音です！」
「他には？本当に雑音だけですか？」

「騒音だけだ！煩い！痛い！！頭が、頭が割れそう！痛っ！痛い痛い！」

「椿、暴れてはいけない。落ち着いて。呼吸を乱してはいけない、体力を消耗してはいけません」

幸樹さんがあたしを押さえ込む。生理的に出た涙のせいか視界が白く霞んで、興奮のせいか呼吸がしにくい。肺まで痙攣を起こしたのか。そんなの気にしない。もう頭の中だけで精一杯なんだ。

「悲鳴は？」と幸樹さんは問う。

「誰かが囁く声は聴こえますか？或いは悲鳴」

「しませ…ん、ぁああっ！！」

ズキ、と何か針が刺さったような痛みが走る。頭痛は片頭痛は、生き地獄だ。

「白瑠、さん」

「！？」

「白瑠さん、あたま、破壊して、壊して！」

「何を言ってるんですか！堪えてください、何も願ってはいけません。ラトアが来たら治まりますから！」

「いやあっ！痛い！！音を止めて！！黙らせて！！」

あたしは起き上がり、枕の下にあるカルドを掴んだ。しかし直ぐに幸樹さんに掴まれ手を捻って取り上げられた。

またズキ、と痛みが走る。

ザクッと腹を刺された感覚がした。しかし、腹に傷なんてない。神経が可笑しくなってやがる。まるで支配されてるようだ。ズタズタに引き裂くつもりなのか。内側から、滅茶苦茶にして、殺す気だ。

爆音の中で笑い声が聴こえた気がする。

「頭の中にいる!!コイツを出して!!」
「誰かの声が聴こえるんですか?その声が何を言っても―取引（、、）なんてしてはいけません」
取引?何のことだ。
なんで取引なんかをするんだ。
誰かが頭の中で脳内を掻き乱す。ビクリとまた震える。痙攣が震えが、肺を押し潰す。痛い。息が。
「椿!深呼吸をしてください!」
「はぁっ…だめっ…むりっ」
「椿!」
酸素が、吸えない。
呼吸ができない。
意識が、プツリと途絶える。
それから「っかは!」と息を吹き返す。意識が戻る。また肺が機能し出した。
「椿、息を吸って、吐いて」
幸樹さんがそう言うのが聴こえる。騒音はまだ続いた。窒息しないように、なんとか頭痛に堪えて呼吸をする。
「こう…き……さん……」
「椿、私が視えますか」
視界が定まらず、顔を左右に動かしても、幸樹さんは視えない。

「白瑠が来ました。ラトアも」

やっと来たらしい。
その時だった。
猫の爪で黒板を引っ掻いたよりも酷い音が爆発するように頭の中で響いた。

「うぁあああぁあ！！」

白瑠さんがあたしの名を呼んで部屋に戻ってきた。
強烈な痛みが同時に走る。
カッターナイフの刃が脳内に散乱して暴れているみたいだ。
あたしは白瑠さんの腕を掴む。
殺して！と叫んだつもりだ。
白瑠さんは言い聞かせるように何かを言う。
駄目なの。痛いの。
お願いだから解放して。
あたしは必死に悲願する。
ケタケタと笑う声がした。
笑うな出てけと怒鳴る。
白瑠さんに叫ぶ。
お願い殺して白瑠さん。
我に乞え、と声が言う。
激痛。ハンマーで叩かれた痛みがする。また呼吸が出来なくなった。
煩い煩い煩い。
頭の中で騒ぐソイツに怒鳴り散らす。そのせいで余計酸素がなくなって苦しくなる。
ズキ、と針が次々と突き刺さる痛みが走った。

「きゃあぁあああああぁあっ！！！」

ビクリと震える。痙攣まで激しくなっていった。ベッドの上で苦しみ悲鳴を上げる。幸樹さんと白瑠さんが何か言うが、聴こえない。

「おい、くそっ！！その悲鳴を止めさせろ！！オレ達（、、、）には耐えきれない！！」

詰まる喉。微かに耳を塞いでいるラトアさんが見えた。隣には、あの少年、ハウン君。

「気絶させるんだ！意識がない方がいい！」

ラトアさんのその声を最後に、意識が途切れた。

その意識の外れで、ソイツは笑っていた。

少女は人形玩具

朝陽に目を覚ます。
締め切られたカーテンの隙間から差している。気分は最悪だ。
喉はカラカラ、顔には涙が乾いた跡、身体中がまた痛い。
ボヤけた感じが頭に残っている。

「いやー、お目覚めかい、眠り姫」

寝返りをしようとして右に目を向けたら、そこに見知らぬオッサンがいた。
ハスキーボイスの草臥れた顔のオッサン。
あたしは視認した瞬間にベッドと棚の間に在ったベルトにある短剣を掴んでオッサンの肩に突き刺した。

「ははは、威勢がいいな。お嬢チャン」

しかしオッサンは笑顔のまま短剣を引き抜いて言った。あたしはもう一つ短剣を取ろうとしたが。

「待て待て、恩人を串刺しにしないでくれ。私はお嬢チャンに刺されるために永眠から起きたわけじゃないさ」
「……吸血鬼がなんで、起きてるんです？」

身体が重くて起き上がれない。敵ではなさそうだ。

「お嬢チャン、あのメモリカードを何処から手に入れた？」

あ、と思い出す。
あのパソコンの画面を見てからだ。あれが元凶。
頭痛に騒音に痙攣。

「貴方が…治したの？」

幸樹さんは何故かラトアさんを連れてこいと言っていた。この人も吸血鬼だ。
吸血鬼が治したのだろうか。
「こんなもんが、偶然お嬢チャンの手に渡るなんて世も末だな」とオッサンは手にするメモリーカードを見た。

「お嬢チャンの中に悪魔が入り込んだ」
「は？」
「頭の中で叫んでたのは、悪魔だ。私は悪魔退治の専門、の吸血鬼さ。ははは、十年前から墓で眠ってたのに叩き起こされちまったよ。運がよかったな、私の居場所はハウンしか知らなかった」

悪魔？ハウン？
そういえば、ハウン君もいたっけ。

「ハウンに好かれてるようで」

オッサンはあたしの腹部に目を向けた。やけに膨らんでいる掛布団を捲れば、そこにはハウン君が。
お……重いと思ったら…。
あたしの腹の上に頭を置いて眠っている。

「悪魔って……貴方達が戦争した相手？まさか、そのメモリに入ってたとでも言うの？」

「あれ？お嬢チャン知らないのかい？悪魔は人間の手で機械の中に閉じ込められたのさ。奴等、電気と気があってたせいかねぇ、ほら、ゴーストバスターみたいな感じで掃除機でスッポリ入った、ははは。時代が代わるにつれて、最終的にコンパクトになったんだ」

それがこれ、とメモリを見せ付けるオッサン。

「数少ない、悪魔の生き残り。人間達があちらこちらって混ぜてなくしちまってどこにあるかわかりゃしねー中、運が悪い奴がメモリを開いて殺される」

パキッとメモリを握り壊した。

回収し損ねた地雷を踏みつけた、ということか。あたしは運が悪いのかよかったのか、一体どっちなんだ。

悪魔が封じられたメモリ。

それを。あの人は知っていのか？

「悪魔は殺した――――と、言っておいたが違う」

「は？」

「お嬢チャンのケースは初なもんで、私にも無理だった」

草臥れたオッサンは、にぱっと笑っていった。

「は…はぁ？何それ」

「悪魔は脳に直接叫ぶ。悪魔の悲鳴だ。それで殺すか、或いは話して取引を持ち掛ける。それだけなら、私が引き剥がして殺せたが…特殊な悪魔で、お嬢チャンから引き剥がせなかった」

引き剥がせなかった。

つまり――――あたしの中にまだ悪魔がいる！？

「そこの」

あたしが口を開かないようにしわくちゃの手でオッサンは押さえ付けた。びくともしない。

「小僧達には悪魔はもうお嬢チャン達を苦しめないと言っておいた」

指差すのは、椅子に座って大口を開けて眠っている白瑠さん。その後ろにはパソコンを大事そうに抱えて壁に凭れて眠っている藍さん。ドアの隣には、ラトアさん。

「いや、悪魔は殺したと嘘ついた。嘘は嫌いだよ、胸が痛いなー。でも仕方ない。お嬢チャンを救う方法は悪魔を封じるか一思いに殺すかの二択だけだったからさ」

封じるか――殺すか。

「何故か悪魔はぴったりとお嬢チャンの中に引っ付いた。奥のそのまた奥に、潜んじゃったのさ。悪魔の気持ちはわかるよ、私だってこんな美女から離れたくない」

「…美女ではありません」

「ああ、すまないね、絶世の美少女か。……ん、それは嘘が混じるな」

自分で勝手に言ったんだろ。

「特殊な悪魔じゃなきゃ容易く引き抜けたんだがな。仕方なく封じた。生き埋めってやつさ」

「何故彼らに嘘を?」

悪魔を封じ込めたのはわかった。どうして白瑠さん達に嘘をついたんだ？

「時間がなかったのさ。血相かいて右往左往って心底心配してたから、一思いに殺す選択はとらないと思った。かと言って悪魔を封じるなんて選択を選ばないだろう？お嬢チャンを生かすって選択を私が選んでやった。嗚呼、この事はくれぐれも黙っておいてくれ。殺される最後なんて御免さ。私は世界の終わりまで平穏に眠っていたいからな」

草臥れた顔で笑う吸血鬼。
自分の身が可愛いか。
知ったら笑顔で白瑠さんは頭蓋骨を破壊しかねない。もし話したら、どっちを選んだかなんて、わからないけれど。

「封じたって……どうやって？」
「おいおい、そんなこと聞いてエクソシストになるつもりなのかい？お嬢チャンが訊くのはその効力がいつまで続くか、だろう？」

あたしは黙って睨み付けた。

「効力はわからん。その悪魔の力量がわからないからな……少なくともそう半年は持つだろう」

こめかみを指差してオッサンは答えた。
悪魔の封印の効力、早くて半年。

「解けたら？」

それが重要だ。

「取引したらお嬢チャンが一我々（、、）の敵になる」

吸血鬼の――敵。

「お嬢チャンを殺すか、或いは取引を持ち掛けてくるだろう。なんであれ吸血鬼を滅ぼす為に必要なことさ。取引したら、その時はお嬢チャンを殺すしかないだろう。吸血鬼全員がお嬢チャンの敵になる」

あたしは、ハウン君とラトアさんに目を向けた。

「お嬢チャン次第だ。甘い誘惑にも地獄に似た苦痛にも負けないでくれよ？ははは、ハウンがこれ以上無口にさせないでくれ」

「ハウン君…？ちょっと、待ってよ。解けたら何かないの？あの笑う不快な奴をなんとかできないわけ？半年後にまた頭で騒がれるのを堪えっていうの？」

取引をしたらの話を訊いてるんじゃない。また騒ぎ出した悪魔の対処法が聞きたい。

「ははは、それを教えたら悪魔まで知ることになっちゃうじゃんか」

笑ってオッサンが手を振った。

「……聞いてんの？」

「お嬢チャンの頭にいるんだから当然さ」

「半年後まで悪魔が同居して生活を覗き見られるんですか？」

「さー知らないさ。可能性はあるだろう。頭にいるんだし今の話ま

で聴こえてるかも……ね」

オッサンは、そう顔を近付いて囁いた。
頭の中。
嫌なところに封じやがった。悪魔に覗き見られ聞き耳立てられる。
青ざめた。が直ぐに思い返す。

「わかった、じゃあ何かあるんですよね。この悪魔をなんとかする方法」
「勿論。おにーさんが助けてあげよう」

胸を叩いてオッサンは答えたが、どうにも信用できない。
今殺さないのならば、何かしら方法があるのだろう。

「信用……出来るんですよね？」
「ハウンを信用するなら」

またハウン君の名前が出た。

「ハウン君と何の関係があるんです？」

問えば頬杖をついてオッサンは草臥れた笑顔を見せる。

「ハウンが吸血鬼になった時からの世話役なんだ、私は。言わば父親代わり。元は神父さ。名はジャスタ」

元神父でハウンの父親代わり。

「ほら、見ての通り幼いだろう？ハウンはその幼さで吸血鬼になったからな、誰かが面倒見なきゃいけなかった。私にとっても息子さ。

だから、息子のお気に入りは殺したくはない」

それが救う動機になる。

そして、ハウン君次第でもあるんだ。

幼い姿で長い時間を生きる吸血鬼。

喋ってくれたのだから、少なからず好いてくれていることは間違いのだろう。だからこの吸血鬼を呼んだらしい。

信用はできる。だから、あとはあたし次第。

「あたしが敵になることはありません。あたしは吸血鬼が好きなんで」

「それっておにーさんに告白してくれてるのかな？」

「どうかしら」

ふん、とあたしは鼻で笑う。白い肌で墓から出てきたオッサンに見えるが、吸血鬼には見えないからコイツは好かないだろう。

「頭の中が騒ぎになったらハウンに私を呼ばせればいい」

そう言って大欠伸をした。本当に神父だったのだろうか、疑ってしまう。

「さて、私も眠ろうとしよう」

「何故あたしのベッドに入ろうとするんですか？」

「いや、私は美女と同じベッドじゃないと眠れない病気なんだ」

「墓場で寝てたんでしょアンタ」

一応助けになったからあたしは仕方なくベッドを譲った。汚れたらどうしよう。

「あー、一つ確認し忘れてたんだが」
リビングのソファに行こうとしたら呼び止められた。
「取引をしていないよね？お嬢チャン」
「…？してませんよ、頭の中の声には怒鳴るしかしてませんから」
「ふーうん。そっか。じゃあなんかのサービスだったのかもね」
「サービス？」
「ラトアから聞いた。痣が消えてるよ」
それだけを言って「おやすみ、絶世の美少女チャン」と勝手に話を終わりにされた。
あたしは部屋を出て、廊下で服を捲って確認してみる。
痣なんて、跡形もなかった。酷いくらい青ざめた痣が一日で治るはずない。
悪魔の仕業？一体何のため？

「つーちゃん、大丈夫ぅ？」
目を覚ました白瑠さんは猫なで声を出して問う。うるうるした眼で心配な眼差しを向けてくる。
「ええ、大丈夫です…はい、申し訳ご」
「んーよかったぁ」
謝罪を遮られて抱き締められた。
ハウン君とジャスタは起きるなり帰ってしまったのでリビングにいるのは、ラトアさんと藍さん、幸樹さんに白瑠さんだ。
幸樹さんは起きるなり診察して昨日の昼から何も食べていないあ

たしの口に食べ物を突っ込んだ。今も何かを作っている。

「お嬢、一体何処からあのメモリカードを手に入れたんだい？僕の方が遭いそうなのに、なんでまた？」

さっきからずっとパソコンのキーボードをカチャカチャ押す藍さんが訊いた。

一同が耳を傾けたのがわかる。

何処から――プレゼントだ。

誰からの――多無橋さんだ。

「わかりません、いつの間にか在ったんですよ。拾ったかもしれませんが…覚えてません」

あたしはそう答えた。

藍さんからラトアさんに目を向ければ、黙って目を逸らされる。ラトアさんも話すつもりはないらしい。

全く。なんでまたあたしはボコボコにされてまで手に入れた物に危うく殺されなきゃいけないんだ。

多無橋あの野郎。

「なんのメモリなのかを開いたら……ああなりました」

「貴女の好奇心は危険ですね」

幸樹さんが歩み寄って白瑠さんに羽交い締めにされたあたしに皿を渡した。フルーツポンチだ。

それを横から白瑠さんに奪われる。

「こんな調子でアメリカに行けるんですか？白瑠」

「アメリカ？」

「あーだめじゃん、俺が話すのにぃー」

頭の上で白瑠さんが喋る。

「ラトアの仕事がアメリカであるんだ。いい機会だから暫くそこで仕事するぅんだぁ」

また勝手に決めてる。

「はぁ、そうですか。でも、パスポートないんだけど」

「うひゃひゃ、そんなの用意できるよぉ」

突っ込みは不要らしい。

「アメリカの方が危険だというのに……大丈夫なんですか？白瑠」

「あっちの方が安全だよぉ」

「どうでしょうか、予想してない事態に陥る娘ですよ」

「ちょ…そんな推測が全くできないトラブルメーカーみたいに言わないでくださいよ」

「椿さん、貴女今年厄年です」

他人にはっきり告げられた!!

真面目に言われちゃった!

「大丈夫大丈夫、俺が付きっきりになるよぉ」

白瑠さんは身体を揺らしながら言う。羽交い締めにされたあたしも揺れる揺れる。

「うーえー、やだーなー。つーお嬢に暫く会えないなんて」

落ち込んだような表情をしつつも手を止めない藍さん。さっきから何してんだろう…。

「椿さん」

幸樹さんに呼ばれて顔を向ける。

「アメリカに行ってもですが……行く前もくれぐれも死にかけないように」

「死、死にません…頑張ります」

気圧されてブンブンと頷いた。

好きで死にかけているわけじゃない。

そういえば今年、死にかけるの四回あったよね…。

来月生きてるかなぁ。サンタさんじゃなくてサタンに会う羽目になったりして。

翌日は幸樹さんが付きっきりで看病してきた。全然平気だというのに。

寧ろ、怪我が完治してバリバリ元気だ。

そのまた翌日。

幸樹さんは表の仕事に、白瑠さんはパスポートを取りに行くとかで、藍さんにあたしを預けて出掛けた。

こう過保護にされては、多無橋さんに会いに行けないではないか。

「椿お嬢ー……」

やけに暗い声を出すなと振り返ってみれば、本当に暗い表情をしていた。

「えっと…？」
「お願い！お嬢！頼み事を聞いて！！」
「嫌です」
「即答！？」
「どうせコスプレでしょ、最近してないから」
「今回は深い事情が！」
「結局はコスプレかよ！」

藍さんの頼み事、結局コスプレ。
足にすがってきたのでとりあえず、深い事情とやらを聞いてやろう。

「実は……先週から中学生の女の子とメールのやり取りをしてて」
「解決法はズバリ通報ですね」
「最後まで聞いてくださいぃいいい！」
「すがるフリして足を撫で回すな！」

一回蹴り飛ばしたら床に項垂れた藍さんはしくしくと泣くフリをしながら続けた。

「ほんと、仲良く…メールをしてたんだよ？そ、それなのに、昨日からパッタリとメールの返事が来ないんだよー。何かあったのかな？何かあったんだよね？椿ちゃん、お願い！中学校に潜入して無事を確認してきてほしいんだ！！」
「わざわざ潜入する意味がわからん！！事情が浅いわ！」

耐えきれずまた足蹴にする。
全然深くないじゃないか。何が深い事情だ。忌まわしい。

「椿ちゃん！僕は本気の恋をしてるんだ！お願いだよ！僕の恋の手助けをして！」

「それでは中学生の制服は着なくていいんですね」
「着てほしい！！」
「どこが本気の恋だどあほ！！」

ガシリと手を掴んで必死に頼み込む藍さん。冷静に対応することを一瞬心掛けたが一瞬しか持たなく拳で藍さんの頭を殴った。

「そ、それとこれは…違うんだよーう」
「いや、あたしの台詞だろ。メールの女の子の無事を確認するだけなのになんでコスプレしなきゃいけないんですか、死ね」
「一番最後怖っ！」
「ごめん、本音が」
「謝ってない！？」
「直接会えばいいじゃないですか。なんです？もう自分の年齢と趣味を明かしたんですか？援助交際だったんですか？」
「援助交際じゃないよ！ピュアなメールのやり取りをしたんだよ！」

そう言い続けるからそのメールを見てみれば、本当に普通のメールだった。変態要素が表れてないメールのやり取りだ。
これでメールが途切れるのは不自然だな。
でも、相手がわかんないだろう。女心は秋の空。
ただの遊びで相手をしてやるくらいするだろう。飽きて拒否してるのもあり得る。

「藍さん…犯罪ですからもう少女を好きになるのはやめましょう」
「ええ！？だめっ？だめなの！？」
「きっと騙されただけです。そして言わせていただくと……それは恋じゃない」
「っ！！冷たいお言葉…！ドライ過ぎるよお嬢！！」

そんな涙目で見られても、本音だもん。
歳上でイケメンでも、包容力のない藍さんなんかに好きになるわけない。あたしは断言してやる。
それに、ロリコンだし…。

「お嬢！お嬢恋したことある！？」
「学生の時はそれなりに」
「それを思い出して！僕はあの子にメロメロなんだよ！夢中なんだ！」

夢中なのはいつもじゃん。
ストーカーだってやるじゃん。
でも、藍さんの眼は真面目だ。
……少女関連は真面目な顔をする人だから騙されないぞ。

「無事を確認してくれるだけでいいんだ！お願い！なんでもしますから！！」
「……なんでも？」
「なんでもする！！足だって舐めるから！」
「靴だろ、足指はお前喜ぶじゃんか」

とりあえず足蹴にしつつ、考えてみた。なんでも、ね。

「えっと……椿お嬢様。眼がとんでもなく冷たいですよ。氷の女王様のようです」
「フン、なんでもと言ったこと精々後悔するといい」
「はっ…！？じょ、女王様、一体何の命令をするのですか！？」

何ごっこだよ。
あたしはしゃがんで藍さんと目線を合わせた。

「簡単です。その女の子の無事を確認したあと、多無橋さんの元に連れてってください。白瑠さんにも幸樹さんにも内緒で。簡単でしょう？」

「え……？」

藍さんはきょとんとしたが、その条件を呑むことにした。

そんなこんなで、あたしは中学生である“寧々ちゃん”の学校に潜入することに。

その為に、必要があるの謎だが制服を着る羽目になった。

紺色のミニのプリーツスカート。ブラウスの上に学校指定の白いセーター。白のニーソにローファー。

高校生と変わらないと思うがこれが中学生の制服という事実が非常に恥ずかしい。

何より。何より何より。

藍さんがヤバイ。

口がポカーンと開いてそこからだらだらと涎が落ちていく。息はハァハァと荒くそのせいか頬が紅潮している。

半径一キロ以内に入ってほしくない変質者が登場。

鳥肌だけで人間死ねると思った瞬間だ。

「近寄ったら殺す！」

カルドを構えてそれ以上近寄らないように、後退り。いや、もう、ほんと、近寄らないで。

「ぐふっ……ぐふふっ…ハァハァ…超ツボ……ハァハァハァハァハァハァ」

「お前ほんとはただあたしにこれを着せたかっただけなんだろ！？涎！」

「ぐしゅるしゅるっ…ハァハァ、お、思いの外、ツボにストライクした、ハァハァ」
「呼吸を一からやれ！！」

あたしは気持ちだけ百キロ離れてから藍さんが落ち着くのを待った。藍さんは涎を拭いてから（袖がべったり）息を整えて「つーお嬢のおさげがマニアックで」と指差す。
確かに耳の後ろに髪を二つに束ねたけど、これアンタの指示じゃん。二つ結びにしたら幼さがでるって。

「ツインテールの方がいいと思ったけど…その方がツボ！」
「やっぱり遊んでるのか。目と首、どっちに刺してほしい？嫌な方を選べ」

二つ結びと言われてツインテールと連想しなくてよかった。つか指示されてもやらん。

「遊びじゃない本気だ！！」
「死ね」
「あぶねっ！？え？超危なくない！？今当たってたら確実に死んでたよ！カルドって投擲する武器だっけ！？」
「死ねばよかったのに。世の中の少女とこれから生まれてくる女の子の為に……死になさい」
「つ、椿ちゃん！落ち着くんだ！悪いのは椿ちゃんにツボるほどの萌え美貌を与えた神だ！」

思わずカルドを投げた。それは藍さんの首を狙ったのだが外れて壁に突き刺さる。本当に本当に死ねばよかったのに。
神って。何の話だよ。

「艶やかな黒髪におさげ！長い睫毛から覗くつぶらな黒い瞳！それとは対象の白のセーターは天使の羽根のように掌まで隠れる袖がツボ！その下から出ている紺のスカートは小悪魔っぽい！トドメは白のニーソにローファー！ふっくらした太ももを包む白いアイツ！なんて萌え要素がありまくりなんだ！！天使の罠！？ぐふふっ！これで眼鏡を掛けて照れたように話し掛けられたら…ハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァ！」

「今日こそ息の根を止めてやる。覚悟しやがれ」

一度コイツは病院送りにして精密検査をさせてやるべきだ。

散々暴れた末に漸く出発。

私立女子中学校にあたしは潜入した。

学校なんて懐かしい。

校門を潜って校舎に入った。藍さんはきっちり学校指定の下履きまで用意していやがったからそれを履いて校舎を歩く。

丁度昼休みの時間らしく一人歩いても目立たない。

…目立たない。

……目立たない。

なんかしら不審がられると思ったが平然と生徒とすれ違う。

「どう？バレてないっしょ？」

耳元から藍さんの声が漏れる。頑なに断ったが何かあったら自分が白瑠さん達に叱られるからと強引に小型通信機をつけられた。

「はぁ……なんでバレないのかあたしには理解し難いです」

「そりゃあつーお嬢があまりにも似合ってるからぐふっ」

「いや、普通に身長でもわかるでしょ」

「……」

「……うるせえ！あたしは百五十センチ以下じゃねえ！！」

「何も言ってないよ?!わ、わかってるって!つーお嬢は百五十五センチ以下だって!バストはギリギリDカップで体重は推定」

ブツリとあたしは通信機を切った。

死ねばいい。アイツまじ許しまじ。殺す殺す殺殺殺殺。滅したい。

嗚呼、あの時見捨てればよかった。あの時、玄関さえ開けなければ。

思えばあれが悪夢の始まりだった。

思わず、叫んでしまったが幸い一人の生徒しか振り返っていない。

さっきから前方を歩いていたから気にはしていた。中学生とは思えない小さな身長の女子生徒。白銀のショート。脱色した髪の女子中学生がこの世にいるなんて、と思っていたのだ。

叫んだことで彼女は振り返ってきた。あたしをじっと見てきたかと思えば、五十メートル先から駆け寄ってきた。

ヤバイバレた?と焦りつつも白銀の女子中学生の顔が見たくて動かない。

ん、可愛い顔だなぁ……ぁ?あれれ?

見たことあるな。

ん?幻覚…か?

空似…だよね?

首を傾げて凝視している間にもその女子中学生はあたしの前に来た。

「つばき、おはよう」

そうぼんやりした瞳で見上げて、ぎこちなく小さな唇を動かして小さな声で挨拶。間違いなく、幻でなければ、ハウン君。

あたしと一(セーターだけはMサイズ)同じSサイズの制服らしいが見た目小学生のハウン君には大きいようで手はすっぽり袖の中、スカートが膝上五センチのニーハイ。

「写真撮ろう!!」

突っ込みは全て後回し。
あたしは直ぐ様携帯電話を出した。通りすがりの女の子に頼んで携帯電話のカメラ機能で撮影してもらう。
ハウン君を抱き締める形でピース。
永久保存！
いや、保存するならハウン君一人だけで！
あたしは女子生徒に礼を言ってからハウン君にカメラを向けた。
と、そこで気付く。
おや…？この子も見たことあるぞ、と。

「“寧々ちゃん”！？」
「え、は…はい！」

藍さんに画像を見せてもらった。なんでもお互いの写真を交換したらしく、寧々ちゃんの顔は予め確認できたのだ。
中学生らしい幼さがある可愛い顔の女の子、間違いない、この子だ。

「あたし、藍乃介さんの……近所に住んでるの」
「え？藍くんの？」

藍くんって呼ばせてる…。

「そう。なんか昨日から連絡取れなくて凄く心配してたの、どうかしたの？」
「え、あっやだっ…ごめんなさい。親に携帯電話を取り上げられちゃって…メールを返せなかったの」

申し訳なさそうに寧々ちゃんは言った。ふむ、そうゆう事実か。携帯電話ばかりいじっている中学生にはありがちなだろう。

「携帯電話が戻ってきたら連絡するって伝えてもらえるかな？」
「今校門の前にいるよ、直接言ったらどうかな。紺色のバン。何かあったんじゃないかって凄い心配してたから顔を見せた方がいいわ」
「あ、そうなの？じゃあ行こうかな。…ふふ、藍くんって本当のお兄ちゃんみたい。わたしお兄ちゃんがいないから、嬉しいや。ありがとう」

寧々ちゃんは踵を返して藍さんの元へと駆けていってしまった。
藍さんが本気の恋と言っていたからお節介を焼いてしまったが、かなり余計なことをしてしまったかもしれない。
完全に“お兄ちゃんみたいな人”のポジションに入れられている。
寧々ちゃんはその気はない。
ん？でも…メールでも兄妹ごっこみたいな会話をしていたような…。
日常生活に悩みまで色んな会話をしているようだった。アプローチかけてる台詞なんて見つけなかったが……。
つか、あんな変態の元に行かせてよかったのか？十中八九間違いだ。

「あ、そうだ。ハウン君、どうしてこんなとこにいるの？」

あたしは突っ立ってただ見上げてくるハウン君に漸く質問をする。
それよりもどうして女装をしているのかが気になる。実は女の子？
…いや、男の子か。否、噂の男の娘！？

「まだ真っ昼間じゃない、今日は曇りだけど。眠くないの？」
「ねむい、の」
「じゃあどうしてここにいるの？」
「……」

答えたくないのかそれとも言葉が見付からないのかハウン君は黙っ

てしまう。
女装してる訳は言いたくないのかもしれない。
まぁ…いっか、写真写真と。

「この前はありがとう、ハウン君。お礼を言いそびれちゃった。ありがとうございます」

深々とあたしは頭を下げた。

「君がいなきゃ悪魔に殺されてたんだよね、ジャスタさんを起こして連れてきてくれてありがとう。本当、痛かったんだよ、助かったよ」

しゃがんで目線を合わせてもう一度お礼を言っておく。
運が悪い中でハウン君がいてくれて幸いした。

「おれいは」

ハウン君は自分の唇に人差し指を当ててから、言った。

「チュー」

少年でも吸血鬼。色っぽく目を細めておねだり。
お礼はチュー!?
え、唇ですか、ハウンさん!?
とんでもないお礼要求に硬直していれば、とんと押された。
あたしは尻餅をつく。
そのあたしに馬乗りになったハウン君が、小さな手で頬を押さえ――キスをした。
フレンチではなくかなりディープなキス。

あたしが抵抗する前にキスは終わり、ペロリと自分の唇を舐める妖艶な吸血鬼。
うっ……犯罪のにおいがする。
学校で中学生じゃない二人が制服を着て廊下で乗っかりディープキス。一方は女装男子プラス吸血鬼。犯罪級ラブコメ…！！
そうでした、彼は少年でも遥か歳上。きっとあたしより経験豊富なんだろう。
なんか、もう、メロメロになりそうだよ。
やべショタコンになりそう。
ハウン君に心を奪われそうだ。
――――――ズキッ。

「いたっ…」
「…つばき？」

痛みが走って頭を押さえる。ハウン君は無表情ながらも心配して顔を覗く。

「ん、大丈夫…後遺症かな、はは」

頭痛ではないようだ。何ともない。笑いかければ頭を押さえた部分にハウン君はチュッとキスをした。
それから何事もなかったかのようにあたしから退いて廊下を歩き去ってしまう。
さよならの挨拶をしない子だ…。
あ、やべ。寧々ちゃんが藍さんの毒牙にかかる前に助けなきゃ。
あたしも立ち上がりその場をあとにした。

「つーお嬢！通信機を切っちゃだめじゃん！」

校門近くに停めてあったバンを開けば、藍さんが待ち構えて叱ってきた。
左右を見ても寧々ちゃんは見当たらない。

「寧々ちゃんをどこに閉じ込めたんです？」
「このバンのどこに隠すところがあるって言うんだい！？もう校内に戻ったよ…はぁ、僕もこれで一安心だ」

胸を撫で下ろす藍さんは不安が消え去ってすっきりしたみたいだがどうにもあたしはすっきりしない。

「ほら、僕の頼み事は終わったから次は椿お嬢だ。多無橋氏のところに行こう」

爽やかな笑顔で藍さんは促す。
何かモヤモヤしつつもあたしはバンに乗り込んだ。
バンを走らせながら「寧々ちゃんに聞いたけど誰かといたんだって？」と藍さんは訊く。あたしは後ろで武器の整理をしながらハウン君がいたと短く答えた。

「へぇ。そっか。あのちっこい吸血鬼の坊やか、つーお嬢の恩人。すごい偶然だね、あはは」

わざとらしく笑う藍さんの背中を見る。そんなあたしをバックミラーで確認してから「あの神父ヴァンパイアに一番小さいサイズの制服をあげたんだ」と答えた。

「なんでも眠りから起こした罰を吸血鬼の坊やに与えるんだってさ」
「罰？」
「起こさない約束だったんだ。その約束を破ったから、制服を着さ

せて昼間に学校一周でもさせてるんだろうねーぐふふっ」

あたしのせいじゃないか。

ハウン君は何も言わなかった。罰くらい、言えるだろ。言ってくれればよかったのに。

あの似非神父め。

「そんな怖い顔をしないしない。約束を破ったんだ、それはいけないことだよ。言わば契約。契約を破っちゃいけない。これは絶対のルールなんだから、悪魔だって契約は守る」

そう語る藍さん。

何が言いたいんだこの人。

「そういえば。つーお嬢。多無橋さんに会うのにどうしてそんなに武装してるの？もしかして実は食事に誘われた日に仕事をもらってたり？」

いきなり話題を変えた。あたしが武器をバンに運んだ時は何も言わなかったくせに。

「別に。常備してないともしもの時、困りますから」

「ふーんー。もしもかー」

あたしはバックミラーに映る藍さんの顔を見た。

にやにやした意地悪な目付きをしている。

「言わなかったけどさー」とまた口を開き始めた。

「あのメモリカード。かなり最新だったねー」

「……へぇ、そうなんだ」

「んー、そう。落ちてるような代物なんかじゃないんだよねー。きっと厳重にガードされていたはずさ。調べてみたらね、“悪魔の指輪”とかいう黄色のダイヤが嵌められた指輪が…行方を眩ました」

あたしは沈黙した。

メモリカードが隠されてた黄色の石が嵌められたあの指輪。

「更に詳しく調べてみたら……多無橋氏に渡るはずだったらしいよ。ぐふふっ、これはすごい偶然だねーお嬢？」

あたしは。

何も答えずに睨み付けた。

何もかも知っているようだ。

調べて、辿り着いた。

あたしが多無橋さんに会いに来たのが、きっと決め手になったんだ。

車が停まった。目的地に着いたようだ。

「僕も約束を破ったし、これでおあいこにしようって伝えておいて。多無橋氏はこのビルの二十四階の部屋だ、アポはとってないから上手く忍び込んで」

藍さんが破った約束——食事に一人で来なかったこと。

あたしは黙ったまま、バンを降りて閉めた。

「くれぐれも、制服を汚さないでー。それから」

「…汚しませんよ、脅すだけです。殺るときは返り血を浴びないようにします」

藍さんは助手席の窓から顔を出して釘を刺す。あたしは肩を竦めて振り返る。

「多無橋氏からメモリを貰ったことはちゃーんと幸樹と白瑠には黙っておくよ」

爽やかに笑って藍さんは車の中に引っ込んだ。

少女趣味の変態というキャラが濃すぎて、忘れていた。否、変態キャラで隠されていたんだ。何を考えてるかわからない、尻尾の隠れた食えない奴。

白瑠さんが思い付きであたしを脅かすならば、彼は計算してあたかも偶然ぶってあたしを脅かす。

今回、メモリを見ただけで予想はついていたんだろう。調べてメモリは多無橋さんから流れたと確信した。あとはあたしがそれを知っているかどうかを確認するだけだ。

過保護に守られたあたしは仕返しするチャンスを待っているはず。多分、ただの予測だが中学校潜入はただあたしがチャンスを掴む為に出した罠。もしもあたしが忘れていた時の為の――ハウン君だった。自然な流れであの悪魔の話題に入れる切札。

ハッカーで仲介者だけあって頭はキレる。なんて奴だ。

本当に苦手なのは、アイツなのかもしれない。

「説明を、してください」

二十四階に部屋は一つだけだった。一階をまるごと使った会議室。キーピッキングを使って音を立てずに忍び込んだ。誰かいれば殺戮を決めていたが、幸い多無橋さんは一人。他に人気はない。

あたしは後ろからカルドを首に突き付けた。

「……可笑しいと思ったら、会議の連中がいないのは君のせいかな？紅色の黒猫ちゃん。殺してしまったのか…或いはIが協力したのかな？」

少なからず緊張していたがいつもの調子で多無橋さんは喋る。どうやら藍さんが細工してくれたようだ。つくづく食えない人。

「ふむ…どうやら、君は一無事（、、）のようだね」

「――メモリの中身を知っていて、あたしにプレゼントをしてくれてありがとうございます」

強く押し当てれば、少し強ばった。脅しは聞いてくれているようだ。中学生の制服を着た分の素敵なステージを貰えた。邪魔は当分来ないだろう。

「仕事に失敗した、報いというわけですか？」

「違うさ。言っただろう？最初から渡す気だったと」

「ほう？なら初めからあの悪魔であたしを殺す気だったんですか。聴かせてやりたかったわ、頭が割れるくらいの悲鳴を」

ガシリと短い髪を鷲掴みにして怒りを噛み殺して言う。今すぐにでも、喉を掻き切りたい。

「っ……？まさか、“彼”の声を聴いたのかい？」

「…どうゆう意味ですか？」

「“彼”の声を聴いて、生きていることに……いや、聴いたことに驚いているんだ。まさか、そんな、君は一攻撃を受けたのかい？（、、、、、、、、、）」

多無橋さんはわけのわからないことを訊いた。

悪魔を封じたメモリと知ってて攻撃を受けていないと思っていたのか？

「メモリを見たら悪魔に攻撃されるのは当然でしょう。他の人が見たと思ったんですか？」
「――誰が見ても、攻撃しないと思ったからこそ君にプレゼントしたのさ」
は？
攻撃をしない悪魔だというのか。
「言っただろう、黒猫ちゃん。あれは“貴重なプログラム”なんだ。長年調べあげられた悪魔のメモリーなんだよ。不可解なことに、あの悪魔は誰が開いても襲わない―温厚（、、）なやつなんだ。何もせず声も出さず、まるでこちらを嘲笑うように見てくるだけの、何の危害もない世界で一つだけの“悪魔のメモリー”。だからこそ、君にプレゼントしたんだ」
裏現実に踏み入れた歓迎を示した特別なプレゼントとして。
多無橋さんは言うが、それに信憑性はあるのか。
あたしは握る手に力を込めた。
「お気に入りの君を安易に消すわけないじゃないか。それも些細な仕事で半分失敗しただけで」
あたしを気に入っているのはわかっている。その通りだ。
だがしかし。
「それでは納得いきません。そんな温厚な悪魔が何故あたしに攻撃をしたんです？」
「っ、それは…そうだね。悪魔の憎き敵である吸血鬼が側にいたとか。吸血鬼ならばいくら温厚でも暴れだすだろう」
「生憎、開いた時には吸血鬼はいませんでした」

「それでは……わからないね。しかし、信じてほしい。決して君を消そうとプレゼントしようとしたわけではないと」

人差し指で多無橋さんはカルドを遠ざけようとしたがあたしはそれを許さず再び首に押し当てた。軽く引くだけで首は切れる。

「あのメモリの詳しい情報を」

「……。悪魔の力を我が物にしたい一人の人間がそのメモリを調べた。人間で実験をして取引をするのを観察しようとしたのだが、その悪魔は取引を持ち掛けなかったし人間を殺そうともしなかった」

どんな人間でも男でも女でも幼児でも赤ん坊でも老人でも、悪魔はうんともすんとも言わなかった。ただ、画面の中で時折姿を見せて嘲笑うように見ていた――という。

我が物にできないと判断した人間はそのメモリを高値で売った。人間から人間へと売られていったメモリはいつしか“悪魔の指輪”に代わり、“貴重なプログラム”と成ったのだ。

あたしが開くまで、悪魔は長い間沈黙を続けていた。

「ふふ……これはかなり神話に近い話さ。沈黙の悪魔――悪魔のメモリなんて吸血鬼に知られたら消されてしまうからね。裏の裏で暗い水の底で伝わる怪談話。今や高値で売れる貴重品だったのに……君が沈黙を破らせるなんて、熟君って娘は――面白い」

堪えていたが、多無橋さんは笑いを漏らす。心底愉快に、できるなら哄笑したいくらいに、堪えながら笑う。

「あの悪魔の特徴は？無口以外になにかわからないんですか？」

「何故そんなことを訊くんだい？まさか、対処に困ってるのかな。

沈黙の悪魔がずっと騒ぎっぱなしなのかい？」
「悪魔なら殺しました。散々騒ぎやがったアイツを知りたいだけですよ」

グイッと引っ張り顔を上げさせる。首はこれ以上なくカルドにさらけ出す。どうせなら喉に噛み付いて引きちぎりたい。
あたしが吸血鬼だったら――――ズキッ。
また痛みが走って目を細めたが先程と同じたった一瞬だけ。

「まさか……“彼”を殺せたのかい？一体どこの神父が君を救ったのかい、是非ともお礼がしたいね」
「吸血鬼が殺した」
「可笑しいな……少なくともそこらの吸血鬼では殺せない程の力量だと思っていたんだけどね」

少なくとも、そこらの吸血鬼では殺せない悪魔だろう。

「もういいです。これで失礼します」

そろそろ秘書さんも戻ってくるだろうから、あたしはカルドをベルトにしまった。そこで初めて多無橋さんはあたしの姿を視認する。

「……前回から思っていたのだが、やけに年相応の服装をしてるね。可愛らしい、仕事服と違うからいい」
「師匠に黙って貴方に会うには色んな手を使うから仕方なくです」

思ってもみなかった格好だったらしく目を丸める多無橋さん。殺し屋が学生服だもんな。

「Ｉさんから伝言です。約束を破ったからこれでおあいこ、だそう

です。責めないでください。最後に、―これ（、、）はIさんとは関係ありません」

しっかり伝言を伝えたあとに、あたしはセーターの中からバタフライナイフを取り出して、警戒を緩んだ多無橋さんの腹に突き刺した。

「っ…！？」

「あたしはてめえの玩具じゃない。調子こくんじゃねーよ」

耳元で甘く激情を込めて囁いてやる。

刺されるなんて思いもしなかったのだろう。驚愕に満ちた表情で絶句していた。気が晴れてフッと笑う。

「それではさようなら」

「……っはは。流石、わざと急所を、外してくれてるね…ふふ」

離れて会議室を出ようとしたら、冷静を保って多無橋さんは人のいい笑みを浮かべた。

死んでも構わなかったが一応藍さんのお得意様だから急所を外しておいた。メモリをプレゼントした罰とでも言っておこう。

「では君は誰の玩具なんだい？頭蓋破壊屋、の玩具か」

お得意のムカつく言葉を選んで言ってくる多無橋さんに振り返って答えておく。

「ええ。あたしは頭蓋破壊屋さんの人形です」

いや、違うな。

首につけたチョーカーの鈴を鳴らして言い直す。

――チリーン。

「彼の飼い猫です」

ガンガンと鳴り響く音楽が金属を弾いて木霊していく。悪魔の騒ぎ声に似たエレキギターの演奏に顔をひきつらせつつも、看板を確認した。

車の修理工場『松平』。

ここで間違いないはずだ。

「あの、すみません」

とりあえず訊ねてみよう、とあたしは作業員に話し掛けた。

「あん？なに？」

車の下から這い出たのは、作業服のおねえさん。あ、この人だ。

「松平兎無（まつだいらうな）さん、ですか？」

「あたしだけど……なんで名前を？」

立ち上がったおねえさんはあたしよりも背が高い。名前を呼ばれて警戒した表情に変わった。

「あの、あたし」

ガツン！

いきなりで全く反応が出来なかった。ベンチが飛んできてあたしの耳元を擦り壁に食い込んだ。

「借金とりか！？金はないって言っただろう！！」
「しゃ、借金とりじゃないです！！」
「どっかの刺客だな！？」
「弥太部火都の紹介できました！」

松平兎無さんが道具箱を投げ付けようとしたからあたしは必死に止めた。

「む…？火都だって？」
「はい……その、武器を作っていただきたくって……」

ギリギリ止まった。片手で鉄の道具箱を持ったまま停止する松平兎無さんは、武器職人。
表は修理工、裏は武器職人。
弥太部火都の紹介だ。
ショッピングで武器の話をしたら紹介してくれた。

三時間前のこと。
海外旅行の準備で白瑠さんが留守だから、代わりにラトアさんがあたしの子守。
朝から起こされて不機嫌なラトアさんに日常英語を習うはずなのだがずっと黙っている。

「すまなかった」

第一声はそれだった。
あたしに向けての謝罪。

「悪魔について話すべきだった。メモリに封じていると教えていれ

ばああならなかった、すまない。オレの責任だ。そもそも鼠狩りの件を秘密にするべきではなかった」
「よしてよ、ラトアさん。めそめそしてるとぶっ殺しますよ」
「……」
「……」
一人用ソファに座って向き合う。沈黙してあたしを見るラトアさん。
「外出してくるわ、貴方も寝た方がいい。帰ったら勉強教えて」
「何処に行くんだ？」
「やめてよ、ラトアさん。貴方まで過保護になるつもりなら三回殺しますよ」
目を回して肩を竦めればラトアさんは苦い顔をした。過保護なお兄ちゃんの仲間入りになりそうな自分に苦い味を感じている。
「藍が」
そう口を開く。
「藍乃介が知っていた。昨日多無橋の元に行ったそうだな」
ラトアさんは今、藍乃介さんの家に泊まっていたのか。あたしは上げた腰を降ろした。
「故意ではなかったそうですよ。あの悪魔、長年沈黙を守っていたそうです」
「信じられるのか？」
「さぁ。一応気を晴らす為にバタフライナイフを腹に刺しておきました。仕返ししてきたなら殺すまでです。その時は、白瑠さんも殺

ってくれるだろうし…過保護だから」

爪を気にするフリをしながら言う。あっちも頭蓋破壊屋がついてることを視野にいれて何か仕掛けてくるだろうが可能性は低い。

「お前を怒らせたら怖いな」

「怖いのはあたしのアンラッキーです。殺しを初めてからのこれまでを知ってます？電車の中で五十六人を殺して頭蓋破壊屋に殺されかけた。この傷です」

ラトアさんの呆れた目を指差す首に向けさせる。白い傷痕。

「入院した病院で狩人の鬼と友達に。それから裏現実に。初仕事はヤクザの抗争相手の始末。初の大仕事では弥太部矢都に射抜かれ死にかけた。知らぬ間に付けられた紅色の黒猫の名は一人歩きして有名に。そのせいで気色悪いファンが真似た。気に入ってくれた多無橋さんは玩具扱い。頼まれた仕事では指鼠にボコボコにされて危うく指を取られてコレクションにされるとこだった。その直後に初めて存在を知ったばかりの悪魔と遭遇。悪魔の話を聞いたまさにその時、手の中には悪魔が封じられたメモリの入った指輪があった。それをプレゼントされ見てみたら悪魔の悲鳴っていうタイトルの曲が大音量で頭の中で響いた。頭痛で自殺だってしようとしたわ、窒息死するかと。これ全部、九月から十一月だけで起きたのよ、信じられる？夢ならいいのにって思うわ」

一気に始まりからここまでの話をした。

まだ三ヶ月だ。たったそれしか経っていない。たった三ヶ月なのにだ。

「別に裏現実に入ったことを後悔してないですよ、誤解しないで。

あたしが同族殺しになるのは遅かれ早かれ決まってたみたいですから。でも、こんなの、あり得ます？裏現実者はみーんな始めの三ヶ月は奇想天外なんですか？ラトアさん」

「……もっとある」

「もっとある？始めの三ヶ月は四回じゃなく、六回七回って死にかけるんですか？まぁ殺して殺される世界だから死にかけるなんてしょ」

「違う、お前のことだ。知らないところでお前は」

「そう、知らないところであたしの噂は広がってる。頭蓋破壊屋に並ぶ存在だって。本当はただの弟子で人形（おもちゃ）だっていうのに」

ラトアさんの言葉を遮って言いたいことを愚痴って溜め息を溢す。

ラトアさんは何か言いたげだったが口を閉じて視線を落とした。

「だから、バタフライナイフを急所以外に刺しただけで済ませたことを褒めてくださいよ。これからも死にかける日々が来るなんて嫌ですね…あたし殺戮ができればいいんです。あーなんでこんな不運なんだろう…呪われたかな？ラトアさん、幽霊っていますか？」

「……いないと思う」

それは助かった。

いるならばあたしはとっくに呪い殺されているか、はっは。

髪をくしゃくしゃと掻きながら息を吐くラトアさんは口を開いた。

「悪魔のことはジャスタから聞いたんだな？」

「ん、大方は聞いた」

「そうか…。……ジャスタは世界一の悪魔退治屋だ、アイツに殺せない悪魔はいない」

「悪魔って…誰にも殺せるわけじゃないの？」

「悪魔なら吸血鬼を殺せる。悪魔は吸血鬼を造った本人だから…一

対一なら吸血鬼が敗けるだろう。悪魔は煙と同じ身体をしている。取引を持ち掛ける人間のイメージに合わせて姿を変えるんだ」

煙。あの似非神父の例えが漸く解った。掃除機で吸って閉じ込める。ゴーストバスター。

「煙だからと言って触れられないわけではじゃない。しかし人間の中に入った奴を引きづり出すのは簡単には出来ない。簡単なのはその人間ごと殺す、しかないからな」

人間ごと、殺す。一つの手。

「悪魔退治屋はそれができる。引っ張り出せるんだ。引っ張り出したら一人でも殺せる、それがジャスタだ。アイツの天職とも言える。……だが、あの日は…やけに手間取っていたようだったが……何か聞いてないか？」

ラトアさんは、何にも聞いていないようだ。あたしの中に悪魔がいると知っているならきっと会いに来たりしないだのろう。

「特別な悪魔だとは言ってました。…まぁ、沈黙を続ける悪魔なんて珍しいんでしょうけど」

「そうだな……沈黙をして力を蓄えていたのかもしれん。他の悪魔も同じことをして逆転の時を待っている、かもしれないな……」

難しい顔をして考え込む姿は、英国の伯爵みたいで素敵だ。一昔、の。

「何も聞いてないんですか？」

「何も言わない奴なんだ。必要なら嘘だってつく、本当に神父だっ

たのかも疑わしい」

……嘘だと思う。

「奴なんだが。十年何処かで寝ていたくせに未だ起きてまたハウンといる理由が何かあると思ったんだ。…あのパーティーに出るつもりなのかな」

最後は小さく独り言のように呟いた。パーティー？なんだろう。

「ハウン君といるのに理由が必要なんですか？父親代わりなんでしょ」

「ハウンの子守は初めから乗り気じゃなかったんだ。元は……まぁ、いい、この話は。十年前にハウンに悪魔退治を押し付けて土の中で眠った奴だ。間違っても気が向いたからっていう理由じゃない、と思うのが妥当だろ」

何かを言いかけて止めて肩を竦めて正論を言った。育児放棄だ。

「話は終わり？出掛けてもいいかな？」

「……。プリントを作って待っているから無傷で帰ってこいよ」

「指切りしましょう」

「いらん」

そして現在、嘘をつかず無傷のまま目的地に着いたのだが危うくベンチが身体を貫通するとこだった。

「火都ね、火都。そういえば客が来るって言ってた気がする。それがアンタ？狩人？にしては若そうね、中学生？」

「いえ。……年齢的には高校生です。狩人じゃなくて殺し屋」

「へぇ、殺し屋。何て名前？」
「紅色の黒猫」
「じゃあキャット」

凄く略された。海外に行ったらブラットキャットとか呼ばれるんだろうな。

兎無さんに奥の部屋に通された。道具が散乱した白いテーブルに棚しかないこの部屋で武器を作るのだろう。

「あたしの作品を使うんだからそれなりに名前を売らなきゃいけないよ」
「……はぁ。頑張ります」

この人もどうやらあたしを知らないようだ。世界は広い。うんうん、いいことだ。

「ところで、何の武器が欲しいんだい？火都からそれなりに聞いたからあたしんとこに来たんだろ」
「ええ、大方聞いてます。火都の百発百中の秘訣は貴女の作品のおかげだって」
「お世辞が上手いことで」

テーブルに両手をついて早速話題に入る兎無さん。冗談を交えてからあたしはパグ・ナウを白のテーブルに置いた。

「へぇ、パグ・ナウ。んん、悪くないじゃない」
「それを改良してほしいんです。コンパクトにより強度にしてほしいんです」
「注文承りました。百万だ」
「はい」

パグ・ナウの刃を出し入れしている兎無さんに素直に頷いたらギョッとされた。

「アンタ、金持ちのお嬢様なわけ？」

「……いえ、殺し屋です」

「売れない殺し屋が百万用意できんの？」

「売れない殺し屋かどうかはわからないですが……十分にお金はあります、けど」

疑いの目を向けられても事実だ。殺し屋としての名前が売れていないが仕事はしている。名指しの仕事は一つや二つだけ。

それでもベッド下には百万どころじゃない大金が埃を被っている。百万くらい使ってもどうってことない。

「へー、いい金蔓ができた。火都に礼を云わないと」

はは、ぼったくりだけはやめてくれよ。

「二十五万でいい。完成品が気に入らなかったらキャンセルして」

「わかった。前払い？」

「後払いでいいさ。他には？キャット。武器になる爪でも造ってあげようか？」

にやっとからかうように腕を組む。熊の爪だから爪。

「あたしは火都と違って飛び道具はあまり……ナイフくらいですね」

ととりあえず持っているナイフを掌から落としてテーブルに置く。

「はーん、じゃあナイフでも買っていく？いいもんあるよ」

そう言って兎無さんは右側の壁際に行き、壁を反転させた。現れたのはズラリと並んだナイフの数々。
ワオ。スパイみたい。

「これはなんかどう？投げやすいよ」

ケースの中から細長いナイフを取り出した。かと思えばあたしの後ろの壁に投げ付けて突き刺す。
軽く腕を振っただけにしてはよく飛んだ。
「買った」と壁から引き抜く。
「気前がいいねぇ、お客さん」とまた兎無さんはナイフを取り出した。

「逆手で持つのが癖かい？」
「はい、切りつける時には逆手がやりやすいので」
「いつもナイフで？」
「短剣に、カルド」
「カルド？そりゃまた珍しいものばっか使うね。大振りナイフはどうだい？」
「かっくい。買った」
「毎度あり！」

所持金を殆どを使い果たしてナイフを数本買って改良代も先払いして兎無さんと別れた。取りにくるのはきっと、数ヶ月後だから。
家に帰ったらラトアさんは一眠りしていた。テーブルには手作りのプリント。さて、勉強タイムだ。

――ズキン、ズキン。
頭痛がする。
悲鳴が聴こえる。

息が出来ない。
頭が割れる。
――ズキン、ズキン。
ベッドの上で野垂れ回る。
痛い。苦しい。痛い。
耳を押さえても、聴こえる。煩い。頭が破裂しそうだ。
痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

「つーちゃん」

名前を呼ばれて目を開く。

「魘されてたよ、大丈夫？」

白瑠さんが顔を覗く。
気分最悪、大丈夫じゃない。

「うー…頭痛が酷いです」
「すみませぇん、頭痛薬と水頂戴」

額を押さえればすぐに白瑠さんはＣＡを呼んで頼んだ。ＣＡのおねえさんはすぐに頭痛薬と水を持ってきてくれた。
上空を飛ぶ機内。
日本を発ってアメリカに行く途中だ。眠っている間に頭痛が発生してしまい参っている。

「ひゃひゃ、大丈夫？飛行機は初めてじゃないんでしょ」
「最後に乗ったのは十年前ですよ……。別に飛行機に酔ってるわけじゃないです」
「もうちょっとだから耐えてね」

隣の座席に座る白瑠さんはぷにぷにと頬をつついて髪の毛を指に絡ます。
んー、眠っていた方が楽かもしれない。
あたしは毛布を肩までかけて眠ろうとしたら、くいっと髪を引っ張られた。
白瑠さんの肩に頭を乗せる形になる。あーはいはい、こうすればいいんでしょ。
あたしは抵抗せずに白瑠さんの肩に凭れて目を閉じた。
それから一時間で飛行機は着陸した。
アメリカの地に降り立つ。
観光目的ではないので嬉々とした興奮はない。寧ろ頭痛は治ったがへとへとだ。
はぐれないように白瑠さんに手を引かれながら嫌に人が多い空港から出れば、別ルートからアメリカに来たラトアさんが車の中で待っていた。
そのまま、依頼人の元に行くと言う。一日休ませて、と訴えたが却下された。
目的地まで長いから車の中で休め、とのことだ。
旅行は苦手ですぐに体調崩すのにぃー、と愚痴ったあとに後部座席を占拠したあたしは眠った。
雷の音に目を覚ました。朝になったはずなのに外は暗い大嵐。真っ黒な雷雨が土砂降りの雨を降らせ雷を唸らせる。

「一体どこにいくんです？田舎、みたいですが」

高層ビルなんて一つたりとも見当たらない。それどころか家一つも見当たらない草原に見えるのは嵐のせいか。

「あそこだ」

ラトアさんが答える。
フロント硝子の向こうを見てみれば、お城がそびえ立っていた。
否、多分屋敷だろう。お城みたいに大きく見えたのは単に丘の上にあったからだ。
それでも、十分大きな屋敷のよう。
伯爵が居そうだ。一昔、の。

「くれぐれも、無礼な真似は止せよ」
「ラトアさんのお得意様ですか？」
「お得意様というより……お嬢様に気に入られている」

お嬢様？お金持ちのお嬢様？
我儘なお嬢様を想像した。ピンクのドレスに扇子を扇ぎ、オーホホと笑うお嬢様。

「挨拶するべき？」
「オレが話をするから、クラッチャーと黙って立ってろ。先ずクラッチャーを起こせ」

助手席にぐーすか寝ている白瑠さんを起こしている間に車はお屋敷に着いた。
ちょっとラトアさんは不機嫌だ。
立派な門が開いて中に入り停める。駆けて開けられた扉の中に入れば使用人達からタオルを渡された。
それで身体を拭きつつ屋敷を見回す。これまた立派な階段の上にはシャンデリアがあった。
それに見とれていたが、階段の手摺の下にバリアフリーがあることに気付く。

老人でもいるのかと思った。そのバリアフリーで降りてきたのは、車椅子の少女だ。

「ラトアさん」

そう少女は嬉しそうに微笑んでラトアさんの名を呼ぶ。

「ミシリ。具合はどうだ？」

ラトアさんはそう優しげに問う。

嗚呼、彼女が礼のお嬢様か。

「よく来たね、嵐の中大変だったろう。おや？お嬢さんもいるのか、部屋に通して温かいものをお出しなさい」

少女の後から降りてきたスーツの男はおおらかに笑って使用人に指示をした。

屋敷のイメージで主は怖い人かと思ったがそれは嵐のせいだったみたいだ。

「俺、ココア」

「…同じく、お願いします」

白瑠さんは気軽に頼み、あたしは一応礼儀正しく頼んだ。ラトアさんが睨むんだもん。

「ラトアさん、お友達？」

「仕事仲間のクラッチャーとブラットキャットだ」

「ごきげんよう」

……お嬢様がいる！？

気品よく使える人間を初めてみた！

とりあえずあたしは同じく「ごきげんよう」と挨拶を返す。

通された部屋は書斎だ。

注文通り温かいココアを貰い、頂く。ソファにラトアさん、白瑠さん、あたしで座る。書斎の頑丈そうな机に当主である男が座った。

「新顔さんの為に自己紹介をしよう。当主のタウト・シルベスターだ」

「頭蓋破壊屋（スカルクラッチャー）でぇす」

「紅色の黒猫です」

「ベニ…？」

「ブッラディブラックキャット」

順番で白瑠さんに続いて、日本語で名乗ったら首を傾げられた。

そしたら白瑠さんが言い直した。

紅色の黒猫の紅色は、血のこと。だから名乗るときにはブラッディブラックキャットと名乗れと言われた。

血の黒猫です。……嫌だ。

「ああ、聞いたことがある。頭蓋破壊屋は特に、紅色の黒猫も噂は英国にも届いているよ」

届いていやがった。

火都や兎無さんが知らなかったのにこんな遠くの当主が知っている。

海外なら知らない人が多いと思ったのに。

「期待の新人と偉大なクラッチャーがいるならば安心して任せられるね。勿論、ラトア、君もだ」

「失敗は妨害がなければ有り得ないだろう。挨拶を終えたのだから仕事の話をしようか」
「そうだね。簡潔に言おう」

殺しの仕事。標的は間接には仕事の敵。
詳細は、英語だった為あたしの英語力では解釈できない。あとで白瑠さんかラトアさんに訊いてみよう。
否、ラトアさんはミシリア・シルベスターお嬢様に呼び出しを食らっているから、白瑠さんに訊かなくちゃ。
へらへらしてるけど白瑠さんはこれでも留学してたから英語はペラペラ。

「今日は休むといい」

最後にそれだけは聞き取れた。
ラトアさんと別れて、あたしと白瑠さんは執事の案内で部屋に案内された。
なんとも広い客室だ。
クイーンサイズのベッド。衣装棚に高そうな置物がある。

「休める！ひゃっほーい」
「ひゃっほーい！」
「……」

ベッドに飛び込もうとしたら先に白瑠さんが飛び込んだ。
アンタの部屋は隣だろうが。

「えー、つーちゃんと同じ部屋がいいぃ」
「休みたいんです、出てけ」

上目遣いされたが一蹴する。
白瑠さんはしぶしぶゾンビのように這い出るのを止めた。

「一緒に寝る！？」
「寝ない。ラトアさんとあのお嬢様の関係は知ってます？」
「ぶぅー。あのお嬢様を昔救ってから仲良しなんだってぇ。足が悪いってこともあって不死身のラトアにメロメロなんだ。よくあることさ」

ふうん。
命の恩人、吸血鬼か。
なるほど。と欠伸を洩らす。鳴呼疲れた、ベッドに倒れ込み白瑠さんに手を振った。

「つぅばきちゃん。依頼人の家だからって無防備に寝ちゃダメだよぉ？ちゃんと」
「わかってますよ……武器は肌身放さずでしょ」
「男が訪問しても部屋にいれちゃだめだよ！」
「おやすみです」

白瑠さんを追い出して再びベッドに戻る。しなやかで深く沈むのが気持ちいい。
ふぅ、と息を吐く。
雷で部屋がチカチカと光る。雨音に吹き荒れる風の音。嵐の音を聴きつつ眠りについた。
　ギィイイ。
微かに聴こえた錆び付いた音に浅い眠りから引き戻される。
ピシャアと鳴る雷。その光が部屋の壁に窓の人影が映し出す。

「誰だ！？」

起き上がりカルドの先端を向けた。

「あり？日本人仲間だ」

日本語が返ってくる。

窓から、男が一人入ってきた。日本人の顔立ち。ネックウォーマーで髪の毛を上げ、耳には金のピアスを三連付けている。手袋を嵌めていて所持品は腰のポシェットだけのようだ。半ズボンでブーツ。ちゃらけた茶髪メッシュの男の顔に見覚えがあった。

「寝てると思ったのに敏感だな、へへ。でも、叫ばないでくれよ。別にアンタを襲おうって気はない。いや、アンタにその魅力がないって言ってるわけじゃないぜ？アンタ、べっぴんだな。へへ、今夜食事でも……どう！？」

ペラペラと喋り出したかと思えば床を蹴り向かってきた。懐に入られ、拳が打ち込められる。

「っ！」

当たる前にギリギリ避けた。しかし咄嗟過ぎて無理矢理だった為、尻をついて倒れる。

体勢を立て直す暇を与えず彼は拳を振り上げた。

「待って！」とタンマをかけたが容赦なく拳が振り降ろされる。

「那拓蓮真！」

「！？」

ピタリと、拳が止められた。気絶させるつもりだったのか、腹の上

で拳は停止する。

「……貴方の、弟さんの友達です」

「……」

「えっと……貴方は、那拓遊太さんですね？」

「……アンタは？蓮真のお友達ちゃん」

拳を開いて、蓮真君を連想させる顔立ちの那拓遊太はあたしに手を差し出す。その手を掴んで立ち上がった。

「よかった、爽乃さんの方だったらどうしようかと思ったわ。蓮真君から聞いてるわ、自由奔放の家出お兄さん」

「蓮真に裏の友達がいるなんて初めて聞いたけど…蓮真と友達だってのは本当みたいだな」

「初めまして、椿よ」

「オレは遊太」

自己紹介をして握手をする。

「それで、椿。蓮とはどれだけ親しいのかな？」と顔を近付けて那拓遊太は問う。

兄弟揃って同じ癖を持つのか。

「家の道場に入れてもらえるくらいには、親しい方ですよ」

「へぇ！あの蓮が？へへぇー。いつから友達に？」

「先月ですね。メールのやり取りもしてます、証拠をお見せしましょうか？」

「あーいいよ、もう見てる」

ポケットから携帯電話を取ろうとしたが、無い。かと思えば那拓遊太の手の中にあった。

「手癖が悪いようですね…。蓮真君は“末っ子”で登録してます」
「わかる？常に誰かのケイタイを盗らなきゃ落ち着かないんだ」

クスクス笑って那拓遊太はあたしの携帯電話をいじる。
怪盗はスリなんてお手の物らしい。

「この屋敷には盗みに来たんですか？」
「そう。アンタは？ここのお嬢様ともお友達？」
「いえ、殺しの仕事を貰いに来ました」
「へぇ、アンタ殺し屋か、びっくり。殺し屋での通り名は？」
「紅色の黒猫」

携帯電話を投げ渡されて受け取ってから答えたら「紅色の黒猫だって？」と聞き返された。
知っているようだ。
何故異国の地でも知られてるのだろう。たかが五十六人を殺しただけなのに。

「まじで？アンタが？蓮真のダチのアンタが紅色の黒猫？」

何か楽しそうに笑みを浮かべたまま那拓遊太は問う。
そうだけど。そう頷いて思い出す。
しまった。彼は黒の殺戮者の仲間だ。

「へへぇー。こりゃすげえ出逢いだな、すげすげぇ。アンタのこと海外にいながら聞いてたぜ」
「……それだけ？」
「それだけって？生憎詳しくは知らないから褒めちぎれないぜ。黒っちから聞いただけだから、面白い新人だって」

気さくに笑いかける遊太。敵意も何も感じない。
黒っち。それってまさか。

「黒の殺戮者…？」
「そう、黒っち。九月だったかな、仲間に入らないかって会いに来た少しあとに話題に出してたよ、皆に面白そう面白そうって」

黒の殺戮者があたしの話を。
やはり彼が集団のリーダーか。
面白そう、ってますます白瑠さんみたいだ。イメージは白瑠さんが黒髪。それは絶対に嫌だ。
「他には？」とあたしはチャンスを逃さないよう問う。

「それから何か聞いてない？」
「ん、何も聞いてないけど。…あ、最後に連絡とった時に確か日本に行くって言ってたな」

それかしか知らないのか。なら、二人の衝突も知らないだろう。残念だ。やっと詳細がわかると期待が膨らんだのに。

「隣の部屋には白の殺戮者がいるわ」
「え？まじで？」
「黒の殺戮者の仲間だって知ってるから会わない方がいい。仕事なら邪魔しないから済ませて」

その時だ。
女の悲鳴が屋敷中に轟いた。

「お、嵐の中の屋敷に悲鳴。殺人事件発生？」

ちゃかして言う遊太。
殺人事件。
「貴方はここにいて」と一言言ってから部屋を飛び出した。
悲鳴が聴こえた方に駆けてみたら廊下に使用人達が集まっていた。
書斎だ。
使用人を掻き分けて中に入れば、ラトアさんとミシリアを見付ける。
二人の前には、胸から血を出したタウトさんの死体が横たわっていた。

「ふぁあ、なぁに？」

大欠伸して白瑠さんは一番最後にのろのろと駆け付ける。

「……ありゃりゃ。先越されたみたいだねぇ、敵が先手を打ったみたい」

タウトさんの死体を見て白瑠さんは冷静に暢気に分析した。
「いやあ！」とミシリアが震え上がる。当然だ。実の父親が死んでいるのだから。
ラトアさんが目を塞ぐようにミシリアの小さな身体を抱き締める。

「犯人は？まだ屋敷にいるはずでしょ」
「複数だ。その中にいる」

カルドを引き抜いて問えばラトアさんは声を荒げて答えた。
その中。集まった使用人達の中だ。

「動くな。この中に見覚えのない使用人、或いは入ったばかりの使用人は誰です？」

「複数ってことはぁ、んひゃ、楽しそうお、全員殺っちゃう？」
「怯えるでしょ、日本語はわかんないか。その中にいる犯人がいるから知らない奴はいないですか？」

殺戮を始めようとする白瑠さんを止めて使用人に言うが、彼らは怯えて凍り付く。
一人一人の顔を眺めて見極める。複数か。何人か。
ラトアさんはミシリアを抱き締めたまま。においで見付けて欲しいが、手が放せないようだ。
嵐だし、逃げるのは困難だろう。

「白瑠さん。執事さんに言ってください。誰も出れないように車の鍵を…」

使用人を見張りつつも、白瑠さんに頼んだ。ふと、違和感がして目を凝らす。
それは目を疑うもの。
使用人の一人。男だ。
俯いていた男はあたしの視線に気付いて顔を上げた。
記憶が鮮明に蘇る。まともに見たのは一瞬だ。その一瞬で覚えた顔。
一気に心拍数が高まる。哄笑するのは堪えてギッと奥歯を噛み締めた。
その首を今すぐ掻き切りたくってうずうずする。カルドを逆手に持ち、もう片手にナイフを二つ指の間に挟んで――。

「指鼠っ！！」

脚力をバネに奴の目の前に飛び込んだ。
カルドを首を目掛け振り上げたが咄嗟に取り出されたナイフに防が

れた。
使用人達が悲鳴を上げながら避ける。
「……知り合いだっけ？」
一度距離をとった指鼠はそう聞いた。
「あら？あたしのこと覚えてないの、ある意味嬉しい……わね！」
隣にいたメイドを切り裂く。使用人達が悲鳴を上げた。
指鼠から目を放さず、足でメイドが握るナイフを蹴りあげる。
ここの使用人は武装しない。たかが使用人。
ボディーガードではない。だからこのメイドは殺し屋だ。
「なんでアンタがここにいるのかしら？アンタ、日本にいたはずよね。先週まで。…嗚呼！そうか、アジトに警察が押し入ってきたから海外に逃げたのね」
「……お前、誰？」
皮肉に笑ってやれば睨み付けられる。可笑しくて可笑しくてたまらない。
「アンタをこの手で殺せるチャンスをくれて――ありがとさん！！」
返り血を浴びた頬を拭ってから切りつける為に飛び掛かった。
指鼠は後退りをしながらカルドをナイフで防ぐ。
後ろでまた悲鳴が響いた。
まだいる殺し屋と白瑠さんが殺し合いを始めたのか。或いは白瑠さんが殺戮を始めたかもしれない。

どっちでもいい。コイツさえ殺せれば。コイツを！
コイツが元凶！

「あはっ！今度はあたしがボコボコにしてやる！いや、バラバラにしてやる！」
「っ！」

指鼠の左手の甲から血が噴き出す。
ボコボコにされた仕返しにバラバラに引き裂いてやる。
指鼠は後退り、あたしは前進していく。
左の一つの爪と右の二つの爪で鼠をじわじわと追い込む。
鼠をいたぶる猫。
本来の上下関係。
たった一つのナイフで防ごうとする指鼠の服は最早ボロ切れ。
壁に左足を着けて、右足で首を蹴り飛ばし反対の壁に叩き付けた。

「あら？もう終わりかしら。根性ないわね。猫様が爪を出したら逃げちゃうのかしら、鼠ちゃん」

クスクス、と嘲る。
睨み付ける彼が立つのを待ってやろう。いたぶらなきゃ気がすまない。もっともっと、倍返しにしなくちゃ。
その時、ズキッと微かな痛みが頭部に走った。

「椿！」

白瑠さんの声にハッとして振り返る。銃声のない弾丸が腕をかすってよろめく。
銃口を向けた殺し屋は直ぐに白瑠さんが頭蓋骨を粉砕して廊下に脳味噌を撒き散らす。

カチャリ。
あたしの頭に銃口が突き付けられた。

「爪を取れ、仔猫ちゃん」
「……」

歯を噛み締めたが、銃口を突き付けられたからじゃない。クソ男の腕があたしの首に回ってきたからだ。
ナイフとカルドは床に突き刺さった。

「動くなよ、頭蓋破壊屋。アンタを出し抜けたことは自慢させてもらう」
「…んひゃひゃ、好きにするといぃよ。逃してあげるからぁその子返してくれるぅ？」

あたしを人質にしたのはいいことだ。白瑠さんは動かない。見逃すとまで言う。
おいおいそんな約束を勝手にしないでよ、コイツを殺したくて殺したくってたまらないんだ。
あたしは右腕の短剣に手を伸ばそうとする。しかし白瑠さんは首を横に振った。

「仔猫ちゃん、そこの窓を開けろ」
「……アンタのこと殺したい」
「そりゃあ無理だ。おれも仔猫ちゃんを殺したいさ。だから、今度決着をつけようぜ」
「あら？なんで今すぐに決着をつけようとしないのかしら。おっかなぁい頭蓋破壊屋さんは邪魔しないわよ」
「仔猫ちゃんを殺したあとに頭蓋破壊屋に殺される。そうだろ？頭蓋破壊屋の恋人ちゃん」

ぐいっと銃口で小突かれて急かされる。嵐の雨に体当たりされている窓を開けた。

「アンタってなんで…相手の武器を持っているかどうかを知ろうとしないのか教えてよ」

「は？」

「だからのこのこ来た獲物を取り逃がしてコレクションを鼠に食わされ警察が押し入っちゃうのよ」

あたしを掴んだまま窓から脱出しようとする指鼠はそこでやっと気付く。

「お前――――あの時の」

「刑事を――よくも撃ちやがったな」

あたしは指鼠にだけ聴こえるように低く呟いて、右手に掴んだ短剣を振り返ると同時に振った。銃を仕留める。

指鼠は素早く窓辺を蹴り大きく離れた。

実践初使用のナイフを投げ付けたが、嵐の強風に軌道はそれ地面に転がる。

嘲笑うように嵐の中に指鼠は駆けて行ってしまう。追い掛けようと窓に足を乗せたら、首にまた腕が巻き付いて引っ張られた。

「駄目だよ、つーちゃん。殺られちゃう」

「は！？あたしが！？」

「そうだよ。嵐の中で視えない銃弾を浴びるなんて嫌だろ」

「でも！アイツの勝ち逃げじゃないですか！」

「そうさ。負けたのはお嬢様とのお喋りに夢中で殺し屋達に気付かなかったラトアさ」

追跡を阻止する白瑠さんが目を向けるのは、ラトアさんだった。
事実に何も言えないでいる。否定はできない。
ラトアさんは現に、書斎を再び来るまで気付きもしなかったのだから。
血のにおいに敏感のはずの吸血鬼が、血のにおいを放つ殺し屋に気付かなかったのは失態。

「クラッチャー、話がある」

ラトアさんはそう一言だけ言って書斎へと戻る。なんだかつまらなそうに白瑠さんは頭の後ろで腕を組んであとをついていった。
「つーちゃん、先休んでていいよぉ」とそれだけを言い残して。

「……ちっ…」

外に投げたナイフを拾ってから二階に戻って窓を覗けば遠ざかる光が見えた。
車だ。指鼠の乗った車。
せっかくのチャンスがパーだ。

「くそったれ！」

メイドが怯えながら渡したタオルで髪を拭きながら部屋に入るなり服を脱ぎ始める。

「……オレ的にストリップされるのは大歓迎だけど、蓮のダチってのーは今後兄弟関係が気まずくなるから訊く。オレの存在忘れてない？」
「……」

完全にベッドの上で寛ぐ怪盗を忘れていた。

白い部屋の紅

真っ白だった。
何処もかしこも真っ白。無垢な純白。壁も床も天井も電球もカーテンもテラスもベッドも棚もテーブルもソファも。だだっ広一つの部屋は白色一色。
気持ち悪い。酔った。

「あたし、ホテルで泊まります」
「うひゃひゃ、だぁめ」

部屋に入る前にあたしは踵を返したが白瑠さんに襟を掴まれズルズルと部屋に入れられる。
以前幸樹さんにこの部屋があるとは聞いていたが、まさかここに泊まることになろうとは。
アメリカのニューヨーク。
二日車を飛ばして着いたのだが、嫌だ。気がどうにかなりそう。てか気持ち悪い。目が回る。

「ほ、ほら、白瑠さん。ベッドだって一つしかないしあたしはホテルに」
「うひゃ、一緒に寝れるじゃん」

白瑠さんはあたしを引っ張ってベッドにダイブ。二人とも乗れる。
当然だ。キングサイズのベッドなのだから。
「あー疲れた、疲れたぁ。おやすみぃ」とあたしに腕を回し寄り添って眠り始める自由人。あたしも自由になりたい。
白い部屋に白瑠さんと二人きり。なんかこの世に白瑠さんと二人き

りなった気がする。…地獄か。地獄なんだろう。白いくせに地獄！
二人きり。
ラトアさんはあの屋敷に残った。父親を亡くしたミシリアが心配なのだろう。

「仕事を無くしてすまなかった。ここまで連れて来たのにタダ働きを」
「別にいいですよ、お金には困ってませんので」

白瑠さんと話を済ませたラトアさんがあたしの部屋に来て説明をした。

「ミシリアが大事なんですね」
「いや、違う」

冗談で言ったのに真面目に否定される。

「本来ならお前達と屋敷を出るが、タウトが死んだのはオレの失態だからな。その責任がある」
「……償い、ですか。そんなのミシリアに悪いんじゃないですか？」
「彼女なら喜ぶさ。アイツはオレに、吸血鬼に憧れているんだ。足が悪いから、不死身のオレにな。出来ることなら吸血鬼にしてほしいと願っているだろう」

それは無理な願い。
歩けない少女の叶わない願い。
ラトアさんは自嘲の笑みで言った。

「吸血鬼に純愛をくれる人間なんて、いないのかもしれん」

純愛。吸血鬼と人間以前に、人間と人間の純愛が存在するのかも疑わしいものだ。

「指鼠の名を出したのはまずかったな、精々バレないような言い訳をしろ」とラトアさんは皮肉に言って部屋を後にした。

正直、直ぐにでも白瑠さんにそのことを問われると思ったが出発しても白瑠さんは指鼠のことには触れてこなかった。

長い間運転すると聞いたから代わろうかと言ったら、大笑いされた。免許なくても真っ直ぐ走れるわい。

とりあえず、一人で運転させるのは失礼だから起きて話をしようと話題を考えた。

「白瑠さん、純愛についてどう思いますか？」

「定義がわかんない、うひゃひゃひゃっ！」

話題選択ミス。

白瑠さんはケタケタ笑った。この人に純愛について語らせるのは無理難題だ。

「少なくともぉ、お嬢様がラトアに寄せてる想いは純愛なんて綺麗なもんじゃないね」

見据えたように白瑠さんはそう言った。あたしの思考はお見通しなのか、それともラトアさんが同じことを言ったのか。やっぱり話題選択ミス。

白瑠さんはそれ以上何も言わなかった。あたしも頬杖をついたまま窓の外を見つめ話題を探す。

「あ、白瑠さん。“番犬”っていう裏現実者を知っていますか？」

不意に思い出したから訊いてしまったが、これも話題選択ミス。

白瑠さんが誰かを覚えているはずないし、裏現実者の話は墓穴だ。
しかし、白瑠さんはきょとんとした顔であたしを見た。いや……前、前を見て運転してください。

「そりゃあ……知ってるけど」
「知ってるとは意外ですね…」
「つばちゃんが知ってる方が意外だよ。誰から聞いたの？」
「さぁ…藍さんだったかラトアさんだったか……覚えてませんがいると聞きました」

水滴が残る窓を見つめながら答える。本当は那拓遊太から聞いた。
彼は騒動の最中にちゃっかりお目当ての物を盗んでいたのだ。見せてくれたのは宝石の嵌められた短剣だった。
宝石に高い価値はないが、なんでも短剣を使っていた前の持ち主が大物。
それが番犬。
その話をしたあと、蓮真君の話をしてからラトアさんが来る前に屋敷を出ていった。

「番犬、かぁ。懐かしいなぁ。俺が裏に入った後で、忽然と消えちゃったんだよねぇ」
「消えちゃった？」
「そう。あはは、これはしゅーちゃんに聞いてみなよ。番犬は狩人だから」
「秀介君と同じ狩人なんですか」
「そう、しゅーちゃんが狩人の鬼なら、彼は裏現実の番犬。だから番犬。その頃、名を馳せた殺し屋は彼に片っ端から一掃されてたんだ。地上最強の狩人だって噂されてたなぁ」

地上最強の狩人。

裏現実の番犬。
それはとても大物そうだ。
使われた短剣が盗むほどの価値があるのは当然だな。

「消えちゃったってことは、その番犬って」
「うん。死んじゃったんだ」

白瑠さんは笑ったまま運転する。
死んだ。番犬は死んだ。
ではあの剣は遺品か。

「裏現実の番犬が消えちゃったらやりたい放題ですね」
「うひゃひゃ、だから俺が今名前を馳せてるんだよぉ」

番犬が居なくなったあとの大物。それが頭蓋破壊屋の白瑠さん。白の殺戮者。
狙われたら最期。人間の頭を片手で粉砕する。
番犬がいたならば悪目立ちするあたしは直ぐに狩られただろう。

「よかったですね、番犬に遭わなくて」
「んー、そうでもない。俺遭いたかったんだぁ。つーちゃんみたいに俺のこと殺して欲しかったんだ」

意外にも。白瑠さんはその話を口にした。
殺して欲しい。
あたしを殺すことを断った白瑠さんが、そんなことを言うなんて。

「俺もね、最初殺してもらいたかったんだぁ。椿みたいにね。でも、番犬が死んでからねぇそれは諦めちゃった。てか、バカげてるなぁって思い直したんだぁ」

白瑠さんはあたしの眼を見なかった。だけど笑ったまま、あたしに言う。

「だからさ、誰かに殺されたいなんて乞わないで」

「……」

「楽しいことあるから」

結局話はそれっきり。

あたしは寝てしまい、気付いたらニューヨークだった。

そして白の部屋の中だ。

寝返りを打って白瑠さんに背を向ける。

白瑠さんとあたしは似ている。根本的に似ているんだ。

殺戮中毒の殺人鬼。

同じことを思っていた。

いや、どうだろう。死にたい理由は違うかもしれない。

でも思い直した。

バカげてるから。

実際、バカげてるんだろう。自殺願望に他殺願望。

白瑠さんが偽善なことを言う人ならきっとこう言うだろう。

散々殺したのに今更逃げるなんて卑怯だ。十字架を背負い生き続けろ。

……なんてね。

白色から逃げるように、目を閉じた。

真っ暗な夢を見た気がする。

ただ、真っ暗。視界が真っ暗。

目を開けば眩しいくらい真っ白なのに――。

十分休んだ翌日は仕事。元々所持金は多くないために早速依頼を

引き受けて殺しに行った。
ギャングから邪魔者を殺してほしい、とのこと。簡単な仕事だった。
夜道で標的の首を跳ねて終わり。
白瑠さんはその首と引き換えに現金を受け取り、それから他に客はいないかを訊ねた。
翌日はその客の依頼で殺し。ビルを停電させて暗闇を駆けてボディーガードを切りつける。海外だけあって武器所持は当然で発砲してきた。困ったのはその武器の数。銃の弾の数は勿論、銃本体を何丁も持っている。マシンガンじゃないだけましか。
真っ赤な血を見たあとに白い部屋は気が狂いそうだった。
白に赤の残像が映る。
気持ち悪い。

「あの、白瑠さん。この部屋嫌いなんですけど」
あたしはハッキリ言ってみた。
「んひゃあ？どうして？」
あたしが焼いたステーキを頬張りながら白瑠さんは首を傾げる。
「白一色だからです」
「赤一色ならいいの？」
「いや、それはそれで嫌です」
「じゃあ何一色ならいいのぉ？」
「先ず一色にする意味がわかりません」
「何言ってるのつーちゃん。他の色に浮気ばっかしちゃだめだよ！一途が一番！」
……あたしが折れることにした。

一途にも程がある。
白一色の部屋を遠い目で見た。

「椿ちゃん色にしてもいいよ？ここで殺戮しちゃえば？」
「結構です」

さらっと白瑠さんが言う。ここで人を殺せばさぞ真っ赤になるだろうが、そんな部屋で寝てられない。
よくもまぁこんなに真っ白にできたものだ。バスルームだってキッチンだって真っ白。無意味に指先で撫でてみた。

「昨日は二日連続で仕事をやりましたが、次はいつやるんです？」
「んー。どうしよっかなぁ、俺に仕事入ってるけどね、これラトアとやる予定だったんだよねぇ」

モグモグと肉を口の中で噛む白瑠さんはつまらなそうに呟く。
ラトアさんとやる予定。
つまりあたしと二人きりはできないということ。
誰かしら、サポートが必要。あたしのサポート。

「白瑠さん……あたしと二人で大仕事はする気ないんですか？」
「んん？やだなぁそんな睨んで。そりゃあつーちゃんにはまだ早いお仕事だもん。日本と違って狩人が多く標的をマークするからねぇ、実力だってつばちゃんより強い。それに当たったらまずいっしょー、前と違って幸樹がいないんだ」

前とは弥太部矢都に当たった大仕事で怪我をしたこと。幸樹さんがいなければやはり、死んでいただろう。

「あたしがまた下手を踏むと思っているんですね…」

「んー」
「あたしが誰かに殺られると思っているんですね…」
「んー……」
「精々逃げ惑う雑魚を殺してればいいんですよね…」
「……」
今度は白瑠さんが折れた。
「しょーがないなぁー。じゃあ一回だけ大仕事やろっか」
椅子の上で膝を抱えたあたしの頭を両手でくしゃくしゃ撫でた。もう触られることに慣れたから彼の手が人間の頭蓋骨を破壊できようが怖くない。
密かにガッツポーズ。
しかし一つ問題がある。
彼が標的についての情報収集が疎かなこと。
白瑠さんは一人で標的を障害物があろうとそれごと粉砕する頭蓋破壊屋。
だから情報収集するということはしない。
それをサポートするのは幸樹さんと藍さんだった。
情報は時には武器になる。ないよりはまし。
痛い目見るのは決まってあたしだ。
しかし今回はそれなりに情報が在った。依頼者提供。
武器を売買する組織の親玉が今回の標的。なんでも依頼人を裏切ったとか。
売買するだけあって組織一同は武器を所持してそれなりに扱いを心得ている。
標的に辿り着くまでが困難だ。武装集団推定五十人の中に飛び込む。
「俺が引き付けるからつばちゃんターゲッド殺って」

「……逆にしません？貴方がターゲッド、あたしがその他を引き受ける」
「うひゃ！？つばちゃん大胆！だめだめぇーひゃひゃ俺が囮でつばちゃんが本命ぇ！」
笑って白瑠さんはあたしを押し倒した。ばたんとベッドに倒され、腹の上に乗られる。
「いや、確実に遂行するなら白瑠さんが本命がいいでしょ」
「ひゃひゃ、確実に遂行するなら椿ちゃんが本命でしょお」
「白瑠さんですよ！」
「椿ちゃんだよ！」
「あたしがちゃんと引き付けられないと思ってるんですね！？」
「違うよ！俺の方が引き付けられるからだよ！」
「同じじゃん！！」
あたしは足をばたつかせて暴れながら反論し白瑠さんはあたしの頬をつつきながらも宥める。
口論の末に、じゃんけんで決めることになった。
あたしはチョキ。白瑠さんはパー。
あたしの勝ち。囮はあたしが引き受けることになった。
「まずかったら絶対に逃げるんだよ！これ師匠命令だからね！」
「了解です、師匠」
白瑠さんは最後まで口を尖らせていたが仕事決行時間になって諦めた。
あたしは堂々と正面、白瑠さんは裏口から侵入。
「すみません。ここにチャックっているかしら？」

手動のドアを押して中に入れば、三つのテーブルを囲って男達が博打をしていた。横にはビリヤードをしている男が三人。どいつも煙草と酒を持っている。
そして拳銃がちらほらと見えた。
奥の方にドアが在る。その奥にも居そうだ。

「ははっ、お嬢ちゃん。チャックは三人いるぜ？」

一番近くにいた男が下品に笑いかける。チャックという名の男が三人手をあげた。
全員があたしを見る。
紅一点。紅いコートに赤いミニのタイトスカートに網タイツにヒールで若い女ってだけでにやつくのだから楽勝だ。
右のテーブルに六人、真ん中が七人、左が九人。二十二人。計二十五人か。
少なくともあと半分はドアの向こう。
さて。おっ始めるとするか。

「ハーイ、チャック。死んで頂戴」

あたしは笑顔で手をあげて近付いたチャックにナイフを投げつけた。よく飛び深々と刺さる。ん、いいナイフだ。
一同が現状を理解する前にカルドを引き抜き、右のテーブルに乗って円を描くように奴等の首を切った。
直ぐに他の男達が銃を引き抜いた。テーブルを足で倒し、まだ息のある男一人を盾にする。
バキュンバキュン！
忽ち煙草の臭いが充満した部屋に火薬のにおいが充満して銃声が響く。

あたしは盾にする男が持つ銃を引き抜いて撃ち返す。
あと十人。と、ここで銃声を聞き付け、男十数名がマシンガンを構えてやってきた。
テーブルを盾に死体の男二人からマシンガンと銃を奪い、マシンガンを持つ男を撃つ。
マシンガンは大勢相手に有効だ。
銃を捨ててパグ・ナウの刃を出して盾から飛び出す。弾丸を避けて首を狙って切り刻む。
五人の返り血を浴びれば数人が奥のドアへと逃げ込んだ。
白瑠さんは大丈夫だろうか。
大丈夫だろう。
しかし囮をしっかりやれていないと文句を言われてしまうからあたしは追った。
銃声がする。廊下を渡り一つの部屋に行き着く。監視カメラの映像が映し出されたテレビが並んだ部屋。
こうゆうのが在ったら壊せとアドバイスをもらっていたから切り裂いて壊す。
奥のドアはまた廊下。
死体が一つ、二つ、三つと転がっていた。
扉の前で男達が殺しあっているのを見付ける。
一人は白瑠さんだ。
白瑠さんが一人を鷲掴みにして壁に叩き付けている隙に、一人の男が銃口を向けていた。
白瑠さんはそれに気付いたが遅い。
――――ガウン。
倒れた。白瑠さんではなく、男の方が倒れた。
あたしが銃で頭を撃ち抜いた。
撃ち抜いたのが意外だったのか目を丸める白瑠さん。それは刹那だけで掴んだ頭を粉砕する。西瓜のように弾けて脳味噌が散らばった。

「仕事かんりょー」
「その人、無傷じゃないですか」
「や、やめてくれ！頼む！見逃してくれ！助けて！」

白瑠さんに蹴られたのか鼻が折れている男がガクガク震えて英語で命乞いをする。
よく見れば最初にあたしに話し掛けた男ではないか。

「ん！つばちゃんいる？」
「いりません、あたし十分殺しましたから」
「ひゃひゃ、じゃあ見逃してあーげぇる。俺達のこと忘れないでぇね！頭蓋破壊屋と紅色の黒猫をよろしくぅ」

白瑠さんは気まぐれに殺さず名乗ってから踵を返す。帰りは堂々と正面から出るらしい。
名乗る意味があるのだろうか、あたしは未だガクガクと震えた男を見下ろしてから後を追った。

「つーちゃんつーちゃん！つばちゃん！起きないと犯しちゃうよ！」

熟睡したばかりなのにバッと起き上がったあたしをほめてほしい。
ベッドの上で飛び跳ねる白瑠さん。朝からご機嫌だなぁ。
携帯電話で確認するともうお昼だ。

「なんです？白瑠さん…」
「着替えて着替えて！お出掛けだよん！」
「はぁ？…さっきまで仕事やってたのに…休ませてください」
「犯すよ」
「……」

致し方なく布団から這い出る。
浴室で着替えながら思い出す。
そういえば仕事以外で街に出るのは初めてた。食用は仕事のついでだったから。
白瑠さんと二人で出掛けるのも久しぶりだ。あの調子は仕事以外のお出掛けに決まってる。
そういえばショッピングしようとか何回か話し掛けてたっけ。まともに相手してなかったから覚えてないけど。
　着替えるなり大金を持って白い部屋を出た。
賑わうニューヨークの街を白瑠さんに手を引かれて歩いていく。

「どこ行くんです？」
「ショッピングしに行くんだよぉ」
「はぁ、何をです？」
「つばちゃんの服」

あたしは着せ替え人形か。
手を振りほどこうとしたが無理だった。断念。
人混みを抜けて一軒の店に入る。若い女の子向けのブランド店。
ブランドとか興味ないんだけどなぁ……。
お決まりになったあたしの服は白瑠さんの趣味でどんどん着せては購入していく。
今日はこれが続くのを覚悟した方がいいらしい。あたしは溜め息を吐いて渡された服を着る。
　四、五店回って行けば白瑠さんが「ホットドッグ食べよう」と言い出した。
おぉ、ニューヨーク本場のホットドッグだ。

「つーちゃん何個食べる？」

「一個」
「ホットドッグ十一個ちょーだい！」

十個食うのかよ。
地元もびっくり。白瑠さんはあっという間に平らげた。
やっぱり頭蓋骨を粉砕するエネルギーは食べ物に在るんだね。なんて思いつつもニューヨークの街を見上げた。
都会といった感じ。白瑠さんのバルコニーから見ても夜の街は都会の目映さを放つ。
車の走る音にクラクションが煩いのもやっぱり都会らしい。

「ほら、つばちゃん。次行くよぉ」
「え、まだ行くんですか！？」

やっと自分の分を食べ終えたら手を引かれて、次はクレープ屋に向かった。
白瑠さんは三種類のクレープとソフトクリームを平らげやがる。この人、胃袋どうなってやがるんだろう。
あたしは食べきれず、残りは白瑠さんが一口で食べてしまった。
甘いものが好きだなぁこの人。

「ねー、つぅちゃん。夕御飯なに食べたい？」
「白瑠さんは何か食べたいものありますか？」
「つ・ば・き」
「あたしはチーズバーガーが食べたいですね。チーズバーガーにしましょう」
「それならあっちに美味しいバーガーショップあるよぉ」

気のせいだろうか。
ニューヨークに来てからやけにそのネタを出しているような。実は

思ったよりあたくしの操ピンチじゃね？だいたい、白瑠さんと二人きりって…。
でも毎晩同じベッドで寝てるけど手は出してないんだよね。
つか最後に犯されかけたのって随分前だし、それに飽きたのかもしれない。やったね！でも気は抜かないぞ！
　日が沈んでから、白瑠さんが気に入っているハンバーガーショップで夕食を摂った。

「んー！このチーズバーガー美味しい！」
「だしょだしょ！？美味いっしょ！」

テンション高い二名。
肉がジューシーでいい感じに溶けているチーズがもう最高に美味なチーズバーガー。
興奮してテーブルをバタバタ叩く。
白瑠さんはもう最後の一個目を食べ始めている。美味い…。アメリカ最高…。でも太らないように自重しなきゃ。
ついでに購入したポテトフライも食べ終えて食事の余韻に浸りながらコーラをストローで飲んだ。
何気なく隣にある硝子の向こうに目を向けた。先程から目を向けて遊歩道を行き交う人々を見ていたのだが、一人突っ立ってガン見した人間と目が合う。
　ゴボッ。思わず吹き出して噎せた。
それでも白瑠さんと硝子の向こうの彼はポッカーンと見つめあう。
硝子の向こうの彼なんて口をあんぐり開けている。

「あひゃひゃ、しゅーちゃんだぁ。神出鬼没ひゃひゃ」

白瑠さんはそう指差しながらあたしに笑いかけた。

「てんめぇえ!!頭蓋破壊屋!!」

硝子越しに秀介が怒鳴るのが聴こえるような聴こえないような。
なんでこの子、ニューヨークに居るんだろうか。
あたしは唖然としてしまった。神出鬼没にも程がある。
行く先々で出会うなんて。多分彼はこれを運命の赤い糸が巡り合わせているんだ!とかなんとか言うのだろう。

「つーちゃん、にっげろぉ」
「えっ!?」

手を掴んだかと思えば白瑠さんはそう言い出して店の裏口から逃走。
荷物を片手に、もう片手であたしの手を引いて走る走る。
そのまま家へと帰宅。
あたしは満腹のまま全力疾走でへばった。

「あひゃひゃ、まさかしゅーくんがいるなんてびっくりだねぇ!もしかしてつーちゃんが呼んだの?」
「呼びませんよ…はぁはぁ…腹痛っ」

白瑠さんは平然と楽しげに笑うがあたしはそんな余裕もなく玄関で沈む。喘息起こしそう。

「仕事でニューヨークに来たんですかね?」
「さぁ、藍くんに聞いてみたらどう?」
「あーじゃあ幸樹さんに電話してから聞いてみます」

定期的に幸樹さんに電話をする約束をしていたから、先ずは幸樹さんに電話をしたがまだ仕事から帰ってきていないらしく留守電。
だから直ぐに藍さんに電話をした。

「椿お嬢！ぐふふ！愛のコールだね！」
「ええ、憎しみを込めて藍さんにコールしました」
「愛と藍をかけたんだね！…っては！？憎しみ！？」
「狩人の鬼と会いました。彼、こちらで仕事をしてるんですか？」

挨拶もほどほどに早速情報を求めた。ちょっと待ってと藍さんは間をあける。パソコンで情報収集しているようだ。

「ん、そんな噂はないよー。まじで？すげーな。ぐふっ、つーお嬢と白くんの情報なら二時間前に届いたよ。紅色の黒猫と頭蓋破壊屋が武器売人を壊滅させたんだろー？ぐふふ」

秀介の情報はなかったが、嫌な情報を聞かせられた。
依頼人、明らかにお喋りそうだったもんな。
藍さんに届いているなら、秀介も知っているのかもしれない。
狩りに来たのだろうか。

「……」

秀介の第一声が、頭蓋破壊屋だった。
あたしと目を合わせていたのに、眼中に入れないように白瑠さんを睨んでいた。
最後に交わした言葉で幻滅したのだろうか。
嫌いになったのだろうか。

「あれ？つーお嬢？」
「はい。なんでしょう」
「リアクションしてくれないと困るんだけど……ほら、電話だし」
「はぁ、つまらなかったものにリアクションなんてできないですけ

ど」
「傷付く！」

用は済んだので会話も程ほどに電話を終える。
白瑠さんはお酒を白いテーブルに用意して、あたしを待っていた。

「藍さんは情報を持ってませんでした。昨日やった仕事は噂になってるようですけど」
「だって、俺とつーちゃんの名前を大々的に出したもん」

わざとだったようだ。
そりゃあ噂になるだろう。
あの武器売人の客は裏現実者らしいし、あたしと白瑠さんなのだから。
今、裏現実で話題を横取りしているのは白瑠さんにあたし、そして黒の殺戮者率いる集団。
黒の殺戮者から逃げるようにここに来たのに名前を馳せていいのだろうか。
白瑠さんは心配してないのかあたしにお酒を差し出す。

「かんぱーい！」
「…乾杯」

ご機嫌だな、この人。
どうしてそんなに機嫌がいいのかを訊いてみれば。

「うへぇ、つばちゃんが助けてぇくれたぁから！」

満面の笑みを浮かべて白瑠さんは缶ビールを平らげていく。買い置きしておいたのに、もうなくにりそうだ。

「何のことですか?」とあたしは首を傾げる。
「とぼけちゃってん!」と白瑠さんが小突く。もう酔いが回ったのだろうか。三時間はシラフに飲み続ける人なのに。
「俺がぁ撃たれそうだったのを…バンっ!…て撃ったじゃん」
「ああ、あれのことですか」
あたしはカクテルをマイペースに飲んでいく。白瑠さんは水の様に飲んでいくのだが、さっきの疾走で喉が渇いたのだろうか。
「それは当然じゃないですか。あたしは何度も助けてもらっていますし…それにあれはあたしが引き付けなきゃいけなかったから」
「んふっふふ」
「な……なんですか…?」
やっぱり酔いが回ってしまったようだ。赤らめた頬にとろんとした目で笑いながら見上げてくる。
不適に笑いを洩らしてあたしの太ももに両手を置いて顔を近付けた。
「らりゃりゃ、にゃんひゃ、ふにゃふにゃするぅ」
「酔ってるんですよ…それ」
「あひゃひゃ!飲み過ぎた!」
「はぁ……寝ます?」
「わおっ!椿からお誘い!」
「違います!ぎゃあ!?」
酔っ払いが抱き付いてきた。思いっきり胸に。
二人で飲むんじゃなかった!
「んふぅ、つばちゃんとこの部屋にいるのが……うひゃ幸せ!」

「は、はぁ…さいですか」

どんな幸せだよ。意味わからん。

とりあえずしがみついたままの白瑠さんをベッドに運ぼう。……どうやって？

細身だけど長身で体重あるぞ、この人。

「椿ぃ、ちゅー、しよ」

「は？」

――――――ちゅ。

何も言ってもいないのに、顔を向けた瞬間に胸に耳を当てるように抱きついていた白瑠さんから唇にフレンチキスをされた。

不意打ち。

……あ、あれ……？

な、なんか……あれれ。

フレンチキスなのに、徐々に頭に熱が。

ぎゅう、と抱き付いてくる白瑠さん。白瑠さん相手なのに胸がキュンとしてる。

あ、あれ。なんだ、これ。

なんかほのぼのとした感じ。

う、やばい……。なんかあたしまで酔ってきたみたいだ。

どうしてだか、幸せを感じている。酔ってるみたい。錯覚だ錯覚。

「あぁれ？つばぁき、顔真っ赤にしちゃってかぁわぁいぃ。ちゅーは初めてじゃないんでしょ？しゅーちゃんともしたんでぇしょ？うひゃ、うぶだぁねぇ」

「わっ、ちょ、わわっ！」

頬擦りしていた白瑠さんがまた顔を上げて、またキスをしようとし

てきた。なんとか止めたが、ぶちゅーとされる。彼に抵抗なんて効かないのだ。
夢心地の白瑠さんがあたしの唇に唇を押し付ける。
何かを食べてるつもりなのがもぐもぐと唇を動かしていく。
両手でがっちりとあたしの頭を固定して、とろんとした目の白瑠さんから笑みが消えた。

「……」

呆けたような表情をしたかと思えばまた唇を重ねて舌をねじ込む。
生暖かい唇に舌。
本当にヤバい。
白瑠さんが相手だっていうのが妙な気分に陥る。胸キュンどころじゃない。変過ぎる。な、なんだこれ。
「ふっ」と熱い息を洩らした瞬間に腕を掴まれた。
痛いと言う暇さえなく噛み付くようなキスをされる。いっきに炎が燃え上がったかのように、白瑠さんの行動が激しくなった。
え、ちょ、白瑠さん!?
ガン、とテーブルにぶつかり飲みかけの酒が零れた。それでも白瑠さんは止めない。
太股を掴み開くように上げて身体を密着してそのテーブルの上にあたしを押し倒した。その合間にもキスは止まず、熱い吐息が交わる。
押し退けるがびくともしない。あらゆる抵抗をしたが何も効かない。
ぐうんっ。といきなり担がれた。

「ハァ、はく、るさっ……ん!?」

いきなりどうしたんだ。担ぐより以前に酔って変な行動しているが、これ以上変な行動をしてほしくない。
そう思った矢先にベッドに落とされた。

……ベッド？ササーと血の気が引く。これまじでヤバい。

「白瑠さん！しっかりし」

てください。そう言い終わる前に、押し倒された。

そして行為の続きが実行。

デニムを呆気なく脱がされ、シャツの中に手が侵入した。白瑠さんはキスをしながらブラジャーを外す。

「ハァ…ハァ……はく、るさん…あぁっ……」

唇は解放されたが解放したら甘い声が恥ずかしく洩れる。白瑠さんは首にキスするのに夢中だ。

ざらついた温かい舌が傷痕をなぞっていく。

そんな最中にも白瑠さんの手は動いて愛撫する。

――――しーん。

不意にだった。

何故か静かになった。

濡れた首に息が吹きかかる。シャツの中に手は入ったまま。

「すぴー…」と聴こえる寝息。

落ちた…！！

あたしは白瑠さんを押し退けてベッドの端で胸を押さえた。

どどどどどどどど。と弾く心臓。本当にや、ヤられるかと思った！服脱がされた！

心臓がなかなか落ち着かない。

熱くなった身体が冷めそうにない。完璧に酔いが回ったのかも。

裸にされるのも時間の問題だったのに、まさか寝るなんて。なんて人なんだこの人！それでも男か！？……あれ？まじで酔いが回ったみたい。

いや、現実問題、これが他の女の人なら確実に怒って帰っちゃうだ

ろう。あたしは怒る気力がないし帰る場所もない。
長い溜め息をついて、ベッドから降りる。零れたお酒を拭き取ってごみ袋に缶を放り投げた。
片付けた頃に電話が鳴る。幸樹さんだ。仕事が終わったのかな。
白瑠さんが起きないようコートを羽織ってバルコニーに出た。

「…お仕事中ですか？」
「え？いえ」
「外にいるみたいですが」
「ああ、バルコニーにいるんです」
「寒くないんですか？寒いのは苦手でしょう」
「ええ、寒いですが……」

下履いてないから尚更。
座り込んでコートでくるむ。中で電話したら酔っ払いが起きるじゃないか。何か言い訳を言い訳…。

「星を見てるんです！」
「夜景じゃなく？」

街が明るすぎて星が見えなかった…。

「白瑠さんが酔っ払って…今寝てるんです」
「何故また嘘をついたんですか？……何かあったんですね」

ギクリ。

「な、なにかってなんです！？」

思いっきり裏返った。失敗。

電話の向こうで幸樹さんが沈黙したあと溜め息をついた。

「暫く二人になるからそうなるだろうと予測していましたが……一週間とは予想外ですね」

「あの。何の話ですか」

「え？椿さんが白瑠に犯される話です」

「未遂ですから」

「ああ、そうなんですか」

なーんだ、とははと笑う幸樹さん。なんだって。ちょっと！予測してたならなんで二人で行かせたのさ！？それでもアンタお兄ちゃん！？

「じゃあヤっちゃったら報告してくださいね」

「なんでヤっちゃったら前提なんですか！？その為の定期連絡なんですか！？」

「冗談ですよ。調子はどうですか？」

やっと悪ふざけから解放された。

とりあえず今週やった仕事と昨日やった仕事、それから秀介と会ったことについてを話す。

お疲れ様です、と相槌を打っていた幸樹さんだったが。

「秀介……くんですか」

と何か深刻そうに呟いた。

「どうかしたんですか？」

「……椿さん。念のため確認しますが、貴女は秀介君が好きですか？」

「……いきなりなんですか。何度も好きじゃないと言ったじゃないですか」

あっけらかん。

何度も何度も恋人否定したのに今更深刻に訊くことじゃないだろ！

「あ、そうでしたね。キス騒動で気でも変わったのかもなんて思ってしまいましてね。それならいいんです。彼にちゃんと断ってくださいね。多分その内白瑠が相手するでしょうから」

あくまで軽く幸樹さんは笑って言った。距離が離れてるからって他人事なんだ。…酷い。

「あまり外食をせずに家で作るように。貴女が作るなら白瑠は食べるんですから、野菜一色にしたらどうですか？ふふ」

「それは流石に文句言うでしょ……。幸樹さんの方はどんな調子ですか？」

「私ですか？私は椿がいなくて酒が喉も通らないんですよ…」

「いや、いいですからそんな演技…って酒かよ！」

「寂しいですよ。家に花がないと物寂しいですから」

あたしのツッコミに満足したのかクスクス笑ってから本音を言った。

花――椿の花。

「だからって家や車に女を連れ込んでマーキングさせないでくださいよ」

「おやおや、仕方ありませんね。私は貴女だけを愛していると何度言えばわかるんですか？」

「言葉だけなんて信用できません。女を連れ込まないと約束してください」

「おや。ではその可愛い唇に口付けをして…身体が信用するように愛して、誓いましょうか？」
「…っ！やめてください！！」

今回はノリで乗ったら、色っぽい囁き声で耳を犯された。耳レイプ！耳が弱いのを知ってこの人は！
白瑠さんも幸樹さんも！男ってやつはコノヤロー！！
満足したらしく電話は切られて、あたしは暖かい部屋の中に戻れた。囁き声のせいで顔は熱いが足が冷え冷えだ。
寝巻きに着替えて温かい布団で寝ようかと思ったのだが、ぐーすかと寝てる白瑠さんを見下して考え込む。
寄り添って寝るとあったかいが、酔っ払いだしな…。
あたしは自分を守るためにソファで寝ることを決意。白瑠さんの毛布を奪い、代わりにあたしの紅いコートをかけてやった。
あたしは冷たいのがお似合いなのだ。
毛布にくるまってソファに横になる。
目線の先には白瑠さんの背中。
ちょっと笑った。
白い部屋の中で白瑠さんが紅いコートを被っている。可笑しくて吹き出して笑った。

二日後。
あたしは一人ベッドの上で時間をもて余していた。
酔っ払った記憶は白瑠さんにはなかったらしく、平然に朝食を摂ったのであたしはなかったことにすることにした。絶対他の女だったら白瑠さんはフラれてる。
その日はだらだらと過ごして、今日「ちょっと出掛けてくる」と言って白瑠さんは部屋を出ていった。
多分仕事を取りにいったんだろうとあたしは帰りを大人しく待ったのだ。

買った雑誌で吸血鬼映画をチェックしていればもう夜。
そうすれば白瑠さんから電話がきた。

「つーちゃあん。今日、仕事する予定だったんだけどぉ、しゅーちゃんと遊ぶことになっちゃった」

幸樹さんの予測通り。白瑠さんは秀介の相手をする気になったらしい。仕事より遊びか。
なっちゃった、って白々しい。

「だからつばちゃん、一人で殺ってきてぇ」

……へ？

「え、今、なんて？」
「つばちゃん、一人でお仕事殺ってきてって言ったんだよん！」
「え？い、いいんですか？」
「んっ！つばちゃんならもう大丈夫だぁかぁら！それにちょーう簡単な仕事だから行ってらっしゃあい」

驚きのあまり携帯電話を見る。間違いなく白瑠さんからの電話だ。
夢じゃない。
仕事をもらう場所を教えてもらった。

「はい、じゃあ……いってきます」
「ひゃひゃ、いってらっしゃい。怪我しないよぉにねぇ？ばいひゃー」
「クラッチャーっ！！」

電話が切れる前に秀介の声が聴こえた。間違いなく本物の白瑠さん

だ。
まさかこんなに早く白瑠さんが一人で仕事をしていいと言ってくれるなんて。
そんなに大仕事で助けたことを評価してくれたのか。上機嫌で酒が進んでいたもんな…。
恐らく至極簡単な仕事なんだろうがしっかりと殺っておこう。
あたしは直ぐに着替えて、十全で出掛けた。
　空き地に囲まれた古い小屋のような建物を見付けるのは容易かった。ここが目的地。
こんな建物を持っている人間は一体誰だろう。ニューヨークのど真ん中で、変なの。
いや、この場所なら殺し屋と会っているなんて思われないのかな。
どうでもいいから仕事をもらおうとドアノブを捻って中に入った。

「誰だ？」

入るなり、こめかみにショットガンの銃口を突き付けられた。

白い部屋の紅（後書き）

次回、紅色の黒猫死す！？

「人に名前を訊くなら自分から名乗りなさい」

あたしは冷たく吐き捨てた。ショットガンを持った男は気に入らなさそうにフンと鼻を鳴らして降ろす。

「アンタ―も（、）殺し屋か？」

部屋の隅の棚に腰掛けた男が問う。じゃらじゃらと耳に目立つピアスをつけ、眼帯をしているブラウンの髪をオールバックにした男。

「貴方も？」

「ここにいる全員が殺し屋だ」

彼は周りを見回した。

小さな部屋の中心に置かれた誇りを被ったテーブルに三人の男がついている。ブラウンの男と逆の壁には寄りかかって立っている男が一人。ショットガンを持つ男とは逆の隣にハットを被った男がソファを独占して横たわっていた。

全員が殺し屋らしい。

「…仕事があるって聞いたけど」

「皆そうさ。だから殺し屋が来たんだろ」

テーブルの右の椅子に座った金髪の男が言う。腰に2丁拳銃が見えた。

「依頼人は?」
「見ての通り、依頼人待ちだ。しかし殺し屋がこうも多いと収入が減る。小娘は帰れ」

ショットガンの男が吐き捨ててテーブルにつく男達が下品に笑った。見知らぬ殺し屋と手を組む仕事なのか?それは仲間割れのリスクが高いはず。そんな仕事を一人でやれと白瑠さんは言うのか?だったらアンタ鬼師匠だ。

誰かがあたしのお尻に触れた。あたしは直ぐにパグ・ナウの刃を出して触れてきたソファの男の顔に突きつける。

「おっと、おっかないお嬢さんだ」
「ヒュー。手を出したら切り刻まれちまうぜ」

ソファの男は降参の意味を込めて両手を上げる。左の椅子に座るボトルを飲む男がケタケタ笑った。

「これは面白い。殺されるなら可愛い殺し屋さんに殺されたいもんだね」
「なら殺してもらえ。おい、アンタ。殺してほしいとさ、幾らで殺してやるんだ?」

ソファの男のあとに奥の椅子に座る一見若そうな男があたしに話し掛ける。殺し屋なのにエロおやじの集まりみたいじゃないか。まさか白瑠さんは他の殺し屋に会わせる為にここにくるように言ったのだろうか。それなら帰りたい。
あたしは携帯電話を開いたが、圏外だ。
「ちっ…最悪」と日本語で洩らす。

「お前……日本人か」

反応したのは大人しい壁際にいる二人だった。壁に寄り掛かる口を開いた男は長身だが、日本人のようだ。

ブラウンの男は単に日本語が喋れるだけだと勝手に解釈しよう。

「貴方もそうみたいね」とあたしは彼が握っている日本刀を見た。

殺しの武器は日本刀か。

「侍だな。おい、アンタどうする？ここにいたらここにいるオッサン達に笑いのネタにされるだけだぜ」

ブラウンの男も日本語で話し掛けてきた。

テーブルの男達には通じていないから笑って答える。

「ウザくなったら殺すまでよ」

面白かったのか二人は笑った。

「それにしても…街中で圏外ってなんなの？」

「この建物が鉄で出来てるからじゃないのか」

日本刀の男は英語で答えて壁を叩いた。鉄を叩く音。ペンキで塗られているから気付かなかったが全体的に鉄のようだ。見た目より頑丈、ということか。タイルの天井もまた鉄。あたしの後ろのドアも鉄だ。

ドアノブを捻って押した。

しかし、ビクともしない。あれ、可笑しいな。

あたしは何度か押したが開かない。

見かねたのかショットガンの男が貸せ！と乱暴にあたしを押し退けて開けようとしたがやはり開かない。

「おい！どうなってやがる！開かねーぞ！？」

体当たりするが鉄のドアはビクともしなかった。部屋の連中はざわめき出す。

「閉じ込められたのか？」と誰かが言う。

「どうなってやがる？」と椅子に座る奴らが立ち上がる。

「これは――――狩人の罠じゃないか？」

日本刀の男が言った。

狩人。殺し屋を狩る者。

全員が目を丸める中、ソファの男が口を開く。

「聞いたことがある…。ある狩人が殺しの仕事と称して殺し屋を狩るってさ。――――ここは罠」

狩人の――――罠。

「冗談じゃねぇ！！今ニューヨークにはポセイドンと“ガトリング”がいるから小さい仕事で遭わねぇようにしたっていうのに！！」

奥の男が声を上げた。

ポセイドン、は秀介のこと。もう一人も知っている。ある程度名の知れた裏現実者の名前を教えてもらっていた。

狩人。ガトリング。マシンガンをぶっぱなす危ない女だと聞いている。

これは彼女の罠なのか？

まずいな。怪我せずに帰れるだろうか。

「オレは狩人に目をつけられるほど名前を売ってない！」
「こ、この中に狩人のブラックリストに乗ってるやつはいるのか？ああ！？」
一番笑っていた三人が一番動揺して焦り始めた。
「名乗れ、名乗れよ！」
2丁拳銃を取り出して男は名乗るように要求する。
「私はジェームス。通り名はアイスピック。アイスピックって目を潰すからそう呼ばれるようになったのさ」
「き、聞いたことあるぞ！」
「そうゆう君は…シルバーの2丁拳銃のガンマンだろう？確かマフィアの裏切り者を暗殺したって聞いたさ」
「お、お前は！？」
「……侍。十字侍だ」
「そこそこ手練れの刀使いだな。おれはウルフマンだ。最初に仕留めた奴の名前だよ」
「お、お前だ！お前は！？」
ニューヨークにいる殺し屋の名前を把握してるだけ藍さんから聞いていたが、ほとんど聞いた名前だった。
ガンマンはあたしに銃口を突き付ける。
名乗りたくないんだけど、と黙っていれば「名乗れ！」と怒鳴られた。
「……黒猫」
あたしは溜め息をついてから名乗る。

「紅色の黒猫よ」

ちゃんと英語で、ブラッティブラックキャットと名乗った。驚愕に満ちた目を向けられる。だから名乗りたくなかったんだ。

「は、ははぁ？おい、こんな時に冗談はよせよ…」

2丁拳銃の男はひきつった顔で言ったがあたしが何も言わないから言葉を失う。

「まじかよ……こんな小娘が例のブラックキャットだって？」

ウルフマンが一歩あたしから離れればテーブルの周りにいる男達も後退りをした。

「紅色のコート……紅色の黒猫。お前が日本で殺戮をやったあの紅色の黒猫か？」

十字侍は問う。

「アンタが……紅色の黒猫か」と目を丸めてブラウンの男が床に足をついて確認する。

「ええ、正真正銘の紅色の黒猫よ」

あたしは頷いて肯定した。

「そっ、そいつだ！狩人の狙いはそいつだ！！そいつを差し出せばおれ達は助かる！！」

あろうことがそんなことを言い出した。
バッとブラウンの男が何かを2丁拳銃の男に突き付ける。指の間に三つの筒。何の武器かはあたしにはわからないが、人間を殺す武器には違いないだろう。

「それは許さねーぞ」

低い声でブラウンの男は言った。
するとボトルを飲んでいた男がリボルバーをあたしに向けて、奥の男もあたしに腰の後ろにしまっていた銃を向ける。

「……あら。あたしに喧嘩売る気？」

あたしは冷たく嘲笑ってやった。

「殺られる覚悟はあるのかしら？」
「銃が見えねぇのか小娘！」
「やめておけよ。紅色の黒猫は先日この近くの武器売人を殺戮したんだぜ。五十人全員の銃弾を避けて無傷で殺す相手にてめーらが勝てるわけねーだろ」
「あら、よく知ってるわね、狼人間さん」
「客だったのさ。大の大人の男達の血の海を見せてくれてどうも」

ウルフマンの情報のおかげで怖じけ付いた三人は銃を降ろす。

「あれ、私はスカルクラッチャーが殺ったと聞いていたが」
「あたしと頭蓋破壊屋さんで殺ったんです。最も…半分以上はあたしが殺しましたけど」
「スカルクラッチャーと仕事をやったのか！？」
「クラッチャーとは仲間なんです。でも今、彼はポセイドンと遊ん

でる最中」

大物の名前がまた上がり驚愕してるとこにもう一つ驚愕する情報を洩らす。

「ほらやっぱり！！これはお前をハメる罠なんだ！」

「お前黙れ！例えそうだとしても！黒猫を引き渡したところで狩人は見逃さないぞ！あのガトリングならば獲物は必ず息の根を止める！」

2丁拳銃に大してブラウンの男は声を上げた。

ガトリングと呼ばれる女はマシンガンをぶっぱなす上に獲物は確実に息の根をとめるらしい。

「彼の言う通り。冷静になりなさい。さもなきゃ殺します。足を引っ張られ死ぬなんてごめんですから」

「っ……」

「全員で協力してこの建物から逃げることに専念してください。あたしを殺して名を馳せたいなら外に出てからにして」

それを聞いてアイスピックが笑った。そんなことを考えたくもないのか男三人は一層青ざめる。

そんなのを気にせずにあたしはブラウンの男に目を向けた。

「……“眼帯の手品師”のレネメン・ジャルットだ」

藍さんからニューヨークにいる殺し屋としては聞いてない名前だったが、随分前に聞いたことがあった。

「黒の殺戮者の仲間ね」

あたしは目を細める。
黒の殺戮者率いる集団の一人として、“眼帯の手品師”という名前を聞いていた。
通りで頭蓋破壊屋の名前には反応を示さないわけだ。きっと遊太とは違って白瑠さんと仲間だってことは聞いているのだろう。

「そのことでアンタに話がある。黒からの伝言があるんだ。これが終わったら聞いてくれ」

あくまで友好的にそうあたしに言ってきた。
黒の殺戮者から伝言だって？
あたしに、なんでまた。
首を傾げていれば何も持っていない左手を差し出される。

「生きてここから出よう」

殺し合う気は更々ないように笑みを浮かべて握手を求めた。おや、黒の殺戮者の仲間は友好的な者が多いらしい。
とりあえず此処から出るまでは殺そうと襲ってくる気はないようだから握手をした。

「オレの名刺はポケットの中だぜ」

握手したら胸ポケットを指差された。中を見てみれば彼の名刺が。
おお、手品だ。思わず笑う。
「可愛い殺し屋だな」とレネメンは笑った。

「ずるいねー先手を打っちゃって。まぁ私は紅色の黒猫のお尻を触ったから生き残ってやらないとね。さて、皆さんどうする？」

アイスピックが訊ねた。大物の名前ばかりが出て頭を抱えていた小物殺し屋が大人しい隙に作戦を練ろう。

「一体狩人がどんな手であたし達を仕留めるか。何であれ狩人だってその攻撃を避けて返り討ちにしないと」

「問題はどんな手なのか」

「ドアはこれ一つだ。壁は蹴り破れないだろう」

「本当に一つだけなんですか？隠し扉だとかは？」

周りを見回していれば十字侍とアイスピックが調べだした。

奥の壁は草臥れた本棚があるだけ。本なんて一つもない。あの向こうの壁に出入りする扉があったりして。なわけないか。

窓さえないのは恐らく完全に閉じ込めたんだ。問題は閉じ込めてどうあたし達を仕留めるつもりなのか。

「何処か鉄で出来てない場所からマシンガンを撃ってきたらたまらないね」

アイスピックがドアの隣の壁をカンカンッとノックした。

パカ。

それに返事するかのように小さな扉が開く。そこから銃口。

え？と間抜けな声が洩れた次の瞬間にガウンと銃声が鉄の箱の中で轟いた。

「伏せろ！」

ウルフマンが指示する。

全員が素早く、あるいは慌ててしゃがみこむ。

アイスピックは銃口と気付き間一髪眉間に弾丸が食い込まないで済

んだが、代わりに肩を撃たれ倒れた。
目の前にいたあたしは直ぐ様彼の口を押さえ込み黙らせる。
痛みに声を上げては駄目だ。
黙っていろ、聞かれている。
あたしはそう仕草でアイスピックにも周りの殺し屋にも伝える。
きっと壁のあちこちに似たような小さな窓があるはずだ。位置を把握されたら、銃を突っ込まれ発砲される。
何も言っていないのに、十字侍が近寄りあたしと一緒にアイスピックの手当てをした。
弾丸は貫通したようだ。とりあえず止血。きつく布を巻き付けるのは十字侍。あたしは声が洩れないように両手でアイスピックの口を押さえ込む。
それが済んだら、ナイフを取り出して壁を睨み付ける。
小窓が開いたその時、反撃のチャンスだ。
他の者も武器を構えた。
ここで小さな問題が。
小窓が開かさせるには誰かが囮にならなくてはならない。一体誰が囮になるか。
目を見て誰も反応をしない。
いい大人どもめ。
白瑠さんなら迷わず買って出ただろう。やれやれ。
あたしは立ち上がって鉄のドアを蹴り飛ばした。
ガンッと大きな音が響く。
さぁ?どっからかかってくる?
構えて待つ。
しかしいつになっても鉄の壁から窓が開くことはない。
一体どうしたのかと次々と立ち上がる。

「おい……何か聴こえないか?」

床に倒れたままのアイスピックが小声で言う。耳をすませば確かに何か聴こえる。
キキキキキ、となにかゆったりと規則正しい音が壁の向こうから聴こえた。
それは次第にガチンガチン、と何か嵌まるような音もしてくる。
機械の、音のようだ。

「まずい！！仕掛けがあるんだ！」

悟ったレネメンが叫ぶ。
しかし、あたし達になす術はない。
パカパカッと壁からズラリと小窓が開いた。
四方の壁だけじゃない。
真上の天井のタイルもパカッと開いた。
数え切れないガトリングの口が向けられる。
閉じ込めて――その中でガトリングで殺すのが、彼女の手か！
そう理解したって無意味だ。
武器を構えたって、無意味だ。
こんな規則正しくただ機械的に弾丸を撃ち込む無数のガトリングに対抗できる人間なんていない。
防ぎ切れはしないのだ。
盾にできるものなんてない。死ぬまで撃たれる。
　戦慄が走った。
――死ぬ。
　これは絶対――絶対絶滅だ。
ガウン、と一発目が放たれる。あたしはナイフで叩き落としたが、それだけで右手が痺れた。
そのあとから、銃声が続いて響く。
ガガ

ガガッ！！

　防ぎきれず、あたしは撃たれた。

弾丸の嵐なんてものじゃない。四方、上から降り注ぐ強烈な弾丸が電光のように走った。家具も人間も蜂の巣にする。

　ガンッ。

頭に衝撃を食らったのを最後にあたしは気を失う。

或いは死んだ。

それでも弾丸は止まなかった。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ――ククククッ――ガガッ――――…。

　火薬と血のにおいに、目を開く。砂煙が充満している。やっと弾丸が止んだらしい。

「ゲホッ…」

思わず咳込んだ。それで気付く。

―痛みがない（、、、、、）。

腹に触れた。怪我なんてない。バッと起き上がった。

返り血を浴びているが、身体には何一つ傷がない。撃たれたと思っ

た頭だってぼんやりとした頭痛を感じるだけ。撃たれた痕なんて何処にもない。

―弾丸がかすった形跡すらなかった（、、、、、、、、、、、、、、、）。

あたしの下に、アイスピック。隣にはレネメン。

弾丸が身体を貫かれ、血塗れだ。

テーブルは木っ端微塵。

２丁拳銃の男の頭は半分なくなるほどの弾丸を食らったらしい。生死は明らかだ。

他の殺し屋は血塗れで倒れてる。しかし息が聴こえる。虫の息でも生きているようだ。

――――でも。

でも、なんで。

何かドクドクと不規則に心臓が脈打つ。

充満した火薬のせいか、呼吸がしづらい。肺が押し潰されそう。

困惑が脳内をぐるぐると回る。

撃たれたはずだ。撃たれたような衝撃を感じたはず。なのに、何故。

何故。何故。何故。何故。何故。何故。何故。何故？

その時だ。カチャリ。

額にマシンガンの銃口が突き付けられた。

「お前――――何者だ？」

煙草を加えた眼鏡をかけた女が見下す。

ガトリング――狩人。

そんな彼女の後ろに、白瑠さんが立っていた。

白瑠さんが振り下ろした手を、女は咄嗟に避ける。

「何者だ！？」

ガガガッと女は発砲。白瑠さんはしゃがんで避けた。
「待て！パトリシア！撃つんじゃない！」
聞き覚えのある声が割って入る。
「お前、ポセイドンか。殺し屋を庇うのか！？」
「見逃してくれ！俺の恋人なんだ！」
「嘘ついちゃだめだよぉ、しゅーちゃん。嘘つきぃ」
「うるせぇ！いいから椿の手当てをしやがれ！パトリシア！話がある！」
無理矢理女狩人を秀介は小屋から引きずり出した。
外で二人が話す。
「椿ちゃん、ごめん。大丈夫？しゅーくんが気付いてすっとんで来たんだよ」
「え、ええ…はい……」
白瑠さんは首を傾げてあたしの顔を覗く。大丈夫もなにも、無傷だ。無傷。何処も痛くはない。
「よかったぁ、じゃあ帰ろう」
「あっ、あの！待って！まだ生きてる人がいるのっ」
あたしの手を掴んでそのまま帰ろうとする白瑠さんを慌てて止める。
きょとん、と白瑠さんは首を傾げた。
「……知らない人間を助けるの？」

知らない人間を殺戮したあたしが死にかけた人間を助ける気なのか。
白瑠さんは不思議そうに首を傾げた。

「え、と……彼らが盾になってくれたおかげであたしは助かったんです」

あたしはレネメンを見る。まだ息があった。これは嘘じゃない。あたしを守るように手を伸ばしていて倒れていたんだ。
それに、あたしはまだ伝言をもらっていない。

「ふぅん。そっか。じゃあ助けてあげなきゃね。そいつとそいつとそいつも生きてるけど助けるぅ？」
「ええ、助けられるなら」
「つばちゃんがそう望むなら」

ニコッと白瑠さんは笑って、生きている殺し屋の為に救急車を呼んだ。
せっかくの獲物が取られるとガトリングが暴れだせば秀介が相手になって戦った。
その間に救急車に運ぶ。

「クラッチャー！！」

無事見送ったあとに、秀介が白瑠さんを呼んだ。
振り返った瞬間に、あたしは秀介に抱え上げられた。

「あとは頼んだ！！」

秀介の物なのか、オープンカーに飛び乗り、エンジンをかけ飛ばしてその場を去る。

「……ちょっと、秀介」
「……怪我、大丈夫？」
「怪我はないわ。でもちょっと」
「よかった。…本当によかった」

もうすでに見えない後ろを見つめる。
秀介は運転したままあたしの手を握った。
ぎゅ、と握り締める。

「もう君に嫌われたかと思った」
「え？なに？聴こえない」

オープンカーの風で聴こえないようだ。

「君にやっと嫌われたかと思った！」
「はぁ！？なんで！？」
「…篠塚さんが怪我して入院したのはあたしのせいだもの。あたしが指鼠の居場所を教えて、撃たれた。それでも、見舞いにいかなかったから」
「なんだって！？」

いきなり急ブレーキで危うくフロント硝子を突き破るとこだった。
シートベルトはしましょう。

「椿！俺は椿が大好きだ！嫌いになったりしない！あれは、そのっ！……あれだ！あれは俺が悪かったんだ！！」

言葉を探してぐるぐると目を回して声を上げる秀介。

「そんなことは知らなかったけど……それでも、椿は篠塚さんに顔を会わせられないのに……無神経なことを言った。正直会わせる顔がなかったんだ。きっと椿は泣いてると思ってた。そしたら……クラッチャーと楽しそうに笑ってる椿を見付けて――――へこんだ」

途切れ途切れに秀介は言う。落ち込んでガクリと頭を垂らす。

「椿って笑うと本当に可愛いって自覚してないだろ。…俺、椿が、他の男と笑ってるのが、すげえムカついた。あの餓鬼より妬いた」

直ぐにムスッとした顔を上げる。餓鬼って、蓮真君のことか。

「だからクラッチャーに八つ当たりして俺…別に椿を無視したわけじゃない！俺はずっと椿だけが好きだ！大好きだ！愛してる！嫌いにならないって何回言えばわかるんだよ！愛してる！アイラブユウ！！」

ガッとあたしの肩を掴み、秀介はニューヨークのど真ん中で愛を叫んだ。

街を行き交う人々があたし達に目を向けた。驚いたあとパチパチと拍手をされる。

「ちょ、秀介。場所を変えようよ」

恥ずかしい。あたしはノリノリで礼を言っている秀介を小突く。

「あ、俺のホテルここだよ」と秀介は目の前のホテルを指差した。

目立ったのでさっさとあたしは秀介の泊まる部屋に入る。

返り血を浴びたのに紅色のコートのおかげで誤魔化せたみたいだ。

秀介は必要以上に怪我してないか確認するから大丈夫だと頭を叩い

てやった。

「悪かったな。クラッチャーがさっさと椿の居場所を吐いてくれればば」

「よくわかったわね。また狩人専用の通信？」

「ああ、狩人の中ではアイツは容赦なく罠を仕掛けて殺し屋を一掃するからな」

ソファに座って、秀介はまたあたしの身体を確認しながら答えた。

形振り構わず殺し屋を狩るのが彼女のやり方。容赦ない。

「そんな狩人仲間を白瑠さん…ってクラッチャーに任せていいの？」

「そうでもしなきゃ椿と話せないと思ったから」

理由は明確だった。

やれやれと呆れて溜め息を吐く。

「椿、手が冷たい」と秀介が両手を握る。

あたしの手は凍えるほど冷たく、震えていた。血の気が引いてる。

生きた心地がしない。

あの弾丸が吹き荒れた鉄の箱の中で、一体何があったのだろうか。

耳元を横切る数え切れない弾丸。人間を貫き鉄に食い込む弾丸の山。

どうしてあたしだけ、あたしだけが無傷なんだ？

奇跡と呼ぶにはあまりにも――不気味で気持ち悪い。

「椿……？怖かったろ。悪い」

「……うん。正直、あたし、まじで死ぬと思った」

秀介が心配そうに顔を覗く。あたしは笑って答えておいた。

秀介は微笑んであたしの髪を撫でる。愛しそうに見つめる眼差しが、心地いい。

「ずっと恋しかった」

幸せそうに見つめてあたしの頬を拭うように撫でた。
温かい手。

「キスしたい」

冗談のように笑って、秀介は言った。

「すればいいじゃない」

あたしはさも当然のように言う。
「え？」と秀介は目を丸めた。

「したいんでしょ？しないの？」

あたしは身を乗り出して顔を近付ける。驚いて秀介は仰け反った。
秀介の膝の上に手をついてるから彼は逃げられない。

「へ…？つ、つばきゃん？」

笑みをひきつりながらも首を傾げる秀介にあたしはまた顔を近付けた。
そして唇を重ねる。

「つ……ばき？」

秀介は身体を強張らせて戸惑っていた。あたしはお構い無くもう一度、唇を重ねる。

酔っ払った白瑠さんみたいに、もう一度キスをして、次は深く入り込む。

「つば、き……んっ」

いつもなら不意打ちしてくる彼は逆に攻められたら引き腰になるらしい。だからあたしは彼の上に股がって抱き付いた。

「ん……椿っ…」

躊躇いがちにキスを返していた秀介は漸く激しいキスをする。あたしを抱き締め返す。
唇を舌を吐息を絡めていく。
髪を掴みギュッと握り締め無我夢中にキスをした。
背中から、秀介の手が短パンに入ってきて気付く。
というか、我に返った。
ぐいっと秀介の頭を固定して唇から離す。

「ん？」
「……あたし何やってんだ？」
「へ？」

あたしは信じがたくて困惑した。

「なんであたしこんなことしちゃってんだ？意味わかんない」

首をフルフルと振って秀介の上から退く。意識が飛んだみたいにそんなことをしてしまったことが理解できない。

「え、椿…？」

「あたしのキャラじゃない。意味わかんない。なんであたし？わっかんねぇ」
「つ、椿？」
「どうかしてる。死にかけてどうかしたんだ、うん」
「椿！？」
「なんだい？秋川君。何か質問があるなら答えてやらない」
「答えてください先生！つ、つ続きは！？」
「つが多い。残念答えてやらない」

ショックのあまりあたしが離れた体勢を保ったままの秀介。あたしは知らん顔でそっぽを向く。

「俺の気持ちに応えて誘ってきたんじゃないんですか！？」
「残念ながら君の気持ちにも、応えられない」
「上手い！…ってそうじゃなくて！え？なに？椿は誘っておきながら寸止めをする娘だったの！？椿は強引に押し倒されてそのまま身を委ねちゃう娘だったよね！？」
「君はあたしの何を知っているんだい」

いや、でも、あたしから誘うような行動をしない娘だと知っていたからこそ戸惑っていたのか。

「うっ、ううっ…！わかった！わかったよ！今回だけは見逃す！許すよ！うぐっうっ！」

秀介はなんだか泣きそうな顔をして苦しそうに謝ってもいないあたしを許してくれた。なんで苦しそうなーんーだーろー？
まぁ、あたし達の中でキスしたから謝る謝らないなんて口論は存在しないから許すも許さないも意味ないけど。

「それで…いきなりどうしたんだよ…？」

涙目で秀介は訊いた。

「どうしたって……。えっと……ほら、恐怖と恋愛感情って似てるって言うじゃん？そのせいかー……なぁー……なんて」

「……」

見苦しい言い訳。

どうしたって、あたしが訊きたい。いきなりどうしたあたし。

「ニューヨークというエロテックな場所に影響されて！あっ！昼間に激しいシーンがあったドラマをみたせいもあるかも！」

「椿……」

「な、なんでしょう」

「本当は俺が好きなんだろ」

「そうかも。……いや違う！！断じて違う！！」

混乱のあまり、一度頷いてしまった。慌てて首を横に激しく振るう。

「俺への気持ちを隠してるんだろ」

「断じて違う！！」

「その反動だ！」

「違うってば！！」

「じゃあ確認する！」

否定したのに秀介は信じずにあたしの足をがしりと掴んだ。え、確認って…？

「攻めていけば身を委ねる。椿は強引に弱いから、押し倒されたら

許しちゃうタイプだ」
「そうそう、それで仕返しに夜這いなんかしたら逆に犯されちゃうようなタイプだよねぇ」
「そうそう、負けず嫌いだから……」

秀介暴走。かと思いきや、第三者の声が割って入ってきた。
会話が成り立って秀介は気付かずうんうん頷いたがはたと止まる。
あたしの後ろにいつからいたのか、白瑠さんがあたしを抱き締める形で座っていた。

「うきゃあぁぁあ!?」
「クラッチャー!?」
「俺もまぜて♪」
「まぜるか!」
「まざるなぁあ!」

混乱騒ぎ。
落ち着いて落ち着いて、と白瑠さんに宥められる。…屈辱。

「なんでお前ここがわかったんだよ!?」
「え、ポルシェを探せば一発じゃん。あとはつーちゃんのにおいを追ったぁ」
「お前は犬か!!」

そういえば二人がまともに会話するのを初めて見た気がする。片や声を上げているのを果たして会話と呼んでいいものやら。
いや、ラトアさんと似たようなものか。
あ、どっかで見たかと思えばあのオープンカー、ポルシェだったのか。

「パトリシアは！？」
「ん、任されたから殺したぁ」
なんでもないように白瑠さんはさらりと頷いた。ムッと秀介はしかめるがすぐにそっぽを向く。
殺し屋に頼んだんだ。そりゃあ殺されるだろう。あたしはよかった。彼女には危うく殺されかけたし、病院に運ばれた彼らの息の根をとめかねない。
「あひゃひゃ！犬と言えば番犬だねぇ、つばちゃんもう訊いた？」
白瑠さんは会話を繋ぐ。
そういえば、裏現実の番犬のことを秀介に訊けばいいと言っていたっけ。
「番犬？」
「あーうん、番犬。狩人の。たまたま耳に入ったからどんな人かなぁて」
「俺あの人に憧れてたんだ！」
狩人の番犬だとわかるなり、秀介はぱっと顔を輝かせた。
憧れ、か。
「あの人は歴史上最強の狩人だ！俺はあの人みたいになりたくって狩人に成ったんだよ！」
ニカッと無邪気に、語る。嬉しそうに誇らしげに打ち明けた。
「狩人になれば会えると思って成ったんだぜ！すげえ強いし俺のヒーロー！彼に会うのが俺の夢だ！」

「あっひゃー、残念だね。そりゃ叶わない夢だぁ、彼に会えない」

白瑠さんは夢を打つ砕くことを言い退けた。ムッと秀介はまたしかめる。

「番犬が死んだ説があるがありゃデマだ！彼を殺せたら誰かが言い触らすだろ？それがないのに死ぬかよ！番犬は生きてる！ぜってえに生きてる！」

「いいや、番犬は死んだよ。番犬は死んだ。番犬には会えない」

死亡説を真っ向から否定する秀介だったが、白瑠さんは切り捨てるようにはっきり告げる。

まるで、彼の死体を見たかのように、確信している口振り。

これは譲らないとばかりに言いのける。

夢の否定をされている秀介は当然頭にきて食い下がり、白瑠さんと口論を始めた。

どちらでもいいが、あたしを挟んで騒ぐのはやめてほしい。

せめて離してくれ、白瑠さん。

「俺の直感でわかる！生きてる！」

「死んでるね」

「……」

…変な、白瑠さん。

狩人の仕掛け罠（後書き）

次回最終話

手首の手錠（前書き）

嘘。
まだ続きます。

手首の手錠

繋がれた手が。
貴方の手に触れる。

「待て！椿にまだ話してないことが！」

あたしが欠伸を洩らした頃、白瑠さんも飽きたらしくあたしを担いで秀介の部屋を後にした。
秀介は話があるとか言っていたが白瑠さんは気にせずに撒いて自分の家に帰る。
そのあとも、秀介は何か話があるらしく仕事先には出没するようになった。
その度に白瑠さんが秀介の相手をする。
戦っている間にあたしへの用件を忘れて『打倒頭蓋破壊屋魂』に火がついたらしく。
白瑠さんが飽きた頃にはあたしも忘れて帰った。
その繰り返しが四回続いて、今日のこと。
二人はまた遊んでいた。

「クラッチャー！今日こそお前を潰してやらぁ！」
「うひゃひゃ、頑張ってぇ」

秀介と白瑠さんのぶつかりあいは凄まじかった。
本気でぶつかって三又槍を振り回す秀介はまさに鬼の如く。

あたしじゃあきっと気圧される彼を白瑠さんはそこら辺に落ちていたパイプ一つで防いでいく。
アクション映画の激しいアクションシーンを延々とやっていく二人。
参考に熱心に見学していたのも最初の二回だけで、もう見飽きてしまった。
白瑠さんは遊んでいるからなぁ。
遊ばれて身体が持っている秀介も凄いと思うが、やっぱりあたしは白瑠さんとひねくれた策略家の対決がみたい。
多分あたしの好きなアクションホラー様々な戦いのはず。是非とも見たい。
そういえば、ガトリングの罠から二週間か。
生きているなら意識は回復しているだろう。あたしに伝言があると眼帯の手品師に会いに行ってくるか。
丁度白瑠さんは手が放せないのだから。
あたしは黙って踵を返した。

「ふぁあ…」

欠伸を洩らす。
どうにも最近夢見が悪い。そのせいで寝た気がしないのだ。
白い部屋に閉じ込められる夢。
白い部屋が黒に飲まれていく夢。
……うつ病かもしれない。ついでに診てもらおうか。うん。
しかし病院の場所をイマイチ知らない。ニューヨークは広い。徒歩で行けるだろうか。
飽き性な白瑠さんのことだから直ぐに切り上げてあたしを探しにくるだろう。
車を盗んで行く？事故るの確実だよな…。
寧ろ事故って救急車に運んでもらおうか。うん、それが手っ取り早い。あたしって頭いい！

早速その手を使おうと車を探すことにした。
建物が並ぶ間に生じる路地裏を歩いていく。

「椿っ！」

そこで後ろから名前を呼ばれ、腕を掴まれた。
振り返った先にいたのは――篠塚さん。
篠塚健太楼（しのずかけんたろう）がいた。

「しの、ずか……さん…？」

まさかと思い、呼ぶ。
信じられなかった。いるはずない。こんなところにいるはずはないと自分に言い聞かせた。
だけど握り締められる感触は、間違いなく本物。
目を合わせて会ってしまった。
焦って、今すぐ逃げ出したくなって、腕を振りほどこうとしたのだが――。
カシャン。
その前に、右手首に銀色の手錠がかけられた。
あ…、と絶句。
手錠――逮捕――死刑。
連想する単語が頭の中でぐるぐる回る。
嗚呼、あたし、終わった。

「逃げるな！ちゃんと話を聞いてやるから！」
「……はい？」

篠塚さんはガチャリと自分の左手首にあたしを捕まえた手錠をはめた。

変わっていない。
篠塚さんがあたしを見る目は――犯人を見るような目ではなかった。

あたしは連行された。
ニューヨーク市警ではなく近くのレストランにだ。
客の少ないレストラン。
テーブルに向き合って座った。手錠はつけたまま。テーブルの上にドンと置かれた。
あたしは沈黙してその手を見つめる。

「……話してくれ」

篠塚さんが口火を切った。

「取り調べなら警察署でしょう。なんでニューヨークにいるんです？怪我して入院したと聞いてましたが」
「……俺は今、療養中なんだ。休暇でニューヨークに戻った。怪我は大したことない」
「そう……」

あたしはそれしか言えなかった。謝ろうと思ったがタイミングを逃して重い沈黙が降る。

「話してくれ、椿。一体何があったんだ？何がなんだが…混乱していて解らない」

篠塚さんは額を右手で押さえて言った。混乱していて当然だ。
彼は信じて疑わなかった。あたしが被害者だと。
多分他の警察だって彼と同じように混乱するだろう。

「ああ、ごめんなさい。じゃあ簡潔に話しますね。貴方が長年追った頭蓋破壊屋はレッドトレインの犯人ではありません。彼はたまたま乗車していただけ。五十六人の乗客の喉元を掻き切って殺したのはあたしです。この前自主したのは二回目にレッドトレインをやった模倣犯ですよ。一回目の真犯人はあたし」

あたしは上っ面の笑みで篠塚さんに優しく話す。篠塚さんは目を見開いて絶句していた。

「五十六人の命を奪ったのはこのあたしです。そのあと頭蓋破壊屋に殺されかけて被害者に上手く紛れ込み容疑者から勝手に外れていたんですよ。あたしの第一声を覚えてますか？“大丈夫です”…だったかな。直ぐにわかったわ、貴方があたしを殺人鬼だと気付いていないって。哀れむような目であたしを見てました。そして勝手に事件当時のことを覚えてないと話を進めた。なんで皆そうなんでしょうか？あたしの周りって皆あたしの話なんて聞く気ない。思い込んで勝手に解釈しちゃう。だからあたしの本性を見逃してしまうんですよ、篠塚さん」

あたしは鋭いナイフを突き立てるように強く言い放った。

違う。やめろ。

これじゃあ篠塚さんを責めているようだ。八つ当たりだ。やめろ。

落ち着け。

一度、深呼吸をする。

「篠塚さんはもう少し人間を疑うべきです。騙されて痛い目見てしまいますよ。現に五十六人を殺した殺人鬼を見張っていたのに取り逃がしたんですから。あの夜、あたしが消えた日。頭蓋破壊屋が来たのはご存知ですよね。ほらあの刑事……名前は……まぁいいや、

頭が飛んだ死体で頭蓋破壊屋が来てあたしを拐ったと思ってたでしょ。本当は迎えに来たんですよ。裏の世界で頭蓋破壊屋は殺し屋をやっていまして、あたしの師匠になったんです。今あたしは殺し屋をやっていて、人間を殺しています。数えてませんが…百はとうに越えたでしょう。まぁ、こんぐらいかな。質問ありますか？」

嘘っぱちな笑顔を貼り付けてあたしは篠塚さんを見上げた。
篠塚さんはただ、言葉が見付けられず口を開けずにいる。
まだ困惑しているようだ。
理解できていない。
あたしが殺人鬼だという事実がわかっていないんだ。
そういえば、幸樹さんは言ってたっけ。
あたしが人殺しに見えなかった、と。
人を殺す姿を見れば、頭は理解してくれるだろうか。

「な……なんで」
「なんで殺したか？理由は一つ。人を殺さずにはいられない異常者だから」
「異常者だって？どこが」
「通常ぶってただけです。猫を被ってたの。入院中、部屋を抜け出して鎮痛剤を取りにいったの覚えてます？本当は見張りで居眠りしてる刑事を殺そうとメスを盗んでたんですよ。殺戮中毒」

あたしはつかさず質問に質問を遮るスピードで答えてやる。
正当の理由を探してる。

「あたしは悪くないと思ってるんですね…」

そうだよね。
貴方は優しい人なんだから。

「貴方もあたしのせいじゃないと言うんですか？椿のせいじゃない、椿は悪くない。そんな戯言は言わないでください。あたしは悪で、貴方は善。それだけです。何を困惑している顔をしてるんですか？自分を責めなくていいんですよ、誰も気付かなかったんですから。家族も友人も医者も刑事も、ニュースを見た国民も」

「――――気付いてほしかったんだろ」

篠塚さんが。

戸惑いを捨てて、強い口調で告げた。

「俺があの時、一番初めに君に問い詰めていれば……話してくれていたんだろ。俺のせいだ」

あたしでも、他の誰でもない、自分のせいだと彼は口にした。

「君は何一つ、演技なんてしなかった。何かを怖がって自分が死ぬと思っていたことは伝わっていたから…俺は疑わなかった。君を被害者だと思い込んだ」

自分が悪いことをしたみたいに思い詰めた顔で続ける。

「俺が悪い。君は悪くない。何一つ、悪くないんだ。椿。気付けなかった俺が悪かった。すまない」

手錠で繋がった手を、握り締めて謝った。

「すまない？何それ、人殺しは悪くないって言ってるのよ。篠塚刑事」

あたしはなるべく激情を堪えて刺々しく言う。

「君は俺に助けてもらいたかった。そうなんだろ」

見透かしたように真っ黒い瞳で篠塚さんは言い当てる。動揺が走り声をあげたくなったが言葉が出ない。

「あの病室で君は俺に話した。親に迷惑をかけたことも警察が嫌いなことも、寂しそうな顔をする訳も。気付くべきだったんだ。友達にも言えなかったこと、それが君のＳＯＳだった」

「――――ちっ違う！あたしは…！助けなんて求めてない！！」

「あの電車の中で俺にすがり付いたのも、俺に気付いてほしかったんだろ」

「っ、違う…！」

「あの電話で君は助けを求めた。助けてと、言葉にして俺に助けを求めた。俺は直ぐに駆け付けたが――間に合わなかった。何が君を傷付ける？何が助けを拒むんだ？椿」

今までやってしまった行為が、今更一度に代償として返ってきた。喉に詰まるモノを堪えようと歯を噛み締める。

視界を遮る滲むソレを溢さないように眉間にシワを寄せた。

泣くんじゃない。泣くな。泣いちゃ駄目だ。

泣いたら敗けだ。

泣いたら死ぬ。

泣いたら罪悪感に押し潰される。

助けなんて。助けなんて。助けなんて。助け、て。

「――――じゃあ。助けてくれるんですか？篠塚刑事」

堪えきった。

睨み付けて、震えを噛み殺す。

「死刑椅子の用意された刑務所か、この手錠を外すか。一体貴方はどちらを選択するんです？刑事さん」

「椿…！」

「それとも、貴方が腰の銃で撃ち抜いてくれるんですか！？」

「何を言ってるんだ！」

「助けるなら殺しなさいよ！！」

バンとテーブルを叩いて怒鳴り付けた。

篠塚さんの目に困惑が蘇る。

「死に……たいのか…？」

「……」

死にたかった。

ずっと。ずっと昔から。

生まれてきたのが間違い。

「殺せないのなら、今すぐに手錠を外して――」

ジャラと手錠のついた手を前にまた身を乗り出しテーブルに膝をついた。

「ｋｉｓｓ　ｍｅ．」

もう片方の手で篠塚さんの顎に添えて、ちゅっ、と口付けをする。

完全に無防備だった篠塚さんは数秒間ぽかぁんとした。

「なっ、なっ、ななっ！椿！？ななにっなにしっ！？」

震え上がった篠塚さんは漸く反応してあたしを押し退ける。

「あそこの店員に通報されたくなかったので」

あたしは平然を装い元の場所に腰を降ろした。
目線を向ける方には電話しようかと話している男と女の店員。今の
で痴話喧嘩だと思い込んで電話の前から離れた。

「あ、ああ……そう、か……」
「ええ」
「……」
「……」

さっきとは違う気まずい空気なる。
篠塚さんは唇を押さえて黙り込んでしまった。いい大人が頬を赤らめてる。
キスぐらいで…。と思ったがそれはアメリカンに感化され過ぎてるせいかもしれない。キスは挨拶。あたし達日本人です。
正直言ってあたしはパニクっている。なんでまたあたしは篠塚さんの唇を奪っているのだろうか。
キスミーってなんだよ。
アメリカンに感化されている…！？
可愛いな、篠塚さん。
あたしも不意打ちされたらこんな反応をしていたのだろうか。
と、とりあえず落ち着け。
落ち着け。取り乱さずにこの場を切り抜けよう。

「本当ならナイフで首を掻き切ってもよかったんですけ…」

ど!?
平然に平然に気を取り直して話を進めようとした矢先に動揺が走った。
ど、どどどどうして!?
篠塚さんの後ろに、白い髪に白いシャツの白瑠さんがニッコリと笑って立っていた。
焦る。冷や汗がでる。
白瑠さんは左手を上げて、それを篠塚さんの頭に向けた。
篠塚さんが――殺される!

「しぃーのっちゃん!」

ポンッと白瑠さんの色白の手は篠塚さんの肩に乗せられた。篠塚さんは振り返って目を丸める。

「奇遇だねぇ!ん?またお仕事なのかなぁ?」
「白瑠さん!」

白瑠さんはいつもの笑顔で気さくに篠塚さんに話し掛けた。そして篠塚さんは、“白瑠さん”と呼んだ。
口をあんぐりとしてしまう。
明らかに篠塚さんの方が歳上、のはずだよね?
え、ど、どうなってるんだ?

「いえ、今回は休暇で……。また会えるなんて縁がありますね」

敬語使ってる!

「うひゃあ、そうみたいだねぇ。あひゃひゃ、なになに?女の子捕まえちゃったのぉ?かぁわいー娘だねぇ」

そして変わらない口調で白瑠さんは篠塚さんの隣に座ってあたしにニコニコと笑顔を向けた。他人のフリをする気らしい。

「あ…その、彼女はその……。白瑠さんは、ニューヨークには何しに？」

「俺はぁ仕事だよぉ。ほら、話したじゃん、かぁわいー部下を可愛がってるとこぉなぁんだぁ」

「ああ、そうでしたね。この前はその部下の話ばかりをしていましたね」

その部下ってあたしのことかい？

顔が引きつる。“この前”とはきっと白瑠さんが篠塚さんを引き留めた時だろう。

ちょっかいを出したとかで、知り合いみたいだとは思っていたが。

一体どんな仲なんだ？

篠塚さんがさん付けで敬語を使うなんて…。白瑠さん貴方は一体何を仕出かしたんだ。

「そう言えば、しーのちゃん。どぉしても助けたい女の子がいるって話してたけどぉ、助けることできた？」

説明を求めて白瑠さんに無言の視線を送ったのだが、スルーされて篠塚さんに話し掛けた。

「え……それは……」

篠塚さんはあたしに目を向ける。またあたしの話らしい。

「ああ、この娘のことぉ？」

白瑠さんは笑みのままあたしに顔を向けた。
知ってて、わざと訊く。
何を企んでるんだ、この人。

「……はい。彼女のことなんです」

篠塚さんは、正直に話した。

「守ると、約束したのに破ってしまった」

篠塚さんはあたしの手をまた握り、あたしを見つめる。

「オレンジジュースちょーだい！二人も何か頼む？」

自由な白瑠さんは空気なんてまるきり無視で店員を呼んだ。お前何しに来た。
勿論、あたしも篠塚さんも何も頼まない。
オレンジジュースがきて、ジュゴーと飲み干した白瑠さんは。

「約束破ったら針千本飲まなきゃいけないねぇ？しーのちゃん」
「え…」
「何か償いをしなきゃいけないだろう？守れなかったんだから」
「……そうですね。…椿、俺に何してほしい？」

大真面目に篠塚さんに告げた。変わらず笑みを貼り付けているが、茶化すような口調じゃない。
あの車の中であたしに話したみたいに。
…嗚呼、さっきの会話を聞いていたのか。
篠塚さんは再びあたしを見つめた。

もう二度と、あたしと関わらないことを、誓ってほしい。
そう言えばいいもののあたしは、言う。

「彼との関係を話してください」

あたしは白瑠さんを左手の指で差した。
白瑠さんはきょとんとした顔をする。予想外だったみたいだ。

「え？なんで…」

「確かに貴方はあたしを死なせない、そう言いました。守ってもらう約束なんてしてません。よって償いをする必要はありませんが、彼との関係が気になるのでよければ話してください」

あたしはツンとした態度で言い退けた。
篠塚さんは白瑠さんに目を向ける。

「あひゃ、いんじゃない？話してあげなよ。死にたがりやちゃんも聞きたがってるんだしぃ」

白瑠さんは話すように促した。
死にたがりや。やっぱり聞いていたのか。やだなぁ。また気まずくなる。

「……白瑠さんは俺の命の恩人なんだ」

篠塚さんは、話し出した。

「俺には、過去の記憶がない」

「！」

「俺の記憶は数年前、病室から始まる。そこに彼がいたんだ。重傷

で道端に倒れていた俺を白瑠さんがおぶって病院に運んでくれた」

命の恩人。

だから篠塚さんの態度がそうなんだ。

でも、可笑しい。

白瑠さんが、なんでまた彼の命を救ったのだろうか。

白瑠さんに目を向けたが、彼はオレンジジュースをもう一杯おかわりをした。

「ジュゴー……ほぉんと、あと一分遅れてたら死ぬとこだったんだぁよぉ。うひゃひゃ、ビルから落下しちゃったんだぜ」

笑い事じゃないのに笑う白瑠さんに合わせてはっはーと笑って見せたが直ぐに笑みをなくす。なんで話してくれなかったんだ。

「当時は警察官で家族もいなかった俺の入院費まで出して世話してくれたんだ。彼がいなきゃ、今頃路上生活さ。感謝してる。本当に」

「ひゃひゃ、てぇれーるぅ」

ますます謎だ。

あたしなら兎も角、白瑠さんが救う理由が見当たらない。

どんな気分で篠塚さんを見付けたかは知らないが、数年前と言えば名を馳せたばかり。殺戮に殺戮をしていた彼が死にかけた人間を解剖せずに助けると言う選択をとるなんて理解しがたい。

「道端の人間を助けるなんて、一体どんな仕事をしてるんですか？」

あたしは意地悪を言ってみた。さぁ、なんて答えるんだ。

「んひゃあ？俺はぁ仕事に支障するから明かせないなぁ、ひゃひゃ」

「そういえば、秘密なんでしたっけ」

白瑠さんはいつもの調子で答えた。篠塚さんはそんな彼を疑いもしない。
この人、刑事に向いていないのではないか？

「じゃあ俺はこの辺で。ばいばぁい、しーのちゃん。まったねぇ」

白瑠さんは正体を明かされないうちに腰を上げて店を出ていった。
何しに来たんだよ。
あたしを助けに来たんじゃないのか？てか放置ですか。

「……で。篠塚刑事。あたしをどうするおつもりで？」

あたしは話を戻す。
カルドに触れた手は、テーブルに置いて肘をつく。
篠塚さんは少しだけ間を開いてそれから口を開いた。

「今からでも、間に合う。椿、戻ってこい」
「戻る場所などありません」

あたしはピシャリと言う。
戻る場所など、存在しない。
あるのは、死刑椅子。或いは白い病棟。

「…恥ずかしい話、過去の俺は真面目な警官ではなかったらしい。
欠勤ばかりでろくに愛想もない奴だったと同僚に散々からかわれた。
そんな俺が刑事に昇進。人間は変われるんだ、椿」
「無理です。積極でどうこうなれるわけない。殺さずには」

「俺が止める！殺す前に全力で止めてやる！中毒なら治せるだろ！俺が治るまで側にいて君を助ける！」

痛いくらいに両手で握り締められた。

「俺が君を死なせない」

揺るぎない意志が込められる瞳。

「俺が君を枯らせない」

あたしを死なせない。
椿の花を枯らせない。
――ねぇ、助けて。
口にできない言葉。
口にできない悲鳴。
口にした時に崩壊する呪文。

「……何を言ってるんですか。それこそあたしは枯れる。あたしは紅色の黒猫。気が向くままに殺戮、血飛沫の紅色に染まる。血が水なんです。枯れますよ」

あたしは顔を伏せたまま、篠塚さんに届くように呟く。

「過去の自分を覚えてもいないくせに、あたしを助けるなんて笑わさないで。記憶を取り戻してからほざいてください。その時……同じような意志で言えるでしょうか？」

あたしは睨み付けた。
直ぐに篠塚さんは言い返そうとしたが、その時だ。

「強盗だっ！金を出せ！」

拳銃を手にした男が店に押し入った。

振り返る篠塚さん。

彼は素早く反応した。

懐から常備している拳銃を取り出し、立ち上がり、一両手（、、）で構える。

そして一秒もしない内に発砲。狙い通りに強盗の銃を撃ち抜いて丸腰にした。

「手をあげろ！警察だ！」

そう叫んだあとに漸く彼は気付く。

左手首にぶら下がる一つの空っぽの輪。

振り返った先に、あたしはいない。

キスをした際に手錠の鍵を奪っていた。あたしは強盗が入ってきたのを見て瞬時に鍵を使い手錠を外し、裏口から逃亡をはかったったのだ。

思った以上に篠塚さんの強盗への対応が早すぎて正直失敗するかと思ったが、裏口には白瑠さんがバイクで待機をしていて簡単にその場から離れることに成功。

「何のつもりですか？白瑠さん！」

白い部屋に戻ってからあたしは彼をどついた。

「何って？刑事から救出しただけだけどぉ…」

「もっと早くに救出してくださいよ！何を暢気にオレンジジュースなんて！」

「つーちゃんが手錠の鍵をゲットしたならテーブルに置いた手錠の鍵を外す隙を作ってあげようと思ってたんだけどぉ。カルド構えて睨むから任せていいのかと思って」
「それは貴方が余計な話ばっかするからですよ。なんですか。心配しなくても彼はあたしを殺しませんよ」
「つばちゃん殺す人間は俺が殺すぅ」
「……さいですか」

んひゃひゃ、と白瑠さんは白いシャツを脱ぎ始める。
篠塚さんはあたしを殺しっこない。
篠塚さんは殺す人間ではないということか。

「白瑠さん。なんでまた篠塚さんを助けたんです？」
「んーひゃあ？死にかけた人間を助けるのに理由がいるのかぁなぁ。人を殺すにも理由はなぁいもん！」
「いいえ、人を助けるのに理由はあります。気分で殺さない時はあっても、死にかけの人間を病院に運ぶ理由はあるでしょう？」

ズボンまであたしの目の前で脱ごうとする白瑠さんはなんとか手を止めてくれた。綺麗な色白の上半身をあたしに向けて、にんやりと笑みを向ける。

「死なせたくなかったから」

そう答えた。

「椿だってわかるだろ？殺してくれって頼み込む人間は、殺したくなくなる」

殺してくれ、と頼んだある少女を思い出す。あたしは彼女に冷たく
「いやだ」と拒否した。
彼女を守るために殺してくれと言った男が一人。
どの二人も、殺したいという気持ちは失せた。
――嗚呼、だからか。
だから、白瑠さんはあたしを殺さないのね。

「……え？篠塚さんって……」
「うん。自殺未遂」

白瑠さんは躊躇いなく笑って言い退けた。
ビルからの落下。飛び降り自殺。
あの、彼が。

「記憶がないだけで人間変わるねぇ、んひゃひゃひゃ」
「……なんでまた、助けただけじゃなく世話まで？」

白瑠さんは満面な笑みでためてから、答えた。

「面白そうだったから」

ズキズキ。
頭痛がする。
左手で頭部に触れたまま俯く。
最近異常に頭痛が起きている気がする。それは異国の地に長期滞在してるせいだろう。
ストレスで頭痛は起きる。
ストレスと言えば、秀介や篠塚さんのこともある。
なんでも秀介は篠塚さんと一緒にアメリカに来たのにそれをあたしに話しそびれたのだ。
接触したと知り秀介は謝罪するために仕事中に割り込んできた。
つい五日前のこと。
あたしは秀介が邪魔しない仕事はないんですかと文句を洩らしたら、白瑠さんは秀介に嗅ぎ付けられない仕事を見付けると言った。
今もあたしは仕事待ちで一人ソファに座り込んでいる。
まさか、あの篠塚さんが自殺志願者だったなんて。以前は真面目じゃない警察官だったらしいが、一体何があったんだろう。なんて野暮か。
記憶がないだけで、人間変わる。
そんなわけない。
記憶の中の何かが自殺に追い込むとは、思えない。
人間を死に追い込むのは——多分、現状だと思う。
目の前の現実。現実だ。
過去なんて。重くない。
過去だなんて、忘れた。

「嗚呼、痛いなぁ…」

ズキズキズキと頭が痛い。
溜め息をついて、電話をかける。しかし、この電話は繋がった試しがない。
ラトアさんがいるはずのシルベスターの本邸にかけたが出ない。誰も出ないのだ。

「携帯電話ぐらい持てよ、ＤＶＤを持ってるんだから」

膨れっ面をする。古風な喋り方をするくせにＤＶＤを所持しているあの吸血鬼に連絡を取りたい。
彼からハウン君の連絡先か居場所を聞き出したいのだ。
あたしがあの鉄の箱のカラクリで奇跡的に無傷で生存したのは――
――悪魔が関連してるかもしれない。
否、悪魔しか考えられないのだ。
あんなの白瑠さんだって生存できやしない。頭蓋骨粉砕技を使ってドアをぶち破り、無事脱出はできるだろうが。
無数のガトリングに避ける隙間も与えられないあの空間で無傷で生き残れる人間なんているわけない。
悪魔の力だ。
心当たりはそれしかない。
指鼠にやられた怪我を治した悪魔だ。可能だろう。
しかし、悪魔はあたしの奥深くに封じたのに、あたしの怪我を治すことが出来るのか？
それを封じた本人であるジェスタに訊かなくては。
最悪なのは、封印が解けたこと。
それはないだろう。そう思いたい。
ジェスタ曰く半年は持つと言っていたんだ。それが一ヶ月も持たなかったなんて冗談じゃない。
でも、封印から出てきたなら悪魔はあたしを殺すか、或いは契約を持ち掛けるかのどちらかをするはずだ。

頭痛は軽い。あの爆音並の騒音はしない。
悪魔の声だって聴いていない。
沈黙の悪魔だ。声を潜めている可能性がある。だからこそ確認してもらわなくちゃいけない。
悪魔との契約。
それだけはするなと言われている。魂と引き換え。
そんな馬鹿げた契約を結ぶつもりなどない。
だから自分から話し掛ける気は更々ない。てか端から見たら可哀想な人にしか見えないではないか。
神父吸血鬼に連絡できないなら自分で何とかしなくてはならない。
確かめる術は、怪我をしてみることだ。
ナイフを取り出して、左の掌に添えた。
切りつけて、その傷が治ったならば――。

「何やってんの？」

ナイフを握る右手が掴まれた。
後ろを振り返れば、白瑠さん。いつの間に帰ってきたのだ。

「え。えっと…。血が、見たくて」

ギクリとして顔を引きつらせる。
白瑠さんは笑みのない表情で見下ろしてきた。
決して自殺しようとしたわけではないんです。ガクガク震えた兎の如く、目で訴える。
暫く心地の悪い沈黙の中、見つめあった。
にぱっと、白瑠さんは笑う。

「仕事見付けたから人の血を見なよ、つばぁちゃん。しゅーちゃんには邪魔されないお仕事」

ナイフの刃を握って白瑠さんはソファを挟んであたしに抱き付いた。

「ほめてほめてぇ」

マタタビで酔った猫のように頬擦りをしてきた。

「え？あ、はい…すごいです、偉いです、ありがとうです」とほめてお礼を言う。

頼んだのはあたしだもん。

「ご褒美のちゅー」

……何故。

何故そこまでしなくてはならないんだ。

「ずるい！俺が一番につーちゃんに会ったのにしゅーちゃんとしーのちゃんばっかずるい！」

やっぱり見てたのか。

ずるいって、意味ワカメ。

てか、アンタとはもうキスした。篠塚さんより早くに。

酔っていて覚えていないだろうが、誰よりもあたしにキスしたよ。

あたしは呆れた目を向けた。

が、次の瞬間に白瑠さんの唇にキスをする。

白瑠さんはきょとんとした顔をした。

やがてにんまりと口元を歪ませてあたしをギュッと、詳しくは首を抱き締める。

「つぅばぁちゃん、だぁい好きぃ」

「……」

ゴロゴロと喉を鳴らしそうな白瑠さんに抱き締められながら、思う。
何しているのだろう、あたし。
白瑠さんとキスをするつもりなんてなかったっていうのに何故やってしまったのだろうか。
…欲求不満なのかなぁ。
それはショックだ。何やってしまったのだろう。

「…で、白瑠さん。仕事の内容は？」

あたしは溜め息を吐いてから話を戻した。
デニムの短パンを履き、黒のニーソックスを履く。上は白のニット。短剣を手首の下に。左手にパグ・ナウ。
ベルトを腰につけて、カルドと投擲用のナイフを付ける。
紅色のコートにつけたナイフは確認済みだからそのまま袖を通して着た。
紅色のブーツを履く。かっこいいデザインのブーツ。
その隙間にナイフを差し込む。

「完了しました。行きましょう」

着替え終わり、脱衣室から出た。
リビングで準備する必要ない白瑠さんに話し掛ける。
白いシャツに白いジャンバー。暗い灰色のズボンに白の革靴。
林檎に噛み付いていた白瑠さんは「んひゃあ、ひほうはー」とドアに向かった。
移動車は、白のフェラーリ。
向かうはターゲットのいる会社ビル。表は企業会社に勤める人間が裏現実者の仲介者を務めていたがトラブルを起こして反感を買った。
仲介者とはミスは許されないそうだ。一度トラブルをやってしまっ

たら混乱を招き大惨事を起こしかねない。
そんな仕事をハッキングや少女ストーキングをしている藍さんがこなしているなんて、なんかムカつく。
変態のくせに天才。
すげえムカつく。

「裏か表か」
「裏」
「じゃあ俺が表」
「殺した方が絶対命令一つ」
「おっけい」

その会話をしてフェラーリから降りた。
簡単な仕事は別ルートからターゲットにそれぞれ別々に向かうようになったのだ。
白瑠さんは表から堂々と、あたしは裏からこそこそ。
そして先に辿り着いて殺した方が一つ命令を告げる。
些細な命令ばかり。
白瑠さんは料理を作れとか買い物をしようとか、頼めば普通にすることを命令した。
あたしも似たようなものだ。白瑠さんのおごりでハンバーガーを食べにいこうとかその辺。
覚えたピッキングで裏口から中に入った。表の会社であるこのビルは警備が薄い。
楽チンな割には高い収入の仕事。
そう思った矢先だった。

「殺し屋、めーけっ！」

声と共に一人の男が上から降ってきたのだ。

海賊が使うような剣を二つ、振り降ろしながら。
殺気に気付いてあたしは後ろに飛んで避けた。
っ！なんだ？
狩人か？
トラブって殺されると理解し、狩人を雇ったのだろう。
狩人と仕事が被るのは――弥太部矢都以来だ。
悪い想像しかしない。
いや、今回は不意打ちを避けれた。そして相手は飛び道具ではない。
長剣相手は蓮真君のおかげで克服をした。今なら殺せる。
そう自信とともにカルドを握り締めた。直後に気付く。
パンッ。
移動したあとに先程までいた位置に銃弾が食い込んだ。
銃だ。レイザーライト付きのスナイパーライフル。
光に反応しなければ気付けなかった。
まずいな。スナイパーライフでは太刀打ち出来ない。
レイザーライトがなければ撃ち殺されていた。
まずい。離脱しなきゃ。
あたしは直ぐに引き返した。離れて白瑠さんに連絡を取ろう。スナイパーの方は白瑠さんに、剣の方はあたしが。
また瀕死になって心配をかけてはならない。
ビルを出て直ぐに携帯電話で連絡。
ドガッ！
壁がいきなり崩壊した。
違う。突き破ったのだ。
身体の大きな男が、壁を突き破って突進してきたのだ。
それを諸にあたしは喰い、反対側の壁に叩き付けられた。
「だぁっ…！」
くそっ！

罠だったのか。暗い中でレイザーライトなんかを付けるなんて可笑しいと気付くべきだった。誘導されたのだ。
狩人が三人。
聞いたことがある。
つい最近、秀介が狩人の話をしてくれたのだ。

「こいつらに遭ったら、先ず逃げるんだ。椿」

そう始めに付け加えて、秀介は戦わずに逃げろと教えられた中の一組の狩人。

「肉弾戦のでかい男と、二刀流の男と、スナイパーの女。その三人の連携プレーに囲まれない内に逃げるんだ。あいつらは手強い」

そう言っていた。
床に倒れたが秀介の忠告を思い出して、手をつき床を蹴って走り出す。

「逃がすかよ！」

大男を飛び越えて二つの剣を同時に男が振り下ろした。
カルドでその二つを止め、パグ・ナウでがら空きの腹部を狙う。
しかし、スナイパーがそれを阻止するべく撃ってくる。
カルドを振り剣の男を突き飛ばして、ドアを抜けビルを出た。
閉めたドアを、大男が吹き飛ばす。
一体どんな怪力だよ！
痛みの走る身体で駆け出す。三人はあたしを追ってきた。
白瑠さんが既にビルにいることを知ってか知らずか追ってくる。
ビルにまだ狩人がいるいないにせよ、彼らを引き剥がせば仕事は成功するだろう。

今回はあたしの負けだ。
変な命令されたら時間稼ぎはしたと訴えてやろう。
さて、どうやつらを倒そうか。
スナイパーをどうにかしたいが彼女も近くにいてついてきているらしく、大男と二刀流と立ち向かうと弾丸が飛んでくる。
この三人。強い。
チームプレーが凄すぎる。
一心同体のように攻撃をしてあたしの攻撃を防ぎ追い込もうとするのだ。
大男の振り下ろす拳を避ける。白瑠さんの頭蓋粉砕技並かもしれない。コンクリートに穴をあけやがった。
石のように硬いど太い筋肉に手をついて、飛び掛かる二刀流を蹴り飛ばす。
その勢いでパグ・ナウで怪力男の首を裂こうとしたが、撃たれ弾丸のせいで軌道がずれて空回りした。
あたしは怪力男の顔面を蹴って距離を取り、また走り出す。
絶妙に彼女が攻撃を防ぐため、あたしは彼らの血が見れないでいる。
やはり強い。
矢都と正面から戦っていたならこんなに苦戦していたのだろうか。
白瑠さんだって飛び道具を避けて接近するに手こずっていたな。
ダッ、と路地裏の壁に足をつき空中で回転の勢いでナイフを投擲。
三人まとめてこれで仕留めようとした。
が。三つのナイフをバ、バ、バン、とスナイパーが弾き返した。
なんつースナイパーだ。
宙返りで着地してまた走り出す。
ふと、一人いないことに気付く。
先回りしたか。
挟まれたら本格的にヤバイ。
なんとかしなくちゃ。
なんとか。何か策は?

ええい！思い付かない！
あたしは急ブレーキをして、怪力男に向かった。
レイザーライトが見える。
そこにナイフを投擲し、カルドを怪力男に振り上げた。
投擲したナイフは弾かれ、怪力男から先に攻撃を仕掛けられる。
しかしこれはあたしの読み通り。
怪力男がコンクリートに食い込ませた腕を土台に隣の壁を飛び越えた。

「しまった！」

着地したあたしは直ぐ様、ビルの方へと駆け出す。
後ろでコンクリート壁が破壊される音が聴こえたが振り向かず彼らを撒くことに専念した。
しかし、数分もしない内に。

「めっけたぁ！」
「うぐっ！」

前方から現れた二刀流の男から攻撃を受けた。カルドで刃を防いだもののコンクリートの地面に叩きつけられて倒れる。

「オレらから逃げられると思うなよ！最期だからオレの名前を教えてやるよ、オレはイアン！」

あたしに剣先を向けて彼は名乗りを上げた。そうだ。確か三人のイニシャルがIだからトリプルだかその辺のチーム名がついていると秀介から聞いた気がする。

「うっ……――――ふふ。んふふふ…」

怪力男の壁ごと喰らった突進のダメージで呻いていた声は、笑いへと変わる。

「ふふふ、ふふ、ふふふふふ……」

「あ？何が可笑しい？」

「ここまで手こずる相手が久しぶりで……あははは、白瑠さん以外に一筋縄では殺せない人間と遭えたのが嬉しくて、つい」

目を押さえて笑う。

「くっくっ……たぁのしぃなぁ」

「あ？…お前、頭可笑しいんじゃねぇの？」

「殺しだって、歯応えなきゃ、つまらないもの。そうだろ？狩人」

「言うじゃん、獲物」

「はは…――――自分が捕食者だと思うなよ」

「あ？」

「あたしは紅色の黒猫。捕食者だ」

左手のパグ・ナウで剣を弾く。

立ち上がったと同時に、カルドで首を跳ねた。

「何一人で図に乗ってんだよ。あたしは三人組から逃げていただけ、一人相手なら簡単に殺せる。それをわざわざ一人になってくれるなんて、ありがとう」

カルドについた血を振り払う。

言ってももう聴こえてないが。

携帯電話を出して白瑠さんに電話をした。コール三回目で白瑠さんは出る。

「あれ、つーちゃん。どうかした？」
「いえ、別に？ただそうですねぇ、今日は白瑠さんが殺して構いません。あたしはちょっと……警備員を殺してますので」
あたしはそう言い訳した。が、白瑠さんは悟ってしまったのか、沈黙を返される。
「んひゃあ、楽しそぉなこと、しぃてぇるぅみ、た、い、だねぇ？ずるぅい」
バレた。
笑みが押さえきれないせいで言葉に笑いを含んでしまったせいだ。
「まっ、いいよ。でも命令いちは受けてもらうかぁら」
まぁいいですよ。どうせ些細な命令だろうから。
あたしは立ち尽くす女の子を視て、電話を切った。
女の子と表現するには歳をとりすぎかもしれない。若い娘。
ミニスカートとショートブーツ。惜しみなく出した足。
顔は幼さが残っている。
そんな彼女はあたしの足元に転がる仲間を視て、青ざめていた。
「うっ、ううっ……」
今にも吐いてしまいそうな蒼白の顔。両手に持つ2丁拳銃がガタガタと震える。
「うっ、あぁぁあああっ！！！」

拳銃を二つ、向けて彼女は発砲してきた。
あたしはカルドを捨て、真っ直ぐに彼女に向かって走る。
そして弾丸を避けながら、ナイフを投擲した。
彼女はそれを撃って弾こうとしたが、それは外れる。
ズブッ、と心臓に突き刺さり彼女は倒れた。

「ふん、仲良しごっこかよ。いいスナイパーだったわ、動揺してなければ」

あたしは鼻で嘲る。
仲間が殺されて動揺し、命中力を下げてしまった彼女は小物並のレベルに落ちた。
三人の実力が合わさっているから強い。下手をすれば白瑠さんレベルに近い。
しかし、それはあくまで三人の連携プレーだけ。
それから逃げて撤こうとしたがまさか三人がバラバラになるとは思いもしなかった。
それは三人の致命傷のはず。だから手分けして、などという行動はしないとばかり思っていた。
こちらが有利になったのだ。

「うっおおおぉおおおおおおっ！！」

壁を突き破り怪力男が咆哮して突進してきた。こっちは怒り任せか。
あたしは軽々と避けた。
そしてナイフを投擲。胸刺さったが胸の筋肉が厚すぎて、心臓に届かなかったらしい。
怪力男は拳を暴力的に振るう。
ジャンプしてそれを避ければ、コンクリートに食い込む。その腕に足をついて引っ掻き、爪痕を残す。

「うがあっ！！」

もう片方の腕を振ってあたしを払おうとしたがあたしは容易くかわす。

「知ってた？アンタの攻撃は力任せ。でかすぎる図体は避けやすい。それを二刀流とスナイパーがサポートしてた。スナイパーが攻撃を防ぎ二刀流が隙を突く」

「うがあぁあああああっ！」

「そんなサポートは死んだ」

怪力男は暴れだした。モグラ叩きのように拳を振り下ろしていくがあたしに掠りもしない。

「最強の連携プレーには程遠い。残念でした」

ザクッと背中を引き裂く。それでも怪力男は腕を振るう。大きな的。それを守るスナイパーがいない今、切り裂き放題。筋肉が硬く、切り応えがいい。

怪力男の拳を避け、そして身体を切りつける。

血飛沫が飛んだ。舞うように引っ掻く。踊るように笑って、避けては切り裂いた。

腕を脚を腹を背中をあちらこちらと裂いていく。

血が舞う。そこら中に血が飛び散った。

それでも彼は立っている。意識なんて朦朧としているくせに、まだあたしに拳を振るった。

しかしそれは最後の力だ。拳をついたまま、息をゼェハゼェハとして動かなくなる。出血のせいだろうか。

そんな首を掻き切った。

息の根は止める。
散々踊るようにくるくる回りながら切り裂いたせいで前も後ろも血塗れだ。
ん。久々に血を浴びた。
そうだな…ボディーガードを瞬殺した以来かも。
白のニットも真っ赤に染まる。早く乾かない内に髪を洗わないと。
最初の殺戮後の髪は酷い質だった。
唇の周りを拭う。
そこで気付く。
イアンの前に立つ茶色のコートの男。右手には銃。しかし、その銃口はコンクリートに向けている。
多分、きっと。
怪力男を殺戮していたのを目撃していたらしい。
呆然と、立ち尽くしている。
あたしはクスリと笑った。
滑稽だ、滑稽。なんて傑作。至極滑稽。

「裏側の現実を御覧いただき、まことにありがとうございます」

クスクス笑って舞台の道化の如く、大袈裟に手を振り、会釈する。

「親愛なる篠塚様」

不敵に笑ってやった。篠塚さんは動けずにいる。

「これがあたしです」

おどけて言った。
血塗れのあたし。
殺戮した光景。

殺戮者の素顔。
あたしの正体。
これで解っただろ？
笑って切りつけるあたしがこれでも救えるとでも言うのか？
貴方は、コレを視ても同じことを、言えるの？
　少しだけ待った。
篠塚さんは何も言わない。
何も言えずに立ち尽くすだけだ。
だからあたしは、“何も言えない”と解釈して踵を返した。
篠塚さんの声は追い掛けてこない。
あたしは振り向かず、去った。
彼は境界線を越えずに、ずっとそこにいればいい。
これでいいんだ。
これで。

　ザァアアアアアアアア。
降り注ぐシャワー。それを浴びたまま、あたしは動かない。壁に沿って膝を抱える。白い浴室。
透明の滴は赤に変わり流れていく。
それをただ。
あたしはぼんやりと見つめる。

「生きてる？椿」

ノックして白瑠さんがドア越しに訊いてきた。これで三回目。

「生きてます」

あたしは短く答えた。
生存確認。自殺してやるオーラでも醸し出してしまったのか、白瑠

さんはドアから離れようとしない。
もう少ししたら出よう。
あたしは見つめたまま動かない。
白い床に流れる紅色。
それをただただ、見つめた。
生きちゃってます。

それからだ。
白瑠さんはあたしを病人扱い。
仕事を二三したが簡単であろうとあたしにピッタリと付いて離れなかった。
仕事以外だって何処に出掛けようとピッタリとついてくる。
うぜぇ。
いつまで続くんだろう。
沈黙したまま考えてみた。
あたしは普段通りに戻ったのになぁ。
なんて横たわっていれば、主治医の白瑠さんが顔を出した。

「ちょっと出掛けてくるねぇ」
「はぁ、どうぞ」

漸く監視から解放される、と思った矢先。

「椿ちゃん、出掛けちゃだめなんだからね？大人しくソファでゴロゴロしててね！チーズバーガーはここに置くから！コーラも！ねっ！？」
「……了解です」

過保護にウザさが増してきやがった。
白瑠さんは白い襟付きシャツの上に黒の革ジャンを着て外出していく。

「……」

ソファの背凭れに顎を置いてドアを見つめる。
白瑠さんは何処に行くんだろう。
バルコニーで誰かと話していたような。
あたしはバルコニーに出ようとソファから降りて見付ける。
キッチンテーブルに置かれた白瑠さんの携帯電話。
忘れてる…。
あたしはそれを手にしてバルコニーに出た。
携帯電話の履歴を見る。
登録してない番号。
ん?見覚えがある。
何処で見たんだっけ?
思い出そうとしながらバルコニーから下を視て、白瑠さんの姿を探した。
白瑠さんはバイクで道路を走り去る。
あ、と思い出した。
あたしは確認でその番号に電話をする。

「んだよクラッチャー!まだ何か用なのかよ!?篠塚さんなら待ち合わせ場所に行ったぞ!いいか!?篠塚さんに手を出したら」

聴こえてきたのは、秀介の声。

「…彼、篠塚さんに、会いに行ったの?」
「……え、椿?」

言葉を失う。
白瑠さんがなんでわざわざ秀介を通して会いに行くんだ?
あたしと会ったことがバレた?
何しに会いに行ったんだ?

「ご、ごめん！なんか二人は知り合いで……話すだけって言ってて、心配はないと思う、けど」

慌てて弁解する秀介。

あたしは首を振るう。

「いいの、別に……じゃあね」とあたしは静かに電話を切った。

風が吹いて髪が靡く。

少し考えた。考えたが白瑠さんは篠塚さんを殺したりしない。

大丈夫だろう。

篠塚さんだってあたしが血塗れになって笑ったことを話したりしない。……どうかな。

わかんない。

頭がズキズキする。

考えるのは放棄してベッドに倒れ込んだ。息をつくと、頭痛から解放された。

なんかめんどくさいことが起こりそう。

あーやだやだ。

現実逃避して目を閉じた。

「……」

ちょっとだけ眠ってしまったが、すぐに起きる。

あの夢を見たからだ。

最近付きまとう夢だ。

白い部屋に閉じ込められたあたし。

その白が黒に埋め尽くされる夢だ。

逃げるように起きた。

あたしはポケットから名刺を取る。肌身放さず持っている名刺。

篠塚さんの。

もう一つは、レネメンの名刺。
退院した頃だろうか。
連絡をとったら、白瑠さんがますますめんどくさくなるだろう。
でも秘密にするなら大丈夫。
レネメンに黒の殺戮者に伝言を聞くだけ。
電話するだけで済むなら危険度はない。藍さんが居場所を特定されない細工をしておいたという携帯電話だしきっと平気だろう。
電話してみようか。
あたしは携帯電話の番号を押した。

「椿ぃっ！！」

怒鳴り声が轟いて思わずあたしは携帯電話を切る。ビクゥと震え上がり、背を伸ばしたまま硬直した。
ど、怒鳴られた…。
は、白瑠さんに…。
怒鳴って白瑠さんが帰って来たのだ。
え？何バレたかな？白瑠さんに怒られることのどれがバレたかな！？

「帰る！！」

怒鳴った彼の白いシャツに血がべったりとついていた。ズカズカと部屋に入って荷物を漁り始める。
帰るだって？帰ってきたじゃないか。

「日本に帰るんだ！」
「え、なんでっ…なんで急に、その血」
「いいから早く！」

ベッドに白瑠さんが鷲掴みにした服を次々に投げ飛ばす。トランク

に武器やら服を入れるように指示された。
説明を求めようと開いた口を、閉じる。
――黒の殺戮者だ。
白瑠さんを不機嫌にするのは彼だけ。
その血は黒の殺戮者のものだろうか。
彼は吸血鬼で、死なない。
ついさっき接触でもしたのだろう。
日本から黒の殺戮者が来た。
噂を聞き付けた、或いはレネメンから聞いたのか。
黒の殺戮者が迫っている。
あたしは直ぐにトランクに入れた。
ああ畜生！
白瑠さんを追えば二人の対面を見れたのに残念！

「椿！出るよ！」

まだ服が残っているのに詰め込み終えたトランクを持ち、白の部屋から出ていった。
エンジンがかけられた白のフェラーリに乗り込む。
「くそっ！」と白瑠さんが悪態をついた。
び、びびる。
バックミラーを睨んでいた白瑠さんはアクセルを踏み込んだ。グウンと猛スピードに走った。
後ろを見れば、黒のインパラ。
猛スピードのフェラーリの後ろをついてくる。
こ、こわっ。
白と黒の鬼ごっこ。怖。
白瑠さんの運転はいつもスピード違反だが、黒の運転もブッチ切れだ。
逃がさないつもりなのだろう。

白瑠さんが撒こうと他の車を避けては紛れようとするが、黒のインパラは車と衝突してもお構い無しに突っ走ってる。
遠くで爆音がした。
車が幾つかひっくり返る。
それでも迫りくる黒のインパラ。
あー、そう言えば…計画に邪魔なら容赦なく消されるとかなんとか…幸樹さんが言ってたっけ。
カーチェイスか。
これこそアメリカン。
ひゅー、最後にこんな見せ物をしてくれるなんてさっすがぁ。あっはっはー。
もう遠い目で笑うしかない。
ごめんなさい。やっぱり二人が対面するとこなんて見ません。見たくありません。
隣の白瑠さんのお怒りオーラだけで参っている。
このまま無事に空港に辿り着きますように…。

「椿」
「は、はい」
「撃って」

いきなり口を開いた白瑠さん。あたしの膝の上にショットガンを投げた。
撃つって…。当然あのインパラだろうなぁ…。
断ったら怖いのであたしはドア窓から身体を出して、腰を降ろし狙いを定める。
白瑠さんを信じて周りにぶつからないことを祈ろう。
運転席を狙った。
そこを撃ち抜けばいい。

「……」

ガウン、ガウン！

あたしはタイヤを撃ち抜いた。タイヤは破裂。まともに走れないそのインパラは目の前の車にぶつかって横転。

あたしは直ぐに車の中へと戻った。

「…なんでフロントを撃たなかったの？」

白瑠さんは後ろを確認してからあたしに問う。

「あたしは銃使いじゃないんですよ。髪が邪魔だったし、ひっくり返っただけでもほめてください」

「……ん。ちぇ。また、死なないなぁ」

口を尖らせて白瑠さんは少しだけスピードを緩めて呟いた。

死なないだろうな。

車が爆発した中に閉じ込められない限り。

一件落着して一息つく。

「あー、いててぇ。さっき塞いだ頭の傷がまた開いちゃったよ」

「おい。自分だけ抜け出してないで助けろ」

「今撃ったのが黒猫ちゃんかなぁ？髪で顔が見えなかったよ、全く白（はく）の奴、徹底的に俺に会わせないつもりだぜ」

「おい。今すぐに助けねぇなら、てめえのお遊びに付き合うのをやめんぞ」

「もーう、せっかちなんだからぁ。くはは」

横転した車から這い出た黒は、愉快そうに笑いを洩らした。

「――――この血がこびりついた甘い香りが、紅色の黒猫ちゃんの匂いか」

空港についた頃、秀介から電話が来たのでそれに出た。

「椿！無事！？」

「無事だけど…？」

「白と黒が表で派手にやりやがったんだよ！しかも真っ昼間のレストランで篠塚さんの前でだ！」

「なんですって！？」

思わず声を上げる。

待つように言われて今車の中だ。多分、チケットでも買いにいったのだろう。

誰に話し掛けられても信用するなときつく言われている。

「な、なんで…篠塚さんの前なんかで……何したのよっ？」

額を押さえて冷静になろうと努力をした。篠塚さんに危害さえ加えていなければ多目に見てやる。

「黒の頭を拳銃でぶっぱなした」

吸血鬼の頭を一般人のいるレストランで撃ち抜いたのかよ。その時の血。

「しかも篠塚さんの拳銃」

しかも篠塚さんの！

呻きたくなった。

あたしが殺戮を見せただけじゃなく頭を撃たれても生きている吸血鬼を見せてしまったのか？

なんで最悪なことに発展するんだ。あたしの中に悪魔がいるからか？いるからなんだろ？畜生ーぉ。

「篠塚さんは……？」

「黒を追ってる」

「止めなさい！！殺されるじゃない！」

「はいっ！」

思わず叫んでしまった。

秀介は電話を切って直ぐに篠塚さんの元に向かったようだ。

おいおい。

篠塚さんが黒の殺戮者と会うなんてまじ洒落にならない。頭を抱えてしまう。

ああもう…。

篠塚さんを突き飛ばしたあとにこれだ。

なんでこうなる。

はっきりと境界線を見せた矢先にどうして。

全部墓穴になる。やってきた行為が、頭痛として戻ってきやがる。

あたしはどうすればいいんだ。

あたしはどうしたらいい？

どうしたら救われるの？

――ククッ、邪魔な奴は殺しちまえよ――。

「…！！」

ビクッと肩を震わせる。
詰まる呼吸。咳をして肺に酸素を送る。
声が――――した。
耳から聴こえたんじゃない。
頭の中から聴こえた。

「てめっ……！」
「椿、行くよ」
「！」

その声に話し掛けようとしたのに、白瑠さんが来て車から強引に引きずり出される。
篠塚さんの無事も確認出来ずに、飛行機に乗って帰国をした。

乗り込んだ機内。
白瑠さんは漸く、一息ついて目を閉じる。安心したようだ。
離陸した飛行機にまで来れやしない。もう安心だろう。
あたしは、一難去ってまた一難。
いや、去ってなんかいない。問題は一つも解決してないのだ。
唇を噛み締めて深呼吸をする。

「白瑠さん……ラトアさんと連絡とれないんですが…何か知りませんか？」
「ん？ラトア？んー、さぁ？聞いてないけど」
「……そうですか」

やっぱりラトアさんと連絡がとれないか。くそう。

「椿？どうかしたの？」
「…なんでもありません」
髪を握ったまま俯くあたしの顔を白瑠さんは覗く。あたしは首を振って顔を背いた。
「頭痛？薬もらおうか？」
「いえ……ただ……気分が悪いだけです。大丈夫ですから」
本当に気分が悪い。
あたしは、眠ることにした。
目を開けば、ベッドの上。
白い部屋。出口のない四角い部屋。
ベッドの下から、黒が広がる。
闇のように、全てを飲み込むように、白の部屋を染めた。
――ズキン、ズキン。
頭痛がする。
悲鳴が聴こえる。
息が出来ない。
頭が割れる。
――ズキン、ズキン。
ベッドの上で野垂れ回る。
痛い。苦しい。痛い。
耳を押さえても、聴こえる。煩い。頭が破裂しそうだ。
痛い。痛い。痛い。痛い。
笑い声がする。
――ククク。
喉で笑うあの声。

「椿！」
「っ！！」

夢から目を覚ます。
白瑠さんがあたしの肩を握っている。魘されたみたいだ。
あの夢は、何故か、怖い。
見る度に魘される。
魘されては起きる。
白が黒に変わるその前に、いつも目覚める。

「ちくしょ……畜生！くそっ！くそっ！くそっ！！」
「つ、椿？」

悪態をつく。だんだんと床を踏み潰す。
起きるなり暴れるあたしに戸惑う白瑠さんは顔を見るように顎を掴む。

「ムカつく！！」
「ん、ああ、そうだね、うん」

白瑠さんは何のことか理解していないがうんうんと頷いてあたしを宥めた。
乱れた息を、整える。
深呼吸。

「大丈夫？どうしたの？」

あたしの頬を親指で拭いて、白瑠さんはゆっくりと問う。

「……何故篠塚さんに会いに行ったんです？」

「ん」
「なんでまた彼の前で黒の殺戮者を撃ったんです？」
息をある程度規則正しく落ち着かせてからあたしは問い詰める。白瑠さんはきょとんとした。あたしは彼の携帯電話を押し付けて返す。
「お喋りだなぁ、しゅーちゃんたら」とだけ洩らした。

「つばちゃんと何かあったのかなぁ、って思って。訊きに行ったんだよ。すごぉく悩んでたから、助言してあげようと思って」
「……」
「つばちゃんに訊いても言わないだろ？」
「…そうですね。白瑠さんが黒の殺戮者と一体何やっているかを訊いても答えてはくれないのと同じ」
「……」

頭にきてあたしは禁句にしていたそれを口にした。
刹那黙り込み膨れっ面をしていた白瑠さんは、結局聞き流すことにしたらしい。

「しーのちゃん、俺と話したがっていたし」
「訊けばあたしは答えてましたよ。狩人三人を殺したとこを見られた」
「うん。そうらしいね。しーのちゃんから聞いたよ」
「……彼が、話したんですか」

さらりと答える白瑠さん。
篠塚さんが、話したのか？
一体どうやって？
命の恩人だからって、話すだろうか。

「思い詰めてたから、記憶なくす前の彼のことを教えてあげた」
「え？…知ってるんですか？」
「知ってる。ちょっとだけど話して、そのあと彼は落ちたんだ」

肩を竦めて白瑠さんは答えた。
自殺前の彼と、話したことをまんま話したのだろうか。

「めんどくさかったけど……表と裏についてネチネチ言うからさぁ。
裏現実について話した。んで俺が頭蓋破壊屋だってこと話した」
「じ、自白しちゃったんですか！？」

ガァンとショックを受ける。なんでそんなあっさりと！
裏現実の話まで。
そしたら、白瑠さんは面白そうににんまりと笑みを浮かべた。

「しーのちゃんったら。次会った時は命の恩人であろうと、捕まえるってさ。んひゃひゃひゃ、変わんないなぁ、あの人は」

楽しげに、笑いを洩らす。
強い意志で告げる篠塚さんが簡単に想像できた。
困惑しただろう。次から次へと知らなかった現実を明かされて。
でも、それを受け入れて。
そう決心したのだろう。
頭蓋破壊屋を追い続ける。
そして紅色の黒猫も――――。
　不意に、白瑠さんの顔から笑みが消えて、冷たい瞳に変わる。

「そこにあんにゃろうが乱入してきたんだよ。しーのちゃんを巻き込んだら死ぬから頭撃ち抜いて店を脱出してきた」
「巻き込んだら死ぬから、彼の銃で撃つって間違っていますよね？」

「銃持ってなかったもん」
「頭粉砕すればいいじゃないですか…！」
「頭に弾丸入ってればアイツの仲間が弾丸取り出すんだ。時間稼ぎ」
見てみたいような見てみたくないような…！
乱入ってことは、例の集団と来たのだろうか。その仲間が黒の殺戮者の頭から弾丸を取る光景。……ん。
「あと二ヶ月は稼げると思ったのに……」
「名前を大々的に出すから噂が耳に入ったんでしょ」
「それは藍くんが錯乱させるために出鱈目な情報出してたんだけど」
……。
あたしのせいだぁあ！！
絶対にあたしのせいだ！
レネメンが連絡したんだ。それで見つかった。
じ、自業自得…！
なんてこと……。
普段の行いが悪すぎるのかな。悪すぎるのかなぁ。
何も悪いことしてないよ。
レネメン。君を逆恨みする。
君はあたしを庇ってくれたけど……？
あれ？あたしに伝言ってなんだろう？
「白瑠さん。どうして彼ら追ってきたんです？」
「んー……嫌がらせだよ」
白瑠さんは頭の後ろで腕を組んで、つまらなそうに答えた。
その表情は答える気がないようだ。
あっそ。

あたしは潔く諦めて、そっぽを向いた。
眠れば魘されるから、眠らずただ変わらない景色が映る窓を見つめた。
　これからを考えよう。
幸樹さんか藍さんにラトアさんかハウン君の連絡先を教えてもらったら悪魔退治。
無理ならば兎無さんのもとに新しい武器を取りに行って仕事三昧。
篠塚さんは秀介に頼んで、もう会わないようにしよう。
それからなんとしても、黒の殺戮者の伝言を聞き出してやる。
悪魔野郎のせいだ。もう滅茶苦茶にしてやりたい。
蹴り破って破壊して殴って裂いて切って粉砕して微塵切りにしてしまわなきゃ気が済まない。
悪魔ぶっ殺してぇえ！
暴れたい。くそっ。
機内で殺戮しないように自分の身体を抱き締めて堪えた。
どうにも出来ないならとことん不運に遭ってやる。
殺され死にかけ生存しては殺戮して暴れてやる。
何度でも何度でも。

「はーい」

　カチャリ。
ドアを開いて出てきたのは、女の人だった。
白瑠さんはきょとんとして、あたしはポカンとする。
　確認しよう。
この家は幸樹さんの家のはず。クラウンの隣にレンタカーを停めてトランクを持ち、チャイムを鳴らした。
帰ってくると連絡していなかったからきっと驚かせてしまうと思ったが、思わぬ反撃を喰らった模様。
玄関から訪問者を迎えたのは、女の人だった。

あたしより背の高いセミロングの女性。デニムにブラウス。くりっと首を傾ける仕草からして子供っぽい性格の持ち主と印象を持つ。
しかし、明らかにあたしより歳上の女性。

「え……と……あれ？」

あたし達の手にするトランクを見て、女性はまた首を傾けた。
眼をぱちくりとして笑顔をひきつる。

「もしかして……」
「どうしたんです？由亜（ゆあ）さん」

そんな女性を背中から抱き締めて頬にキスをしようとした幸樹さんは、あたし達を視界に入れてピタリと止まる。

「……おや」

数分の間。それぞれ、その体勢のまま立ち尽くした。
謎の女の人も幸樹さんも白瑠さんもあたしも。
ただただ気まずく居心地悪い空気。

「…おかえりなさい。椿さん、白瑠」

幸樹さんはあの微笑みを浮かべてあたしの持つトランクに手を伸ばした。
あたしはその手が触れる前にバッと手を上げて避ける。
その行動の意味はわかりきってるだろう。触るな。

「……」

あたしが注目される。
女の人は口を開いたまま言葉を失って立ち尽くす。幸樹さんは空回りした手を、キュッと握った。
このまま踵を返して何処かにいってしまいたかったが、他に行く宛なんてない。
それで彼の手を避けそびれた。

「たっだいまぁ！」
「！」

腰に白瑠さんの腕が回って無理矢理玄関の中へと入れられる。

「おかえりなさい」

足を踏み入れて、幸樹さんはもう一度言った。
あたしは眼を逸らす。
白瑠さんにズルズルと引きずられようが、誰とも眼を合わせないようにした。
一ヶ月ぶりのリビングには食べ物の香りが漂う。料理の最中だったらしい。眼を向けた先には、クリスマスツリーがきらびやかに光を放っていた。
そういえば、今日はイヴか。
家の中のクリスマスツリーなんて何年ぶりに見ただろう。

「え、えっと。は、初めまして！アタシは成宮由亜です！紅色の黒猫…じゃなくて！よろしく！椿ちゃん！あっ、椿ちゃんなんて馴れ馴れしいかな？な、なんて呼べばいいかな？んっと…アタシのことは好きに呼んで！」

テーブルについて、たどたどしく女の人は自己紹介した。

「お好きにどうぞ」

あたしは眼も向けずに回答する。

「こうくんの彼女？」

あたしの隣に腰掛けた白瑠さんがズバリと訊いた。

「えっ、えええええっとですねぇ！」と女の人は動揺して慌ただしさを出す。

裏に繋がる人間だから、頭蓋破壊屋に話し掛けられた動揺かもしれない。

「私の恋人です」

そこできっぱりと幸樹さんは言った。

看護婦に手を出していた幸樹さんの、正式の恋人。

「クリスマスのイヴに突然邪魔してすみません。あたしと白瑠さんは藍さんの家に泊まります」

カタリと椅子から立ち上がってあたしは言った。

次から次へと…。

悪魔殺してぇ。

「そんなあからさまに不機嫌な顔で踵を返さないでください。座りなさい。貴女がそんな反応するのは予測してましたが…まさか突然帰ってくるなんてね」

「だって突然だもん」

幸樹さんはあたしを引き留めて溜め息をついた。眼を向けた先の白瑠さんは微塵も反省の色を見せない。

「椿さん。拗ねた顔をせずに一ヶ月ぶりなのですから可愛い笑顔を見せてください」

「拗ねてません」

「万引きがバレた不良みたいですよ」

「元からです」

「拗ねると大変ですね、全く。椿、よく聞いてください。私は貴女を一番、愛してますよ」

「恋人の前でそれはやめてください」

「そ、そう！幸樹さんは椿ちゃんを一番愛してるんだよ！」

「なんで貴女が言うんですか！」

幸樹さんのいつもの台詞。

恋人の前で、と呆れていれば何故かその恋人まで説得するように言った。

思わずあたしは恋人に眼を向ければ、真剣な眼差しをしている。

打ち合わせか、はたまた幸樹さんの調教か。

「嘯くな！愛するなら恋人を愛しなさい！」

「何を言ってるんですか。地球上の男皆の優先順位が恋人ではありません、一番は椿さんですよ。ねぇ？由亜さん」

「はい！幸樹さんの優先順位で一位なのは椿ちゃん！アタシは二番でもそれ以下でも大丈夫だから！」

「大丈夫じゃない！貴女は何を吹き込まれた！？」

「妹は神様」

「何を吹き込んでるんですか！？幸樹さん！」

「幸樹さんなんて他人行儀な…。お兄ちゃん、でしょう？椿」

「留守の間に何があったんですか！！？」

必死な由亜さん。にっこり笑顔の幸樹さん。
二人でどんな打ち合わせをしやがったんだ。
幸樹さんは隠れシスコン？いや…元から過保護だったが。なんだよ、妹は神様って。
隣では白瑠さんが腹を腹を抱えてケタケタ笑っている。

「何があった？……そうですね…貴女には想像できないでしょうね」

寂しげに幸樹さんは微笑んで話し出した。その雰囲気。何か重い事情が…？

「正直、実の妹の咲がいなくて寂しかったんです。この広い部屋で一人で過ごすのは…あまりにも……ね」

目を伏せる姿に、白瑠さんの笑い声も停まる。

「白瑠が転がり込んだあとに椿さんが来た。妹のような貴女に大変癒されましたよ。一番愛しています、誰よりも大切です。そんな貴女が…長い間この家にいなくなって…物寂しくなりました。家にいたくなくなりましたよ…自分の家ですし結局は帰ってくる度に…悲しくて…。とてもとても、花が恋しくなりました。殺風景な家に女性がいるだけで変わりますから。だから由亜さんを椿さん代わりに……」

「椿ちゃんを恋しがってる幸樹さんに漬け込んで誘惑したんです！」

「誘惑されてるのは貴女だ！貴女は騙されてる！」

「うっひゃひゃひゃひゃっ！」

悲し気でシリアスかと思えば途中から逸れた。
亡き妹のあとにそんなことを言うなんてなんて人だ！

花って、飾りかよ！
あたしの身代わりにそしてそんなことを言わされてる貴女が漬け込まれ騙されてる！
全然重い事情じゃねえ！
単なる男と女の事情！
白瑠さんは一人で大笑い。

「あーもういいです！！拗ねてなんかいないですから！イヴに恋人の邪魔なんてできないですから、あたしと白瑠さんは藍さんのとこにいきます！」

二人のなり染めなんて知りたくない。あたしはガタリと立ち上がった。

「藍乃介ならもう時期来ますよ。椿さんが帰ってきたとメールしましたから」
「へ？」
「イヴもクリスマスも藍くんと一緒に過ごすつもりだったの」

幸樹さんと由亜さんが言った直後に、ガチャンッと玄関が開く音が聴こえてきた。噂をすれば影。

「メリークリスマスイヴ！！椿お嬢！！」

廊下をドタドタと走り片膝でスライリングし、両手で赤い包み紙の箱を差し出す藍さん登場。

「早速僕からのクリスマスプレゼントを着てください！」

あたしは無言のまま箱をスルーして藍さんの顔面に足裏で踏みつけ

た。

「ぶっ!?いきなり足蹴!?愛のある挨拶ありがとう!是非これを着てクリスマスパーティーをしよう!!」

メシ。

次は藍さんの頭を踏みつけ、床に叩き付けた。これが足蹴だ。ぐりぐりと踏みつける。

「ひっひぃい…!」と由亜さんはガクガクと震え戸惑う。

「はぁ……空気を読むことを勉強するべきですよ、藍乃介」

「一体何が……?」

白瑠さんはまだケタケタ笑ってテーブルを叩いている。

幸樹さんが溜め息をついて、藍さんは床とキスしたまま問う。

「つ、椿ちゃん!愛の挨拶もそれくらいにしよ、ねっ?」

「愛なんてありません。バイオレンスな挨拶でもありません」

頭を踏みつけるのをやめるように言うのは由亜さんだけ。

なんだ。この人は天然なのか?スーパー天然なのか?天然が幸樹さんに操られてるのか?

なんなんだ、この人。

新しいキャラに顔をひきつってしまう。

「ぐふふ…」

足元で藍さんが笑った。もう足を退けている藍さんはあたしを見上げて何処かを見て笑っている。

怪訝に思い見下せば、藍さんはニコッと笑いかけた。

「僕へのプレゼントは、コレを着てくれるだけでいいから！」

グシャッ、とあたしは藍さんの箱を蹴り飛ばした。それから藍さんの背中を踏み潰す。

「ぐはっ！」

「ひぃい！」

「ぐっ……つーお嬢……なんか暴力的になった……白くん、なにやったの…」

「え？つーちゃんはただ幸くんに怒ってるだけだよ」

「ひぃい！アタシのせいだね！？ごめんなさい！椿ちゃんやめて！アタシが悪いの！足蹴にするならアタシを！」

「貴女は落ち着いてください！」

床にへばりついた藍さんに白瑠さんは平然と返す。

そこで大慌てするのは由亜さん。なんて厄介なキャラなんだ。

「椿さん、落ち着いてください」

「触んな！女たらし！」

「……」

「あ、口が滑った…」

「滑ったって…私がいつ女性をたぶらかしたんです？」

「アレじゃない？車内で女物ピアスを見付けたの」

「え？幸樹って病院のナース全員に手を出してるんじゃなかったの？」

「藍乃介、黙りなさい」

立ち上がりあたしに触れようとした幸樹さんに思わず怒鳴ってしまった。

肩を竦めた幸樹さんに恋人の前で白瑠さんと藍さんはチクる。
幸樹さんは笑顔で踏み潰した。藍さんはじたばたした。少女である
あたしはともかく、幸樹さんに踏まれるのは嫌だったらしい。
あたしが軽蔑の眼を向ければ。

「全員は出してません」
「そ、そうだよ！幸樹さんにだって好みがあるよ！」
「貴方！全否定しなさい！貴女！フォローを間違ってる！」

あたしはビシッと幸樹さんと由亜さんを指差して突っ込んだ。嫌だ
！このカップル！！

「えっと、えっと……ナイスツッコミ椿ちゃん！」
「わざとか？」

可愛い顔して全ては計算済みか。なら尚更酷く嫌なカップルだ！
以前よりツッコミの立場が過酷だ。

「何が気に食わないんです？私は由亜さんとちゃんと交際しているんですよ」
「あたし気に食わないなんて言ってません」
「拗ねた顔をしてます」
「してません」
「では一緒にイヴを過ごしますよね？」

目の前に立つ幸樹さんはにっこりと笑った。
くそっ…。なんでイヴに恋人だけで過ごさないんだ。そんな二人と
過ごすつもりだった藍さんの神経を疑う。存在自体疑う。

「やったぁあ！パーティーパーティー！ケーキは？何ホール！？」

何ホール食べるつもりだ。
白瑠さんは無邪気に笑いだしてケーキを探す。しかしキッチンにはケーキを作る材料なんて見当たらない。冷蔵庫の中にもない。

「予定では貴方が参加しないと思い、一ホールしか頼んでいません。その内届きますよ」
「えー！！……んー、じゃあ……つばちゃんとあとニホール買ってくる！」

ショックで声を上げたが、白瑠さんは直ぐにパッと笑顔を灯して立ち直った。あたしを連れて出掛けようとする前に幸樹さんが首根を掴み止める。

「ひゃ？」
「それなら由亜さんと椿さんに任せましょう。白瑠は報告があるだろ」

にっこり、幸樹さんは白瑠さんに言った。
ね？と由亜さんに視線を向ける。

「あ、はい！じゃ、じゃあ行こっか！椿ちゃん！」
「……はい」

嫌だったが、もう決定事項らしい。どうせ黒の殺戮者の話をするのだから何がなんでもあたしは追い出されるから仕方なく頷く。
白のコートを着て、あたしは由亜さんと街に出掛けた。
気まずい。
ギクシャクした空気だ。
別に拗ねてはいない。

妬いてもいない。
ただ、この人と馴れ合うつもりがないだけだ。仲良くなるつもりはない。
ただそれだけのこと。
別に、拗ねて、なんかない。

「……由亜さん」
「はっ、はい！なにかな？椿ちゃん！」

隣にピッタリと並んで歩く由亜さんはそわそわしていたが、あたしに呼ばれぴしっと背筋を伸ばした。

「裏現実者なんですか？」
「そうだよ！情報屋なんだけど」

情報屋、か。
殺し屋には見えない。

「じゃあ仕事で幸樹さんと会ったんですか？」

別になり染めが知りたいわけではない。ただ会話を繋いでるだけ。

「うん、だけど会ったのは……今年の春頃だったかな」
「ふぅん」
「さ、再会して、寂しがってる幸樹さんの心の隙間に入り込んだの！」
「もういいですからそれ。なんですか、幸樹さんに言うように仕込まれたんですか？」

呆れて肩を落とす。

もういい加減にしてほしい。彼のあれはあたしへの些細な意地悪であって本音なんかではないのだから。それを言い続けるならいじめっ子と認識するぞ。

「あ…これは……付き合う前に何回も言われてたから。アタシを受け入れるのはきっと、椿ちゃんがいないからだって。椿ちゃんは咲ちゃんの分さえも埋めてくれた女の子だから」

実の妹のいない分を埋めた。
兄妹ごっこなんかで？

「幸樹さんったら、椿ちゃんの話ばっかりなんだよ。前は咲ちゃんの話なんてしなかったのに、椿ちゃんはすごいね。想像してたのより可愛いし、幸樹さん帰ってきてくれて喜んでるし」

ふふ、と可愛らしく由亜さんは小さく笑って言う。あたしの視線に気付いてハッとした。

「あっ！ごめんね！のろけを言って！」
「それはのろけと言わないと思いますけど…」

寧ろ逆に嫉妬を込めた愚痴になるはずなのに、この人は何を嬉しげに言ってるんだ。
それに、“あたし”だからじゃない。妹みたいな娘なら、それだけでいいんだ。
あたしはただ。
咲さんの居場所を奪っただけ。
奪ったのがあたしだっただけ。
隙間に漬け込んでいるのはあたし。
幽霊がいるならばあたしは咲さんに絞め殺されてる。

「貴女はいいんですか？」
「え？」
「幸樹さんの一番じゃなくて」
あたしは静かに訊いた。
「幸樹さんが幸せなら、それがアタシの一番！」
由亜さんは迷いなくそう答える。
純愛している人が、ここにいた。
純粋な愛情。
その定義は、それがどんなものなのかはわからないけど。
由亜さんがピュアな人だと、思えた。
嗚呼――――だからか。
――――関わりたくないと思うんだ。

「アタシがモンブランケーキが好きだから届くのはモンブランなんだけど。椿ちゃんはケーキ苦手なんだよね？」

幸樹さんの恋人だから、これからも会うことになるのだろう。出来るなら顔は合わしたくないな。そう思いつつも、対応する。

「ええ、ケーキは苦手なので食べません。白瑠さんが一人で平らげるだろうから、適当なのを買いましょう」

ケーキが並んだ硝子ケースの前でケーキ選び。
甘いものは苦手だ。生クリームとか、クリームとか…。ケーキは一切れでも食べきれない。
白瑠さんの嫌いな食べ物はないだろう。
由亜さんが適当に選び店員に注文してる間に、店の外に目を向けて見た。
丁度見覚えのある人間が目の前を横切る。

「由亜さん、ちょっと待っててください」
「え、あっ椿ちゃん！」

あたしは直ぐに店を飛び出して、追い掛けた。
地味な灰色のマフラーを首に巻き付けた彼の背後まで駆けたが、彼は気付かないまま歩く。
たまらなくなって、あたしは彼の背中に抱き付いた。

「うあ！？」

「よっ！蓮真君！」

ビクッと震え上がる学生服の那拓蓮真はギョッとして振り返る。
そんな彼ににっこりと笑いかけた。只今上機嫌。
しかし、蓮真君の方はあたしを凝視するやいなや、不機嫌そうに顔をしかめた。

「死んだと思った」

そう蓮真君は酷い挨拶を言う。

「失礼な」
「メール二通返事しなかったら死んだと思えって言ったのはお前だろ」

口を尖らせる蓮真君。
あ、そういえば。アメリカにいる最中にメールがきていたような。
仕事中だったり買い物中だったりで返信し忘れていた。

「ごめん、アメリカに行ってたから」
「へぇ、メール一通送れないほど忙しかったんだ」
「そうゆうの、苦手なの。電話してくれればよかったのに。君が頻繁に連絡をとる派だとは思わなかった」

笑ってやれば、蓮真君はムスッとした。おやおや。ご機嫌斜めだ。
一ヶ月会わなかっただけで日本は変わりすぎだ。

「こんなとこに何の用？学校は東京だって聞いたけど…下校にしては方向が違うわね」
「お前の兄貴にお悔やみを言いに来たんだ。確か家はこの辺だろ？」

「君は律義だねぇ、死ぬよ」

あたしが死んだと思ってわざわざお悔やみを言いに幸樹さんの家を探しに来たのか。
実は自殺志願者なのかい？

「お前がちゃんとメールをしないからだろ。指切り魔の件でどっか消えたまま連絡しないから」

ご立腹のようだ。マフラーで口元は見えなくなったが眉間にシワが寄っている。
「心配したぼくがバカだった。お前は紅色の黒猫だもんな」と歩いてきた道を引き返し始めた。

「ちょっと、とっておきの土産話があるんだけど」
「お前が一瞬で百人殺戮しても驚かない」
「きっと驚く」
「へー？なんだよ」

呼び止めた蓮真君はあたしを振り返って向き合う。

「那拓遊太に会った」

その一言だけで効果覿面。
蓮真君は驚いて目を見開いた。

「遊太の、兄ちゃんに？」
「うん。元気だったよ、近い内に会おうってさ」
「まじか！」

パッと蓮真君は笑顔になる。機嫌が直ってくれたようだ。
これでちゃんと無事に再会したことを喜べそう、だったのに水を差すように蓮真君の後ろに由亜さんが立っていた。

「あれ？椿ちゃん、知り合い？」

…げ。
蓮真君は目を丸めて由亜さんを振り返り、あたしの顔を見た。まずい。

「こんにちわ、アタシは成宮由亜」
「こんにちわ、ぼくは…奈乃宮なたく。どうも」

瞬時に蓮真君は偽名を使って由亜さんと挨拶をした。流石頭の回転が早い。元々その名前を使うのに慣れているからだろう。

「ぼくは椿の……」

あたしの隣に立って蓮真君はそこで言葉を止める。
なんて説明する？
昔からの友人だなんて、それは通用しない。あたしの過去の繋がりは断ったこと、幸樹さんから聞いているだろう。
表の名前を出したからには表繋がりにしないと。

「ナンパ」
「恋人」

あたしと蓮真君は見事にハモらせて違う単語を出してしまった。致命的ミス。

「……あたしが逆ナンしたの」
「椿ちゃんが逆ナン？でも…奈乃宮君は恋人って…」
「あー…その、すみません。ぼくが口走ったんです。ほら、彼女のお兄さんが目を光らせてるっていうから……ぼく達、内緒で付き合ってるんです」
「え！？ホント！？」

ミスったからにはそうするしかない。ナイス蓮真君。

「あの、そうなの……。わかるでしょ？幸樹さん達、煩いから。内緒に会ってて…。お願い、皆には言わないでください」

あたしは頷いて、頼み込んだ。
上目遣いで猫なで声。白瑠さん達に使う手が彼女に通じるかどうか。
否、女同士であたしと仲良くなりたがっている彼女ならば。

「うん！！女同士の秘密だね！約束するよ！」

あたしの手を握って由亜さんはそうきっぱりと断言した。

「ありがとう、由亜さん」
「当然だよ！わかるよ、だって幸樹さんは椿ちゃんを一番に愛してるが故に、束縛しちゃうところがあるんだよね。椿ちゃんの恋路はアタシが守る！」

ハン、簡単な奴。
笑顔の裏で鼻で笑い退ける。本当に笑えるな。

「えっと、じゃあ…椿ちゃんはイヴは彼と過ごしたい、のかな？」

「あ、いえ。彼は彼で家族と過ごすんですって。あたしはほら…急遽帰国したばかりだから」

あたしは蓮真君に目を向けてから答えた。蓮真君は何か怪訝な表情を見せたが、とりあえず由亜さんが忘れているであろうケーキの行方を問う。由亜さんは慌ててケーキ屋に戻った。

「なんだよ、逆ナンって。それにイヴを家族と過ごすだって？ウチはクリスマスを祝わない」

「しょうがないじゃない。君を守るために…彼氏って下手したら死んでたよ。彼女が殺し屋じゃなくてよかったわね」

由亜さんの背中を眺め、溜め息を吐く蓮真君が肩を落とす。

「殺し屋じゃないんだ？」

「うん、情報屋だって」

そう答えれば蓮真君は、顔色を変えた。

「情報屋だって？おい…まじでやめてくれ、ぼくの正体は話すなよ。情報屋は一気に噂を広める天才なんだから」

「あーうん。わかってる。遊太から君の存在はバラさないでって頼まれてるし、正体を話すつもりはないわ」

裏現実デビューをまだ許されていない蓮真君は拒む。

那拓家の秘蔵っ子なのだ。

学生の那拓は、知られてはいけない。まだ就職前だから存在は明かせない、と遊太から聞いていた。

それに、由亜さんに明かすつもりは、更々ない。

「その話は近い内にしよう。ちゃんと連絡しろよ？じゃあ」
「うん、またね」

由亜さんがケーキを持って戻ってくるなり、蓮真君はそそくさと離れていく。

「あれ……アタシ、嫌われたかな？」
「いえ」

蓮真君のあからさまな態度に由亜さんは不安げな顔をした。あたしは首を振っておく。
すると蓮真君が引き返してきた。
ずっとズボンにしまっていた寒さで赤くなった手で紙袋を差し出す。

「そない物に渡すつもりだった、クリスマスプレゼントとして渡す。いらないなら捨てて」

あたしがわからないまま受けとれば、蓮真君は背を向けて歩いた。

「お前が好きだっていった花」

それだけ言って、今度こそ帰っていく。
あたしが好きな花の話を、したっけ？首を傾げてその袋を開けてみた。
中には指輪。銀色の指輪だ。花をモチーフにした銀色の指輪。

「それって、蓮華？」
「いいえ……蓮の花」

あたしは微笑んで答えた。

蓮の花。蓮真君と話したっけ。
蓮真君は蓮華は知ってたけど蓮の花は知らなかった。しっかり調べたようだ。
椿の花と蓮の花。

「いい子だね。かっこいいし椿ちゃん好みをプレゼントするし……椿ちゃん、幸樹さんに紹介しないの？」
「裏じゃない人を紹介したら監禁されちゃう」

あたしは指輪を紙袋に戻してコートのポケットにしまった。お返しは何にしようかな。手袋がないみたいだったから手袋にしよう。それまでに買わないでいてくれるといいな。

「ちょっとショッピングモールに寄ってもいいんですか？」

あたしはそう由亜さんに頼んだ。
ショッピングモールで蓮真君のプレゼントを買ってから帰宅した。
欠伸が絶えない。飛行機で睡眠をロクにとれなかった。
だから帰ったら直ぐに、一言言って自分のベッドで眠る。
不思議なほどにぐっすりと眠れた。夢を見ずに、十分に眠れた。

「え……あれ！？」

悪夢を見なかったのも驚きだったが、何よりも窓から差す光に驚く。朝日だ。
慌てて部屋を飛び出してリビングに出れば、飲み潰れてソファに眠る白瑠さんと藍さんがいた。
暴れ放題だったようだ。

「おはようございます、椿さん」

一人、幸樹さんはダイニングテーブルでコーヒーを啜っていた。

「あの、えっと……ごめんなさい、あたしったら……寝過ごしちゃいました」

「何を言ってるんです？まさか、パーティーに参加したことを忘れてたんですか？」

あたしが申し訳なく謝れば、幸樹さんは可笑しそうに笑い出す。

「え？」

「ちゃんと昨夜はパーティーしましたよ。証拠に今、由亜さんが写真を現像してます」

「え……まじで？」

「クスッ…食後に飲んだお酒がまずかったみたいですね。椿さん、次から次へと飲み干してましたから。二日酔いは大丈夫ですか？」

テーブルに両手をついて言葉を失う。断片的に思い出してきた。確かに食事に参加し、皆で撮影もした。…気がする。

そのあとにシャンパン、ワイン、なんか強い酒をどんどんと飲んでいった。…ような気がする。

声にならない悲鳴を出して椅子に座り込む。日本帰国後早々に酔い潰れるなんて。色んな問題のせいだ。

「その指輪…」

「ん？あれ…？」

指輪と言われ自分の手を見れば、左手の中指に蓮真君の指輪が。いつの間に嵌めてたんだ？

「椿さん、指輪はしないのでは？珍しいですね」
「ああ……お気に入りなんです」
「そうですか」

指輪をするとナイフとか持ちにくくなるから普段はつけないが、今日くらいはつけていよう。クリスマスプレゼントなんだから。

「椿さんはお気に入りを大切にしますからね。…よければこれも、お気に入りにいれてもらえますか？」

幸樹さんは細長い包装された箱をあたしの前に差し出した。きょとんとしれば、幸樹さんは微笑みを向けて「メリークリスマス」と言う。

「え…？クリスマスプレゼント？」
「そうですよ。どうしたんです？開けないんですか？」

ぽっかーんと、箱を見下ろす。紅色のリボン。クリスマスプレゼント。

「あ……ごめんなさい、クリスマスプレゼントなんて……何年ももらってなかったから……意外で。あたし、用意してない…」
「一方的に送る予定だったのですから、お気になさらず。開けてみてください」

包装されたクリスマスプレゼントは、本当に久しい。
この包装を破って箱を開ける子供時代は、数えるほどない。
促されて、丁寧に包装紙をとる。
ネックレスの箱だ。
それを開けば、紅色の宝石。

「幼稚に見えるかもしれませんが、どうか大切にしてください」
その宝石は花びらの形で折り重なり、一輪の花になっていた。椿の花だ。
「ありがとうございます、大切にします」
綺麗な一輪だ。朝陽にキラキラ光る宝石に見とれる。
「喜んでもらえて嬉しいですよ」
きっと高いだろう。オーダーメイドかもしれないしルビーかもしれない。
でも喜んでもらう。
「白瑠からもプレゼントがありますよ。起こしてください」
「え？いつの間に？」
「貴女が夕方寝てる間ですよ」
急遽帰国に用意してるはずない。プレゼントなんて用意しなくていいのに。お返しが困るじゃないか。
「朝食を用意しますね」と幸樹さんは立ち上がり、キッチンに向かった。
「あ、椿さん。報告することないですか？」
「え？」
「白瑠とは」
「何もありません」
「そうですか」

清々しい笑顔で頷いてから幸樹さんは朝食を作り始める。
あたしは肩を落として、ソファでワインボトルを握ったままの白瑠さんの元にいく。

「白瑠さん」

呼んで白瑠さんを揺らして起こそうと試みた。
起きない。ぴくともしない。無反応。ただの屍のようだ。

「先生、昏睡状態みたいです」
「フライパンで頭を殴りますか？」
「それはいいですね」

冗談だけど。
ペチペチと顔を叩いても起きない。息はしてる？うん、してる。耳を引っ張ったが、反応しない。

「白瑠さん？はーくーさぁん！」

すげえ、起きない。
背中を叩いても起きやしない。ほっぺをつねってみても反応なし。
まじで昏睡状態？

「耳元で白瑠と呼んでみてください」

幸樹さんの助言通りに耳元で呼び掛けてみた。

「もう少し、囁くように」
「……」

幸樹さんが笑いを堪えているように聞こえるのは気のせいだろうか。
絶対に遊んでない？

「白瑠」
「……んっ」

あ、反応した。

「白瑠」
「んっ…んぅ」

何故大声より囁き声が効くんだろうか。気持ちよさそうな笑みを浮かべた顔をしてる。

「白瑠さん、起きて」
「ふ……んん」
「白瑠さんってば」
「んー、まだぁ」
「今すぐに起きてください」
「んーんー」
「白瑠」
「んひゃ」

起きる気がないらしい。
寧ろあたしの囁き声を子守唄代わりにまた寝ようとしてる。
はぁ、なんであたしは遊ばれるんだろう。力の差？
少し無難に白瑠さんを起こす方法を考えてみた。

「は、くる、さん」

甘く、いやらしく、息を吹き掛けるように、囁く。
その直後に白瑠さんはビクッと震え上がり飛び起きた。ギョッとして耳を押さえる白瑠さんに、ニヤッと勝ち誇った笑みを洩らす。

「メリークリスマス、白瑠さん」
「め……メリークリスマス…椿ちゃん？」

にっこり、と挨拶。白瑠さんも笑みで挨拶を返したが戸惑いを隠せないでいた。混乱中だ。
不意に足元を見てみた。視線を向けている藍さんが床に寝転がっている。

「小悪魔度までアップしたの？」
「メリークリスマス、藍さん」
「ぶふっ！！」

白瑠さんの持っていたワインを藍さんにぶっかけた。

「あっ！つーちゃん！メリークリスマス！」

混乱を忘却して白瑠さんはクリスマスツリーに置いた箱をあたしに差し出す。

紅色のリボン。

「何が入ってるんです？」
「開けてみて」

白瑠さんはウキウキした様子で急かした。まるでクリスマスのプレ

ゼントを開ける側の子供みたいだ。
丁寧に包装紙を外して箱を開けば、ナイフが二本。
白い光を放つ刃には模様が刻まれていた。特注品に違いない。
片方には椿の花。もう片方に猫のデザインが刻まれている。
なんともかっこいい。

「かっこいい…。ありがとうございます、白瑠さん」
「んひゃ！どういたしまして！」
「椿お嬢！僕から！」
「試し切りにされたいの？」

お礼を言うと白瑠さんは嬉しげに笑い返した。早速使ってみたいな、と思った矢先に藍さんが箱を差し出す。ギロリ。

「いやっ、違うよ！昨日のサンタコスとは別のプレゼント！」
「サンタコスだったんですか」
「ぷっ！椿さん……貴女昨日着たじゃないですか」

幸樹さんがキッチンで吹き出す。…おや、あたし、とんでもない醜態を晒していたもよう。
あの蹴り飛ばした箱の中身はサンタクロースのコスプレ衣装。酔っ払って着てしまったようだ。
ショックを受けつつも藍さんのプレゼントを開けてみた。
中には紅色のコート。
新しいデザインの仕事用のコートだ。今度のはフード付き。
あたしはそれに袖を通してフードを被った。

「どうです？幸樹さん」

コーヒーテーブルの上に乗ってキッチンの幸樹さんに見せる。

「お似合いですよ」と幸樹さん。

「ありがとうございます、藍さん。……でも、どうしよう。あたしは用意してないんです」

「大丈夫。つばちゃんの笑顔と」

「サンタコスで十分！」

グウと親指を立てて満面の笑みを向ける白瑠さんと藍さん。それほどサンタコスがよかったらしい。

「うー、二日酔いだー」

「おっ、とっと」

「ひゃあ、つばちゃん」

藍さんが立ち上がろうとして失敗。踏み台が揺らされあたしは転倒しかけたが、白瑠さんの上に着地。白瑠さんはギュッと抱き締めた。頬擦りしてくる。まだ酔ってるのか？

「白瑠さん、次の仕事は？」

「ひゃあ？つーちゃんたら、一週間ぐらい休んだら？」

「疲れてないんですから、休む必要ありません。白瑠さんはお疲れなんですか？」

「んひゃひゃひゃ。しょうがなぁいなぁ」

うん。単に黒の殺戮者に会った後遺症のようだ。必要以上に抱き締めてすがり付く。

「じゃあ皆揃ったことだし、皆で大仕事やっちゃう？」

二日酔いに唸りつつも藍さんが提案をした。皆で思い出す。

「あの、ラトアさんと連絡は取れませんか？」
「んー？ラトアとは連絡してないよ、つかするようなタイプじゃないじゃん」
「つばちゃん、最近ラトアばっかだよねぇ。そんなにラトアに会いたいのぉ？」
「ラトアさん、てかハウン君に会いたいだけです」

ラトアさんもハウン君も、連絡をこまめにするとは思えない。寧ろ携帯電話を持たなそうなイメージがある。現に二人は携帯電話を持たない。

「あー、あの吸血鬼少年？つばちゃんに馴れ馴れしかった」
「べったりでしたよね。まぁそのおかげで椿さんは悪魔から救われたんですから。朝食できましたよ」

幸樹さんはもうダイニングテーブルに朝食を並べていた。二日酔いの藍さんに手を貸して皆というメンバーでテーブルにつく。
救われたなんて嘘。
ジェスタは歪曲した。
それは今現在もバレていない。
悪魔はまだあたしの中だ。
空港以来、未だ悪魔は沈黙したまま。ジェスタに会うまで沈黙していてほしい。
まずい状況。
吸血鬼がいない今、叫ばれたらジエンドだ。
今なら仕留められるというのに、どうして悪魔は黙ったままなんだろう。何を企んでいる？

「どうしてハウンに会いたがってるのですか？」

二日酔いの為の軽い朝食を食べていれば幸樹さんが訊いた。
話せば総出でジェスタを探してくれそうだが、嘘ついたジェスタはボコボコにされるだろう。話すのはやめようか。話さない約束だし。

「特に理由もなく、ただ会いたいだけです」

あたしはそう返答して項垂れる藍さんの看病をしてやる。
あたしも悪魔も、黙っていれば白瑠さん達にバレない。黙っていれば。

「どうやったらハウン君に会えるんでしょうか？」
「神父ヴァンパイアといるなら彼を見付ければ？」
「どうやって」
「ラトアなら自分の仲間なんですからすぐ見付けられますよね」
「そのラトアは音信不通ぅ」

連絡の取りようがない。
やはりラトアさんから見付け出さないとハウン君にジェスタには会えそうにないようだ。

「ラトアから連絡くるまで待つしかないようですね」

早めに、くることを願う。
隠密に悪魔を退治したい。

「それで、大仕事はどうするんです？」
「ん！遠くがいい！」

仕事の話に話題を戻せば、白瑠さんが挙手した。

「なるほど、遠くですか」
「んー、そうだねー。遠征の仕事もいいよね」
その意見を受け入れる幸樹さんと藍さん。遠出にする理由はわかってる。
きっと黒の殺戮者を撒くためだろう。藍さんもガセネタで撒き続けるはず。一定の地域だけは避けて仕事をするのか。
いつになったら、それは解決するんだろう。
問題事が次々と増えて最悪だ。
悪魔に黒の殺戮者に篠塚さん。あたしの頭痛の種。
「あ、皆さん！メリークリスマス！」
そこに由亜さんが戻ってきた。家の合鍵を持っているところを見れば、戻ってきたというより帰ってきたというべきか。
現像から帰ってきた由亜さん。
「あ、由亜っち。仕事で遠くの地域に行くつもりなんだけど、なんかない？」
「遠くの地域？関西とかかな？」
「たこ焼き！！」
「関西イコール関西ですか…」
「ついでに観光できるところがいいですね」
「温泉がいいとこ知ってるよ！椿ちゃんどう！？」
「温泉いこぅ！」
「温泉いこー！」
「下心が丸見えだ！！」
目の色変えた中学レベル二人の頭を叩く。一名二日酔いのおかげで

大ダメージ。
暗殺のついでに観光なんて、気楽すぎではないか。
まぁいいけど。

「由亜さん。写真みせてください」

あたしは由亜さんから写真をもらう。やけに分厚い。たくさん撮ったようだ。
一枚目の写真。
サンタコスのあたしと由亜さんのツーショットだった。
うげっ…。あたしまじで着たのかよ。
ヘソだしミニスカのサンタコス。超ノリノリにポーズを決めてやがる自分。
「あーつーちゃん可愛い可愛い」とその写真を手にクスクス笑う白瑠さん。
その他の写真もパーティーでハメを外し、酒を飲み続けてばか騒ぎする様が、ありのままに写っていた。
なんてこった…。
頭が痛くなりそうだ。
シラフの写真も発見。
一同が並んでいる写真だ。
なんだか、まるで。
家族写真みたいな一枚目に、呆然としてしまった。
家族写真なんて滑稽な比喩だ。
家族写真なんて、嫌いなくせに。いつも嫌々だったのくせに。
なのに、写真の中の少女は嬉しげで、もっと言えば幸せそうに笑っていた。

「この写真、あたしがもらってもいいですか？」

家族写真なんて嫌いなくせに、その写真を欲しがった。

猫と鼠の指切り

「ねぇ、仕事先にしゅーちゃんがいたらどうするぅ？」
「不吉なことを言わないでくださいよ」

藍さんのバンの中で、トランプゲームをしていた。
仕事先は京都に決まり、そこに行く最中。
幸樹さんと由亜さんは別の車だ。

「俺が勝ったらつばちゃん舞妓やってね！」
「絶対に勝ってよ！白瑠！」
「二人の団結はそればっかですよね」

京都関連での話題で持ちきり。
白瑠さんは八つ橋やらあじゃり餅やら食べ物の話ばかりだし、藍さんは舞妓コスに巫女コスの話ばかり。
残念ながら、あたしが勝ちで舞妓コスは阻止した。
京都市で観光した後に予約した宿で一休みの直後に仕事。
仕事の方がついでみたいな予定だ。
しかしそんなことは誰も突っ込まず一同で仲良く出発した。

「えぇ！？椿ちゃん、舞妓やらないの！？」
「そんなに驚かれても……。寒いですし嫌ッス」

京都市について幸樹さん達と合流。

「さて、どこから行きますか？」
「京都タワーかな？」

「八つ橋！」
「可愛い女の子が通う小学校！」
「やめろ。てか今冬休み」
「ぐは！！痛恨のミス！！」
「お前まじで捕まれよ」
「そっか！藍くんの対応はそれが基準なんだね！」
「そうです、由亜さんもやってみてはどうですか？」
「が、頑張ってみるよ椿ちゃん！」
「頑張ること！？いじめだよ！由亜っち！」
「じゃあ右から行きましょうか」
「八つ橋のにおい！」
「どうしてにおうのかがわかりません……」

騒がしく集団で移動して行く。
六時まで観光を楽しみ、それから宿の温泉。夕食に支度を済ませていざ仕事。

「恋愛成就の神社に行こうよ！椿ちゃん！」
「先ずは厄払いを受けたいです」
「女の子が恋愛成就より厄払いですか？」

クスクスと幸樹さんが笑う。いやあたしはまじで厄払いをするべきだ。幸樹さんだって厄年だって断言したじゃん。
「安全祈願のお守りは買っておきましょうか」と幸樹さんは意地悪を言う。
白瑠さんが八つ橋を三箱購入したので、神社へと向かった。
本当に幸樹さんは安全祈願を買いにいって、あたしと由亜さんは恋愛成就の参拝に向かう。

「そうだ、椿ちゃん。奈乃宮くんのお土産は決めてる？」

「え？あ…いえ。蓮の花をモチーフにしたものをお揃いで買いたいと思ってますが」
「そっか！奈乃宮くん、幸樹さん達に紹介できるといいね！」

紹介しないことを祈りたい。
恋愛成就、ねぇ。
あたしは素敵な出逢いでも乞うか。そうだな。イケメンで優しくて変態じゃなくてまともな人と、素敵な恋に落ちて末永くラブラブしたい。なんて。
やっぱり恋愛より問題解決について考えるべきだ。
付き合う気ないし。
んー、そうだな。
付き合う気になる、相手に巡り会えますように。
愛せる相手に会えますように。
末永く、愛せますように。
――――ズキッ。

「っ…」

こめかみに走る一瞬の痛み。

「椿ちゃん！蓮の花見に行く？」
「蓮の花が咲くのは夏です」
「蓮の花の噴水が大学の隣にあるんだって！椿ちゃん好きなんでしょ？」
「流石情報屋ですね」

今回は由亜さんの情報も武器にしてる。藍さん曰くネット上から集められない情報は、由亜さんが掴むとか。情報は武器だ。
そんな藍さんは意外にも、白瑠さんと一緒に逆ナンに遭っていた。

相手が少女じゃなくてげんなりしている。白瑠さんは笑って対応してたがあたしを見付けるなり駆け寄った。藍さんも逃げ出して駆け寄る。

「もう最悪だよ！女の子いないし！」
「いませんよ、こんな季節。夏前なら中学生が溢れてたでしょうね。はい、椿さん。お守りです」
「あざーす。はい、藍さんにも恋愛成就のお守りをあげます。寧々ちゃんと結ばれますように」
「あ、はは…あ、ありがと……お嬢」
「あれ！？藍くんに好きな娘がいたんだ！」
「あ、はははっ」

乾いた笑いしかでない藍さんはそれでもあたしからお守りを受け取った。細やかな嫌がらせだ。

「恋愛成就なんて…椿ちゃん、好きな相手がいるの？」
「いませんよ。素敵な出逢いを願いました」
「…ふぅん」

疑いの目を白瑠さんに向けられたが、回避した。

「アメリカで出逢いなかったの？」
「声をかける男は無視しろと言ったのは藍さんです」
「やつらはヤり目だ！！」
「断言するな、変態」
「ほら、次行きましょう」

先導するのは幸樹さん。
止まらずに、観光しにいった。時間が許す限り遊んだ。

十分に楽しんだあとは和風の宿。
荷物を運んですぐに由亜さんに手を引かれて温泉に向かった。

「あれ、椿ちゃん。なんでナイフを持ってるの？」
「覗きをするアホに投げるためですけど」

露天風呂に出てナイフを所持していたのは正解だった。本当に覗きに来やがった二人を、ナイスを投げつけ追い返す。
暫くはゆっくりと寛げる。
ホッとして息をつく。熱いくらいのお湯にすぐにのぼせてしまいそう。

「すべすべになりそうだね！」
「そうですね」

自分の腕を撫でる。温水の効果はわかんないけど、なんとなく肌艶がよくなりそうだ。

「あったかいね。冬にはやっぱり、温泉だね！」
「……そうですね」
「…あれ？温泉嫌い？」
「好きでもないです」
「嫌いでもない？」
「そうですね、なくても別に困りません」
「え、遭難のあとはどうするの！？」
「遭難のあとに温泉に入る掟があるんですか？」

この人、ぬけてる。
「好きか、嫌いか、なくても困らない、が基準なのかな？椿ちゃんの」

「好きか嫌いかどうでもいい、ですね」
「じゃあ幸樹さん達は好きなんだね！」

妙なことをいきなり言いやがった。天然さん。
まぁあれか。ライクの好きだよね。

「どうでもいいなわけないもん！あれ？アタシはどうなのかな？…
もしかして…嫌い…だったりする？」

満面な笑みを浮かべた由亜さんが急に不安げな顔になった。きっぱり言える相手ならば、少しは好意を抱けたんだけど。

「好きですよ」
「ほんと！？よかった！」

単純でめんどくさい人だ。
嗚呼、めんどくさい。

「はぁ、仕事だねぇ。アタシは待機だけど、椿ちゃんは大仕事。気を付けてね？」
「はい」

仕事か。
湯気と一緒に白い息を吐く。

「仕事だ」

温泉からあがり、脱衣室に戻った。
それから夕食を済ませる。

「うひゃあ、椿ぃ。湯上がり色っぽい」
「あの、着替えるから出てください」
「手伝うぅ」
「またナイフを投げ付けられたいんですか？」

夕食からデレデレした白瑠さんを追い出すのは、一苦労だった。若干のぼせた顔が色っぽいのは謎だ。
新しい紅色のコートを着て、寒いからズボンを履いてブーツを履く。

「……はぁ、パグ・ナウ取りにいかなきゃ」

旧パグ・ナウの機能を確かめながら、呟く。兎無さんから新パグ・ナウを受け取らなきゃ。一ヶ月以上は待たせてしまっている。
もう完成しているだろうし、新パグ・ナウを使いたい。
由亜さんを口実に使って蓮真君に会いに行く前に取りに行こうか。
先ずはこの大仕事を片付けよう。
今回の獲物は企業関係の社長兼裏現実者。場所は高層ビル。残業しているはずの標的を、静かに殺しに向かう。
今回は狩人なし。
標的は自分が狙われていることを知らないから、狩人はいない。そう藍さんは得意気に断言した。
障害物はマシンガンを所持していない警備くらい、の楽な大仕事。
かけられた金が大きいだけの仕事だ。

「じゃあ俺は裏から」
「私と椿さんが表から」
「よし！アレをやりますか！」
「やっぱり…」

それぞれ右手を重ねる。

「えーと……チームらぶかっぷる！」
「はは、ありがとう。白」
「…ちゃんとチーム名を決めません？」
「チーム頭蓋破壊屋にチーム紅色の黒猫に続いたからぁ、チームＩ・ＣＨＩＰにしよう！」
「アイチップ？なんスッか？」
「僕のコードネームだよ。普段はＩって短く名乗るけど」
「へぇ。じゃあ次回は幸樹さんのコードネームをつけるんですか？」
「チーム串刺しドクター？」
「刺しますよ、藍乃介」

そんな会話をしつつ、無事生還を祈りパッと放した。
行動開始。
あたしは幸樹さんと行動することになった。多分、あたしがまた怪我しても治療できるようにだろう。心配性だ。

「……あれ？」

バンから降りて、高層ビルの入り口に立って首を傾げる。

「警備……がいるはずですよね？」
「そのはず、ですが」

入り口に警備員が一人もいなかった。直ぐに幸樹さんが通信機で藍さんと連絡をとる。
藍さんはビルのカメラをハッキング済みのはず。

「可笑しいな……警備員が何処にもいないよ」

藍さんの返答はそれだった。
唯一の障害物である警備員が、何故いない？
疑問に思いつつも、あたしと幸樹さんは中に入った。

「この曲……」
「…たしか『刀の舞』ですね」

中に入ればビル中に響く音楽。
フロアだけじゃなく、建物全体に響いている。
あたしと幸樹さんは怪訝な顔を合わせてから、それぞれ武器を出して歩み出す。

「この曲は萎えますね」
「そうですか？ノリノリになりません？」
「ノリノリに殺しをやるなんて想像しただけで吐き気がします。藍さん、この曲を停めてください」
「ラジャー」

エレベーターに乗り込む前に藍さんに頼んで入った。
入るなり気まずい沈黙。
エレベーターは静かに上へと上がっていく。

「由亜さんとはどうですか？」

きた。幸樹さんは嫌な質問をする。その為の同行でもあるのだろう。

「仲良くやってますよ」
「彼女のことは好きになれそうですか？」
「好きですよ」
「そんなつれない顔では到底信じられません」

「本当ですよ、悪い人じゃないもの」
「いい人でも好きになれないでしょう？」
「……あたしが嫌っては困るんですか？」
「ええ、だって私は貴女が一番」
「それはもういいですから」

肩を落として溜め息をつく。
由亜さんが悪い人じゃなくいい人だ。あたしと仲良くなりたがっているし、愛想もいい。
ただ、あの人が、あまりにも純粋すぎるから。
出来るなら、関わりたくない。

「藍。息を潜めることだけはしないでくださいよ、白もです」
「んひゃあ、ごめんごめん。二人でする話かと思って」
聞き耳を立てられちゃ二人の話にならない。
白瑠さんから返答はきたが藍さんから返答がなかった。

「藍さん？」
「緊急連絡！」

すぐに藍さんから返答が帰ってきた。

「幸のハートを射止めた由亜っちからの緊急ニュース！」
「なんですか？藍」
「殺し屋二名を目撃だって！先客がいる！」

先客。なるほど、警備員は殺られたようだ。ライバルに先を越されている。
あたしは舌打ちを洩らす。

「待ってください、まだ先を越されたとは限りません。藍、他に情報は？」
「殺し屋は、指鼠と電鼠。指鼠は知ってる、アイツは多才な奴だ。やればなんでもできるって意味。今流れてる曲だって、アイツが流してやがる。今すぐ停めるよ、僕の才能にかけて！お嬢！」
「――――指鼠だって？」
後半から藍さんの話は聞こえてなかった。押さえきれずニヤリと笑ってしまう。
「椿さん？……それでは、標的変更。白、指鼠の方は椿さんの獲物だそうです」
幸樹さんは怪訝に顔をしかめたが、すぐに理解したようで笑みを浮かべた。
「ひゃあ？そういえば、お嬢様のお屋敷にいたねぇ。指鼠。つーちゃんどんな知り合い？」
「殺したい知り合い」
くるくる、とカルドを回す。殺したい。こんなにも早くあの野郎と再会できるなんて。殺してやる。
今日こそ、あの野郎の息の根をとめてやる。
「クスッ……おやおや、とても親しい仲のようですね」
「ええ、とっても。今すぐ会いたいです」
じっとしてられない。
今すぐにあの野郎の血がみたい。

幸樹さんは面白そうにあたしの表情を眺めた。

「殺戮者らしい顔ですね」

「鼠をいたぶりたい顔です」

幸樹さんは近くの階に停まるようにボタンを押した。

エレベーターはすぐに停まり、扉が開く。

そこに、男が一人立っていた。スキンヘットで黒いサングラスの黒ずくめ。

殺し屋だろうとそうでなくとも、殺すだけだ。

最初に動いたのはあたし。

カルドを振り上げて飛び掛かる。

男は片手で受け止めた。カルドの刃を。分厚い手袋、切れない。ガッチリと掴まれている。

直ぐにパグ・ナウを出し、首を狙おうとしたら手袋の指先が光った。

次の瞬間。あたしの身体中に電流が駆け巡った。

「っあぁぁ！」

「椿！」

電流で身体が麻痺してあたしはその場に倒れ込む。手袋から電流が走っていると気付き、幸樹さんも下手に攻撃が出来ない。くそ、身体が動かない！

電鼠って。電流の電かよ。ナンセンス！

幸樹さんが先に仕掛けた。錐状のナイフを投げ付ける。それは電鼠に突き刺さったが、身体ではなく防具に突き刺さったようだ。

つまりダメージは受けていない。

ある程度身体の麻痺が緩んだあたしは手をついて、それを支えに電鼠を両足で蹴り飛ばした。

電鼠は吹っ飛ぶ。

「椿！大丈夫ですか？」
「右手が…麻痺して……鼠なんて大っ嫌い！」
なんとか幸樹さんの手を借りて起き上がる。カルドから伝わった電流のせいで、まだ右手が機能しない。
電鼠が起き上がってこちらと向き合う。

「コイツを殺して指鼠を殺す、作戦でしたっけ？」「いいえ、私が電鼠を殺して貴女が指鼠を殺す作戦ですよ」

そんな会話をしつつ、目の前のコイツを殺す方法を考える。
あたし達の武器は刃物。
接近して切りつけようとすれば掴まれ電流を流される。投擲しては防具に防がれ仕留められない。
狙うは掴まれないように鎧がついていない身体を切る。首から上とか。

「欲張りはいけませんよ」
「いいじゃないですか、一皮くらい剥いでも」

呆れた声をかけられるがまだ右手が痺れているんだ。ちょっとくらい引っ掻いてもいいだろう。
あたしは幸樹さんに目配せをして膠着状態に終止を打つ。
床を蹴って飛び、壁に足をつけて二三歩。そこからパグ・ナウを振り下ろす。
三つの爪を、電鼠は案の定受け止めようと右手をつき出した。
そんな手と繋げるつもりない。手首を返して、電鼠の手首を掴む。
電流が流れているのは掌か指先のようだ。
壁を蹴り宙返りするあたしに今度は左手をつき出す電鼠のその腕を

避けて右手で掴む。両手を掴んだ。
　次は幸樹さんが、動く。
無防備の首に幸樹さん愛用のナイフが突き付ける。
しかし、電鼠が左腕を捻ったことで両手の拘束が解けた。痺れの残ったあたしの右手は容易く放してしまう。
ナイフを持つ幸樹さんの手を、黒ずくめの左手が掴み、そのままあたしの腹部に食い込ませた。
その一撃にあたしは壁に叩き付けらる。
両手が自由になった電鼠は右手を拳に固め、バチバチと弾いた音がするそれを、幸樹さんの腹部に叩き付けた。
　バチッ！
感電した音のあと、殴り飛ばされた幸樹さんはエレベーターの中へと吹っ飛び、ガタッ！と壁にぶつかる。今のはあたしの身体を一時的に麻痺した電流とは桁が違う吹っ飛び方をした。
あたしが呼び掛ける前にエレベーターはガタンッと言う音を鳴らす。気を失ったのか動かない幸樹さんを乗せたエレベーターは、扉も閉めないまま下へと下がった。

「幸樹さん！！」

間に合わず幸樹さんが見えなくなってから、エレベーターの上に人がいることに気付く。
悠長にそこに座るムカつく笑みを浮かべた指鼠。

「よぉ、また会えたな。仔猫ちゃん」
「…アンタにそう呼ばれるとヘドが出る、クソ鼠」
「仔猫ちゃんにわかるように状況を説明してやる」

あたしはエレベーターの前の壁に背中を向け、殺し屋二人に隙を見せないように構えた。左手にカルド。痺れが取れた右手に白瑠さん

から貰った猫の絵が刻まれたナイフと、投擲ナイフを二つ。
指鼠はエレベーターから降りて、手にするミニのノートＰＣを弄った。

「後ろで寝てるお前の仲間をこのエレベーターごと落とせる」
「……あら、一人じゃああたしに勝てないからってみみっちいことやるのね」

やっぱり幸樹さんは気絶してしまったのか。あたし達が入ってきたことは防犯カメラで既に気付き罠を張ったと言うわけか。癪だが、罠にハマったようだ。ムカつく。
藍さんは一体何をしている？

「噛み付くな。お前が群れてなきゃこんな手は使わない。決着は正々堂々つけたいからな」
「よく言うわね、この前は頭蓋破壊屋にビビってずぶ濡れで逃げてったくせに。エレベーターに入れるのは彼の方がよかったんじゃない？来てるの知らなかったわけ？」

あたしの皮肉に、指鼠はニヤリと笑った。とても不快な笑み。

「知ってるさ。今頃ターゲットがいるはずの部屋に入るとこだろうな。なぁ、教えてくれよ、頭蓋破壊屋の恋人さん。怪物の頭蓋破壊屋は一階が吹っ飛ぶ火薬にも負けないのか？」

吹っ飛ぶ――――火薬。

「ばぁん。って、ドアを開けた瞬間の爆発でも、死なない人間なのか？」

爆発――爆発事件。
ホテル爆発事件の犯人はコイツだ。爆発つまりは爆弾。
爆弾が仕掛けられている。

「白瑠さんっ！！ドアを開けちゃいけません！」

あたしは形振り構わず殺し屋に背を向けて階段に繋がる廊下を駆け出した。通信機で呼び掛けたが返答がない。
藍さんからも返答がないところをみれば、指鼠に遮断された可能性が高い。
その時だ。
上から爆音が響き、建物が震動してあたしはよろめいて壁にぶつかった。
爆音。
爆発。
爆死。
白瑠さんは、開けた。
爆弾が仕掛けられた扉を。いくらあの頭蓋破壊屋の白瑠さんだって。
白の殺戮者の白瑠さんだって。
黒の殺戮者と対等に名を馳せる白瑠さんだって。
人間だ。
吸血鬼じゃない。
地雷を踏んだも同然。
――死んだ。
ドクドクドクドク。
心音が速くなる。
ズキズキする頭部。
ドクドクドク。
息が荒くなる。肺と心臓が張り合っているようだ。
ドクドクドクドクドク。

歯を噛み締める。こうしないと訳もない理解不明の言葉を叫びそうだからだ。

ドクドクドクドクドク。

彼に貰ったナイフを見下ろす。白銀の刃。その刃を左手で握り締める。鈍い痛みがピリッと走った。

ドクドクドクドクドク。

傷口から脈が伝わる紅。紅い血をギュッと握り締める。

紅い血がついたナイフを逆手に握り直し、パグ・ナウを引っ込み、投擲ナイフを持てるだけ握った。

振り返り、躊躇なく、向かう。

全ての投擲ナイフを放り投げる。

指鼠は避けるためにエレベーターに戻り、電鼠は急所にくるナイフだけ叩き落とす。

他のナイフは鎧に突き刺さる。そのナイフを狙って、飛び蹴りをした。

そのあとに指鼠がナイフを振り上げてくる。あたしは白銀のナイフで、それを防ぐ。

パグ・ナウの爪を出して、左腕を振り上げた。

仰け反って指鼠は避け、首筋に掠り傷だけが残る。

ガッ、と足首を掴まれて引っ張られてあたしは倒れた。

電鼠だ。まずい。パグ・ナウを振ろうとしたが、その手を指鼠に踏み潰された。

「うああっ！」

電流が走って悲鳴が上がる。

電鼠が右手を握って電流を流し、あたしは床に平伏す。

「あれあれ、仔猫ちゃん。何を鳴いてるんだよ。そんなに恋人が爆発したのが痛かったのかよ？」

「っ！あああ！」

立ち上がろうとすれば、電流が流されて痛みと麻痺に悲鳴が上がった。

あたしは睨み付ける。

コイツに見下されるなんて、なんつー屈辱だ。

「ってめぇの決着がコレかよ！溝鼠！」

「喚くなって、仔猫ちゃんよぉ。世の中にはルールがある。ルール、掟、つまりは約束だ。お前に正々堂々決着をつけようと、言った覚えはない」

しゃがみ込んで、あたしの髪を鷲掴みする指鼠。

「でも、まぁ…正々堂々じゃないか？恋人の頭蓋破壊屋は場外だし、二対二だろ？」

そう嘯く指鼠に殴りかかろうとしたが、電鼠に押さえ込まれて動けない。

「仕事だっておれが二勝してる。頭蓋破壊屋にもお前にも。お前の負けだ――紅色の黒猫」

ニヤリと指鼠は勝利宣言を告げる。そしてナイフを翳した。

「貰い損ねた指は、貰っとく」

ハッ、とあたしは鼻で笑う。

「てめえのおやつにされるのは御免よ」

「勝利宣言は、殺したあとにするべきですよ。指鼠」
「！！」

指鼠の後ろに、幸樹さん。
無防備に晒す指鼠の背中に、幸樹さんはナイフを突き立て壁に押し付けた。
もう片手に電鼠を狙う。それを避ける為に、あたしの上から退く彼にパグ・ナウを振り下ろすが、それも避けられた。

「ぐっ！」

しかし、形勢逆転。
幸樹さんが指鼠を押さえ込んでいる。

「ふむ、なるほど。確かホテルの爆発事件、あれも貴方の仕業ですよね、指鼠。なら私が一刺ししても構いませんよね？椿」
「ええ、どうぞ。苦痛さえ与えられればあたしは満足です」
「だそうです。うちの黒猫が最高に不機嫌みたいですよ、指鼠」
「ぐぅ！」

電鼠を睨んでるから幸樹さんがしていることはわからないが、どうやらナイフでぐりぐりとほじったようだ。

「作戦は変わりませんよね？」
「ええ、私が電鼠の息を止めて貴女が指鼠の息を止める」
「はんっ！仔猫ちゃん、どうした？立てないのかよ？」

指鼠の嫌味に振り返って睨み付ける。確かにあたしは座ったままで電鼠と向き合っていた。
パグ・ナウで支えたが、二本足で立てそうにない。

幸樹さんと目が合う。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ですとも」

あたしはしゃんとして返す。

だめだ。三度の電流に身体が眠ってしまいそうだ。

大丈夫じゃないが、立ってやる。

壁に爪を立てながら、二本足で立つ。よろけないように踏ん張る。

「おい、黒猫。向かい合う相手が違うんじゃねえのか」

「……るせーよ、溝鼠」

吐き捨てあたしはスタートダッシュをする。電鼠に向かって拾ったカルドを振り上げた。

受け止めようとしたのを見て、瞬時にカルドを逆手に持ち変えて手首を切りつける。腕には鎧をつけていないようだ。

血が吹き出し、頬に飛ぶ。

ニヤリッと勝ち誇った笑みを向け、痛みで歪んだ顔目掛けて振り上げた。が、今度は止められる。

しかし、また電流を流され押さえ込まれるヘマはしない。

パッと手を離して電流を避ける。空いた右腕を使って顔面に肘を打ち込んだ。

もろに食らった電鼠は後ろに倒れた。

「紅色の黒猫さん、作戦は変更しないと言ったでしょう」

「わかってますよ。電流を流され上に乗っかられた仕返しをしただけです」

あたしは落ちたカルドを拾って、幸樹さんの元に戻る。

そしてカルドを大きく振りかぶって、壁に突き刺した。

「うがぁああっ！！」

途端に上がる気持ち悪い男の悲鳴。足元にポロポロと指が転がり落ちる。

幸樹さんが離した指鼠を蹴り飛ばす。

「それじゃあ…」

あたしはカルドについた血を振り払う。

指鼠は指をなくした左手を押さえてあたしを睨み付けた。

「正々堂々と殺し合おうか、仔鼠ちゃん」

正々堂々。これでフェアだろう。正直、立つのだってしんどいんだ。

指なし指鼠対フラフラな黒猫。

それでも笑みを浮かべて、睨み付ける。

「ナメんなよ、餓鬼！おい！電鼠！！やっちまえ！」

左手を止血しながら鼠は吠えた。バチバチと電流の弾く音が聴こえる。

電鼠は幸樹さんに任せて大丈夫だろう。あたしはあたしで指鼠を殺戮してやる。

カルドをしまい、パグ・ナウを出す。そして右手をポケットにしまった。

「……何のつもりだ」

「フェアでしょう？アンフェアをやったら全ての指を切るわ、いい

わね？仔鼠ちゃん」
「…くそったれっ！」

右手が限界なんだ。
指鼠は、吐き捨て銃口を向けた。
あたしはしゃがんで避けたが、その弾丸が幸樹さんの腕を掠める。
銃は邪魔だ。
爪で銃を狙う。
くるっ。
銃が回転して、見事に空振り。
爪から逃れた銃口が、あたしの鼻の先に。指鼠は小指でトリガーを引いた。
　バァンッ！
銃声と同時に心臓が跳ね上がる。きつい火薬のにおい。
だけど弾丸は、あたしの顔を貫通しなかった。
弾かれたように、指鼠の耳元を掠めて消える。
息を吹き返す。今ので、死ぬと思った。

「ってめ」

勝利を確信した指鼠も戸惑う。

「いまっ、なにしやがっ」

動きが停まった二人。
背後から聴こえる激戦の音に、我に返りパグ・ナウで、指鼠の胸に爪痕を残す。

「くっ！」

よろめく指鼠。今畳み込めばあたしの完全勝利。
なのに身体が動かない。
まだ動揺が、振り払えてないんだ。

「！」

物音に気付く。
エレベーターの中。否、エレベーターの中だが、遥か上から聴こえる。
何の音だ？と考えている間に音を立てた犯人が落ちてきた。
ダンッ！
両足でエレベーターの上に着地したのは――――頭蓋破壊屋だった。
あたし達は呆然とする。開いた口が塞がらずあんぐり。
一人で降ってきたんじゃなく、男一人を片手で持って降ってきた。
その男はあたしの間違いでなければ、今回の標的だ。
二人とも脱色した白い髪も全体的に埃で汚れていたが、白瑠さんは傷一つ見当たらない。
十階上から降ってこようとそれは驚かない。既に一緒にダイブしたことがあるから。
まさか。あの爆発で無傷なのは驚き。
それどころか、一緒に爆発で死ぬはずだった標的まで、生かすなんて。

「えぇっと、なんだっけぇ？君の二連勝？」

ニコニコと笑みを浮かべた白瑠さんが指鼠に訊ねる。通信機で聴いていたようだ。ということは藍さんも形勢逆転をしたのか。

「Ｉ・ＣＨＩＰ様に勝てると思うなよ、指鼠」

勝ち誇った声の藍さんの声が聴こえた。

「うひゃひゃひゃ、違うよぉ。今回は俺の勝ぁちぃ」

持っていた男の頭を粉砕して、白瑠さんは勝利宣言をした。
訂正しなくてはならない。
吸血鬼なんて目じゃない。
人間なんかじゃない。
頭蓋破壊屋は、怪物だ。
正真正銘の、怪物だ。
白瑠さんが、死ぬわけないじゃないか。
コキッと骨が折れる音が聴こえて振り返る。隙をついて喉元にナイフを刺して、止めに首をへし折ったようだ。
幸樹さんの足元に電鼠が転がる。
あたしは指鼠に目を向けた。相棒の死に、或いは絶体絶命に、顔はこれ以上なく歪んでる。

「さて、チェックメイトといきましょうか？指鼠」

「……絶対に、てめえに地獄を見せてやる」

低い声で指鼠は睨み付けた。今からどんな地獄を見せれると言うのだろうか。あたしはきょとんと首を傾げた。

「覚えてろよ」

そう告げて右手に出したのは、リモコンのような物。それをカチと押した指鼠は、背を向けて駆け出した。

「爆弾だ！」

藍さんの声。
ピピピとエレベーターの上に置かれたノートＰＣが音を鳴らす。
瞬時にあたし達は指鼠とは逆の廊下を駆け出した。
白瑠さんがあたしの腰を抱き寄せて、壁に穴を開ける。
その穴の中に飛び込んだ瞬間に――――爆音が轟く。
爆発に爆風に建物は揺れて、砂煙が蔓延する。

「けほっ！…けほっ！」

鼓膜がイカれそうだ。
酸素にまじって砂煙を吸ってしまう。最悪な空気だ。

「つばちゃん、平気？」

その声の主はすぐ目の前だった。
当然だ。白瑠さんがあたしを守るために覆い被さっていたのだから。
あたしは目を回して溜め息をつく。

「死んだと思った、無駄な心配をさせたことを謝って」

そして白瑠さんの首に両腕を回す。

「え？え……と、ごめん」

何故か戸惑ったように謝る白瑠さん。爆弾じゃあ死なないなんて発想をこれから付け加えることにする。

「ゴホッ。椿さん、追わなくていいんですか？」
「もう立てない…誰か代わりに殺っといて」
「ありゃ、椿が意気消沈だぁ。鼠は意気衝天って感じだったのに…

しょうがないなぁ」

幸樹さんに問われて白状する。もう限界だ。立てそうにない。このまま寝てしまいたい。

白瑠さんはあたしを抱えあげた。それを見て幸樹さんは溜め息をついてから、あたしの後始末をやりに向かう。

あたしは息をついて、白瑠さんの肩に頭を置いて目を閉じた。

「ねぇねぇ、つーちゃん」

「はい」

「俺が死んだと思って、どうしたの？」

返事したことに後悔した。

「…頭にきた」

あたしがそう答えれば「ふぅん」と白瑠さんは頷いた。

エレベーターは吹っ飛んだので、階段で降りていく。

藍さんのバンに辿り着けば幸樹さんが追い付いた。

「見失いました」

指鼠はまたもや逃げ切ったが、あたしには追い掛けて息の根をとめる気力はなく。

「そうですか」

素っ気ない返答しか返せなかった。

――――後にあたしはこの事を、生きてる間ずっと後悔することになる。

「椿ちゃん！起きて！」
「んぅ…あと三十時間眠らせて」
「旅行先で一日中寝るつもりですか」
「きゃん！」

襟を引っ張られて、慌てて起き上がる。危うく浴衣を脱がされるところだった。
もう眠っていたい。
温かい布団にくるまって振り返れば、由亜さんと幸樹さんのラブカップル。朝から落ち込むツーショット。
由亜さんと二人きりの部屋で警戒なしに眠れた。隣が男三人の部屋。男二人からブーイングを受けたが、幸樹さんがそう決定した。
由亜さんがいるから気軽に入ってくるのは幸樹さんだけだが、このツーショットと部屋にいるなんて追い打ちだ。

「寝かせてください……本当、電流のダメージが抜けてないんです」
「私だって気を失う一撃を受けたんですよ」
「あたしは三度床にへばりつきました」
「だ、大丈夫？ごめんね、アタシが早く連絡してれば」

首を垂らす。眠ってまだ五時間じゃないか。身体も疲れが取れていない。
しゃがんで由亜さんが申し訳ない顔をした。
や、め、て、く、れ。

「情報の問題じゃありません。食らったあたしの責任です。だから

責任とって寝ます」

そう言って枕に戻ろうとしたがまた襟を掴まれて阻止される。

「今日は由亜さんと観光する約束ですよね？椿さん。針千本飲みますか？」

「あ〝ー……」

「い、いいんだよ！椿ちゃん、へとへとなんだし…」

「大丈夫です……髪にまだ静電気が残ってるのでシャワー浴びてきます」

約束したんだった。

あたしは肩を落としてから、立ち上がろうとしてよろけて後ろに倒れる。

「あいてっ…」

「だ、大丈夫！？」

「大丈夫ですか？」

「あい…」

二人に手を貸されて、起き上がる。立ち眩みです、と答えてあたしは今度はしっかりと立った。

着替えを抱えて部屋から出れば、白瑠さんが廊下にいた。

「おっはよう、つーばちゃん」

「おはようございます、白瑠さん。こんなとこに突っ立って何してるんです？」

「寝起きで乱れた姿のつばちゃんを見るために待ってた」

「……はぁ、珍しく部屋に侵入しなかったんですね」

珍しく。いつもはお構い無しにあたしの部屋にいつの間に入るくせに。まぁ、由亜さんがいるからだろう。白瑠さんも由亜さんのこと女と見てるし多少の常識があるのか。

「え？入っても良かったの？」

「そうは言ってないですよ、らしくないと思って。他に用件は？」

無邪気な子供みたいな声を出す白瑠さんに首を傾げつつも問う。

「ん！昼は由亜っちとお出掛けでしょ？夜は仕事ないし俺とデートしよ！」

「んー……いいですよ。疲れてなきゃ暇ですし」

「じゃあ決まり！」

喜色満面の笑みで白瑠さんは頷く。由亜さんとのお出掛けで疲れなければ行くって話はちゃんと聞いただろうか。

用件が済んでご機嫌に背を向ける白瑠さんを見てからあたしはお風呂場へと向かった。

「……あ」

シャワーを浴びて思い出す。

弾丸が弾いたあの瞬間。

曇った鏡を拭いて自分と向き合う。

「一体何の真似よ？」

そう問い掛けても、悪魔は沈黙を守った。

この悪魔は何がしたい？

あたしの中に入り込み、傷を治して、弾丸から守って、一体何を企

んでいるんだ。
チッ、と舌打ちをする。
そんなことしたって、取引なんて絶対にしないんだから。
身体と髪を洗い、温泉に使ってから、また身体を洗って、着替えた。
　由亜さんと蓮真君にあげるお土産探しだ。
予め由亜さんがお店をリストアップしてあるので迷わずに行けた。
二店回って気に入った物を購入したが蓮真君のお土産が決まらない。
また移動している途中に、あるものを見付けて立ち止まる。

「……由亜さん、ちょっと先にいっててください」
「うん！」

上機嫌な由亜さんは荷物を持って先を歩いた。それを確認してから見付けたある物に駆け寄る。
公衆電話。幸い国際電話が使える。
あたしはレネメンの名刺を出して、受話器をとる。硬貨を入れて、刹那考えた。
住みかとは離れたここからならば、別にかけてもいいだろう。
ただひねくれた策略家の伝言とひねくれた策略家の目的を聞くだけだ。
カチカチとボタンを押して電話をかけた。携帯電話か。

「レネメンだ」
「もしもし、レネメン」
「悪いが今は電話に出れない、メッセージを残してくれ」

長いコールだと思ったたら留守電に繋がった。勇気だして電話したのに出ないなんて。
どうしよう、メッセージ残そうかな。
そう迷っている間にピーと録音が始まってしまった。

「……あたし。紅色の黒猫だけど。生還したみたいね、おめでとう。黒の伝言が聞きたかっただけ、またかけ直すわ」
「もっしもぉし」

カチッといきなり誰かが電話に出た。ギョッとする。レネメンじゃないのは確かだ。

「あっ、えっと」
「ん？日本人？ごめんね、レネメンは携帯電話忘れてお仕事しに行っちゃったよ」

英語で話していた謎の男がペラペラの日本語を使って答えた。
お前…誰だよ。

「ああ、そう…」
「君、レネメンのファン？」
「ファン…？」
「マジックの」

あ、そう言えばレネメンは表はマジャシャンなんだっけ。名刺に書いてある。

「いえ、ただの…友達」
「ふぁあ、表の？裏の？」

その質問には息が詰まった。
コイツ、誰だ？
裏現実者だろう。
否、悪ければ例の集団の一員。

「その反応は裏だね。レネメンならショーに行ってるよ。表の仕事中さ」

暢気な声で男はあたしが何も言わなくとも悟る。緊張が伝わったようだ。情けない。しっかりしろ、落ち着け。

「仕事場所、教えようか？」

「いえ、いいの。会いに行ける距離じゃないのよ。かけ直すわ」

凛として返す。怯まない。どんな質問でも、怯まないぞ。

「ふぅん、そう……」と男は意味深に少しの間、言葉を止めた。

「君って、可愛い声してるね」

口を開いたかと思えばそんな事を言われる。そんな発言でも怯まない。

「俺も電話したいなぁ、電話番号教えて」

気軽に男は言ってくる。

つか、お前誰だよ。

「なんなら会いに行くよ、顔がみたいなぁ。居場所教えて？あっ、そうだ。俺は黒の殺戮者。君は？」

がちゃん。

思わず。流れるような動作で、受話器を戻した。

硬貨が返ってくる。

同時に我に返れば、バクバクと心臓が暴れだす。

レネメンにひねくれた策略家の伝言を聞こうとしたらひねくれた策略家本人が出やがった。
駄目だった…。
効果覿面の爆弾発言に公衆電話の中で動揺しまくった。立ち尽くし、脳内で動揺中。
まさかひねくれた策略家こと黒の殺戮者の声を聴く羽目になるとは。
声を聴いた瞬間に死ぬと思った名前を出しちゃいけない例のあの人の声を聴いてしまった。
白瑠さんと似た暢気な口調。何処まで似てるんだろうか。
ショットガンで狙った時はフロント硝子でよく見えなかったから顔は見そびれているんだよな。
てか、直接黒と話せるなら直接訊くべきじゃないか？
ゴクリと息を飲んで高い壁に見える、寧ろ絶壁に見える公衆電話を睨む。
怯むな、あたし。
白の殺戮者の弟子だ。
腹決めてやる。度胸見せてやる。
あたしは受話器を取り、硬貨を入れて同じ電話番号にかけた。

「なんで切ったの？」
「す…すみません」

第一声に怯んだ。
いや、怒っている声音ではなさそうだ。

「その、あたしは……」

名乗っていいのかな。
敵意剥き出しにされた暁には涙を流せると思う。

「どうしたの？緊張しちゃって。可愛い声だけど。何かなぁ？」

急かさないのんびりした緩い口調で問う。電話越しで笑っていそうだ。

白瑠さんみたいに貼り付けた笑みで。

「レネメンが貴方から伝言があると聞いてまして」

「俺？」

「貴方があたしを面白がっているのは遊太から聞いてます」

「遊太？」

心臓が落ち着いて、自分を取り戻す。凛として、静かに問う。

「面白い、とかそんな些細な伝言ならば聞きません。今、貴方が白の殺戮者と何をやっているのかを教えてください。貴方ならば教えてくれますよね？黒の殺戮者さん」

落ち着ける。動揺しない。度胸はあるんだ。

これでも白の殺戮者と同等とほざかれているんだから、電話越しくらい対等に話せる。

受話器から返事を待った。心音を静めて息を潜めて、待つ。

「……――――――くくっ…」

面白そうに喉で笑う声に、ゾッとした。戦慄が走る。

まるで初めて白瑠さんの笑い声を聴いた時みたいだ。

だけどあの時みたいに、顔色を変えない。相手には見えてないけど。

「くははっ！どうやら白（はく）は何も教えてくれていないようだな、くひゃひゃっふふっ。何としても君に会わせないようにしてるんだぜ、

酷いと思わないか？」

笑い声を堪えず、クスクスと笑う黒の殺戮者。
二人揃って笑うのが好きらしい。
ご機嫌はいいようだ。愉快そう。
どうやら白瑠さん側の人間が電話したことを笑われているようだが、不快ではない。

「白の代わりに俺が教えてあげるよ。血がこびりついた甘い香りの――紅色の黒猫ちゃん」

そして、あたしが紅色の黒猫だってことに笑っている。
逃げているのは、あたしを彼に会わせない為だったのか。
あたしに黙って戦っていたのは、あたしに会わせない為だったのか。
やっぱりあたしのせいじゃない。
ラトアさんの嘘つき。

「あたしに何の用なんです？黒の殺戮者。言っておきますが、あたしは白瑠さん程の存在でもなんでもありません。貴方のお遊びに付き合う気はない、迷惑なのであたしの存在は忘れてください」

ムカついてそう返す。
色んなムカつき。
黒の殺戮者の話題が避けられ、あたしと会わせたくない理由はもうどうでもいい。
宣戦布告して勝てる相手でもないから、きっぱりと断る。
目の前で爆発しても死なない白瑠さんとは違って吸血鬼相手に勝てる気がしない。それが黒の殺戮者ならば尚更だ。遊ばれるのは、白だけで勘弁してくれ。

「くひゃははっ！そんな事言うなんて、ますます面白いねぇ黒猫ちゃん！」

逆効果で黒の殺戮者は哄笑する。
なんでこのイカれた二人はあたしに構いたがるんだ。
あたしなんか面白くない。
苛ついてる時に白瑠さんが構ってと抱きついてくる時の苛立ちを感じる。
本当、マジ、構うな。

「君の存在は忘れないぜ。君の可愛い声はあと百年はこの耳に残る。ふふ、謙遜する君に会いたいだけだ。駄目かい？」
「貴方と会うと仲間が不機嫌になるんです、それが迷惑なのよ」
「じゃあ君の仲間には秘密で会おう」
「秘密なんて出来ません」

会いたくはないし、この電話もバレたら金庫に監禁されかねない。
流石に黒の殺戮者にそれは言えない。
嘘も隠し事もいつかはバレてしまう。
きっととてもないお叱りを受けるはず。白瑠さんにバレたら……うぐっ。想像するのも恐ろしい。想像も出来やしない。

「じゃあ堂々と会いに行く」
「迷惑だって言いましたよね」
「白の前で君に害を与えなければ迷惑がらないだろ？」

そりゃあ、害を与えないのならば幸樹さんだって会うくらい許すだろう。

「白瑠さんは嫌がります」

「……」

黒の殺戮者が黙った。
漸く諦めたのか。或いは別の手を考えているのか。

「じゃあ、ゲームをしよう」

どうやら後者のようだ。

「遊びに付き合うつもりはありません」
「ゲームの内容は、君と俺が会うか会わないかを競う。君は俺を避け続ければいいし、俺は君を探し続ける。参加しなくても俺は君を探し出すさ」

ゲームと称した宣戦布告のよう。
つまりは諦めない。
何があろうと、あたしに会うつもりか。

「ルールはない。俺が君を捕まえるか、諦めると宣言するまで続くゲーム。人生楽しんだ者勝ちだぜ、紅色の黒猫ちゃん」

人生は楽しんだ者が勝ち。
口元が緩んで笑ってしまった。
返事に、迷う。

「いいわ、参加する」

そう返事をしてしまった。
どうせ諦めないなら、そうゲームと称して逃げ切ってやろう。
愉快そうに黒の殺戮者は笑った。

策略に嵌まったかもしれない。が、白瑠さんがついている限りそう簡単に捕まらないはずだ。
ルールがないならあらゆる手段を使って逃げ切ってみせる。逃走心が燃え上がり意気衝天。

「勝った方には何が貰えるのかしら？」
「んー、そうだなぁ。君が勝ったら俺は二度と君とはコンタクトを取らないと約束しようか？」
「ええ、それでいい。じゃあ貴方は何が欲しいの？」
「俺はぁ……君の血かな」

その要求には少々顔をしかめてしまったが、勝てばいいんだ。大丈夫。あたしは頷いて了承した。
……ちょっと、ときめいた。
吸血鬼に「君の血が欲しい」と言われて胸キュン。

「じゃあゲームスタート。ふふ、君に会えるのを楽しみにしてるよ」
「逃げ切ってみせるわ。…ああ、一つ いいかしら？本名を教えて」

受話器を置こうとしたが、ふと思い出して訊いた。こうして話せたんだ。本人にずっと知りたがっていた名前を訊いた。
本人なら忘れたなんて回答はでないだろう。

「ん、俺はコクウ」

すんなりと、黒の殺戮者は名乗ってくれた。
――――コクウ、か。

「あたしは椿」

敬意を払ってあたしも名乗り返す。

「椿、花の名前だ。綺麗で魅力的な花の名前なんて素敵だね」

コクウは名前を褒めてくれた。お世辞かな。

「じゃあ電話を切るわね、コクウ。くれぐれも電話で話したことを白瑠さんにチクらないでくださいよ」

「勿論さ、霧みたいに消えられちゃ困るからね。あ、待って。俺からも一つ。俺の仲間を助けてくれてありがとう」

律儀にコクウは丁寧に礼を告げた。

レネメンを病院に送ったことだろう。しなければレネメンは確実に死んでいた。

仲間思いなんだ。改めてそう思った。

吸血鬼の仲間を身体を張って守った黒の殺戮者、コクウ。

「…いいえ。礼を言うのはあたしの方です。レネメンには守ってもらいましたから」

「そうなの？それは聞いてなかった。でも君のおかげでレネメンは生き延びたから礼は受け取って」

カーチェイスで一般人の車をひっくり返していたが、幸樹さんの言う通り冷酷ではないようだ。

仲間は大切にする。

仲間まで見捨てる奴はどうしようもない。大義名分だ。裏に大義なんてなさそうだが。

「では、潔く諦めてください。勝つのはあたしです、コクウ」

「俺は君を見付けて捕まえるよ。ふふ、勝つのは俺だ、椿」

二人して断言をして、あたしは受話器を戻した。
話を終わらせたあたしを褒め称えやりたい。
頭蓋破壊屋と同等はあながち嘘じゃないかも。
あの黒の殺戮者とゲームをやると言ってしまうなんて。対等に話せてしまったなんて。
それにしても、黒の殺戮者の、コクウの好感度が上がった。
仲間意識は強いようだし、それほど横暴ってわけではないようだ。
会ってはいけないが、会ってみたいと好奇心が戻ってきた。
幸樹さん並の大人の魅惑声にメロメロになりそう。やっぱりあたしは吸血鬼が好きだ。アイラブ吸血鬼。
不意に受話器を握ったままの手に目を向ける。蓮真君から貰った銀色の指輪。
あ、蓮真君のお土産を買いに行かなくちゃ。

「コクウ、かぁ」

まさか本人から名前を聞けるとは。いい名前だ。
小さく笑いながら由亜さんが待つ店に行って、蓮真君とお揃いの物を購入した。
宿に戻ってまた温泉。
それから夕食。豪華な蟹料理が並んで白瑠さんの箸は物凄く進んだ。
殻からみをとって幸樹さんがとってくれたから手を汚さずに食べれた。蟹、美味い。

「つーばぁちゃん！行こう！」

部屋に戻ってもう爆睡してしまおうって布団に倒れる前に白瑠さんの声が廊下から聴こえた。
そうだった。約束してたんだ。

我慢して着替えて白瑠さんと出掛けた。

「どぉこ行くんでぇすかぁ？」

「んー？その辺」

「その辺って…散歩ですか。なら着替えなくてよかったのに…」

「そうだねぇ、浴衣デートいいね！うひゃひゃひゃ」

手を繋いでいるがデートではない。

少し強い冷たい風が吹く。浴衣では凍えていただろう。

そう言えば、コクウと話して危険は感じなかったが、どうして白瑠さんは会わせたがらないのだろうか。

別に敵意されていない。コクウにも遊太にもレネメンにも。

やっぱり白と黒の戦争でも始めるのだろうか。

何故、多士済済の集団を作ったのか、訊けばよかった。

またの機会にでも訊こう。

白瑠さんに今訊いたら通りが頭蓋骨の残骸だらけになってしまう。

コクウが迫ったあの時は恐ろしかったからな…。

カサカサと落ち葉を踏んでいく。いつの間にか人気のない道にまで来た。というか山の入り口ではないか？ここ。茂った木々は暗闇に溶け込んでいて空をも覆い被さる。

「あの…何処行くんですか？人気のないとこに行ってあたしを殺す気ですか？」

「……その冗談面白くない」

……。

怒らせてしまった。爆弾を受けても笑っていた人間を怒らせて、冗談をダメ出しされた。酔生夢死みたいな生涯を送ってやがるくせに。

「俺さ、椿を殺したりしないからね？」

「はい、わかってます。十分知っております。一度殺されかけましたけどね、わかってますよ。もう言いません」

あっはっはー、と笑って見たが横の白瑠さんは無表情で前を見据える。くそう、ダブーはこっちだったか。

少し白瑠さんは沈思黙考していたが、やがてにんまりと笑みを浮かべた。

機嫌は早く治るんだ。

「人気のない道に連れ込んで襲うつもり♪」

「はぁ…引き返します」

「冗談だよ！…いや、半分の半分だけ冗談」

「帰るわ、ど阿呆」

こんなことを言えるのもあたしくらいなんだろうなぁ。しみじみ思った。

そんなことを話していれば白瑠さんがあたしの目の前に立ちはだかる。あたしを羽交い締めにした。

え、本気で実行しやがった？

警戒態勢に入ろうとしたら白瑠さんは、あたしの後ろに回って手で目を隠された。

「みーちゃ、だめぇ」

「……この態勢で歩けと？」

後ろから目隠しされて歩かされる。何か見せたいものでもあるのか？不安だなぁ。

「あ、そこストップ」

「うわっと！」

先がなく危うく落ちるところだった。ぽちゃん、と水音が聴こえる。ん？なんだ？

「心の準備はいぃい？」

耳元で笑いを含みながら白瑠さんは問う。

心の準備が必要な光景が待っているらしい。何だろう。頭蓋骨の残骸が散らばった血の海の墓場か？

一応頷けば、白瑠さんは「うひゃひゃ」と笑って手を離した。

あたしが視たのは、黒い世界。

森も黒い影にしか見えず、空に浮かぶ星が暗い紺色だ。満月も浮かぶ、綺麗な冬空。

それだけなら息を止めない。

その星空の下に、湖があった。黒い水に空が鮮明に映し出されている。

二つの星空がそこに在った。

「わお……――すごい…素敵……」

「んひゃひゃ、だしょだしょ？」

白瑠さんは隣で上機嫌に笑う。あたしの反応に満足してくれたようだ。

「こんな絶景、よく見付けましたね」

「散歩してたらね、見付けた」

「…いつの夜に見付けたんですか」

あたしが“見付けた”は雑誌だったりネットだったりなんだが、白瑠さんは発掘したらしい。まさか昨日寝てないのか？貴方、余裕過

ぎだろ。

「はぁ……すごい…感動です……」

とにかくこの景色は凄い。素直に感動してうっとりする。

「椿、こっちぃ座っていいよ」

立ち尽くしていればいつの間にか座った白瑠さんが、膝に座るよう促した。膝に座るのか…。

やむ終えずあたしは膝に座った。後ろめたいことがある故に。

白瑠さんとの密着に慣れすぎたせいでもあるだろう。

白瑠さんの膝に腰掛けて眺めた。

暫くお互い黙って、その景色を見つめる。

「言い忘れたけどぉ」

あたしの腹に腕を回す白瑠さんは沈黙を破った。

「心配してくれて、ありがとう」

心配？なんのお礼だろうか。

一日に黒の殺戮者と白の殺戮者にお礼を言われるなんて、あたしの存在は伊達じゃないみたいだ。

「俺が死んだと、心配したじゃん」

「ああ……。礼を言われるものじゃありませんよ、無駄な心配じゃないですか。貴方が死ぬなんて、世界が終末を迎えなきゃ有り得ないと思ってます」

本気で。

「白瑠さんは死なないと思ってます」
「うひゃひゃ、俺も椿は死なないと思ってるよぉ」

死なない。…死ななかったんだよな。
二回程、撃たれて死ぬはずだったんだけど。
あたしは世界が終末を迎えなきゃ死なないのか？そんなわけあるか。

「嬉しいんだよねぇ、心配してくれると」

あたしの肩に顎を乗せて白瑠さんは穏やかに呟いた。

「嬉しい…？」
「ん」
「それってあたしに心配して欲しいと言ってるんですか？」
「んーんぅ、ただ嬉しかったぁって伝えてるだぁけぇ。これからは心配しなくていいよぉ、椿が死ねって言っても生きるかぁら」

嫌がらせか。
嫌がらせだろ。

「お礼にこれあげる」

そう言って白瑠さんはあたしの目の前に短剣のような物を出した。
白い刃の短剣。
否、短剣じゃない。
白瑠さんが一振りすれば衝撃でジョキッと刃が伸びた。長剣になる武器だ。

「有り難く貰います。…これは昼間にでも買ってきたんですか？」

あたしは気に入り受け取る。

わざわざ用意するなんて、あたしはクスリと笑う。

「んひゃあ、元々あげるつもりだったんだぁ。それ、前の持ち主はねぇ、番犬だよ」

最近白瑠さんとの会話に出る番犬。裏現実の番犬。彼の遺品か。

秀介に悪いが番犬の武器が出回っているならば、やはり彼は白瑠さんの言う通り死んでるのだろう。

「ふぅん……ありがとうございます、白瑠さん」

「ん！ひゃひゃ、黒猫と番犬が名前を馳せてたら面白かったのぉにぃなぁ」

「真っ先に狩られて名を馳せるどころじゃありませんよ…」

片っ端から名前が売れた殺し屋を狩って一掃した歴史上最強の狩人。

白瑠さんレベルなんだろう。あたしは一捻りにされてしまう。

不意にあたしはバカな質問を思い浮かべた。白瑠さんの反応が知りたくてあたしはその質問をする。

「白瑠さんとあたし、どっちが強いですか？」

本当にバカな質問だった。

「お酒？」

「…いえ、力量…」

「ん！？く、ひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃあひゃひゃっうひゃあひゃひゃひゃひゃっ！」

すぐ後ろで哄笑される。
バカな質問は忘却するべきだった。

「確かめてみる？」
「貴方が強いです、師匠様」

そろそろ自分の力量とやらが気になってきたんだ。
あたしの実力は果たしてどのくらいだろうか。
何処まで通用する？
なんて。そう思うのは図に乗ってきた証拠なんだろう。

「椿さん。そこに座ってください」

幸樹さんにテーブルにつくように促された。
旅行から帰ってきた翌日。
白瑠さんが仕事のクライアントに会いに行って家にあたしと幸樹さんと由亜さんだけが残っていた。
どうせ二人はイチャイチャするだろうから、あたしは出掛けようとしたらこうなった。
幸樹さんは威圧感ある笑みを貼り付けていて、一歩後ろに由亜さんは立ち尽くしてオロオロしている。

「なんで……すか？」
「ある人がですね。貴女に脈があるかを訊いてほしいと言われ、由亜さんにそれを頼んだんです」

絶対になんかしくじった？

身構えつつも幸樹さんが何を言おうとしているのかを待つ。
誰かが脈を知りたがっている。だから由亜さんからそれを訊いてもらおうとした。
……。
え、まさか。まさかまさか。
あたしは由亜さんを見上げる。彼女は申し訳なさそうに何度も頭を下げた。

「恋人が――――いるそうですね？」

その言葉が吐かれたと同時に空気が一度、下がった気がする。

「しかも相手は漫画喫茶で会った学生服の少年」

ササーと血の気が引く音が聴こえた気がした。気のせいだ。聴こえるわけない。
しゃ、喋りやがった！
約束しておいて！女同士の秘密だとか言っておいて！
名前まで喋りやがった！
恋人の存在を――（嘘）を知ってお兄ちゃんお怒りだ！
くっ…！落ち着くんだ自分。
黒の殺戮者と対等に喋れるんだからお兄ちゃんくらいで怯んじゃだめだ。
今回だけは許そう。
あたしだって幸樹さんに詰め寄られたら白状するしかない。
軽率だったあたしが悪かった。しかし、次回は由亜さんに秘密を打ち明けたりしない。

「実は……なんとなく、付き合ってみようと思って…。二三回、デートした仲なんです」

「ほう？」
「でも、今日別れます！」
きっぱり言えば由亜さんがギョッとした。
「え、ええ！？」
「前から合わないなぁと思ってたし、彼は表の人間なんで。別れます。ついでにお土産も渡して」
「えっ、ええ！？いいの！？椿ちゃん！」
「はい。別れれば文句ありませんよね？黙っていたことは謝ります。では、いってきます」
嘘を並び立てて堂々と蓮真君に会いに向かう。幸樹さんは何かを言いかけたが、別れるというならばと口を閉じた。
とりあえず一安心だ。
蓮真君が那拓の末っ子だってことは、なんとしても隠し通してやる。
詳しい経緯は訊かれそうだがそりゃ仕方ない。
お土産を片手に電車に乗り込む。最初は兎無さんの店に行ってパグ・ナウを取りにいこう。
そのあとに蓮真君の家だ。
アポは取っている。
松平の修理工。作業の音が響いている。それに負けないように声を上げて呼び掛けた。
「ああ！？借金とりかこのヤロウ！！」
「違います、客です」
車から這い出た作業服のポニーテールの兎無さんがスパナを投げてきたので避ける。この人の挨拶は毎回こうなのだろうか。

「あ、キャットじゃん！いらっしゃーい」
「頼んだ物を取りに来ました。遅れてすみません。それと投擲ナイフを買います」
「毎度あり！」

謝りもしないで笑いかけるくるところを見るとやっぱり兎無さん流の挨拶なんだろう。
買うと言えば目を輝かせられた。
前と同じ奥の部屋に通され、改良したパグ・ナウが出される。

「悪いね。アンタ、あの紅色の黒猫だなんて知らなかったんだよ」

苦笑を浮かべつつ兎無さんはあたしにパグ・ナウを渡した。
ついに兎無さんまで知ってしまったようだ。
頭蓋破壊屋と同等の存在。――（今ではちょっと誇らしく思っていたりする）

「駆け出しの殺し屋には違いありませんよ。お構い無く」

あたしはパグ・ナウを左手に嵌めた。手首に長方形のコンパクトな箱。手の甲には刃で切れないようサポートを付属。
兎無さんの説明で爪を出す。強度の最高級。しなやかな艶がある。
先が曲がってより掻き切れそう。
注文通り普通の服にでも隠せ、より軽い。サポートは手袋で隠せるし、工夫すればアクセにも見える。

「気に入りました、ありがとうございます」
「おぉ、例のお嬢チャンかい？」

奥の部屋に兎無さんと同じ作業を着た白髪で髭面のおじさんが覗き

にきた。
紅色の黒猫のあたしを見に。

「こんなお嬢チャンが例の紅……なんだったかなぁ？」
「紅色の黒猫だって、親父！」
「いやいやぁ、紅色の黒猫がお得意様になるなんて」
「やらしいよ、親父。キャットが引いたらどうすんだ」
「やらしいもんか。おいおい、お前さん！欲しいもんが会ったら此処にこい！優れたもんを揃えて、この自慢の腕で作ってやる！」

おやじ。兎無さんの父親か。
歳の割りにはパワフルなおじいさんは自分の二の腕を叩いてみせた。
それに呆れて笑う兎無さん。
愉快な裏現実者の家族だ。
「ええ、是非」とあたしクスリと笑って頷いた。
有名なお得意様が出来て大喜びの父娘のやりとりを見てぼんやりする。
父親、か。

「たのもう」

投擲ナイフを購入し、次は蓮真君の家に向かおうと店を出る。すれ違いに時代錯誤な格好をした男が入店する。
袴姿にポニーテール。眼鏡をかけていて顔は見えなかったが、あたしの視線は袴と一緒に携えた刀に注目した。
……ラストサムライ？
まぁいいや。とあたしは那拓家へと向かった。

「はい。お土産とクリスマスプレゼントのお返し」

那拓家の道場に入れてもらってから、プレゼントを蓮真君に渡す。
蓮真君はきょとんとした。

「別に要らないけど…。折角だから貰ってやる」

素直に受け取れよ。可愛い。

「手袋？しかも紅色って……まさか血で染めたんじゃないのかよ」
「いや、ペンキで頑張った」
「カチカチじゃねえか」

そんな冗談を言いつつも、蓮真君は手袋を嵌めた。

「指輪をやったから手袋？……あ、つけてんだ、指輪」
「うん、気に入ったから。イヴに会った時は手袋してなかったから……もう買っちゃったかな？」
「いや、買ってない。サンキュ」

蓮真君はチラリと一瞬だけあたしがつけた指輪を見て、手袋を脱ぎお土産袋に手を伸ばす。

「それは京都のお土産。夏なら蓮の花を撮ってきたんだけどね、グッズがあったから」
「……この高そうな刺繍をグッズと呼ぶのか」
「キーホルダーもあるよ」
「キーホルダーはともかく……この布はいくらしたんだ？」
「布とは失礼だ、ハンカチよ。金の刺繍だしね、でも忘れた。最近値段気にせず払っちゃうからさ」

金の刺繍をしたハンカチ。

豪華な蓮の花が黄金に咲いている。
それからキーホルダーも色付いた蓮の花。
お揃いであたしも持っている。キーホルダーは携帯電話につけて、
ハンカチはポケットに。

「んな高いもんを寄越すなよ…ぼくは学生だぞ」
「だからなに？」
「ぼくがプレゼントに困るだろ」
「いいじゃない、別に。金を有り余っている人から貰える物は貰っちゃえばいいのよ」

有り余っているんだ。
銀行の金庫が欲しいほど財産は増える一方だから気にしなくていい。

「お前、本物の彼氏にもそうするつもりかよ」
「あは、そうだ。今日あたし達別れるから」
「……は？」

困った顔で考え込みながら蓮真君が洩らした。そこで思い出したから言う。

「由亜さんが恋人に白状しちゃって、だから別れるって言っておいた」
「早…一週間も経ってないじゃんか」
「嘘が下手な人だから。君が那拓だってことは隠し通すから安心して」

蓮真君はまだ何かを考えているようだった。
会話を進めても蓮真君は同時進行できる人だから問題ないだろう。

「遊太の話をしようか」
「あ、そうだ、宝石をやる。兄ちゃんから貰ったけど、ぼくが持ってても意味ないし」
「え？ああ、うん」

あたしへのプレゼントを考えていたのか。蓮真君は立ち上がって自分の家に戻ってしまった。
怪盗が盗んだ宝石と対抗されてはあたしが負けじゃない。…別に対抗するためにプレゼントしていないが。
じゃあこの指輪は学生が買える値段だったのか。高いってわけでもないよな。別にいいけど。
そう言えば貰ってばっかの白瑠さんにも何かをあげなきゃ。白瑠さんと言えば食べ物しか思い付かない。
今夜は春巻きでも作ってご機嫌をとろうか。幸樹さん、白瑠さんにチクりそうだしな。
大人に何をあげればいいんだろう。困るなぁ。
蓮真君に相談してみようか。
あたしは立ち上がり、道場を見回した。掃除が行き届いて真新しい感じだ。床なんてワックスをかけたみたいにぴっかぴか。靴下で擦ればキュッキュッという。
今日のニーソは黒。関係無いけど。
蓮真君と会う日はお洒落したくなるようだ。お洒落といっても女の子らしい格好。つまりスカート。
残念だな。もうちょっと蓮真君と恋人ごっこしてみたかった。
蓮真君なら付き合ってもいいんだけどなぁ。
付き合ってって言ってみようか。どんな反応するかな。ふふ。
あー、でも幸樹さんに別れるって言っちゃったんだ。
ん？幸樹さんは一体誰に脈があるのかを問われたのだろうか。
あたしに気がある人間は、秀介しか思い付かない。

「ん」

がらがらと玄関が開く音が聴こえて振り返った。
蓮真君にしては方向が可笑しい。蓮真君じゃなかった。
袴姿の男。
さっき松平修理工ですれ違った男があたしと目を合わす。

「貴様――――何者だ!!?」
「うわっ!?」

ギロッと睨まれたかと思えば飛び掛かり、真剣を振り下ろされた。
あたしは間一髪避ける。

「此処が那拓家と知っての不法訪問ならば!私が相手になろう!何処の馬の骨か知らんが、生かしてはおけぬ!」
「え、ちょ、待て」
「問答無用!!」

怒鳴り込みまた真剣を振ってきた。問答無用って。何者かぐらい訊きやがれ!
あたしは腰につけた番犬の剣を伸ばして真剣を受け止めた。
斬撃が三度打ち込まれる。
強烈だ。
それなりに蓮真君に相手をしてもらい長剣は克服したつもりだが、この男は蓮真君より強い。
押されている。
それはそうだ。
蓮真君に似た顔。蓮真君の兄だ。
それも蓮真君を鍛えている――――那拓爽乃に違いない。
裏現実の危険人物。

形振り構わずぶった切る。
那拓を危険人物と呼ばせた存在。
くそっ！
剣で刀を押さえ込み、左足を振り上げた。
那拓爽乃はかわして後ろに下がる。息もつけなかった為、あたしは息が切れていた。一方那拓爽乃は平然と構え直す。

「おい、あたしは不法侵入してない！」
「言い訳無用！」
「聞けよ！」

話を聞かずにまた飛び掛かり斬りつけようとする。
遊太と上手くいかない訳がようくわかった気がした。
顔目掛けて振り上げられた刃を避ける為に仰け反る。
前髪が数本切られた。
あたしは顔目掛けて剣で突く。那拓爽乃も避けた。
あたしは態勢を整える為に後ろに回転して下がる。
両足を床につけてからそれをバネに今度はこっちから仕掛けた。
勢いをつけた斬撃はしっかりと受け止められる。

「む、貴様！ただ者ではないな」
「あたしは」
「何者であれ！一家の恥を晒すわけにはいかん！」

名乗らせやがれ。
コイツムカつく。
那拓兄弟喧嘩をしたならば、あたしは遊太の味方になる。
スパッ、横に振り上げた剣を那拓爽乃にしゃがまれかわされた。かわした爽乃は居合いの太刀で、あたしの懐に入って振り上げられる。

「っ！！」
「椿！」

下がって避けようとしたが二の腕が斬りつけられ、あたしは倒れ込んだ。
そこに蓮真君の声。
真剣を振り上げた爽乃の後ろに見えた。

「覚悟！！」
「待て兄貴！！」

蓮真君の声が聴こえていない爽乃が真剣を振り下ろす。あたしは目を瞑った。

「ぼくの恋人だっ！！！」

蓮真君の大声は道場に轟く。
ピタリと真剣はあたしの頬の上で停まった。
爽乃の眼鏡の奥の眼が見開かれる。
あたしもポカーンとした。
蓮真君はそんなあたし達の反応に顔をひきつらせたが、もう一度言う。

「真剣に付き合ってる……恋人だ」

…どうやらまた別れた直後にヨリを戻したもよう。
恋人ごっこ続行。

「ふむ、蓮真の恋人だったとは知らなかった」

「聞かずにまた斬りかかったんだろ」

なんとか那拓爽乃が真剣を納めてくれた。三人でそこに座り、話す。

蓮真君は溜め息を吐きつつ、あたしの怪我を手当てしてくれた。

「自己紹介が遅れた、恋人殿。私は那拓爽乃と申す。蓮真の兄だ」

「こちらこそ、名乗り損ねました。笹野椿、蓮真君の恋人です」

あたしは軽く頭を下げた。

笹野椿。火都に名乗った名前をまた使うとは。

「中々いい筋だった。私が鍛えれば上々の腕前になるだろう。職業は何かな？」

偉そうにふんぞり返ってる爽乃。鍛える？なにそれ。あ、確か、那拓家に嫁ぐ女はそれなりに育てられるんだっけ。

「情報屋だよ」

蓮真君が代わりに答えた。

殺し屋って名乗っちゃだめなのか。

「情報屋には惜しい。狩人にならんか？」

「いえ……狩人には向きませんから」

つか殺し屋だし。全く逆の職業じゃん。

「蓮真、父上にも話さず交際とは何事だ。こんなとこで隠れて会うならば紹介すればいいだろう！」

交際イコール結婚。
お堅い考えの家系なら遊太も家出するだろう。
この時代錯誤の爽乃ならともかく、自由奔放な彼が大人しくいるとは思えない。
それを言うならば、蓮真君もそんなお堅い考えに縛られるような子じゃないと思う。

「兄貴達がまだなのにぼくが紹介するのは変だろ」
「式を遅らせればいい話だろう」

そうゆう問題か？
流石に嘘で親を紹介されては罪悪感が拭えない。
個人的には蓮真君の親の顔がみたいけど。

「父上と母上が認めないなら結婚は許されんぞ！」
「るっせーな！わあってるよ！」

爽乃の厳しい口調に蓮真君はムキになって声を上げる。
恋人って紹介したのは余計にややこしくしたかもしれない。

「あの…爽乃さん。あたしも心の準備が出来てないので、まだご両親には」
「心の準備が出来ずに交際を始めたのか？遊びで付き合うならば別れろ！」

……うっぜー。
あたしは笑顔を貼り付けたまま手当てを終えた蓮真君を見上げる。

「兄貴、今日は二人ともいないんだ。次に椿を紹介する時間を設け

れば文句ないだろ」
「ふむ……そうだな。それなら文句はない」
「それまで兄貴は黙っててくれよ」
「どぉーしよっかなぁ」

聞いたことのない声が割って入ってくる。廊下に目を向ければ着物姿の男がニヤニヤしながら立っていた。
びくっと微かに蓮真君が肩を震わせる。

「神奈兄貴(かんだい)…」
「可愛い女の子を連れてきたね、蓮」

那拓神奈。蓮真君の話では六人兄弟だと聞いていたが、爽乃が長男ではないのか。
爽乃は頭を下げて挨拶。
それを気にせず那拓神奈は首を傾けてあたしと蓮真君を見下ろす。
蓮真君はそんな彼と目を合わせないように俯く。なんだ?
兄弟らしく似た顔の神奈の笑み。あのムカつく多無橋を連想してしまう。警戒するべきか。

「美味しそうな娘」

那拓神奈は俯いた蓮真君の背中に手を置いて、あたしの顎を掴んだ。

「味見させてくれたら、父さん達には黙っててあげる」
「なっ…!」
「はっ…?」
「……は?」

顔を近付けて、ニコッと笑いかける那拓神奈。

このお堅い家庭でどうやったらこんな人格が育ったのだろうか。あたしは不思議で不思議で仕方なかった。

「なっ、なに言ってんだ！！」

「何を言うんです、兄上！」

「口答えする気？蓮真」

ぐいっと今度は蓮真君の頬を鷲掴みにした。冷たい目で見下ろす。蓮真君が強張るのがわかった。

「っ……！」

「一回ぐらい、お兄ちゃんにくれるだろ？蓮。前の彼女みたいにさ」

あたしは袖から短剣を出し、それを那拓神奈の首に突き付けた。それから蓮真君の首に腕を回して引き寄せて那拓神奈から離す。

「あたしは蓮真君の女。味見なんてさせないわ」

「椿…！」

「……」

蓮真君を挟んで、冷たく見据える。

短剣を突き付けられても那拓神奈は動揺を見せない。ムカつくなぁ。

「君、彼女を寝盗られたことでもあるの？」

「…ないけど家に来たクラスメートが……」

え？つまり、クラスメートで蓮真君を尋ねてきた女の子にコイツは手を出したのか？

「二人ね」

にぱっと那拓神奈は付け加えた。
とんでもないキャラが出てきたぞ。
幸樹さんだって同時に二人に手を出したりしない！多分！やってたらお兄ちゃんと呼ばない、二度と。

「いやぁ、なんか可愛い子だねえ。そんな目で見られると燃えちゃう」
「んにゃ！」
「にゃ？かーわーいー」

ニヤニヤと楽しんであたしの足を掴み引っ張る神奈。
だあー！なんなんだこの兄弟は！

「ちょ、やめてくれ！椿にっ触らないでくれ！」
「煩いなぁ、いいじゃん、ちょっとくらい」
「ちょ、重い…蓮真く」
「神奈の兄上！そんなやましいことを！」
「あはは、じゃあ皆で４Ｐやっちゃおっか？」

とんでもないことを言いやがった。
引っ張られ倒れたあたしの上に蓮真君。その上に手をついて見下ろす神奈、止めようとする爽乃。
耐えきれず、神奈の顔を蹴り飛ばす。
イケメンの顔を蹴ったことに胸が痛んだが、身を守るなら致し方ない。

「いくよ！蓮真君！」
「え！？」
「お邪魔しました！」

蓮真君を起こし、荷物を持ってその場を退散した。

「蓮真君、あの家出るべきだよ。あーなにあのうぜー兄貴！聞いてない！」

コートを着て荷物をまとめながら文句を言う。

「…会わせるつもりなかった。神奈兄貴は女癖悪いんだ。あの兄貴だけ」

「君は末っ子だもんね…パシられたでしょ」

「パシられた、かなり」

「挙げ句にクラスメートが寝盗られた」

「盗られてない」

「なんて最低な変態なんだ」

「へんた……変態なんだろうな」

溜め息をついて俯く蓮真君。

あたしはそんな蓮真君の首に腕を回して抱き寄せた。

「落ち込むなよ、少年！愚痴ならあたしが聞いてあげる。なんなら殺しの依頼してもいいよ」

「あははは、やめてくれ」

「ごめんね、蓮真君。ややこしいことになっちゃって」

「ぼくが勝手に言っちゃっただけだ、いいよ、何とかするから」

蓮真君はくしゃっと笑う。ちょっと困っているようだ。爽乃はともかく、やっぱり神奈が問題だよな。殺してあげようかな。まぁ冗談にしておこう。

爽乃の兄ならば腕もそれなりに強いのだろうか。

あたしのレベル、やっぱり知らなくていいや。
二人で公園にいき、ベンチで遊太の話をした。それから指切り魔のこと、指鼠のこと、ニューヨークでの大仕事等を話して別れた。
帰り道で思い出す。
プレゼント、相談するの忘れた。
仕方ない。藍さんにでも訊くか。彼の方が白瑠さんと幸樹さんの好みを知ってるだろうし。
電話をかけたら沈黙を返された。

「もしもし？藍さん？」
「な、何かな？椿お嬢」

……何故警戒の色が滲んでいるのだろうか。

「まさか今少女ストーキング中ですか？」
「ま、まっさかぁ！あははは！」

図星だったらしい。
とりあえず沈黙を返してみる。そうすれば勝手に大慌てしてくれた。

「ち、違うよ！？たまたまデートしてるお嬢を見付けただけで僕はストーカーしてない！！」
「そこかっ！！」

まさかの被害者は自分だった。デンジャラス。
離れた電信柱に隠れた藍さんに飛び蹴りを決めた。
幸い、公園のところから見られていただけで、蓮真君が那拓だとはバレていない。
変態の視線に気付かなかったのは、不覚だ。
おどおどする藍さんの尻を蹴って彼の家へと向かった。

「プレゼント？」
「そう、白瑠さんと幸樹さんに何をあげればいいでしょうか？」
相変わらず生活感のない廃墟の建物に住む藍さん。限られた家具しかない。薄暗いし。こんなとこに連れ込まれた女の子は泣くだろう。
あたしはソファに座って訊いた。
「ん？僕ならね！」
「幼児が落とした靴？」
「マニアック！？」
藍さんが欲しいプレゼントは聞いてない。至極どうでもいい。
「欲しい物なら自分で買っちゃうもんな…」
「そうなんですよ…あたしに注ぎ込むぐらい有り余っているみたいですからね」
お金。高価なものはプレゼントしてもあまり喜ばれないんだよな。
「ズバリ！お金で買えないもの！」
「……手作りとかですか？」
「つーお嬢が何を手作りするか気になるけど……先ずは物じゃなく、お嬢が甘える！幸樹達はそれだけで十分なはず！」
「いつも甘えてますけど」
「あれで甘えているならつーお嬢はクーデレだ」
クールデレデレ。どうしてデレなきゃいけないんだ。意味わからん。甘えるって、何かを頼むことじゃないか。そんなのがプレゼントに

なるわけない。
そう言えば藍さんは「ちっちっちっ」と指を振った。

「ズバリ！ベッドの上で可愛らしく上目線で甘え」
「参考になりません、黙りなさい」

フリルのついたピンクのクッションを投げ付けて黙らした。相談相手は蓮真君の方がよかったらしい。

「つかぬことを訊きますが、藍さんの父親ってどんな人でしたか？」
「んー？草臥れたサラリーマンだよ、よれよれでいつも辛気臭い顔で帰ってくるただのオッサン」

サラリと藍さんは答えた。何ともない感じに。何とも思っていない様子で。平然と他人事みたいだった。
そう、まるでもう、赤の他人みたいな口調。

「椿お嬢の父親は？」

爽やかな笑顔でそうあたしに訊いたが、ハッとして軽挙妄動に顔を歪ませる。
やべえ、としくじったといった顔。

「ということは親は表の人間でしたか。藍さんは何をきっかけに裏に入ったんです？」

あたしは聞き流して続けて訊いた。藍さんはホッとして爽やかな笑顔を戻す。

「中学校の時にやったハッキング」

「……因みに何をハッキングしたんです？」
「警察ファイルにハッキングしてクラッキングした」
なんつー中学生だ。
「捕まったんですか…？」
「まさか、逃亡中の身さ」
恐ろしい奴…！被害者ぶって逃げ切ってるあたしが言えることじゃないけど、中学生でよく逃げ切れたな。
「幼なじみが裏現実者で匿ってもらったんだ」
「へぇ、幼なじみが。それから裏現実に」
「そーゆーことー」
白瑠さんは殺戮を機に、あたしは白瑠さんと会い、幸樹さんは妹の死で、藍さんは幼なじみがいたから。
裏の世界に足を入れた。
裏側の世界。
裏側の現実。
「あ、夕飯作るんだった。早く帰らなくちゃ」
「え？つーお嬢のご飯！？ぐふふ！食べる食べる！」
「じゃあ買い物手伝ってください」
「勿論！」
そんな裏側の現実だって。
兄弟だったり親子だったり――――家族がいたりするんだよな。
表と同じ。
それも現実。

裏表の違いって、なんだろう。

兄弟愛家族愛（後書き）

どうしても黒と絡ませたかった一話でした。

殺戮中毒の仔猫

腹に突き刺し、腸ごと引き抜く。それから首を掻き切る。
血飛沫。血の海。
顎を貫き舌を引き摺りだして喉を抉りとる。
ドクドクと溢れる赤黒い血の飛沫。気付いた時には血の海。
殺戮の日々。
翌朝はベッドの上で気だるさの中を起きる。

「白瑠さん、次の仕事は決まりました？」
「んー？んんー…」
「お昼はなに食べます？」
「うひゃあ！つばちゃんの作るものならなんでも！」

新しい年になって一週間が経過。幸樹さんが表の仕事で昼間はあたしと天真爛漫な白瑠さんと二人きり。
正月に余ったお餅を並べれば白瑠さんはあっという間に平らげる。
お餅が無くなった。
ていうか作ってない。焼いて醤油やらきな粉を用意しただけ。

「見てみてぇつーちゃん！びよーん！」
「あー、はいはい」

新年から一週間。
未だに悪魔は沈黙。ラトアさんは音信不通。黒の殺戮者も動きを見せていない。
どいつもこいつも動きなし。
つまらん。

春まで悪魔が黙っていればあたしの身は安全だが、黒の襲撃がないのはそれはそれで物足りない。
宣戦布告で意気衝天したのに、これでは意気消沈だ。

「どうしたの？つばちゃん。なんかむっすりした顔して、生理？」

ばちんっ、とあたしはソファに逆さまに座る白瑠さんの顔を叩いた。
最低。
ここまでつまらないと、何かしたくなる。じっとしていられない子供なのだ。

「白瑠さん」
「ん？」
「黒の殺戮者とはいつもどんな会話をしてるんですか？」

ポカンと口を開く白瑠さん。怒るか黙るか、どっちだろう。
白瑠さんはゴツンとソファから落ちた。落ちるんかよ。

「う、うひゃひゃひゃひゃ、あひゃひゃ……あははっ」

白瑠さんが乾いた笑いをした。世界が仰天。

「え？な、なんでいきなりそんなことを訊くのかな？な、なんでかなぁ？」

頭蓋破壊屋、動揺。今なら殺せる。…かもしれない。

「訊いてはいけないようなことですか？」
「えっ、えっ、だって」

ぐりんと前転して白瑠さんはコーヒーテーブルに正座。動作がウケる。
今まで黒の殺戮者の話題は出さなかったからいきなりの不意打ちに戸惑っているのだ。

「白瑠さんの好敵手の話を訊いてるだけですけど……弟子には教えてくれないんですか？」

そんなテンパっている白瑠さんに猫なで声で追い討ちをかける。

「っ…う……」

上目遣いで、攻めてやる。後退する白瑠さん。
最近白瑠さんがやけに我が儘を聞いてくれるんだよな。
仕事は直ぐに取ってくるし、買い物には足になってくれるし、初詣では代わりに並んでくれ、チーズバーガーが食べたいと言えば直ぐに買ってきてくれる。
つまりは何故かパシリな立場をやってくれているのだ。何故だろう。

「んー……別にぃ……会話なんてした覚えないけどなぁ…」
「……喧嘩腰の会話とか」
「さぁ…」
「…罵声罵倒とか」
「んぅ…」

物覚えの悪い人だ。
思い出すのが嫌そうに顔をしかめながらあたしに抱き付く。夏だったらくっつくなと言うが、寒いから許す。あったかいんだよな。

「じゃあ初めて交わした会話」

「……」

この沈黙は思い出して不機嫌になったんだろう。

「忘れたよ」

こりゃあ腹が立っているな。

なんでこうも黒の殺戮者を嫌うのだろうか。いい奴だったし、面白い奴でもあった。不快でもないなかったのに、どうしてだろう。

白瑠さんは話したがらない。

喜怒哀楽の喜と楽ばかりの人だから怒がわかりやすい。

あたたかさにうとうとしてきた。

眠ってしまおうかと思っていれば白瑠さんが首に口付けする。

首の傷痕を舌でなぞり、吸い付く。

それをやられるとどうも反応に困る。白瑠さんはあたしの傷がお気に入りなんだ。

「うっ!?」

気が済むまでやらせておこうか、と思ったけど。

白瑠さんが胸を握った為、あたしはアッパーを喰らわせた。

「なにするんですか!?」

とりあえず離れる。

振り返ってみると、白瑠さんは仰向けで倒れたまま。動かない。

ピクリとしない。

あれ?殺っちゃった?

「は……白瑠さん?」

「ばぁあ！心配したぁ？」
「顎折れちまえ」

慌てて手を伸ばすとバッと笑顔で白瑠さんが起き上がった。あたしは顎が折れるように殴っておく。
最近自分が暴力的な気がする。
その夜も仕事。
今夜はヤクザの殲滅。両目にナイフを投げつけ腹を抉る。首を胴体から切り離し蹴り倒す。
誰だろうとそこにいる人間を殺す。女子供でも殺戮。抵抗など効かなければ無抵抗だ。
返り血を浴びてはまた切り裂き血飛沫を作り上げる。
肉を切り裂き、悲鳴を切り裂く。
龍が描かれた襖の広間は全て血に染まり、死体だけが転がる血の海となる。
その真ん中に立ち尽くす。女子供もいる。子供は五才にも満たない。
何とも思わなかった。
そう、何とも思わない。
殺戮中毒なのに、快楽はこない。
殺戮しなくてもいいと思えるが、殺戮衝動は付きまとう。

「つーちゃん。帰ろう」
「……はぁい」

暢気な白瑠さんのあとを歩いてその場を後にした。
翌日は由亜さんと夕食作り。
虚心坦懐な由亜さんとはそれなりに仲良くなっている。それなりに。
ただ、心から気を許していないだけ。
一緒に買い物はするし、よく幸樹さんの家を出入りするから話す。
由亜さんのおかげでそれなりに裏現実の状況がわかっている。でも

やはり黒の殺戮者の話題は口止めされているらしく、黒の情報は貰ってない。

「お肉は？」
「多目がいいですね」
「あれれ？人参は？」
「包丁包丁！」

二人でキッチンを右往左往。タンタンと素早く人参を切れば、由亜さんに褒められた。
普段人間を切ってますので。なんつって。
手分けして料理をしていれば、視線に気付く。
キッチンの目の前にあるテーブルに頬杖をついている幸樹さんだ。
あたしではなく、由亜さんを見ている。
見つめていた。
いとおしそうに、微笑んで見つめている。
優しげな眼差し。
とんとんとん。
愛しいものを視る優しい視線。愛しい。愛。愛情。
とんとんとん。
そんな視線に全く気付いてない由亜さんは寄り添って耳打ちした。

「奈乃宮くんと別れて本当によかったの？」
「え？…ええ」

今頃蓮真君の話。由亜さん達の手前では別れたが那拓家では交際中だ。

「椿ちゃん、あの子のこと。本当に好きだと思ったんだけどなぁ」

火の調整をしてぼやくように由亜さんは言った。

「そうですか？」

「うん、別れるってきっぱり言うなんて…正直信じられなかった」

嘘を信じた人に疑われてた。

「あたしは裏で彼は表ですし、彼にはあたしなんかよりいい彼女が居ますから。学校でモテているらしいです、ほらっ可愛い顔をしてたでしょ？」

「あー、確かに。モテそうだね」

あたしが笑って言えば由亜さんはクスリと笑った。

「でも」と付け加える。

「椿ちゃんだって彼よりいい彼氏が居るの？」

蓮真君より、いい彼氏。

蓮真君が彼氏ならば、申し分ない。

でも実際彼は恋人ではないんだ。

あたしに恋人はいない。そしてあたしにいい恋人はいない。

恋人なんて。

あたしは幸樹さんに目を向けた。

「そんな人、存在しません」

冷たく、あたしは答える。

くだらない。当たり前じゃないか。それを込めて吐き捨てる。

あたしは愛せやしない。

誰も、愛せやしないんだ。

幸樹さんと違って、愛しそうに誰かを見つめられない。
愛していると言われても、あたしがいい彼女になれないんだ。

「白瑠さん、今夜仕事は？」
「……。つばちゃん」

鍋に詰め込んであとは煮込むだけ。あたしはおどおどし始めた由亜さんから逃げるように、キッチンを出てテレビを見ている白瑠さんの元に寄る。
そしたら怪訝な顔で見上げられた。

「昨日ヤクザを殲滅したんだよ？」
「だから？」
「つばちゃん、日本列島から人間を排除する気ぃ？」

白瑠さんはソファの背凭れに座って今度はあたしを見下ろす。

「つばちゃん、日本に帰ってから二日に一つのペースで仕事やっちゃってるよ？毎日毎日、仕事は？って。冬休み全部仕事だよぉ」
「それが……いけないんですか？」
「つばちゃん、麻薬中毒はやり過ぎで死んじゃうんだよ。殺戮中毒は殺り過ぎで死んじゃうよ！」
「何故」

肩を掴み真顔で言われても、全然納得しない。麻薬中毒は麻薬のやり過ぎで心臓が停まるだけだろう。殺戮のやり過ぎでどうして心臓が停まるんだ。

「いいかぁらぁ、ペースは落とそ。一週間はお休み！」
「ぶー」

ぷにゅ、と頬を潰される。
一週間、殺しを我慢。
そんなの堪えられない。

「無理です、あたし、我慢出来ません」
「どしたの？つーちゃん。なんかストレス？」

白瑠さんは笑ってあたしの頭を撫でた。笑えない。あたしはムスッとする。

「自分で探す！多無橋なら仕事くれるもん！」
「もんって……クスクス」
「だぁめっ！師匠めぇれい！」

くるっと方向転換。向いた先の幸樹さんは子供じみた言葉遣いにクスクスと笑った。
幸樹さんからパソコンを借りて藍さんのサイトから仕事を見付けようとしたが白瑠さんに確保され羽交い締めにされる。師匠命令と言われると。むかぁー。
口を尖らせて膨れっ面をして、ピコンと思い付いた。
殺戮衝動を抑える為に条件を呑んでもらおう。

「じゃあ、師匠。一週間我慢すると約束するので、黒の殺戮者の話をしてください」

弾んだ声で羽交い締めをする白瑠さんに言う。
一時停止した白瑠さんは、バタンと後ろに倒れた。落ちたよ、この人。また。

「…椿さん」

さっきから眺めて楽しんでいた幸樹さんから厳しい眼差しを向けられる。するなと言った話題を出したから。
あたしは反省の色を見せず肩を竦めた。別にいいじゃん。

「やっほー、いいにおい！由亜っちの料理？」
「アタシと椿ちゃんの料理だよ、藍くん」
「やったー！お嬢の愛が込められた手料理！」
「愛じゃなく毒を込めました」
「毒殺！？」

そこに藍さんが来た。最近、愛だ愛だと煩いなぁ。
まるで心を読まれてるみたいで気持ち悪い。曲者め。

「で、白瑠さん」

あたしは気を取り直して逆さにソファに座る白瑠さんを見下ろす。
背凭れにある膝には手を置いて逃がさない。

「んー？なにこの状況」
「藍乃介、椿さんを止めてください」
「椿お嬢が白くんを襲ってるの！？」
「やん、優しくして」
「違う。キショイ、白瑠さん」
「違います。やめてください、気色悪い」
「え！？幸、今なんて言った！？俺が気色悪いって言ったの！？」
「え？違いますよ、椿さんは襲われる役じゃないですか」
「あー、だねぇ」
「それに恥じらう白瑠が気色悪いですよ」

「あー、だねぇ」
「白瑠さん、今貴方が気色悪いと言われましたよ。…って！なんであたしは毎回襲われる役だと言われるんですか！？」
ついつい平然とツッコミをし、ハッとして気付く。
「えぇ、つーちゃんは襲われる派でしょ」
「もしくは誘い受け」
「つーお嬢は断然受けっしょ」
「なにぉう！？攻めだってできるやい！」
「椿ちゃん！アタシは止めるべき！？便乗するべき！？」
一名会話に参加するか止めるかを迷っている。
「えぇ？つばちゃんが襲えんのぉ？」
「襲える！！年下なら襲えるもん！」
「へぇ、じゃああの学生服を襲ったんですか？」
「押し倒したことはある！！」
何話てんだ。押し倒したのだってあれ剣道教わってる最中。いや、でも蓮真君なら襲える気がする。襲ってもいいなら襲ってやる。―（何の話だ、ほんと）
「へ？押し倒したことあるって……漫画喫茶の子だよね？」
きょとんと白瑠さんが首を傾げる。あ、この人聞いてないんだ。
「じゃあ、椿ちゃん！年上はどうなのかな！？」
慌てて由亜さんが会話に参加した。するのかよ。止めろ。止めてく

ださい。

「お、襲えるかな！？」

「くす…無理でしょうね」

「なんで言い切れるんですか！？」

「例え夜這いしても椿さんは返り討ちにあうだけです」

「幸樹さんまでそんなことを…！！」

誰だっけ。それ言った奴。

ああそうそう背後で笑う白瑠さんだ。

「あたしに襲われても知らないんだからねっ！！」

ヤケクソ。かっこ泣き。

「おや？椿さんが自らベッドに入ってくるんですか？大胆ですねぇ」

「椿からお誘い！？うひゃあ！」

「ぐふっ！攻めのお嬢…ツボ！」

「……ベッドの上で殺したろうか」

受けだ受けだ言ったくせに何故攻めると言ったら便乗しやがるんだ。

幸樹さん、恋人がいるって断ってください。白瑠さん、口先だけに決まってるでしょ。藍さん、とりあえずうぜえ。

見事に黒の話題から逸らされた。

くそう！思惑にはまっちまったぜ！

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

話題を戻そうとした矢先に呼び鈴が何度も押された。迷惑な程に連打。

「借金取り？」とあたし。

「借金してませんよ」と幸樹さん。

「あれだよ、熊に襲われて助けを求めてるんだよ」と白瑠さん。山がないのに熊がいるわけないだろ。てか冬眠してるでしょ。

「違う！不審者に追い回された小学二年生のＳＯＳだ！！」
「だったら不審者は貴方です」
「えっと、アタシが出るね！」

玄関に駆け寄ろうとする藍さんの襟を掴み止める。万が一小学二年生だったらお前が第二の不審者だ。
由亜さんが行こうとした途端に、バキッという音が聴こえてきた。
それからドタドタと廊下を駆ける音が。

「つぅぅうばぁあああきゃあああああんっっっ！！」

ドアを蹴り破り廊下を駆けてあたしに迷わず抱き着いてきたのは、狩人の鬼・秋川秀介だった。
一同、呆然であたし達を視る。

「え…？秀……？」
「椿！無事か！？怪我ないか！？あぁ！無事でよかった！！」
「はぁ？てか、どうしてここがわかったの？」
「それは椿が帰るのをつけて！それよりも椿！」
「――――…ほーう……？」

何故か必死な秀介はバッと離れてあたしの身体を隅々まで見て無事を確認してまた抱き付く。
ハッ！？冷気！
振り返れば凍てつく微笑を浮かべた幸樹さん。

「椿さんをつけていないと嘘をついて唇を奪った。そうゆうことで

すか？」
「え…えっと…」

キラーン、と幸樹さんの手からメスが刃を出す。状況がわからずおどおどする秀介。

「い、いいじゃないですか。キスぐらい」
「キスぐらい？椿さんにとってキスぐらいなんですか？」
「そう言えばつーちゃんって、しゅーちゃんにしのちゃんに俺にチュッチュッするよねぇ」
「おやおや、では私にもキスしてくれるんですか？」
「恋人がいる人が何言ってるんです」

嘘ついたのは怒るが、もう秀介とキスなんて挨拶だ。
フォローしたら標的にされ、白瑠さんに暴露された。
幸樹さんいい加減にしてください。由亜さんも黙ってないでなんとか言ってください。

「椿お嬢！僕は僕は！？」
「……ごめんなさい。すみません。許してください。本当に許してください、ううっ…許してっ…」
「謝罪！？」
「てめぇ椿を泣かせてんじゃねぇ！」
「ところで、秀介君。どしたの？」
「嘘泣き！？」
「嘘泣き！？」

便乗する藍さんがウキウキした顔で言う。あたしは謝って泣きそうなフリ。本当に要求されたらあたしは泣けると思う。
それに騙される二人。あたしは直ぐに秀介に用件を訊いた。

「どうしたって…知らないのか？」
「何を？」
「黒の殺戮者が紅色の黒猫に喧嘩売るって！！」

……は？
理解するのに二三秒かかった。
コクウが、あたしに喧嘩を売るだって？

「それ……噂？」
「噂だけど、椿に喧嘩売って戦争始めるって狩人の中でも騒ぎにッ」
黒の殺戮者の戦争相手が、あたし？
まさか。そんなはずはない。
電話で話したコクウはそんなこと、におわせていなかった。敵意なんてないはず。
ただ、単に“面白そう”なあたしに、会いたがっている。それだけのはず。
　ぐいっ、と秀介の襟を掴み白瑠さんが引っ張った。
不意打ちに秀介は倒れ尻餅つく。

「何しやがんだ！？クラッチャーてめぇ！！やんのかコラァ！」
「うひゃあひゃ、しゅーちゃん。ちょっとこっちに来てぇ」
「うおっ！？」
「こっちで話しましょうか、秀介君」

ズルズルと殺し屋二人に捕まった狩人は、密室へと消えていった。
しん、と静まり返るリビング。
残されたのはあたしと由亜さんと藍さん。

「あっ！ドア直さなきゃ！」

由亜さんはハッとしてパタパタと廊下を走り去った。なんだ、あのマイペースな人。

残されたのは、あたしと藍さん。

二人で沈黙して立ち尽くす。

沈黙しても白瑠さんの部屋から音がしない。

「あっ！そうだ！小学生の下校時刻だ！」

「逃がすか。変質者め」

由亜さんと似たノリで逃げ出そうとした藍さんを確保。小学生が安全に下校する為でもある。

「どうゆうことですか？」

「え？えーとー？何の話かーなー」

「……黒の殺戮者の話です」

「さぁー？ガセネタじゃないのかなー？」

目を逸らして笑う藍さん。

ほうほう、今でも黙っているつもりなのか。

「藍さん、隠したって無駄です。あたしは知ってます。貴方達が衝突したこと。黒の殺戮者があたしを捜しているのは、ガセネタじゃない事実でしょ？」

「……んー」

問い詰めれば顔を引きつらせた藍さんは観念したのか、いそいそと椅子に座った。あたしは向かいに座る。

「先々月に、僕は誰よりも早くある情報を掴んだ」

そう切り出した。

先々月。十一月。丁度白瑠さんが不機嫌になった頃だ。

「紅色の黒猫を、黒の殺戮者が捜してるって情報」

「……その情報を白瑠さんに話した？」

「そう。ぶちギレた」

あたしはチラリと白瑠さんの部屋に目を向けた。それだけでキレなくていいのに。

「それで皆でつーお嬢を守ろうってことで、ちょっとだけ衝突した」

「何故会いたがっているだけでそうなるんです？それにあたしに黙ってたのは何故ですか？何故あたしだけ茅の外に出されていたのか、教えてください。会わせたくなくとも話すぐらいしてくれてもいいじゃないですか？」

ひとくくりにまとめて言った藍さんに噛み付くように質問攻めをする。

藍さんは心底困った顔をして白瑠さんの部屋を見つめた。やがてその扉が開いて「二人に聞いてよ！」と責任転嫁する。

部屋から出てきた白瑠さんが暴れる秀介を家から追い出した。

「何を話したんですか？」

「もう椿さんをストーキングすることはやめなさいと説得しました」

「黒の殺戮者の話でしょ」

幸樹さんはにこやかに答えたがあたしはズバッと当てた。

戻ってきた白瑠さんが黙る。

「椿さん、その話はやめましょう。口にしてはいけないと言ったでしょ？」

手を振って幸樹さんは、きつく言った。

反抗的にあたしは睨み付ける。じぃっと黙って見上げた。白瑠さんは表情を変えずに立ち尽くしてるから幸樹さんを一点に視る。

それに幸樹さんは溜め息をつく。

「だめです」

「……あたしだけ仲間外れにして黒の殺戮者からあたしを隠し続ける気ですか？」

あたしがそれを言えば、幸樹さんは藍さんを睨み付けた。

「え、椿お嬢は……知ってたんだよ。黒が捜してるって話しかしてない」

慌てて藍さんは首を横に振って説明する。幸樹さんは再び溜め息をついた。

「何故あたしに黙っていたんです？黙ってどうして黒と衝突したんです？ラトアさんまで使って」

椅子から立ち上がり腕を組んで幸樹さんと対立する。

「あと衝突したことも白状しました…」と藍さんは幸樹さんに白状した。幸樹さんはまたもや溜め息をつく。

「だめです、椿さん。貴女が知らなくていいことです」

「あたしが関係しているのにですか？」

「はぁ…終わりです、この話は」

噛みついたが幸樹さんは肩を竦めた。あたしはギロリと睨み付けたが幸樹さんには効かない。
くるっとあたしはソファを飛び越えどっかりと座った。

「そっちが話さないならばあたしは、黒の殺戮者と孤軍奮闘します」
「……。つばちゃん」

口を開いたのは白瑠さんだった。
あたしは腕を組んでそっぽを向く。

「どうせ彼の方から会いに来るなら、本人に直接訊きます」
「椿っ！」

いきなり白瑠さんが抱きついてきた。痛い。ギュウと腕で締め付けられる。い、痛い。

「…全く、何故貴女は私達が奮闘しているのに、会うなんてことを言うんですか？」

幸樹さんは心底呆れたようにソファに腰を降ろした。

「話しますから。無謀なことはやめてください。約束できますね？」
「ええ、勿論」

やっと話すことになったらしい。あたしは頷いた。
白瑠さんはあたしの腹にしがみついたまま動かない。
何の行為の表れだろうか。
会わないでくれって意味？

そんなに嫌いなのかな、コクウが。

「先ずは、言っておきますが…椿さんが黒の殺戮者の戦争相手ではないのは確かです。黙っていたのは椿さんが、会うと言い出すからですよ。現に会いたがっていたでしょ？」

黒の殺戮者が紅色の黒猫を戦争相手にするは、ガセネタと断言した。会いたがっている。と現在進行形だったりするのは黙っておこう。

「衝突を話していれば、椿さんは参加すると言い出しますしね」

仲間外れが嫌で言うと思うな。

「椿さんがラトアとデートしたその夜、藍乃介が掴んだ情報で黒の殺戮者と対決しました。その前に私の獲物がとられたのを覚えてますか？」

「火都が身を引いて彼が白瑠さんより先に獲物を仕留めた件ですよね」

ようく覚えている。あの日は。火都に会った日だ。

「その際に白瑠と彼が椿さんの話をしてしまってね…。白瑠はわざわざ自分の元に椿さんがいることをバラしちゃったんです」

カッとなった白瑠さんならやりかねない。

「今、紅色の黒猫を捜してるんだぁ」とコクウ。

「あの子は見付けさせないよ！俺のだもん！」と白瑠さん。

適当なイメージ。

「白瑠のにおいを追ってこの家に辿り着くのも時間の問題でしたか

ら、白瑠は決着をつけようと言い出し衝突したってわけです。しかし、中々決着がつかなかったんですよね…それが」

はぁ、と重たい溜め息が落ちる。互角過ぎるのか、はたまた吸血鬼の生命力が強すぎるのか。

「化け物同士の戦いだよ、あれは。フレディｖｓジェイソンさ。白くんがいくら攻撃してもケロッとして立ち上がるんだぜ、黒の殺戮者」

藍さんもソファに座って会話に加わった。

どうしよう、例えが殺人鬼の化け物だけあってピッタリ合う。リアルホラーモンスター。

…片や吸血鬼だし。

「やむ終えず話し合いで解決しようとしたんです。椿さんに会わせないと。しかし中々彼も引いてくれなく……また白瑠と殺し合い。そこに秀介君が割って入ってきたので一時撤退をしたんです」

「秀介君から聞きました」

「妙な情報源はいつも彼からもらうんですか…」

妙なって。それは貴方達が都合悪い情報なだけでしょ。

それからもう一つの情報源は蓮真君だ。話さないけど。

「不機嫌で帰ってくればラトアからアメリカに行く提案をしたのでそうしたんです。そして危うく黒と貴女が会いそうになりましたが帰国した。何故かニューヨーク滞在がバレてしまったんですよね」

「僕がガセネタで撒いたのに、バレちゃったんだよね」

バレちゃったんですよねぇ。あたしがレネメンに言っちゃったから。

あっはっは。

「僕、黒の情報源を探ってみようか」

「しなくていいですよ！…ほらっ、逆に足がついたらどうするんですか」

「ぐふふ……椿お嬢。僕は中学生以来、一度も足がついてない天才だぜいえい！まっかせなしゃい！」

慌ててあたしは止めたがウザイノリでやる気満々な藍さん。あたしの失態を暴く気満々。

「そんなの調べなくていい！！調子に乗るんじゃない！座りなさい！」

ピシャリと言えば大人しく藍さんは腰を降ろした。

「……ぐふふっ、お叱り…ツッボー」と即座に反省の色が消えたが気にしない。

「大体わかってきましたが……何故会わせないんです？こ…黒の殺戮者は、ただあたしに会いたがっているだけなんでしょう？」

危うくコクウと呼びそうになった。それだけはやめよう。

腹に穴が空きかねない。抱きついて動かない頭蓋破壊屋の手によって。

一度、幸樹さんと藍さんが目を逸らした。

「椿さん」

幸樹さんはあたしを呼んでから白瑠さんに目を向ける。

理由は彼にあるってことか。

静かに息を吐いてから白瑠さんの髪を指で撫でた。

「白瑠さん」

呼んでみたが白瑠さんは反応しない。膝枕して抱きついている体勢のまま寝てはいないだろう。

「白瑠さん。どうして黒に会わせたくないんですか？」

「……」

「ただ会うだけじゃないですか」

「……」

「黒はただ会いたいだけなんでしょう？」

「……」

「椿さん。ただ会うだけで済むならば白瑠だって会わせますよ」

「っ会わせない！！！」

沈黙を続けた白瑠さんだったが幸樹さんの言葉に敏感に反応して起き上がった。危うく顎に頭突きを食らうとこだ。

「あいつだけには会わせない！！あいつはムカつくんだ！！嫌だ嫌だ！！」

「……でも、白瑠さん」

「でもじゃない！！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だぁあっ！！」

説得させる暇もなく嫌だの一点張り。なんだろう、この子供は。

「だぁー、わかりました。わかりましたよ、白瑠さん」

そんなにコクウが嫌いなのか。嫌な奴ではないのにな。

白瑠さんに対してはいじめっ子？
白瑠さんがいじめられっ子なんて、考えられない。
子供は子供で、自分の玩具を見せたがると思っていた。が違うのか。
会いたかったなぁ、ひねくれた策略家に。

「会わないように努力します。この前のように全力で逃げます、それでいいでしょう？」

あたしはぽんぽんと肩を叩いて宥めながら言う。

「ほんとに？」

捨てられた仔犬みたいに見上げてくる白瑠さん。可愛らしい声。

「ほんとです。ちゃんと逃げます。会いたいなんて言いません。目の前に現れたらナイフを投げて一目散に逃げます。それでいいんでしょ？」

そうしないとあたしはゲームに負けて、血を吸われてしまう。
追われて逃げる。そんなゲームをして楽しもうか。
白瑠さん達には内緒のゲーム。

「椿、大好きっ！！」

がばっとハグを喰らう。
痛い、苦しい。
呻いたが白瑠さんはギュギュギュウ、と抱き締めてきた。

「それでは、これからは椿さんを彼らには会わせないように一同で奮闘しましょうか」

「だねー。はぁー、これで気が楽になったよー。つーお嬢に隠すのって心が痛かったー」
「少女を拉致してることに心を痛めなさい」
「ツン！？てか拉致なんてしてないよ！僕のは誘拐だ！！」
「拉致は無理矢理連れていくこと。誘拐は騙して連れ去ること。誘拐の方が悪質じゃねぇか」

黒の殺戮者の話はこれにて終了。
いつもの会話に戻っていく。
これで苛々も少しは和らぐ。よかった。
少し経てば、由亜さんが帰ってきた。その隣には、何故か秀介が。

「シュウ…？帰ったんじゃないの？」
「ん…。帰ろうとしたらこの人が…」

きょとんとした中、あたしが問えば秀介は由亜さんに目を向けた。

「せっかくだから夕食食べてって、誘ったの！」
「椿の手料理食べたい！」

にこっと純粋な笑顔の由亜さん。そして目を輝かせる秀介。
色々問題がある。
殺し屋の中に狩人。
頭蓋破壊屋を狙う狩人の鬼。
あたしのストーカー。
あたしは幸樹さんに目を向けたが、由亜さんの笑顔に何も言えない様子だった。
そんなこんなで、狩人を交えての不可思議な夕食の時間。
何とも妙な気分に陥る光景だった。

「うっ……美味いっ！！つばきゃん、美味いよ！！こんな料理を毎日食える俺って幸せ！！」
「あたし、君と結婚した覚えないんだけど」
口にした途端に秀介は声を上げて喜色満面の笑みをあたしに向けたがプロポーズは一蹴する。

「椿が料理出来るの知らなかったなぁ、すげぇー美味い！」
「だからこれは由亜さんと作ったんだって」
「春巻きは椿ちゃんお手製だよ」

明るく笑う秀介に対して冷たく返す。そこに由亜さんがいらんことを言いやがった。
そんな由亜さんを見たくない。
何故か由亜さんはキラキラと輝かせた目であたしと秀介を見ている。
由亜さんの隣の幸樹さんと藍さんは沈黙していた。
白瑠さんと言えばいつものペースで料理を平らげている。白瑠さんはいつも大量に食べるから春巻きは山積みだ。

「まじ美味しい……結婚しよう、椿」
「ムードないプロポーズ。断る」
「え？ムードあるなら結婚してくれる！？」
「しない！なんで恋人じゃない奴と結婚するんだ！結婚しない派だ！」
「じゃあ同棲から始めよう」
「いい加減にしなさい」

箸をへし折りそうだった。
なんでこの子は、過保護な殺し屋達の前で平然と食べて、平然とプロポーズしてくるのだろう。

肝が据わってるにもほどがある。
好きになったら突っ走ってくるタイプなんだよな。あたしも幼い頃はそうだった。だから何度も告白しては敗れたっけ。
一体秀介は何度あたしにフラれれば諦めるのだろうか。
やっぱり新しい恋を見付けるまでだろう。あたしはそうだ。
何気、似てるところがあるんだよね…。

「ん…？」

あたしが秀介の横顔を眺めていれば秀介は手元を止めて首を傾げた。
やがてニコッと微笑を返す。
いや……うん……うーん。

「どうして彼を誘ったんです？彼は狩人ですよ」

幸樹さんが耐えきれず由亜さんに訊いた。秀介に聞こえても構わないような声量で。

「だって！椿ちゃんを心配して来たんだよ？それに椿ちゃんは彼氏と別れちゃったから新しい彼氏を見つけなきゃ！」

由亜さんはコソコソと密かに幸樹さんに耳打ちしたつもりだが、あたし達に丸聴こえだった。
この人、あたしと秀介をくっつける気で目を輝かせていたのか。

「彼氏？」

そのワードに反応したのは、白瑠さんと秀介。ポロリと二人とも口にした春巻きを落とす。

「椿!?彼氏がいたのか!?俺を差し置いて!?」
「うぇえ!?つばちゃんに彼氏ぃい!?」

左右から大声が上げられる。煩。

「ああ、白瑠には言い忘れてましたね。漫画喫茶にいた学生服の少年と去年まで付き合ってたんですよ」
「奈乃宮くんだよ!」

あたしが押し黙っていれば幸樹さんが代わりに教えた。
白瑠さんは口をぽっかぁんと開いたまま、秀介は顔色を変える。まずい。

「アイツが……?アイツが……?…なんでアイツなんだよ椿!?あんな生意気なくそ餓鬼の何処がいいんだ!?」

がしりと肩を掴んで問い詰める秀介に顔がひきつる。いや、嘘なんです。と白状出来るわけもない。

「煩いなぁ、あたしが誰と付き合おうが関係ないじゃん」
「っ!……俺がこんなにも椿を思ってるのに…関係ないだって…?自分からキスして俺の上に乗ってき」
「うわぁあああおっ!!」

何てことを食事中に暴露しやがるんだ。あたしは慌てて秀介の口を塞ぐ。
ああもうっ煩い!変なことがバレそうでひやひやする!

「秀介、食べたら帰って」
「え?泊まっちゃだめ?」

「いいわけあるか」
「いいじゃん！一泊お泊まり！ねっ！」
「よくありませんよ」
「無理矢理くっ付けようとしないでください」
「でもつーお嬢、満更でもなさそうだよね」
「ここで茶々をいれないで！」

じっと観察するようにあたしを見ていた藍さんがいきなり会話に参加。
由亜さんは異様に興奮している。お節介め。

「嫌よ嫌よも好きのうちー。ぐふ、つばお嬢はツンデレだからじ、つ、はー？」
「俺もそう思う！！」
「二人まとめてシメてやろうか？」

ぐふふー、といやらしい顔で言ってくる藍さんに秀介は共感にテンションを上げる。頭が痛い。
ふと気付く。
なんだろう。藍さんは笑っているが、何処と無く不機嫌に感じる。
どうかしたのか。
首を傾げれば、ぱくり。箸で持っていた春巻きを横から白瑠さんに食べられた。

「あー！！てめっクラッチャー！！何椿の食べかけを食べてんだぁあ！」
「煩い！！大人しく食べないなら今すぐ追い出すわよっ！！」
「は、はいっ…！」
「うっひゃっひゃあ！つばちゃんに怒られたやーい」
「るせっー！てめぇのせいだろーがっ！！」

「煩いっ！！！」

あたしは秀介の頭を叩いた。

殺戮中毒の仔猫（後書き）

あと約三話で『裏現実紅殺戮　愛情は狂言』は完結します。

重い重い重い重い溜め息を溢す。
結局、秀介は泊まった。あたしの部屋で、あたしのベッドでだ。
勿論、過保護組が二人きりで寝かせることを許すわけもなく一同あたしの部屋で寝た。
何故だ。
ベッドに潜り込んで、あたしの身体に腕を回す白瑠さんと秀介を眺めて溜め息を溢す。
秀介は興奮してなかなか寝てくれずあたしはそれに付き合うはめになった。
寝たら何されるかわからないからだ。
と言うことで寝不足。
あたしはベッドを這い出て部屋を出ようとした。
あれ。
床に敷いた布団には藍さんしかいなかった。幸樹さんは表の仕事か。
由亜さんも自宅にでも帰ったのかな。
部屋を出てリビングに行けば、由亜さんがテーブルでコーヒーを啜っていた。

「椿ちゃん、おはよう」

にっこりと微笑む由亜さん。
幸樹さんがいつもいる場所にいるのが、ちょっとムカついた。
あたしは軽く会釈して挨拶を返して、ソファに座りテレビをつける。

「椿ちゃん、椿ちゃん。秀介くんのことなんだけどぉ」
「彼とは付き合うつもりはありませんよ」

どうせ好きかどうかを訊きたいんだろう。あたしはチャンネルを回しながら先に答えた。

「えー、でもでも。嫌っていないじゃん」

「嫌ってはいません。いい友人ではありますから。それに彼は狩人なんですから付き合うなんてあり得ないでしょ」

隣に座ってきた由亜さんに溜め息混じりに話す。

なんで秀介は狩る対象のあたしなんかに交際を求めてくるのだろうか。

「……椿ちゃん。言い訳ばっかりしてない？」

それを聞いてテレビから由亜さんに目を向ける。彼女はきょとんとした顔であたしを視ていた。

「“表だから”とか“狩人だから”とかで…椿ちゃんは片付けちゃってる。じゃああれかな？殺し屋の中に、椿ちゃんの“いい恋人”がいるの？」

真っ直ぐな瞳はまじりけのない意志で貫こうとしてくる。焦りを胸の中で感じた。

言い訳…。

「本当の理由は」

別に言わなくていいことなのに。

云うからややこしくなるのに。

あたしは答えてしまった。

「あたしが彼らを好きになれないからです。ただそれだけです。そう言えば納得でしょう？それとも、好きになる努力がいるとか言うのですか？」

刺々しく、感情を出してしまった。だけど由亜さんは怯まない。純粋なまま、素直にありのままのことを口にした。

「ううん、好きになるために努力なんて必要ない。でも椿ちゃん。椿ちゃんは自分で制御しちゃってるんだよ。好きにならないように努力してるんじゃないのかな？」

聞きたくなかった。

あたしは立ち上がり、廊下をスタスタ歩いて部屋に戻った。

聞きたくなかった。

あの人から。

あの純粋な人から。

聞きたくなかった。

嗚呼、そうだ。

あたしは好きにならない努力をしてる。

好きになる資格なんてない。

人を殺め続けるあたしが人を好きになるのは間違っている。

あたしは殺戮者。血に濡れている手。無感情の眼。

その手で好きな誰かに触れられない。

愛しそうになんて見つめられない。

そんなの知ってる。

でも、他人に言われたくなかった。

あの純粋な人に言われたくなかった。

幸樹さんに愛されるあの人から聞きたくなかった。

――アイサレナカッタ。

嫌な記憶が蘇って気持ち悪くなった。

ズルズルとドアにそってその場に座り込む。立てた膝に額を置く。

椿お嬢の父親は？

そんなの、あたしは。あたしは、知らない。

――ダッテ、ウマレルマエニアタシヲステタカラ。

継父には嫌われてた。母親だけが好きだって。母親だけを愛してるから。

――アタシハ、アイサレナカッタ。

今まで忘却していたのに、蘇って気持ち悪くなった。吐きそうだ。

何かが聴こえる。耳を塞げ。嫌。嫌、嫌。

嗚呼、そうだ。

あたしは好きにならない努力をしてる。好きになる資格なんてない。

人を殺め続けるあたしが人を好きになるのは間違っている。あたしは殺戮者。血に濡れている手。無感情の眼。その手で好きな誰かに触れられない。愛しそうになんて見つめられない。そんなの知ってる。

でも、他人に言われたくなかった。あの純粋な人に言われたくなかった。幸樹さんに愛されるあの人から聞きたくなかった。

――アイサレナカッタ。

嫌な記憶が蘇って気持ち悪くなった。

椿お嬢の父親は？

そんなの、あたしは。あたしは、知らない。

――ダッテ、ウマレルマエニアタシヲステタカラ。

継父には嫌われてた。母親だけが好きだって。母親だけを愛してる

から。

――アタシハ、アイサレナカッタ。

今まで忘却していたのに、蘇って気持ち悪くなった。吐きそうだ。

何かが聴こえる。耳を塞げ。嫌。嫌、嫌。嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌。

嗚呼、そうだ。

あたしは好きにならない努力をしてる。好きになる資格なんてない。

――ダッテ、アイサレナカッタカラ。

「椿？」

掛けられた声にハッとして顔を上げる。起き上がった秀介があたしを見下ろしていた。

「椿…？どうした？」

秀介はベッドから降りてすぐにあたしの前にしゃがんで顔を覗く。

あたしはそれを避けるようにまた顔を伏せた。

「椿？」

顔を見ようと秀介があたしに触れる。

「――触らないで」

潜めたようで掠れた声で言う。

「え？」

「触らないで。嫌い。秀介なんて嫌い」

視界を歪ます涙を溢さないように堪えながら、あたしは言った。

「優しくしないで。秀介なんて嫌い。だいっ嫌いよ」

「……椿…」

「大嫌い。大嫌いだから、もうあたしに…付きまとわないで。あたしは嫌い。大嫌いなの」

嫌い。嫌い。嫌い。嫌いだから。好きじゃない。好きじゃない。好きになれない。好きにはなれないんだ。愛せないんだ。だから離れて。

「わかった」

秀介のその言葉に掌から聴こえた心音が、ピタリと止んだ。

「触らない。優しくしない。ここにいるから、どうしたのかを話して。これ、優しさじゃないよ。俺の気が済まないからただ聞くだけだ」

「――――…」

嗚呼、なんて――――バカらしいんだ。この子は。

嘘つくな。

あたしへの優しさだろう。

それは君の愛なんだろう。

君の優しさが――愛。

やっぱり無理だ。

この子に嫌いと言っても、諦めてはくれない。

そんな些細な言葉じゃあこの真っ直ぐな想いを打ち消せない。

あたしなら、心折れる言葉なのに。

嗚呼、でも。

視えないだけで、あたしは。彼を傷付けたかもしれない。

「椿」

「……あたし」

嗚呼、もうあたしは。

「ここから…消えちゃいたい」

消え去りたい。
跡形もなく。
存在したことすら。
全て消えて、無くなりたい。

「よし！じゃあ俺が連れ出してやる！」

「…え？」

顔を上げればニッとした笑顔の秀介。そしてウィンクをした。
有言実行。
本当に秀介はあたしを連れ出した。
あたしの座っていたそこから。あの部屋から。あの家から。
あたしを連れ出し、そこから消え去った。
寝巻き姿のままのあたしを抱えて、パンダのハチロクで走り去ったのだ。
ここで拉致事件発生。
嗚呼、どうしよう。
白瑠さん達、大慌てだろうか。
……。
まぁ、いいか。
とにかく、考えたくなかった。

秀介が走らせる車の中でぼんやりとする。何も考えず、頭の中を空っぽにした。
しっかりと忘却しなきゃいけないことだから。
ぐちゃぐちゃのめちゃくちゃになってしまうから。

「おっはよーさん！椿を拐ってきたッス！」
「……」

あたしを抱えて入ったマンション。辿り着いた部屋から出てきた人物に気軽に報告する秀介。
報告をされた篠塚さんはパリーンと持っていたマグカップを落とした。

「……おはよ、ございます」

無言も何なので一応会釈して挨拶をしたが篠塚さんは呆然。
血塗れの姿を見せた後だもんな。
会うつもりはなかった。
表札に目を向ければ、篠塚と書いてある。
行き先ぐらい聞けばよかった。

「拐った…！？ら、拉致！？…通報！？いや、白瑠さんに電話！？」
「あー、大丈夫大丈夫。同意の上だからさ。それよりあったかいもの作ってよ、椿が風邪ひいちまう」

硬直した篠塚さんを尻目にあたしを抱えたまま秀介は上がり込み、あたしをソファに降ろした。
やっと起動した篠塚さんは大慌て。
白瑠さんの番号知らないじゃないかっ！と一人ツッコミをしたものだから、思わずクスリと笑った。

それを目を丸めて篠塚さんが反応する。
あたしはサッと顔を伏せた。

「……椿、コーヒーで…構わないか？」
「……お願いします」

篠塚さんは、あたしに訊いた。あたしは顔を伏せたまま、頷いておく。
数秒立ち尽くしていた篠塚さんは直ぐにキッチンに向かった。

「ほら、椿」

部屋を見回していれば、秀介は毛布を運んであたしにかけた。
２ＤＫの部屋。殺風景で、男の一人暮らしといった感じだ。

「ねぇ……どうして、篠塚さんのとこに来たの？」
「あ、言い忘れてた。俺今、篠塚刑事と住んでるんだ」

住んでる？
よく見れば寝室に若者の服がハンガーで吊るしてあった。

「なんでまた……」
「ああ、それは」
「待て！俺から話す！」

話そうとした秀介を遮り、慌てて篠塚さんはマグカップを持ってあたしの前に来た。
そのマグカップを受け取る。
「はいはい、わかってるよ」と秀介はあたしの隣に腰掛けた。

「……まさか、篠塚刑事。貴方、裏に首を突っ込む気ですか？」

あたしは冷ややかに見上げる。

白瑠さんから詳しく聞いて、自分から首を突っ込むつもりなのか。

あたしは次に秀介を睨み付けた。その手助けをしているのが秀介。

「俺から頼んだんだ」

「意味わかんないんですけど」

「白瑠さんから聞かなかったのか？俺の……記憶を失くす前の俺のこと」

篠塚さんは静かに言う。

聞いたことは聞いた。

以前の篠塚さんが一体どんな人だったかは、聞いていない。

「俺は……俺も裏現実者だったそうだ」

目を見開いて顔を上げた。

「なんですって…？」

「白瑠さんがそう言っていた。嘘をつくはずないだろう」

篠塚さんも。

否、以前の篠塚さんが裏現実者。

何故白瑠さんは教えてくれなかったのだろうか？

「それで…秀介に手伝ってもらい、裏現実を知って記憶を取り戻そうとしているところなんだ。そっちの世界ならばきっと思い出せる」

記憶を取り戻す。

その為に、裏現実へ踏み込もうとしている。
秀介の手を借りて。

「……何故、そうするんです？」

あたしはやっぱり冷ややかに見上げる。

「何故、記憶を取り戻そうとするんですか？まさかろくでなし警察に戻りたいとか？」

皮肉を吐き捨てた。

「自殺志願者だって聞いてないんですか？嗚呼、まさか…実は人を殺したくなった？警察だったけど裏は殺し屋だったとか？あたしが人を殺したのを見てうずうずしてきましたか？」

「おい、椿！」

「煩い！」

止めようとする秀介を一蹴する。
あたしは一点に篠塚さんを睨み上げた。

「あのね、篠塚さん。貴方はバカです。いい刑事になったのに裏に戻るなんて、馬鹿げてる！自殺志願者だ！アンタは記憶を取り戻したら死にたくなるんだぞ！？見ただろ！？あたしの殺戮を！アンタはそこに足を踏み入れるんだ！記憶なんか取り戻」

過去の自分を覚えてもいないくせに、あたしを助けるなんて笑わないで。記憶を取り戻してからほざいてください。その時……同じような意志で言えるでしょうか？

自分で言った言葉をふと思い出して言葉を止める。

笑えない。笑えない。

「……あれは挑発です。忘れてください」

「いや、椿の言う通りだ。過去の自分さえも知らない俺が…椿を救えるわけがない」

奥歯を噛み締めた。

あたしの為だ。

まだあたしを救う気だった。

見せ付けたのが逆効果を生んで彼を裏に引き込んだ。

全部、仇になる。

全部、狂い出す。

「…――――――っやめてよ!!!!」

あたしは持っていたマグカップを床に叩き付けて割る。コーヒーは零れ、マグカップは大きな音を立てて粉砕した。

「あたしに構うなっ!!あたしがいつ助けてなんて言ったっ!?」

「つば、き!?」

「救いなんて要らない!!構うな!!やめろ!!気色悪い!!」

「椿っ!」

「触るな!!優しくすんな!!助けなんて要らない!!」

あたしは毛布を振り回して叫んだ。クッションだって投げ付ける。寄るな。触るな。優しくするな。助けようとするな。救おうなんてするな。

「助けてと言っただろ!」

篠塚さんが言う。
公衆電話での会話。
レストランでの会話。

「だからあれはっ…！」
「嘘じゃない。助けてほしいんだろう」

血塗れを見せた前と同じ瞳で、篠塚さんはあたしを真っ直ぐに視る。

「俺が助ける。椿」
「……助けなんて…いらないっ！」
「椿。落ち着け。落ち着くんだ、八つ当たりをするな」

あたしに触れようと伸ばした篠塚さんの手を振り払う。
次に秀介があたしの肩を掴む。
胸が苦しい。痛い。

「八つ当たり…？何かあったのか？」
「それで連れ去ってきた」

秀介は悪気なく篠塚さんに答えてもう一度あたしの隣に座る。

「椿。話を聞くから。どうして、優しくされたくないんだ？どうして、助けを拒むんだ？」

静かにそう問い掛ける秀介。
胸が痛い。

「……助け……なんて……要らない…」

胸元の服をキュッと握り締めて、あたしは呟く。

「…助けなんて、要らない…。あそこがあたしの居場所なの。あそこじゃないとだめなの。表じゃあ……生きれない」

視界が滲んでいく。
それでも篠塚さんを見上げた。

「表じゃあ…存在意味も存在価値もないの」

アイサレナカッタカラ。
愛が見えない、表の世界。

「裏じゃなきゃ…生きられない」

愛が見えそうなんだ。
居たいと思える家。
笑えて温かい食卓。
顔を合わせて挨拶。
たまに雑魚寝する。
血塗れのくせに、温かい場所。

「…あんなところに…連れ戻さないで…」

冷たい場所なんかに。
愛さえもわからなくなる場所なんかに。

「もう…大丈夫…だから」

涙が頬を伝って落ちる。

あたしは顔を伏せた。

「…お願い…優しくしないで……優しさを貰う資格はない。愛を貰う資格もない」

人を殺してる。
無情に殺戮。
そして愛せない。

「ごめん…秀介。貴方を愛せない。愛せないよ。愛せないんだ」

あたしは秀介の目を視て、はっきりと告げた。
胸が、気持ち悪い。
涙がポロポロと落ちる。
嗚呼、気持ち悪い。
気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。
気持ち悪い。

「――…気持ち、悪い」

胸元を押さえてソファの背凭れにすがり付いた。
至極気分が悪い。

「え、お…おい？椿？」

慌てて秀介はあたしの顔を覗く。
あたしは、意識を手放した。
あまりの気持ち悪さに気を失う。
　気を失ったはずなのに、夢を見た。ぼやけた白い部屋。白いベッドにあたしは横たわっている。

その目の前に、誰かが立っていた。
顔は伏せていてわからない。黒ずくめ。

「ぅ……あぁ…」

目を覚ますと、二日酔いの朝みたいな気分だった。

「ん?」

何故か手にはナイフを握っていて、それに血がついている。そのナイフの向こう側には、コーヒーテーブル。そこに血を流す死体が一体あった。
あれ?あたしが殺った?
顔を上げてみれば、篠塚さんと秀介が立ち尽くしていた。あたしを凝視している。

「…何かあった?」
「何かって……つばきゃん、正気?」
「こいつ誰?」
「俺の敵だって言ったじゃん!」
「いつだよ」
「椿が起き上がった時にだよ!覚えてない!?」

何を言ってるんだかわからない。あたしは首を傾げた。
一体このナイフは何処から出したのだろうか。謎だ。

「って、あたし殺しちゃった?やだ…一週間は殺すなって師匠命令だったのに…」

慌てて死体の脈を確認した。死体と称してる時点で死んでいる。

「怒られるぅ！白瑠さ……んは怒んないな、寧ろ幸樹さんだ。嗚呼、外出禁止の上に殺っちゃったよぉ」

あたしはソファにバタンと倒れ込んだ。嗚呼、怒られちゃう。
ああーやんなっちゃう。
項垂れながら篠塚さんを視る。唖然としていた。
…あたし、何やったんだろうか。全く記憶がない。

「椿……今のは…一体？」
「はい？殺しました？」
「いや…それは見ていたが……今、言ったよな？」

言った？

「“お前を知っているぞ”……そう言った。覚えていないのか？」

“お前を知っているぞ”
そんな言葉を言った覚えない。この死体が現れたのも、殺したのも覚えない。

「……あたし……そんなことを喋ったんですか？なんで…何があったんです？」

まさかが過る。何度も掌を握って感覚を確認した。

「え？椿が寝ちゃったから毛布かけて…それから…これ…何だろうと思って…とったらそいつが入って来たんだよ。そしたら椿が起き上がって、ソファの下に隠した俺のナイフで殺った」

秀介が戸惑いがちに説明した。これ、とは蓮の指輪。あたしの指輪から抜き取ったらしい。

「勝手に取らないでよ」とあたしは手を伸ばして返してもらう。人差し指に嵌めて、一息つく。

「その記憶がないんだけど…まじで……。あたし、他になんて言ってました？」

「記憶がないって…はっきりと喋ってきっちり殺したのに…」

「例えば、喉で“ククク”って笑わなかった…？」

笑った。なんて解答は欲しくない。

だってそれが意味するのは。

「笑った」

篠塚さんが頷いた。

それが意味するのは――悪魔に身体を乗っ取られた《、、、、、、、、、、》。

ドッカ！といきなり扉が蹴り破られ大きな音を立てる。

扉には、白瑠さん。

「椿ちゃん、返して」

にっこりと笑う白瑠さんは、普段通りに視えた。

秀介と篠塚さんを視てからあたしに目を向ける。その前に死体を視たがそれは空気のような扱いでスルーした。

「白瑠さん……迎えに……来たんですか…」

「……椿？」

まさか迎えに来るなんて思わなかったから呟けば、きょとんと白瑠さんは首を傾げる。

「クラッチャー！一日くらい椿を自由にしやがれ！」
「自由？俺、拘束してないけどぉ」
「椿はあそこからっ…！」

ジャキンと三又槍を出して戦闘モードの秀介に対して白瑠さんは相変わらず丸腰だ。
言いかけて秀介はぐっと押し黙った。
そしてあたしに目を向ける。
気を失う前にあたしが言ったことを思い出した。

「椿……資格なんてもんはねぇよ、要らねぇよ、必要ない」

哀れんだような苦しそうな瞳で、秀介はあたしを見据える。

「俺だって愛される資格なんてないかもしんないけど、俺は椿が好きで愛してるから」

愛される資格。
あるよ、君には、ある。
ただ、あたしが愛してあげられないだけ。
もう罪悪感に押し潰されて消え去りたい。

「椿は椿の居たい場所に居ろ。俺はいつまでも想うから」

いつまでも。想う。
心変わりしてくれない。
秀介も篠塚さんも。

「……」

救えないよ、あたしのことなんて。

救って欲しい心は罪悪感と劣等感と罪に埋もれちゃっている。

あたしはただ、無言で首を横に振った。

それからナイフを置いてソファから立ち上がって白瑠さんの胸に飛び込む。

「椿……」

ギュウと抱き付いてみた。白瑠さんは何も訊かず、あたしを抱えて篠塚さんの部屋を後にする。

マンションを出てから白瑠さんはあたしを降ろしてから自分のジャケットを脱いであたしに渡した。バイクだからだ。

寝巻き姿のままのあたしは白瑠さんのジャケットを着てバイクの後ろに股がった。

ノーヘルで颯爽と幸樹さんの家に戻る。

いや、帰った。

「……」

玄関に入るなり驚いた。

由亜さんが土下座をしている。正座をして頭を下げていた。何してんだ、この人。

あたしと白瑠さんは沈黙。

とりあえずあたしは飛び越えた。後から真似して白瑠さんが飛び越える。

「おかえりなさい、椿さん」

二度目の驚き。
幸樹さんがいた。
大方、自分のせいだ！とかなんとか言って幸樹さんに通報したんだろう。由亜さんが。
どうしよう。怒られる！
硬直したが幸樹さんは微笑を浮かべたままあたしにカーディガンをかけた。
「…た、ただいま…」怒られないことに戸惑いつつ返事をしておく。

「由亜さんもそんなところに寝ていないでこちらで話しますよ」
「由亜っちぃ、つばちゃん帰ってきたよぉん」
「はうっ！？あ、あれ！？椿ちゃんおかえりなさい！！」

寝てやがった！？
土下座に見せ掛けて寝てたよあの人！
それよりも幸樹さんが肩を掴んだことにギョッとした。捕まった！
話すって…拷問！？
嫌がったが幸樹さんにリビングへと連行された。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

爽やかな笑顔で待ち構えていたのは藍さん。
何故か燕尾服を着ている。執事コス。
くそう、変態のくせに決まってる。変態のくせにかっこいい。変態のくせに似合ってる。変態のくせにイケメンだ。くそう、変態じゃなければメロメロだった。
つか、なんで執事コスしてんだ。この人が自分でコスプレしてるのを見るのはハロウィン以来だ。
ハロウィン。個人的にウキウキする日。せっかくだから吸血鬼のラ

トアさんとデートをしようとしたらコスプレをしていた白瑠さんと藍さんに「トリックオアトリート！」と出迎えられた。お菓子を持ち合わせていなかったあたしは悪戯にコスプレをさせられたっけ…。猫耳付き魔女っ子。

「…かっこいいですね、藍さん」

「何故か冷ややかな目で長い沈黙がありましたが……お嬢様にお褒めの言葉を頂けて有り難く思います」

キラッと爽やかな笑顔で藍さんは執事になりきっていた。新しい拷問かなにかだろうか。

「え？かっこいい？俺も着るぅ！」

「えぇー、白くんは似合わないよー」

ちょっと想像してみる。

……似合わない。

そうこうしていれば、無理矢理幸樹さんにソファに腰を降ろされた。

目の前には由亜さんが座り、周りに白瑠さん達が囲うように立つ。

……なんだろう、この状況。

「すりませんでした！！」

「噛みましたよ、由亜さん」

「スリませんでしたぁだってぇ、うひゃひゃあ」

「すまません！！」

「すももせん！スモモ千個！ぐふふっ！」

「ごめんなさい！！」

白瑠さんと藍さんに笑われて、由亜さんはあたしに謝った。

「あ、アタシが…傷付くことを言っちゃったんだよね？怒らせちゃったんだよね？ごめんなさい！」

涙目で謝る由亜さん。
嗚呼、この人ってば。
本当に嫌。
あたしは肩を竦めて溜め息をついた。

「別に傷付いても怒ってませんよ。単に秀介にラチられただけであって貴女が謝ることではないです」
「えっ……でも、椿ちゃん……好きにならない努力をしてるって…言ったのを怒ってるんじゃないの…？」

きょとんと首を傾げた由亜さんはあたしとは別の方に目を向けた。
その目線を追ってみれば、あたしの後ろに立つ藍さんに辿り着く。
藍さんはあたしと目が合うなり、ぐりんと首を後ろへと曲げた。
……この人。まさか。狸寝入りしたな？
秀介に拐われる前の一部始終を聞いてやがったな？
殺気だって睨み付ければ、ちょこちょこと藍さんは下がった。
そうすれば幸樹さんがあたしの肩を叩いて、由亜さんと向き合わせる。

「ええ、カチンときました。あたしは好きにならない努力をしてました。いえ、寧ろちゃんと好きになれないんです。愛せないんですよ。あたし、実の父親に捨てられていて、継父にも愛されずに育って、愛せないんです」

もう白状をした。
早口にさっさと吐き捨てる。

「愛される資格なんてない。愛されるような人間じゃないくって、愛すような人間でもない。そう思っていたのですが、他人に言われたら腹が立ったんで部屋に逃げ帰ったんです」

言い終われば、シン…と沈黙に包まれた。気まずさがビンビン伝わる沈黙。突き刺さる視線。目の前の由亜さんが目を見開いている。

言うんじゃなかった。

後悔して言葉を探す。

こんなことを言っても無意味じゃないか。寧ろ迷惑だろう。そんなのずっと昔から知っているのに、どうして言ってしまったんだ。

篠塚さんのバカ。秀介のバカ。

「じ、事実なんですから…由亜さんが気にかけることないです…！」

ギョッとした。

ポロポロと由亜さんの目から大粒の涙が落ちる。ポロポロと溢れ出す。

えっ、えっ、ええっ！？

泣かしたのか。あたしが泣かせてしまったのか。パニック。

ぶふっ！？

いきなり抱き締められる。がばっと由亜さんが抱き締めてきた。

「ごめんっ！ごめんっ！椿ちゃん！！…いっぱい、いっぱい苦しい思いをしたんだね！いっぱい、寂しい思いをしたんだね！」

泣きながら由亜さんがあたしを目一杯抱き締めて言った。

あの、今、苦しいんですけど…。

「大丈夫だよっ！ここの皆、椿ちゃんが大好きだから！幸樹さんも、

白瑠くんも、藍くんも、アタシも、椿ちゃんが大好きだから！椿ちゃんを愛してるよ！」

ギュウと、苦しいくらいに由亜さんは抱き締める。
泣きながら言う。
……嗚呼、やめてよ。

「アタシ達に愛されてるから！怖くないよ？ちゃんと誰かを好きになれるよ、愛せるよ！大丈夫だよ、椿ちゃん！椿ちゃんは愛されていいんだ、すごく愛されるよ、大丈夫！アタシが保証するんだから！椿ちゃんに酷いことを言う奴はアタシがぶっ飛ばすんだから！」

やめてよ。
視界が滲む。歪む。
やめてよ。
必死に堪えた。
また人前で泣いてたまるか。必死に堪えた。落とさないように堪える。

「そうですよ、椿さん。愛してますよ」

幸樹さんが、あたしと由亜さんを抱き締めた。ギュウと、あたしは二人に抱き締められる。
涙が落ちそうになった。

「お嬢！大好き！！」

後ろから藍さんが抱き締める。嗚咽を飲み込んだ。

「椿、愛してる」

最後に白瑠さんが皆を抱き締める。
もう、堪えきれなくなった。
涙がポロポロと落ちる。
嗚咽が零れ落ちた。
震える背中を誰かが擦る。
誰かが頭を撫でる。
何か皮肉でも言ってやろうとしたけど、情けない泣き声を出しそうだから唇を噛み締めた。
胸が喉が、苦しい。
苦しいくらいの温かい抱擁。苦しくて、痛い。痛い。

「愛されないなんて言っちゃだめだよ、皆愛してるんだから！アタシが許しません！」
「っ……お母さん…みたい…」
「じゃあ、幸くんがお父さんだね！」
「私がですか？…では椿さんを養子にしましょうか」
「じゃあ白くんと僕がお兄ちゃんだねー」
「うわぁあい！あったかい家族だねぇ？椿」

あたしだけ震えた声。
皆いつもと変わらない声音だ。
白瑠さんの言葉に“あったかい家族”がじわっと胸に染み付いた。
血が繋がった家族とさえ感じたことない温かさを感じる。
ただ一緒に住んでいた。
仕事仲間が家族。同居人が家族。
家族。家族愛。
涙を流しながら、思い出す。
クリスマスの写真。
家族みたいな写真。

温かな写真だった。
温かい家。温かい場所。
あったかい家族。

熱いくらいの温もり。
愛しいくらいの愛情。
触れる肌が愛で熱くなる。
愛してる。
愛してる。
愛してる。
愛してる？

「蓮真君」
「ん…？」

眠そうに返ってくる蓮真君の声を携帯電話から聴きつつ、あたしは必死に落ち着こうとしていた。

「もしもの話だよ。もしもさ…酒を飲みまくった翌朝にさ…異性とベッドの上に、裸で寝てたら……どうしますか？」
「……あれ？聴こえないなぁ、電波が悪いな、ああー」

ブツリ。

電話は一方的に切られる。
もしも話を聴くことさえ放棄されてしまった。見捨てられた。くそう、冷たい。

「んぅー、つばぁきぃ……おはぁよぉ」

目を覚ました隣の白瑠さんが起き上がり、あたしにすがり付いて頬にキスをした。

「昨日は楽しかったねぇ」

ちゅ、と楽しげに白瑠さんはあたしの耳にもキスをする。
ササッと血の気が引くあたし。
起きて直ぐに堪えていた悲鳴を、あたしは、全身全霊をかけて、上げた。

「きゃあああああぁあっ！！」

朝イチであたしの悲鳴は家に轟く。直ぐ様に家にいた住人達は、駆け付けた。

整理しよう。
一週間の謹慎が解けて、昨夜は仕事をした。殺しの仕事。
白瑠さんだけではなく、藍さんに幸樹さんに由亜さんと仕事をした。
それで帰ってくるなり、飲み会になったのだ。
飲み会だけは覚えている。
飲んで幸樹さんと由亜さんが抜けて先に寝たところまで覚えている。
そのあとはまるっきり覚えていない。
まるっきり覚えていないで、起きたらこうだ。
白瑠さんと二人きり。

そしてベッドの中で、二人で裸で寝ていたのだ。
悲鳴を上げる。悲鳴を上げるっつうの。

「えっと…えっと……妊娠検査薬を買ってくるべきかな…椿ちゃん」
「白瑠は中に出してないそうですよ」
「でも椿ちゃんは不安になってるみたいだけど…女の子は不安になっちゃうんだよ」
「妊娠云々の前にあたしは……全く覚えてないんですよっ！！」

駆け付けた幸樹さんと由亜さんとリビングで話し合い。あたしはバンッとテーブルを叩いた。叩いたあと頭を抱える。そしてう〝ぅ…と唸った。

「あたし……全く…覚えてない…。あたしまじで…ヤっちゃったんですか…？」
「えっええ？それは…アタシと幸樹さんは先に寝ちゃったから…」
「私達が寝たあとにヤったみたいですね。白瑠が嬉しげにヤったと言ってましたよ」

一足先に幸樹さんは白瑠さんから事情を訊いた。あたしが悲鳴を上げるので白瑠さんは家から追い出されてる最中。
白瑠さんが言い切ったのか。
「事実ですよね？」とニコッと笑いかける幸樹さん。
あたしは顔をひきつらせて沈黙する。
事実。事実。なんて重い言葉なんだ。

「……殺す」
「えっ！？」
「頭蓋破壊屋だと関係ねぇ…！殺す、殺すっ！白の殺戮者と殺し合いをする！」

「いいじゃん、ヤりあったんだからさ」

殺意が湧いてナイフを握り締める。この際だ、殺す！
そうすればずっと黙っていたソファに座る藍さんが口を挟んだ。
あたしは藍さん目掛けて握っていたナイフを投げ付ける。

「おおお落ち着いて！！」
「これが落ち着けるか！！奴は未成年で酔っ払いを犯しやがったんですよっ！！」
「落ち着いてください、椿さん。白瑠から聞いた話では……誘ってきたのは椿さんからだそうですよ？」

……は？
口があんぐりと開きっぱなしになる。何ですと？

「私と由亜さんが先に寝た後に椿さん達はお酒を飲み続けて、藍と椿さんが潰れたそうです。白瑠が椿さんを部屋に運ぼうとすれば貴女が起きて…貴女からキスしてきたらしいですよ」

顎が外れるくらい大きく口を開いてあんぐり。
幸樹さんは続けていった。

「白瑠は酔っ払っているので始めは適当に宥めていたのですが、椿さんの身体が密着して白瑠の身体がすっかりその気になったそうです。激しいキスをしながら椿さんの部屋に行き、ベッドに押し倒した。先ずは椿さんの服を脱がせて」
「んにゃあぁぁあああぁぁあああっ！！」

あたしは耳を塞いで幸樹さんの台詞を遮った。
ど、どどどどうしよう！

断片的に記憶が蘇ってきた！永久に消えてろ！
悪魔のせいに出来るはずだった。記憶がなければ悪魔がまた身体を乗っ取ったのかもしれない。そう微かに希望を抱いていたのに打ち砕かれた。
悪魔に乗っ取られたにしろ、白瑠さんと肉体関係になったことに間違いはない。
師弟関係、兄妹関係、肉体関係。うわっ、うわわわっ。身体中真っ青になりそう。

「どちらにしろ！酔っ払いを犯したんじゃないですか！あたし犯されたんだよ！？幸樹お兄ちゃん！！」

あたしは涙目で訴えた。
寧ろお父さんと呼ぶべきだろうか。幸樹さんは困ったように考える素振りをした。
いつかは犯されると話したが、家族だと言った一週間後に犯されれば事情は変わるだろう。
緊急事態だ。事件だ。事件。警察だ警察！

「あっ！…あぁっん！…ふっ……んんっ！…あぁっ」

不意に聴こえてくる喘ぎ声。
あたしと由亜さんと幸樹さんは、ソファにいる藍さんを見た。
背凭れに乗せてパソコンを開いている藍さん。

「はぁんっ…！あっ、あぁっ…」
「はぁ……椿…気持ちいい？」

聴こえてくる女の喘ぎ声のあとに白瑠さんの声が聴こえてギクリと震えた。

ギシギシとベッドが軋む音に合わせて喘ぎ声が出ている。出しているのは…まさか。

「あっ、いやっ…はあんっ！だめっ……あ、あぁっあっ…！白瑠、さっ…あぁっ！」

「ん、イっちゃう？」

「あっイっちゃう、あっ！あぁぁあんっ」

「んにゃあああああああぁあああああっ！！」

あたしは真っ赤になって大声で遮った。な、なっなっなぁっ！！？

「なんですかそれは！？」

「目を覚ましたらさ、椿お嬢の喘ぎ声が聴こえるんだもん。録音しちゃった」

「今すぐ消せぇえ！！つうか止めろよ！！」

「え？お嬢すげぇ感じてる声を出してるんだぜ？僕が入ったら３Ｐになってたよ、それくらいお嬢淫乱だったよ」

「淫乱な椿さんの喘ぎ声、私に送ってください。椿ったらいい声で喘ぐんですね、由亜さんは上げてくれないんです。でもイキ顔がそそるんですよ」

「訊いてない！！つかもらおうとするな！それでも兄ですか！？」

「最近は淫乱な世の中ですから兄が妹をオカズにしても可笑しくないでしょう」

「オカズっていうな！！止めてよ由亜さん！！」

「まだ続きあるよ？椿お嬢は三回イッたんだよ、もうＡＶ女優さながら…」

「てめぇ！この変態野郎！殺してやる！！」

「うぎゃあ！？」

由亜さんが沈黙してる最中、あたしは精一杯になって混乱していた。

幸樹さんは頬りに笑い、藍さんはパソコンを守死。

「これでわかりましたよね？ふふっ、椿さんは酔っ払っていましたが、じゅーぶん楽しんだようですね」

わかりたくない、わかりたくない。

断片どころか全部思い出してしまった。最悪だ。

あたしはソファの後ろに座り込んだ。崩れ落ちた。立てそうにない。

「……あり得ない……キスだけでも…不自然だっていうのに……白瑠さんと寝るなんて…」

不自然がありまくりだ。

変な感じ。妙な感じ。

これが秀介なら、まだよかったと思う。彼は想ってくれてるし、今後の展開も困らない。

愛していると返事ができる。

……。

ど、どうしよう！

秀介になんて…！？

やっと愛とやらに向き合おうとした矢先に…！

罪悪感がずしりとのし掛かる。

気を失いそう。寧ろ今すぐ記憶喪失になりたい。植物状態で構わない。

誰か昨夜のことを揉み消して。

もうだめ。世界は終りだ。終末を迎えてください。

「ふふふっ」と笑う声が聴こえて、あたしは顔を上げた。

笑っているのは由亜さんだ。

「そんなショックに受けることないよ、椿ちゃん。だってただ流れ

でしただけじゃなく、愛してるからだもん」
「？…白瑠さんが？家族愛だとしても、流れで寝ちゃいますか？」
「家族愛じゃなくって」
「由亜さん…」

何か楽しげに微笑んでいる由亜さん。その笑顔は見たことある。秀介と食事をした時に見た。
家族愛があれば寝ていいのか、なんだそれ。とあたしが首を傾げれば、幸樹さんはゆるりと首を横に振った。
ガチャン。と聴こえてきたのは玄関から白瑠さんが返ってくる音。ぴっきーんと固まる。
廊下を歩いてくる気配を感じる。

「つーばぁちゃん！」

ご機嫌の中のご機嫌の声とともにリビングにご到着。
次の瞬間にあたしはバタンと床に押し倒された。

「チーズバーガーとぉ肉まん、どっち食べたいぃ？それともお・れ？うひゃひゃあ」
「っ……！！」
「朝から新妻ごっこはやめなさい、白瑠」

いきなりキスをしてきやがった。だめだ、こいつ殺すしかない。あたしがソファに刺さるナイフに手を伸ばせば、幸樹さんが白瑠さんを退けた。

「さっき言っただろう、白瑠。椿さんは戸惑ってるんですよ」
「うん。でもさぁ」
「暫くは指一本触れないこと。兄である私が許しませんよ」

「！、お…お兄ちゃん！！」

うっ、と涙目になる。
まともにお兄ちゃんになってくれた幸樹さんが救世主に見えた。
お兄ちゃんのあるべき姿だ。

「えー！いつまでぇ？」
「暫く」
「暫くってぇ？」
「私がいいと言うまで。椿さんが触っていいと言うなら話は別ですが」
「っつーちゃん！」
「嫌です」

ぱっと笑顔を輝かせてあたしを見た白瑠さんを一蹴。

「ぅえええぇー、つーばぁきぃー」
「嫌です嫌です。触るな」

仔犬みたいな眼差しも見ずに余所を向いて完全拒絶。

「えーん！椿、あんなに俺にねだってたのにぃ触ってってぇ」
「っ…！」
「あっ！！つーちゃんから触ったらぁいいでしょう？」
「それは当然、いいですよ」

よくねぇえええ！！

「わぁい！やったぁ！」

ばっと手を広げて白瑠さんはあたしに抱きつこうとした。触るなって言ってんじゃん！

「だーめ！ほらほら、お嬢こっちおいで」

それを阻止したのは意外にも藍さんだった。
手を突き出して白瑠さんを止める。あたしの腕を掴んで藍さんはソファに座るように促した。

「くっ…藍さんに助けられるとは屈辱だ…」
「たまには素直にお礼を言ってほしい…お嬢」

あたしは嫌々ながら藍さんの隣に座る。藍さんは乾いた笑いを洩らした。
ブーイングをする白瑠さんから守るように藍さんは背凭れに腕を置く。

「いや、先ずはアレを消せ。そしたら礼を言ってやる」
「上から！？お嬢！妹キャラ、いってみよう！」
「はぁ？お前ただの隣の変態ヤローじゃねぇか」
「超機嫌悪っ！まだ家族外だった！お嬢！一回だけでいいからお兄ちゃんと呼んで笑顔を！」
「よだれ出てる！」
「俺も入れてぇ！！」
「ぎゃあああ！！」

白瑠さんがソファに飛び込んできたのであたしは猫並の反射に避けた。

「あ、そうだ。お嬢。ラトアと連絡とれたよ」

不意に藍さんはラトアさんの名前を出す。
白瑠さんはソファに沈んでいる。あたしは肘掛けに乗ったまま首を傾げた。

「……ラトアさん？」
「お嬢、連絡とりたがってたじゃん」
「……あ」
「おや、その反応は完全に忘れていたようですね」

……完全に忘れてた。
悪魔退治を完全に忘れて一週間過ごしていた。
なんてこと。
この騒動で藍さんが言ってくれなきゃ悪魔が次に動くまで忘却していた。
危なかった…。
これぱかりはちゃんと礼を言おう。

「藍さん！」
「ぐふ！つーちゃん…折れちゃう折れちゃう。大勢変えてから上に乗」
「黙れ」

この際白瑠さんを押し潰して藍さんを見上げる。

「ありがとう！藍さん！」
「っ…可愛い！笑顔、ツボ！」
「連絡をとったのは私ですけど」
「ちっ、なんだよ」
「切り替え早っ！」

素直に礼を言ったが直ぐに切り替えてテーブルの幸樹さんの元に行く。

「ラトアさん、なんて？連絡先は？」
「目の色変えて…そんなにラトアに会いたかったんですか？」
「椿ちゃんはラトアくんが好きなのかな？」
「大好きです！」

幸樹さんはクスクス笑い、由亜さんがキラリと目を輝かせた。そりゃあラトアさん、大好き。

「…。ラトア、来るって？うひゃあ、こ、ろ、す♪」

ソファから起き上がった白瑠さんが笑いかける。またラトアさんを刺す気だ。

「ラトア、事が済んだと伝えに電話をしたんですよ」
「で？」
「それだけです」
「……連絡先…」
「屋敷から出ちゃいましたよ」

連絡先なし。
振り出しじゃないか。
ぬか喜びをしてしまった。
あたしはズーンと落ち込んだ。

「つばちゃんが落ち込んだ！」

「椿ちゃん！大丈夫だよ、ラトアくん今夜来るって！」
「駄目じゃないか、直前まで黙るつもりだったのに」
由亜さんの言葉を聞いてあたしは飛び上がった。
「ラトアさんが来るんですね！やったぁ！」
笑顔になる。これで悪魔を追い出すことができるんだ。
飛び跳ねて喜びに浸れば――――ズキンッ。
「っ！」
頭痛が走って頭を押さえた。あまりにも強烈な痛みにバランスを崩して、床に倒れる。無様にバタンと倒れた。
「……」
「つばちゃん？」
「椿さん？」
皆が倒れたあたしを見下ろす。あたしは絶句。
痛みはもうない。
だけど、今の頭痛は間違いなく悪魔の仕業だ。
いつでもあたしに攻撃できることを意味しているのか。くそう。喧嘩売ってんなら買うぞ。
「二日酔いで頭が痛いので夜まで寝ます。ラトアさんが来たら起こしてください」
あたしは起き上がるなり走って自分の部屋に戻った。
タンスの上の銀色の指輪に手を伸ばした途端に頭痛に襲われる。

悪魔の喚き声が頭の中に響く。
激しい頭痛。
それに悲鳴を上げないように歯を噛み締めて指輪を嵌めた。
その瞬間、頭痛も騒音も止んだ。

「く……はぁ…はぁ…セーフ……」

銀色の指輪は悪魔を制御できるらしい。
指輪をつけている間は、悪魔は何もしなかった。
指輪を外した途端、あたしは身体を乗っ取られた。
秀介に聞いて、解ったことだ。
秀介と蓮真君に感謝しなきゃ。
一息ついてベッドに倒れ込む。

「つーばぁちゃーん」

そこに白瑠さんが部屋に入ってきた。あたしは直ぐにベッドの脇にあるカルドを手にする。

「大丈夫？」
「…大丈夫です」
「なんか様子変だったけどぉ、本当に二日酔い？」
「もう大丈夫です」
「ふぅん」

白瑠さんは部屋に入ってきたがベッドに近寄ろうとしないでただ壁にそって立ってあたしを見た。
ギクリとする。
白瑠さんに感付かれたかもしれない。へらへらしつつも何もかも見抜いている人だから。

あたしは白瑠さんの出方を待つ。なるべく平然を装って白瑠さんを見た。

「……誘ってる？」

「出てけ」

とりあえず、追い出すことに成功。

あたしはまたベッドに横たわって携帯電話を開いた。

秀介になんて言おう、それはもう考えたくないので忘却して放棄する。

先ずは蓮真君に朝の電話のことは忘れてほしいとメール。それから指輪は気に入っているとことも云っておこう。

ラトアさんを待ち、ハウン君、あの似非神父を呼んでもらうだけだ。

それで頭の中の悪魔を取り除いてもらう。

そうすれば、問題は黒の殺戮者だけになる。

これで平穏になるんだ。

あたしは起き上がって、引き出したから写真を出した。

クリスマスの写真。

一同が並ぶ、家族写真みたいな一枚。

それを見つめて、微笑んだ。

これからは、平穏なんだ…。

あたたかい場所。

誰にも冷たい場所に突き落とされない。

悪魔にも、黒の殺戮者にもだ。

あたしはあたたかい場所居続ける。

そうすれば苦しまず凍えずにすむ。

愛のある日常。

それが続くためになんだってしよう。

「んひゃひゃあ」

「…まだ、いたんですか？」

笑い声が響いてビクリと震え上がる。白瑠さんがドアから覗いていた。

うわ、写真見てにやにやしてるとこを見られたよ…。

「んー♪朝御飯、ちゃーんと食べないとだぁよぉ」

白瑠さんはビニール袋をあたしに投げて、今度こそ行ってしまった。

あー、びっくりした…。

そうだ。あの人のことをどうしよう。

……。

忘却しようか。

忘れよう。跡形もなく。

なかったことにしよう。

彼だって、いつも通りなんだから。

その夜。陽が暮れた直後にラトアさんは家に来た。

吸血鬼独特の気配を放つからすぐにわかってあたしは部屋を飛び出す。

玄関に、黒いコートを纏った男がいた。勿論、それがラトアさんだ。

「ラトアさん！会いたかったです！」

あたしは見るなりラトアさんに飛び付く。ギュッと両手両足で抱き締めた。

流石強靭な吸血鬼。あたしが突進してもびくともしなかった。

「お、おいっ！嫌がらせかっ！離れろ！」

「ん？」

と思ったら別の意味で固まっていたらしい。ラトアさんが目を向ける先には、笑顔で殺気立ちナイフを構えている白瑠さんがいた。あたしは冷たくラトアさんから引き剥がされる。酷い。

「女性が男に飛び付くなどはしたないぞ。いきなりなんだ」

「ラトアさんに会いたかったんです。何度も屋敷に連絡したんですよ」

「ん、ああ…そうなのか、それは悪かった。忙しかったもんでな」

致し方なく離れて会話をする。忙しかった。使用人が電話に出れないほど、ね。

どう忙しかったかは興味がないので訊かない。

ラトアさんの腕にギュッと抱き付くと、白瑠さんがナイフを放った。間一髪ラトアさんは受け止める。

「貴様、いい加減にしろ…」

「うひゃひゃあ、挨拶挨拶」

「吸血鬼だからってやっていいと思うな！」

怒ってラトアさんは怒鳴った。白瑠さんは軽く笑い退ける。

あたしは気にせずにラトアさんの腕を引っ張って廊下を歩かせた。

「ラトアさん、ハウン君が何処にいるか知りませんか？」

「ハウン？嗚呼、確かジェスタと日本を去ったはずだ」

「今……日本に居ないんですか？」

目を見開いてあたしは足を止める。ハウン君の家には居なかったが、日本にさえいないのか。

「いない。悪魔退治を再開したのだろう。どうした？」
「……連絡、出来ないんですか？」
「出来ないな、連絡手段を持ち合わせていない。奴らからこっちに会いに来ない限り無理だろう。世界は広いからな、探すのは無理だ」
日本なら話は別だが。
ラトアさんは探すのは無理だと断言した。
日本以外にいるはず。それだけでは見付けられない。
あの草臥れた似非神父が一体何処をほっつき歩いているかはわからないんだ。

「なんだ？何か用があったのか？」
「……ハウン君に、会いたかったんです。あと…ジェスタさんにも、ね」

ラトアさんが首を傾げて問う。
ジェスタに会いたかった。
会わなくちゃいけないんだ。
なのに、会えない。
悪魔が嘲笑っている気がする。…畜生。

「んぅ？椿？どした？」
「…いえ、別に。ショックを受けただけです。ラトアさん、ほら座ってください。お疲れでしょ」
「疲れてない」

白瑠さんがあたしの顔を覗く。あからさまにショックを受けた顔をしているだろう。若しくは蒼白になっている。
あたしはそのままラトアさんの腕を引いてリビングに連れていった。

ラトアさんと由亜さんは幸樹さんを通じての知り合いだそうだ。
軽く挨拶を済ましたのを見てあたしは用件を聞いた。
正直、悪魔退治が出来ないのが不安で不安でしょうがないが、事情を知らない皆にバレないように会話に集中する。

「仕事の話を持って来たんだ。この前の挽回をさせてほしくってな。例の件はオレのせいで失敗に終わらせてしまったから」

この前の仕事。
仕事をする前に依頼人が殺られてしまった件だ。その後始末を今までやっていた。

「外国ですか？」
「ロスだ」
「ロスか……ふぅん。やります。ねっ、皆で行きましょう！」

ロスにジェスタ達がいるのを願おう。あたしは師匠の返答も聞かずに幸樹さんを振り返った。
同じ国で仕事をすると黒の殺戮者に見付かるから了承するだろう。

「私はオペがあるので、今回は不参加ということにしてください」
「あ、じゃあアタシも幸樹さんと残る」

幸樹さんがいかないならと由亜さんも不参加した。
「あぁ、そうですか……残念です」とあたしは直ぐに諦める。
海外旅行を皆で楽しもうと思ったのに、残念だ。

「藍さんは？」
「え？僕？」
「そうですよ。予定がありますか？」

黙ってパソコンをいじっていた藍さんは、心底驚いた顔であたしを見上げた。

「あ……ううん、ない、ないよ。うん！行く！」

藍さんはご機嫌な笑顔で頷いた。

「決まりですね、藍さんとラトアさんに白瑠さんとあたしで行きましょう」

メンバーが決定。
仕事の話をした。
大企業の社長が今回のターゲット。
裏で依頼者と対立をしていて最近殺し屋を送られたので始末してほしいそうだ。
ターゲットも殺し屋が送られることを予想して狩人を雇った可能が高い。
つまり今回の敵は狩人になる。

「狩人……ですか、心配ですね。椿さんは降りた方がいいんじゃないですか？」

「口を挟まないでください。あたし、トリプルなんとかっていう狩人三人に勝てたんですから大丈夫ですよ」

内容だけ聞いていた幸樹さんが口を挟んだので反論する。

「大丈夫大丈夫、ラトアが盾になるから」

「ならん」

そこに白瑠さんが加わる。

「幸樹も心配無用だよ、僕がサポートするからさ」

「藍が油断している時に限って椿さんはピンチになりませんでしたか？」

藍さんがフォローしたが幸樹さんに痛いところを突かれた。あたしにはフォローできない。

「由亜さんー、なんとか言ってください」

あたしは由亜さんに助けを求めた。あたしに頼られて由亜さんは目の色を変えて幸樹さんをバッと見る。

それだけで幸樹さんは降参をした。

おお、新しい武器。由亜さんを味方につける。

「せっかくだし一週間ぐらい滞在して仕事やろっかぁ」

「あーいいねー、黒もそろそろ日本に来ちゃうだろうからさ。じゃあ住みかを探すよ」

「ん？……黒の話をしたのか？」

「ああ、しましたよ。それで皆で黒から逃げるってことに決まりました」

ラトアさんが反応したからあたしはちゃんと話した。

そうか。そろそろ日本滞在を突き止めてコクウが来る。

黒の殺戮者が動く。

ラトアさんの仕事はタイミングがよかったらしい。

ラトアさんは意外と言わんばかりの表情で白瑠さんに目を向けた。

白瑠さんは気付くなりナイフを投げ付ける。それをあたしが叩き落とした。

「やめてください、白瑠さん」
「ぶぅーいいじゃん。つばちゃんだって好きじゃん、血がぶしゃあって」
「仲間の血は別ですよ。もう」

あたしは溜め息をついてナイフを拾う。
最近はまたに黒の話をする。黒の集団の動きを掴んだ由亜さんと藍さんが教えてくれるのだ。
出会した際の対策案を幸樹さん達から聞くが大体が殺さずに逃げろと言う。
殺すと反感を買うので厄介事が増えるんだ。
レネメンに会っても逃亡するしかない。
火都と遊太は大丈夫な気がするが、念のため逃げよう。
捕まったらあたしの敗けだ。
敗けたくはない。血をとられてしまう。
　話がまとまったら幸樹さんがお酒を出して飲み始めた。
あたしも勧められたが昨夜の過ちを繰り返したくないから断って藍さんの隣に座る。藍さんに情報収集の仕方を教わることにした。それに由亜さんも加わる。

「黒の大抵の情報はコイツから貰うんだ。僕の子分みたいなもん。コードネームはバリュー」
「じゃあ、そのバリューから黒の殺戮者があたしを捜している情報を掴んだんですね」
「あー、いや。それは別ルートさ」

カチャカチャと藍さんがキーボードを叩く度に画面は目まぐるしい変わっていく。
バリューの話はしたが、藍さんはその別ルート先を口にしなかった。

前から気になっていたんだ。
藍さんは“誰よりも先に入手した”と言った。
その方法が知りたい。

「情報収集はアタシより凄いよね、藍くん。幸樹さんに聞くまでアタシは黒の殺戮者が椿ちゃんを捜してるなんて知らなかったよ」

情報屋の由亜さんよりも腕が上ということか。その方法を知ってもあたしには無理そうだ。殺すしか能がない。

「それに集団の個人個人の特徴や戦闘スタイルの情報まであっという間に集めちゃうんだもの。アタシなら、時間が掛かるのに…自信消失だよ」

「いやいや、集団の情報はバリューがちゃんと仕事をしてるからさ。集めてるのは数々の部下だよ」

「部下がいっぱいいるなんて初耳です」

「僕は天才だから！ネット上を支配する神だから！」

爽やかな笑顔でポーズを決める藍さん。それなりに名の売れたハッカーにハッカー達が従うらしい。
バリューというハッカーは一体どうやって黒の集団の情報を集めているのだろうか。んー、わからない。
藍さんにハッキングを教わってからあたしはその日由亜さんと同じ部屋で寝た。
ロスでの土産について話をして盛り上がってキャッキャッと姉妹のように騒いだ。
お勧めの店をリストアップしてあたしの好みで買ってほしいと頼まれた。
女の子らしい話だっと思う。
どんな服がよくて、どんな服が駄目なのか。あたしと由亜さんは好

みが似ていて何度も共感した。
その度に由亜さんがはしゃぐ。あたしもついつい笑う。

「残念です。海外旅行したかったです」
「大丈夫だよ、次は仕事なしで皆で海外旅行をしよ！」

あたしが残念がって洩らせば由亜さんは明るく言った。
仕事なしでの純粋な海外旅行。
それも悪くない。そう思った。

「何処に旅行したい？」
「んー、そうですねぇ。パリやミラノに行ってみたいです」
「わ！椿ちゃん、お洒落さんだね！」

本当の姉妹みたいだった。
物知りな姉ができたみたいにあたしは何でも訊く。由亜さんは知っていることを教えてくれた。

「昨日は随分と話し込んでたみたいですね」

すっかり寝過ごしたあたしが起きたのは正午。幸樹さんがいい加減起こしに来た。

「ふぁあ……。はい…由亜さんがあまりにもお勧めの場所を幾つも話すので聞き入っちゃました」

欠伸を洩らしてあたしは背伸びをする。お勧めの観光地での絶景から美味しいピザ屋まで。
クスクスと幸樹さんは一人笑いを洩らすから首を傾げた。

「私は貴女達が仲良くなって嬉しいですよ」
そう言って幸樹さんはあたしの額にキスを落とす。
「……仲良く、見えますか…」
「ええ、仲良しの姉妹みたいに寄り添って寝ていました」
「……そうですか」
ちょっと、嬉しくて笑みを溢す。
幸樹さんにもそう見られているならそうなのだろう。
「幸樹さん、お仕事は？」
「今日は夜勤出勤なんです。貴女方の見送りをしたいのでね」
「由亜さんは？」
「実家に戻りました、用事があるそうです」
リビングに行けばソファに飲み潰れた男三人が寝ていた。
「今夜出発なのに、大丈夫なんですか…」とあたしは呆れた目を向ける。
藍さんは二日酔いになるし白瑠さんは中々起きない。吸血鬼のラトアさんは心配ないだろうけど。
「二日酔いでも行きますから大丈夫ですよ。白瑠を起こすのは得意でしょう？」
「……あたし、禁酒します」
クスクスと幸樹さんに意地悪を言われたので禁酒宣言をする。
そしたら一週間持たない方に賭けられた。じゃああたしは一ヶ月！
「くれぐれも気をつけてください、椿さん」

「気をつけますって。そんなに心配しないでくださいよ…ほら、厄除けしたし」
「まぁ……確かに厄除け効果は効いているようですね。ですが今年は始まってばかりですよ」
「な、何か起きるとでも思ってるんですか……？厄年は過ぎました」
「どうでしょうねぇ…」

脅しか。
あたしは苦笑いするしかない。正直厄はまだ続いている気がする。
例えば悪魔とか。

「……明るくなったな」

ボソリと聴こえた声に振り返れば、肘掛けから首を垂らすラトアさんがこちらを見ていた。

「お前、前は無表情が多かった。昨日から思っていたが…明るく笑うのが多くなったな」

明るく笑っている。
意識していなかったからわからなかった。あたしったらそんなに無愛想だったのか。

「ええ、心を開いてくれた証拠です」

くすっと幸樹さんはあたしに微笑みかける。
心を開いた、か。
そんな感じなんだろう。
あたしは完全に気を許している。由亜さんにも幸樹さんにもだ。
言いたくないが白瑠さんとああなったのはそのせいでもある。

この家に完全なる安心感を抱いているんだ。
あたたかい家族のいる場所。
あたしは家を見回した。
一週間帰って来れないのは後ろ髪を引かれる気分だ。

「ふん、無愛想よりはいいな」
「ラトアはいじられて愛想が出るんですよ」
「おい」

そしてその夜。
愛し始めた家を後にした。
欠伸を洩らす白瑠さんと藍さんを引き連れて空港へ。

「おい……まじかよ」

不意に人混みに目を向けて苦い顔を浮かべたのはラトアさん。

「クラッチャー、アイツだ。こっちに来るぞ」

直ぐ様、ラトアさんは白瑠さんに伝える。
アイツ――コクウだ。
コクウがこの空港に来てこっちに向かっている。
ラトアさんが気付いたようにコクウも気付いたのだ。吸血鬼のにおい。或いは白瑠さんのにおいに。或いはあたしの――血のこびりついたにおい。

「行きましょう！白瑠さん！」

あたしは白いコートのフードを被って白瑠さんの手を引いた。

「えっ」
「逃げるんですよ！」
「……うんっ！」

手を繋いでエスカレーターを駆け登る。あとから藍さんとラトアさんも登った。
チラッと向けた先に弥太部火都を見付ける。火都も来ているのか。
視ていれば、火都が、ボウガンを向けてきた。そして発射。

「しゃがめっ！！」

咄嗟にラトアさんが突っ込んでしゃがませてくれたおかげで回避できた。
火都に殺されかけた！？
と思ったが飛んできたのはただのペイント玉。

「先に行けっ！オレが食い止める！」
「え、なにそのかっこいい台詞、ずるい」
「アイツに会わせてもいいのか！？」
「ぶぅ」

ラトアさんは台詞の通りに食い止める為に一階フロアへと飛び降りる。大丈夫だろうか。飛行機に乗り遅れないといいが。

「ほらっお嬢行くよ！」

藍さんに背中を押されてあたし達は飛行機に先に乗るために駆け出す。
どんっ。
避けたつもりだったが人とぶつかった。

「おっと、悪ぃ」

反省の色ではなくニッと笑みを浮かべたサングラスの男。ちゃらけた服装――那拓遊太だ。

驚いたが彼はただ笑ってあたしに手を振った。

大泥棒に気付かない藍さんと白瑠さんに急かされていたので、あたしは先を急いで走る。

ラトアさんが上手く食い止めてくれたおかげであたし達は無事飛行機に乗り込めた。そして離陸。

ラトアさんはギリギリ乗り込んだのか、離陸した機内に忽然と現れた。

逃げ切って白瑠さんはご機嫌。

藍さんはロス行きがバレないように細工を施している最中だ。

あたしはトイレに向かって身体中を調べた。

何かを盗られていないか。

あの大泥棒のことだ。わざとぶつかってきたに違いない。

発信器でもつけられたんじゃないかと探したら、一枚の紙を見付けた。

電話して。黒より。

電話番の書かれた紙。

「……あほか」

あたしはそう言いつつ、ちょっとした刺激にニヤニヤしてその紙をポケットに戻した。

アメリカのロサンゼルス。

藍さんが用意した部屋に四人で泊まる。

今回は別々の寝室。白瑠さんの白い部屋じゃなくて安心だ。

「ついて早々仕事なんて、タルい…」
「早くしないとまたオレの依頼者が死ぬ」
「うひゃひゃあ、死んだら面白いね！」
「面白くない」
「全然面白くないです」

標的の会社前に停めたシルバーのバンの中で準備中。
通信機の確認と藍さんの監視カメラを確認して準備完了だ。

「ロスにいる狩人の中に手強い奴はいない。だけどくれぐれも気をつけてね」
「くれぐれも気を付けまぁす。藍さんもくれぐれ油断しないでくださいな」
「了解、この僕の才能にかけて！」

藍さんのテンションウザイ。

「じゃあいつもの」
「今回のチーム名は？」
「チーム・ラトア！」
「リーダーは殉職しまぁす」
「ラトアさん、死んじゃ嫌」
「お前らに殺されなければ死なん」
「うひゃひゃ、じゃあ無事生還を誓って、ゴウ！」

手を重ねてそれからいつも通り、パッと放して仕事開始。
電気のついていない会社の中に入って、あたしと白瑠さんとラトアさんがエレベーターに乗り込む。
そのまま唯一明かりのついている社長室に向かう。藍さんが人影を

見つければあたし達が始末しにいく。
沈黙するエレベーターにデジャヴを感じるのは何故だろうか。何かを忘れてる気がする。

「あのね、椿」

エレベーターが十階を通り過ぎた頃に、口を開いたのは白瑠さんだった。

「はい？」
「俺は椿を愛してるよ」
「……はい？」

顔だけ振り返ったまま、あたしは首を傾げる。
ん……？

「だぁから、愛してるって」
「はぁ……」
「幸樹達が言う家族愛の方じゃないよ」
「……？」

あれ、違うのか。
何で前も聞いたことを今ここで言ったのかわからなく首を傾げてしまった。あ、いや…どちらにしろいきなりの言動の意味が理解できない。

「椿が大好き」
「…はぁ、知ってますが」
「ううん、椿はわかってない。俺が適当に言ってると思って流してるじゃん」

適当でしょ。そう思ったが、白瑠さんは真面目な顔であたしを真っ直ぐに見据える。

「椿を愛してる。誰にも譲らない。俺だけの物でいてほしいんだ。椿を愛してる」

そして、告げられる愛の言葉。

あたしはきょとんとしてしまう。理解しきれていない。

「俺は椿を愛してる」

白瑠さんはあたしを愛してる。

「愛してる」

愛してる？

「愛してる」

愛してる？

「愛してる」

アイシテル？

「愛してる、椿」

アイシテル。

「俺は云ったからね。これからは触るし独占するよ」

最後に白瑠さんはいつもの笑みをニコッと向けて宣言した。なんの宣言だろうか。あたしには全く理解できていない。解読すらできてない。

彼は何を言っているのだろうか。

茫然自失になる。

白瑠さんは笑ったままあたしの顎を撫でて、そして首輪の鈴を鳴らした。

「コホン……十六階に人影発見」

「あっ……あたしが行きます」

耳元から聴こえた控え目な藍さんの声にハッとして返事をする。ボタンを押して十六階で停まってエレベーターが開くなり降りた。

「……今の告白変だったかなぁ？ラトア」

「……時と場所が変だったな」

降りた階は暗く視界が悪い。何より静寂だ。

静寂のせいで白瑠さんの言葉がぐるぐると耳元で回っていく。

「……お嬢？」

「にゃん！？」

いきなり呼び掛けられてあたしはビクッと震え上がった。

「にゃにゃにゃんですか！？」

「…動揺してるお嬢、ツボ…。大丈夫？」

「だ、大丈夫でしとも！」

「噛んでる」
「いひゃい……。…えっと、なんですか?今の?」
「告白?」
「告白?」
「告白」
「告白…?」
「うん」
「…うぅん…」

首を捻って考えた。
告白。…告白。……告白。

「頭パンク寸前で全くわからないんですが……つまりなんです?」
「え?僕に訊くの?」
「じゃあ誰があたしに説明してくれるんですか」
「…えー。てか、その階に人が」
「パンクしたまま戦えません、死んだらどうしてくれるんですか」

押し付け。正直一歩も動けない状態だ。誰が現状を教えてくれ。
藍さんは何故か渋ったが説明してくれた。因みに会話は白瑠さん達には聞かれていない。

「つまりは椿お嬢を愛してるから行為に及んだってことを言ってるんだよ」
「行為と言いますと?」
「……Hな行為。まぁそれ以前のハグとかも含まれるんじゃないのかい。白瑠はお嬢を…本当に好きだってことさ」

……。

「え〝っ？」
「……そんなに驚くこと？」
「え〝……だって、信じられない……よ。だってあたし、弟子で、つか、玩具っていう認識をされてるんじゃ…」
「確かに初めは玩具だったかもだけど、愛しちゃったんだよ。お嬢が可愛いから。…え？微塵も気付かなかったの？」

え？何それ。
それって貴方は気付いてたってことですか？

「あからさまじゃん。女の子になら抱き付くと思ってたの？白瑠が抱き付くのはお嬢だけだぜ」
「……」
「…思ってたんだ」
「思ってたような…思ってないような…。どちらかというと人形を抱き締める子供…」
「だったら椿お嬢が無傷なのは可笑しいよ。心当たりない？尽くしてくれたり、独占欲だしてたり、些細なことで機嫌がよくなったり」

そう言えばパシリを引き受けたり、黒の殺戮者に会わせなかったり、料理をすると機嫌が一発で直ったり…。
あれがありのままの白瑠さんではなく、あたしに対する白瑠さんだったってことか？
好意を寄せる相手にする態度だったってことか？

「まさか…皆知ってたんですか？」
「うん、由亜っちも幸樹もラトアも知ってるよ。本人だけが気付かなかったんだね」

知っていた。

じゃあ由亜さんが言っていたのは、愛してくれる相手に抱かれたから満更でもないってこと。
幸樹さんが言っていた好意を抱いていてあたしの脈を調べてと頼んだのは白瑠さん。
白瑠さんは、あたしに恋愛感情を抱いている。
あたしを愛しているから、あたしを殺さない。

「……っ」

愛しそうにあたしの首の傷にキスをする白瑠さんを思い出すだけで顔が紅潮する。
今までのことを振り返って、白瑠さんが恋愛感情を抱いていると思うとどうしようもなく恥ずかしくなった。

「ど、どうしようっ！わかんないっ、え？なんで？なんで白瑠さんが？」
「……」
「うわっ、無理！仕事どころじゃない！」
「……大いにパニクってるみたいだね、お嬢。でもお嬢。お嬢って本当、可愛いよ」

頬を両手で押さえて挙動不審をやる。視えていないが藍さんには声だけで伝わってしまう。
藍さんは真面目な声音でそんなことを言ってきた。

「お嬢を愛しちゃうだ。愛しちゃうんだよ。制御は不可能で、だめだと思っても惹かれて、愛しちゃうんだ」

藍さんは続けて何かを言おうとしたが、カランという音を聞き付けてあたしは待ったをかける。

「指輪を落とした！」と慌てて足元を見た。暗くてよく見えない。
銀色の指輪。
…あ。と気付く。
頭痛がない。
悪魔が喚かない。

「……」

悪魔がまた沈黙をしている。ジェスタが来ないとわかって安心してあたしの中でふんぞり返っているのか。
一体この悪魔は何を考えているんだ。
目が慣れたのか、足元がはっきりと視えてあたしは指輪を拾った。
迷ったがポケットにしまうことにする。仕事中に騒ぐつもりはないはずだ。
悪魔は沈黙を破るタイミングを待っているのかもしれない。契約をするタイミング。
今じゃない。

「見つかりました。えっと…なんでしたっけ？」
「…ん、お嬢に……白瑠に続いて、迷惑かもしれないけど。椿お嬢、僕――――……！お嬢、右側の廊下の先、階段フロアにいる！」
「！、了解」

藍さんは言いかけたが監視カメラに人影を捉えたらしく、仕事モードに切り替えた。
あたしも切り替えて息を潜む。
人の気配を感じる。音を立てずに、右に歩いて階段フロアに向かった。
ガラス張りから微かな明かりが差し込む場所に人影は視えない。
階段を使って他の階に行ってしまったのか？

「上だ！」

ハッとして顔を上げれば上から人が降ってきた。階段から飛び降りて武器を振り下ろして来たようだ。
かわすには暇がない。あたしは番犬の剣で受け止めた。
ガキィンッと静寂の中にぶつかり合った金属音が響き渡る。

「！、秀介！」
「え？あっ、椿！」

相手が誰なのか気付くなりあたし達は武器を降ろした。
狩人の鬼、ポセイドン、秋川秀介。

「貴方ってほんと、神出鬼没ね。ストーカーしてる？」
「いやいや、してないしてない！これってあれだよ、俺達運命の赤い糸で結ばれてんだよ！」
「……うぅん」

どうしよう、後ろめたい。
ニカッと笑いかける秀介に罪悪感がのし掛かる。

「まぁ、いいや。今回の狩人が君でよかった、獲物はもらうね」
「は？何言ってんの、つばきゃん」

その話は一先ず忘却して仕事を片付けよう。そうしたら三又槍を秀介が向けてきた。

「いくらつばきゃんでも…依頼人は譲らねーよ」

これは意外だ。
あたしの為ならなんだってしそうな彼が、譲ってくれない。
今回は楽ができると思ったのに。

「……あたしのこと、嫌いになったの？」
「えっ！？」

あたしと仕事どっちをとるの？と言えばあわてふためくだろうが後ろめたいことがあるのでそれはやめた。
もしかしたら先日の件が原因かもしれない。

「いやいやいやいや！嫌いにならないって！俺は椿が大好きだから！永久永遠！椿を愛してる！ほらっ、俺は椿が俺を愛してくれるまで待つから」
「……っ…」

この子ったら。
なんて強情なんだろう。
決心の硬すぎる一途。
白瑠さんの告白に続いて云われると動揺してしまう。

「え…あれ…？新鮮な反応…」

ガラス張りから差す明かりであたしの顔がよく視えている秀介が目を丸める。
あたしの顔は真っ赤に紅潮しているに違いない。

「どうかしたの…？椿」
「いや……その……」

なんだろう、このどぎまぎした空気。
逆光でも心なしか秀介の頬も紅潮しているように視えた。
学生ラブコメドラマのワンシーンみたいだ。妙な気分。

「あ……ありがとう…」
「え？」
「あたしを……愛してくれて……ありがとう」
「…椿」

ガァアと顔が熱くなるのを感じた。
ドキドキと心音が高鳴る。
見つめあった。
秀介が嬉しそうな笑みを向けて一歩あたしに歩み寄ったのと同時に。

「お嬢！仕事！」

藍さんに言われてハッとする。仕事中でここはターゲットのいる会社だ。
まずいまずい、変な空気の流れを引きずってしまった。

「よし、じゃあシュウシュウ。ターゲットの取り合いをしようか」
「…お、つばきゃん。俺と張り合うつもりかよ」
「あら、あたしに勝てるかしら？ポセイドン」
「言ったな、紅色の黒猫」

闘争心剥き出しに互いに武器を構える。ジャキンと伸ばす剣。
あたしには甘いが狩人の鬼と恐れられる秀介の実力は知っている。
何度も白瑠さんと戦っているところを見た。動きは読める。
　合図はなく、ただほぼ同時に動いて武器をぶつけた。
流石は三又槍を愛用しているだけに巧みに使う。

槍は突く武器だが、秀介はあたしを傷付ける気がないから振り回し、剣に叩き落としてくる。
　一撃一撃が重い。
あたしはそれを一撃一撃受け止める。
負けてまるか。
槍で突かないならば、棒が振り下ろされる。
それをしゃがみかわして、剣を振り上げた。秀介がその気がなくてもあたしは傷付けるつ気がある。
狩人の鬼はその一撃で倒せるほど弱くはない。
仰け反って避けた秀介はすぐに足を軸に回転してあたしより低くしゃがみ、回転した勢いで槍のついていない棒先を突いてきた。
あたしの腹部に直撃。
「ぐっ」今のは効いた。
よくも秀介の分際で、と睨み付ける。
どうやらマジで獲物を譲ってくれないようだ。
　そっちがターゲットを本気で守るならば、あたしはターゲットを本気で殺しにいってやる。

「…この剣。誰のか知ってる？番犬のよ」
「えっ！？まじで！？」
「まじっ！」

隙を作り懐に入ってあたしは剣を振り上げた。秀介は三又槍で受け止める。
休まずもう一度剣を叩き付けた。
ガッキィンと弾く。
その勢いで回転し、そして勢いを殺さずに剣を突いた。
秀介はそれをかわさず三又槍で叩き落とす。剣は槍と違って全体的に刃だからだ。
考えたな。でも。

そうすると読んでいた。
あたしは剣でできた死角に足を振り上げて、蹴りを決めて秀介の胸元を蹴り飛ばすことに成功。

「ぐっ……」
「……フン」

胸を押さえて膝をつく秀介にニッと笑みを向けてやる。
ほぼ互角、といったところか。
最も彼が自分に惚れていなければこんな小休憩の時間なんてないだろう。

「あれ…椿？」
「隙なんて見せてあげないわよ」
「いや、そうじゃなくて……カラコンいれてる？」
「は？」

先程の仕返しで言っているのかと思ったが、秀介は眼を指差して問う。
カラコン？なんのことだ。

「眼が紅いぜ」
「は？」

眼がアカイ。充血していてそれを言っているのかと思ったがカラコンなら違うだろう。

「何言ってんの、暗いから黒目に視えるでしょ」
「いや……紅く視える…？んん？なんか…つばきゃん変わった？」

目を凝らして秀介があたしをまじまじと視た。
「つばきゃん、ちょっと明るい方に立ってよ」と秀介は武器を降ろして招く。今度はなんだ。

「あれ…？なんだろう…つばきゃん、変わった？髪型？メイク？カラコン？んんぅ……なんか、椿…色っぽいな」

真剣に悩んで秀介は最後に結論を出した。色っぽい？
なんじゃそりゃ、いつも通りだが。

「色気が出てて、妖艶っていうか……つばきゃん、イメチェンした？」
「してないわよ、何なのよ」
「だって、なんか……」
「他の男とヤったからじゃん？」

妙に引っかかっている秀介。そこに通信機から藍さんが言ってきて顔の筋肉がひきつった。
……いや、いやいや。
秀介がそれに違和感を覚えているのか。なんだよそれ。どんだけ敏感なんだ。

「イメチェンなんかしてない！」
「怒鳴るなよ」
「言っちゃいなよ、クラッチャーとヤっちゃったーって」
「煩い！！」
「俺煩くしてないよ…」

とりあえず藍さんを黙らせる。
むぅ…！どうしよう。どうしましょう。秀介に…言うべき？

あたしから言うべき、だよね。白瑠さんから聞いたらまずいことになる。あたしから言っておこう。
そう思うと足がすくむ。
きょとんとしている秀介は、今回ばかりは傷付くだろう。

「……秀介君。もしも……あたしが……誰かと……寝たら…傷付く？」
「は？そいつ殺す」
「……」

きっぱりと言った。
……ど、どうしよう。

「えっと……」
「…え？処女消失？」
「……」
「……」
「……」
「……え゛っ？」
「だぁああっ！！処女じゃなかったらなんだ！？悪いかコノヤロー！嫌いになったかコノヤロー！」
「悪くないよ！いや！？悪いよ！えっちょっ、ちょっと！？誰だよ、相手は！レイプ！？例え同意の上でも…一回殺させろ！！！！」
「一回殺したら死ぬ！」
「アイツか！？あの餓鬼だな！？アイツ殺すぅうう！！」
「違う！蓮真君じゃない！」

傷付くどころかぶちギレた。

「な、なんで！？一週間前は居なかったよな！？恋人！」

「……よ、酔った勢い…で」

相手が恋人じゃないとわかっているのであたしは致し方なく白状する。

そうすれば秀介は一時停止をした。

「……まさか、クラッチャー……？」

そして相手を見事に当てる。

あたしはかぁあと顔を赤らめた。

「……」

秀介は、何も言わない。

いや、何も言えないでいた。

「……秀…介…？」

嗚呼、言うんじゃなかった。流石に、宿敵である相手だったのは、傷付いたのか。

謝ることもできずにあたしも黙っていれば、秀介は口を開いた。

「…好きなのか？クラッチャーのこと」

「へ？えっ？」

「椿は好きなのか？クラッチャーのことを好きなのか？」

大真面目な空気と視線で秀介はあたしを射抜くから気圧される。

「いや……あたしは……恋愛とか全く……あたしと彼にはないと思ってたんだけど、ついさっき告白されて…」

「……。クラッチャーが、椿に、告白したのか？」

あ、言ってよかったのか？これ。

「アイツ、椿が好きって言ったのか？」

「好きっていうか…」

「愛してるって言ったのか？」

「……うん」

「ありのままの椿を愛してるって、告白したのかよ？」

「……はい……されました…」

心なしか、秀介の顔がひきつって青筋が視えるような視えないような。

「アイツッ……！！」

激怒している。嗚呼、どうしよう。まずいことになるんじゃあ…。

「俺、今すげぇ後悔してる！！あの時、椿を行かせたこと！クラッチャーについていくことを許したことを！」

あ。初仕事の時のことだ。

「抱き締めたまま連れ去るべきだった！一週間前！そのままどっか遠くにいくべきだった！無理矢理でも！初めからそうすればよかったって後悔してる！」

浮かべた表情は険しくて苦痛そうだった。傷付いてる。ショックを受けているんだ。

「椿を好きになるのは当然だよな、椿は可愛すぎなんだよ！一緒に住んでてその可愛さがわかんねぇ方が可笑しい！…だけど、クラッチャーには椿を渡せねぇ！椿を拉致ってでもクラッチャーには渡せねぇ！！」

あたしは可愛くない。否定したかったがあまりにも秀介が凄んで言うので口を挟めなかった。

「俺は頭蓋破壊屋よりも椿を愛してる！！」

その告白の直後。上から銃声が聴こえた。
銃？白瑠さんもラトアさんも丸腰のはず。ターゲットかまだ狩人がいるのか？

「相棒がいるの？」
「ああ、篠塚刑事」
「篠塚さんにこんな大仕事をやらせてるの！？」
「あの人、銃の腕前がすげぇんだ。中々だぜ」
「ばか！今クラッチャーと吸血鬼と対面してるんじゃ…！」
「クラッチャー！？殺す！」
「ちょ、待ちなさい！」

クラッチャーと聞くなり走り出した秀介が階段を駆け登る。慌ててあたしも追い掛けて登った。
まずい。篠塚さんが殺される！
なんで首を突っ込んでるんだあの人は！くそう！
頭蓋破壊屋と吸血鬼に殺されていないことを強く願った。
辿り着いた廊下には、驚くべき光景があった。
血を流す——ラトアさんと白瑠さんが社長室の壁に身を隠していたのだ。

「なっ……」

俊敏な吸血鬼のラトアさんが撃たれたのか？或いは白瑠さんに盾にされたとか。

そんな白瑠さんも肩から血を流している。この人が血を流すなんて。

仰天な光景だ。

「うひゃあ、しゅーちゃんたら…強力な相棒を見付けたねぇ」

肩を撃たれても、笑顔で、それもとびっきり楽しそうな笑顔で、白瑠さんはあたしの隣の秀介に言った。

やはり、撃ったのは――。

社長室を覗けば、社長の机から銃口を向ける篠塚さん。

「日本の刑事のくせに、ふん、射撃の上手い奴だ」

ラトアさんは傷が塞がったのか、弾丸を口から吐き出して立ち上がった。

「はんっ！ざまーねぇな！クラッチャー！今回の獲物は渡せねぇよ！……んでもって椿も渡せねぇ！！」

「んひゃあ？椿はしゅーちゃんの物じゃないじゃん。しゅーちゃんがそんなこと言える立場じゃないよ」

さらり。

白瑠さんは秀介を怒らせる台詞を言い退けた。

秀介がプッツーンとぶちギレるその前に。

「白瑠さん、秀介をお願いします」

「ん？」
「あたし、負けるのは嫌いなんです。相手が――誰だろうと、ね」
白瑠さんには威嚇をしていたが完全にあたしには無防備だった為、秀介に回し蹴りが決まる。
あたしはパグ・ナウの刃を出して、剣を逆手に持った。

「秀介！」
「たっ……！？」
「うひゃひゃ！」

頭蓋破壊屋ｖｓポセイドンが戦いを始めた。
あたしは社長室に足を踏み入れる。同時に篠塚さんが身構えた。

「動くな！撃つぞ！」
「撃てばいいじゃないですか」

あたしは歩みをやめない。
篠塚さんが撃ち殺すわけがない。現に白瑠さんは肩を撃たれ、ラトアさんも急所じゃない部分を撃たれていた。
撃たれたとしても、死なない程度だろう。
例え頭に一発撃ち込んでも、悪魔が弾き返すはずだ。
何のためかは知らないが。

「椿！止まるんだ！本当に撃つぞ！」

篠塚さんはそう警告を叫ぶがあたしは止まらない。
篠塚さんの後ろにいるターゲットが撃てと急かすが、篠塚さんは躊躇する。
ガウン。

足元に弾丸が撃ち込まれた。あたしの身体に撃ち込もうともしないのか。
あたしは呆れながらも歩む。
銃口が眉間の目の前にある。
あたしはそれを真っ直ぐに見つめて篠塚さんを見上げた。
彼は撃たない。

「撃つんだ！！」

ターゲットが急かしても、あたしの頭を撃ち抜くなんて。篠塚さんに出来っこない。
数秒間、あたしは篠塚さんと眼を合わせた。
すると篠塚さんに隙が。
頭痛でも走ったのか、苦痛を浮かべた。
その隙を逃さない。
あたしは剣を振り上げる。篠塚さんは、咄嗟に銃を持つ手で剣を握る手を掴んだ。
掴んでもらえなきゃ困る。掴めるようにわざと逆手で握ったんだ。

「今です！ラトアさん！」

あたしは叫んだあとに左手で篠塚さんの肩を掴んで机の上に押し倒す。
ラトアさんは直ぐ様、盾のなくなったターゲットに飛び付いた。

「ッ！」
「吸血鬼のお食事の邪魔は駄目ですよ」

篠塚さんが慌てて依頼人を助けようと銃を握り直すが、あたしは既に篠塚さんの上に座り込んで腕を固定しているので安易には動けな

い。
白瑠さんと秀介はまだ戦っている最中。
ラトアさんはお食事中。
息耐えれば、あたし達の勝ちだ。

「篠塚刑事。駄目じゃないですか。貴方は狩人、殺し屋を撃って依頼人を守らないと」
「っ……」
「……ああ、あたしを守りたいから狩人に戻ったんでしたっけ」

それじゃあ撃っては意味がない。
髪が垂れて篠塚さんの頬を擽るが、彼はそれよりもターゲットを気にかけてもがく。
「無駄ですよ、彼はもう死にます」チラリと見れば血をゴクゴクとラトアさんに吸い付くされて眼から絶命していた。

「篠塚さん、貴方は守る側であたしは殺す側。本当にあたしを守っていいんですか？貴方のその優しさを無駄遣いしないで他に向けてください」

人間の死をただなんとなく視てからあたしは真下の篠塚さんに眼を戻す。
「椿っ…！俺は君を助ける！拒まれても！」
「助けるって…どうやって？言ったでしょ……あたしは、そのままで居たいんです」
「……椿」
「あたたかい場所にいるから、貴方の優しさは必要ないんです。…一つだけ、一つだけお願いを聞いてくれるなら……どうか貴方だけは平和な表側にいてください」

あたしは冷たく突き放すわけじゃなく、穏やかに自然に笑って、篠塚さんに伝えた。
このままで大丈夫。
あたしはあたたかい場所で。
笑っていられる。
花を咲かせていられるから。

「あたしは凛々しく咲き誇る椿花ですよ？篠塚さん」

あたしは純粋に、無邪気に弾んだ声で笑いかける。
それに応えるようにぎこちなく、篠塚さんは苦しそうな笑みを浮かべた。

「本当に……そこにいて……大丈夫なんだな？」
「はい、大丈夫です」
「……そうか…」

頷いてみせる篠塚さんは下手くそな笑みを向ける。
自分で、救いたいのだろう。
本当は、あたしを殺戮者のままにしたくないのだろう。
勝手な予測だけれど、この人は優しい人だから。

「あぁーっ！！しーのちゃんずるいぃ！椿に馬乗りにされてるぅ！！」

背中に衝撃を喰う。確認しなくとも秀介の相手に飽きた白瑠さんが抱き着いてきたのだろうか。

「椿ぃ、俺にも馬乗りになってぇ。…あぁ、でも椿は後ろからの方が」

「やめろぉおっ！！」

あたしと秀介の声がハモった。
ラトアさんの食事も終えたのであたし達は速やかに撤収。
秀介はしつこく追ってきたが撤いた。あたしをラチると言い出したからだ。
完全に秀介の闘争心に火をつけてしまったもよう。
はぁ、あたし、モテ期かな。

ズキズキズキズキ。
翌日。眠っている男達を放っておいてあたしは一人で街を歩いていた。一先ず由亜さんのオススメのフード店で朝食を摂り、一番近い洋服店に向かっていれば頭痛が発生。
まさか、こんな街中で悪魔が、騒ぎ立てるつもりなのか？
そう思ったが、するのは頭痛だけだ。
騒音はしない。ただの頭痛か？
しかし、歩く度にその頭痛は酷くなる。ズキズキと脳味噌を刃物で刺されるような痛み。
堪えきれず額を押さえて立ち止まった。
どんっ。
人がぶつかってきた。ガヤガヤした人並みだ。ぶつかっても可笑しくない。

「あ、ごめん」

しかめっ面で額を押さえる男が謝る。
額をぶつけたわけじゃないのに、お互い同じ場所を押さえていた。

「あぁ、お前もか」

悟ったようにそう呟く。
灰色の髪をした男は眼を細めてあたしを見下ろす。
やがてニコッと薄く笑った。

「悪魔に取り憑かれた同士、がんばろーな」
「！」

悪魔に、取り憑かれた？
何を言っているんだ。コイツ。
凝視をしていれば、薄く笑った彼の眼が紅く。ルビーのように光った。
コイツも。
コイツも、悪魔を？
だったら、悪魔を追い払う方法を――。

「可愛いなぁ、ねぇ、お茶しない？」
「しない」

ナンパしてきたので反射的に断る。アホか。
悪魔を追い出してない奴が追い払う方法なんて知るわけない。

「んー、残念だ。じゃあまた会えたら、その時に」

灰色の髪の男は潔く諦めて、歩き出した。
彼は直ぐに人混みの中へと消える。

「……ジェスタに会ったら教えないと」

あたしは呟いてから歩き出す。
あたし以外にも悪魔に憑かれた人間がいたのか。しっかりしろよ、

悪魔退治屋。

「今、悪魔と交信でもしてたのかよ。頭痛はやめろ。キレんぞ」

あたしは悪魔に一言文句を言っておく。どうせ沈黙だろうけど。

本当に、沈黙を返した悪魔を気にせず、あたしは五着ほど服を購入した。

借りた部屋に戻れば白瑠さんと藍さんが起床。朝食を作って食べさせる。

そのあと藍さんがあたし達が殺戮できる仕事を探してくれた。

「よし、このシステムを十分以内でハッキング」

「ちょっと、ハードル高すぎですよ」

それを済ましたら藍さんが作った簡単なシステムにハッキングをさせられる。

藍さんは積極的にハッキング方法を教えてくれた。

覚えれば結構簡単だな。

「よっしゃ！！クリア！」

「おおー！お嬢すごい！」

「うひゃあ、つーちゃん」

「うひゃぁあ！？」

クリア出来てガッツポーズをしたら、茅の外だった白瑠さんが割り込んであたしを羽交い締め。

「ご褒美あげなきゃ…だねぇ」

「んっ！ちょ…や…白瑠さっ！」

弱い耳を加えて身体を撫で回してくる白瑠さん。

「ちょっと！白瑠！ご褒美をあげるならお題を出した僕だよ！」

そうゆう問題じゃねぇ！
ご褒美ってなんだ！
いらねぇよ！

「人前ではしたないことをするな」

ドカッとラトアさんが白瑠さんの頭を蹴り飛ばした為、あたしはなんとか羽交い締めから解放された。ふぅ…危なかった。

「……うひゃ、吸血鬼死刑！」

そして白瑠さんが笑顔で暴れだした。
吸血鬼、嫌いなのかな。やっぱり。

「白瑠さん、これから殺戮すんですからやめてくださいよ」

もう夜になった。これから殺戮の仕事をするんだ。
彼の場合、今暴れ尽くしても体力は有り余っているだろう。
「んー」と白瑠さんは直ぐに暴れるのをやめてあたしの元に来たかと思えばフレンチキスをした。
あたしはそれで撃沈。

「あは、お嬢…大丈夫？」
「大丈夫じゃない……」
「ふん、しっかりしろ」

無理だ。白瑠さんのこのスキンシップは慣れそうにない。いや、慣れちゃだめだろ。

「……あのさ、椿お嬢」

藍さんが徐に口を開いたら、あたしの携帯電話が鳴り響いた。

「あ、由亜さんだ」

由亜さんからの着信。

あたしはパッと起き上がって直ぐに電話に出た。何から報告しようか、と考えながら「もしもし、由亜さん？」と言う。

先ずは大仕事を狩人の鬼に負けずに遂行したことを報告。

それから。

それから。

それから――。

「その女なら、死んだぜ」

電話から聴こえたのは、指鼠の声だった。

「地獄をみやがれ、ドブ猫」

あたしは忘れていた。

あたたかい場所にいれば、冷たい場所に突き落とされる。

何度も何度も。

繰り返しては忘れる。

忘れては落ちる。

堕ちた。

哀別の悲鳴

愛してても、さようなら。

愛とはなんだ？
そんな疑問はばかばかしいと、あたしは思う。
愛とはまず、親からもらうはず。
だけど、一体、どれが親の愛情だったんだろう。
当たり前にしてくれたこと？それはなに？何だったの？
あたしにはわからない。
片親には捨てられたから。
愛されて祝福されて産まれてこれなかったから。
あたしには愛がわからない。
本当に愛を与えられたのかさえ、あたしは疑問に思うくらい。
その答えを教えてくれたのは彼女だった。
皮肉なことに。
あたしは血塗れになってから、愛を知った。
愛を視て、愛に触れた。
心地よくて歯痒くて微笑ましいもの。
それを――――――奪われた。

ザアアァアアアアアアッ。

雨が降り注ぐ墓場。
幸樹さんは一つの墓の前に立っていた。泣く訳じゃなく、ただその墓を見つめている。
傘も差さずに、ただ見つめていた。

「……なんで…」

あたしは、口を開く。

幸樹さんはあたしを見なかった。

「指鼠の復讐です。私にも由亜の携帯電話で告げられました。爆死させたと、ね。私が駆け付けた時にはもう…」

「そうじゃなくって…」

「由亜の家族には事故死と伝えておきました。それが彼女の遺言ですから」

「そうじゃなくって…」

「由亜の家族には上手く話しておいたので大丈夫です」

「そうじゃない！！」

あたしは声を上げる。

漸く幸樹さんがあたしを振り返った。

傘を差してくれる白瑠さんも藍さんもラトアさんも何も言わない。

「なんで！なんで由亜さんなの！？アイツは！指鼠は！？アイツは何処よ！？」

「――――地獄。彼の言う地獄がこれなんですよ、椿。相棒を殺した復讐に、私の恋人を殺した。それだけのことです」

幸樹さんは淡々と答える。

怒りなんて微塵も見せず事実をありのまま受け入れた様子に愕然としてしまう。

「それで……指鼠は？」

「……きっと仕返しをするのを待っているでしょうが、私達は手を

引きましょう。これはただの挑発です。彼の思うつぼですから」
「…ただの、挑発？」

どくどくと心臓が脈打つ。速く速く脈を打つ。
あたしは白瑠さんの差す傘から出て二歩、幸樹さんに歩み寄った。

「由亜さんが殺されたのに、ただの挑発ですって！？アイツを、アイツを野放しにするのか！？」
「ええ、そうです。これ以上は無意味です、椿も忘れるべきですよ」
「……っ」

完全に意気消沈している。復讐の意志なんて彼にはない。それも、指鼠の存在さえも忘れようとしている。
なんで。なんで。なんで。
どうして。

「あたしが殺しに行く！」
「椿…」
「元はあたしの獲物だ！アイツはあたしが殺す！あたしが片をつける！！」

踵を返して白瑠さんの横を通り過ぎようとしたら腕を掴まれた。
白瑠さんだ。
笑顔なんてない。

「だめだよ、椿」
「っ放してください！」
「師匠命令だ、椿。指鼠から手を引くんだ。幸樹が行かないなら、俺達も行かない」
「由亜は幸樹の恋人だ。アイツが行かないならオレ達が行く意味は

ない」

白瑠さんとラトアさんが、あたしに言う。そして藍さんも。

「お嬢、わかるだろ?復讐の意味を、幸樹は知ってるんだ」

復讐の――意味。

あたしは白瑠さんに腕を掴まれたまま幸樹さんを振り返った。

妹を殺された。その復讐をした幸樹さん。

そして恋人を殺された。

わかってる。

わかってるよ。

妹を殺された復讐をしても、幸樹さんは幸せにならなかった。

だけど。

だからこそ。

だからこそ、引き下がれない。

「復讐じゃない!あたしは後始末をするだけだ!放して!あたし一人で行く!!」

「椿…」

「お嬢…」

「椿、行かないでください」

もがいたが白瑠さんは腕を放してくれなかった。

幸樹さんも止める。

あたしを引き止める。

「貴女まで、失くしたくない」

ズキンときた。

胸が、痛い。心臓が、痛む。

「アイツを殺すっ！！邪魔をしないでっ！！」

あたしは腕を引っ張った。

しかし白瑠さんは放さず、捻り上げる。痛い。

「白瑠さんっ…」

「駄目だって言ってるだろ、椿。腕をへし折るよ」

「師匠命令なんかっ聞けるか！」

もう一度引っ張ったら、激痛が走った。

「ああぁっ！」とあたしは腕を押さえてその場に崩れる。

へし折られた。右手首をへし折られた。

「椿さん…！白瑠、何もそこまでやらなくても…」

「こうでもしなきゃ椿はとことんやる。わかってるだろ？偽者の件だって怒り任せで突っ走る。突っ走んないようにへし折らないと…本当に椿を失くす」

雨が降り注ぐ。それに打たれてあたしは震えた。

痛みじゃなくて、冷たさに震える。

「椿、指鼠のことは忘れるんだ。罠を仕掛けて捕まるのを待ってるんだよ。餌に食い付くんじゃない」

「…でも」

「でもじゃない。まだ食い付くつもりなら――もうあの家には帰って来れないと思え」

衝撃を喰らった。

白瑠さんにしては、あまりにも冷たく突き放す言葉。
いや、今までが優しすぎたんだ。
あたしは優しくされすぎた。
あたしは、何も言えず、ただ震える。
冷たい。冷たい。寒い。

「……椿さん。手当てをしましょう」
「ラトア、椿を運んで」

冷たい冷たい冷たい冷たい。
寒い。寒いよ寒い。
　あたしは部屋に閉じ込められた。手当てをされて、一人ベッドの上に紅色のコートを羽織ったまま膝を抱える。
暗い。本当に暗い。

「……死んだ…」

あたしは呟く。
人が死ぬって、こんな感じなのか。
散々殺してきたが、今まで殺した人間には用はなかったから何とも思わなかった。
だけと由亜さんは。
由亜さんには話すことがあった。
愛を教えてくれた彼女に、相談したいことがあったんだ。
ほら、旅行する約束だってした。お土産も少ないけど、ちゃんと。
ちゃんと買ってきたんだ。
オススメの場所に行こうって話したじゃないか。
まだ姉妹みたいに夜通しで話したかった。

「……あたしのせい…」

全ては実現しない。
あの時、しっかり逃さず殺していれば、由亜さんが死ぬことなんてなかった。
あたしのせいだ。
あたしのせいでも、彼らは責め立てない。
寧ろあたしを守るために腕をへし折って閉じ込めた。
なんで。
あたしなんかより、由亜さんの為にアイツを殺さないんだ。
あの消沈した幸樹さんの様子。
雨に打たれながら墓を見つめた幸樹さんの姿。
初めて由亜さんに会った日。由亜さんを紹介されたリビング。一緒に食事をしたテーブル。一緒に料理を作ったキッチン。団欒したソファ。飲みあかして寝込んだあたしの部屋。
長い日々に感じる。
由亜さんと会って、まだ。
まだ一ヶ月も経っていなかった。
全部、全部。全部、全部。
あの男が、ぶち壊した。
嗚呼、殺したい。
嗚呼、殺したい。
殺し損ねたあの男。
あたしが殺していれば。
あたしが殺していれば。
あたしが殺していれば。
あたしが殺していれば。
コゴエズニスンダノニ。

――――クククッ、殺しちまえよ。

静かに目を開いて部屋を視た。視てもそこには誰もいない。

「殺しちまえよ」

今度ははっきりと聴こえた。

頭の中に響く声。

今か。今が沈黙を破る時なのか。

「煩い、ずっと沈黙してろ」

「殺しちまえよ、邪魔な奴なんて。片っ端からぶっ殺しちまえ」

「…うるせぇ」

「何をじっと座ってんだ？師匠命令だからか？んなもんくそ食らえ。あの白野郎の命令を聞く筋合いはねぇだろ」

「黙れ、悪魔」

黙らせたくとも頭の中にいては手も足もでない。

悪魔の囁きは続く。

「いいのか？あの溝鼠を見逃しても。よくねぇだろ。あのムカつく鼠にやられっぱなしだぜ。ボコボコにされ、仕事で負けて、電流流され、頭撃ち抜かれかけて、挙げ句にはお姉ちゃんを殺された」

ギリッと歯を噛み締める。

悪魔には、筒抜けだった。

頭の中の住み着いた悪魔には、あたしが視たもの、思ったもの、考えていることも、晒されてる。

「いいのかよ…？お前を突き落としやがったアイツをこのままにして。あの姉ちゃんを殺されて、何もしないでいられるのか？アイツが何を奪ったか、本当にわかっているのかよ？ドクターの恋人を奪

った。それだけじゃない。お前のこれから始まるはずだった幸せな日常を奪った。お前のあたたかい場所を、奪ったんだぜ…！？」

悪魔の囁き。
誰かが肩に触れた感触がしてあたしは左手で振った。
しかし、誰もいない。

「うるせぇ…。てめぇの言葉に惑わされない。てめえと契約する気はない、余所に行きやがれっ！」

あたしははっきり言い退けた。
だけど、悪魔は笑う。

「クックックッ…！契約ぅだぁ？――んなもんするつもりはねぇよ」

笑い退けた。
は？
じゃあお前は何の為にあたしの中に留まる？
何の為に殺さないでいるんだ？

「おい……椿」

甘く悪魔は囁いて呼ぶ。
まるで後ろから抱き締められ、耳元に囁かれているようだ。

「どうするんだ？あの鼠を、殺すのか？殺さないのか？」
「……殺せないのよ」
「殺せない？そりゃあ一体どうしてだ？殺戮者のお前が“殺せない”なんて可笑しいだろう。師匠に武器を没収されたから？おいおい、ナイフがあれば殺せるだろう。お前は最初カッターで殺したんだぞ

？」

クスクスと笑って悪魔は囁き続けた。
念のためとあたしの愛用の武器は没収されたんだ。カルドもパグ・ナウも、短剣もとられた。
愛用じゃなければしっくりくこない武器ならば平気とばかり思っているんだ。
残されたのはプレゼントにもらった剣と購入したきり使っていないナイフ。
殺しには十分だが、やはりカルドは欲しい。

「腕が折れてるから？おいおい、折れてないぜ」

それを聞いて腕を視た。
手当てされ固定された包帯を抜き取る。手首は、折れていない。痛みもない。
悪魔が治した。

「どうするんだ？椿」

悪魔はもう一度問う。

「あの溝鼠を、殺さないのか？殺すのか？」

悪魔の囁き。

「いいのかよ、凍えたままになる。アイツの血を浴びろ。アイツを切り裂け」
「……」

毒のように染み込む。

「アイツを苦しめて殺せ。鼠が猫をいたぶる？そんなこと許すな。お前は紅色の黒猫。鼠をいたぶれ、黒猫」

――――――――――――――――……。

「――――鼠をぶっ殺す」

あたしはベッドから立ち上がった。

「椿さん……？」

幸樹さんが様子を視に来た時にはあたしはいない。

窓から風が入り部屋を冷やす。

ベッドの上には武器を詰めていたトランクが空っぽのまま置かれていた。

棚の引き出しは開きっぱなし。名刺やら写真がしまわれた引き出しだ。それも空っぽ。

顔を歪ませた幸樹さんはそれを視て、小さく息をついた。

「帰ってきてください……椿」

「兎無さん。至急武器をください。カルド、それにパグ・ナウ。銃に手榴弾もください」

先ずは松平の修理工にあたしは向かった。
そして奥の部屋に通されるなり、あたしはテーブルに二つのアタッシュケースを置く。

「…え?至急って。…どうしたの、キャット?カルドもパグ・ナウも買ったばっかでしょう。一ヶ月も経ってないじゃない」
「……ええ、一ヶ月も…経ってない。だけど必要なんです。お金なら、これを全額払いますよ」

あたしはアタッシュケースを二つ開けた。二つの箱にある大金に兎無さんは眉を潜める。
覗きにきた兎無さんの父親は仰天。

「おい!なにしているっ!兎無!急いで用意しろ!」
「え、でも…。キャット、なにかあった?」

父親に急かされながらも、兎無さんは問う。
あたしは何も答えずに武器を待った。
それが答えだ。
兎無さんはそれ以上問うことはなかった。
武器は揃った。カルドもパグ・ナウも、流石は優秀の武器職人、しっくりとくる。
兎無さんは余分に貰えないと言ったがあたしは持っていても邪魔だからと金は全部支払ってそこを後にした。

「お、お嬢!?」

次は藍さんの家。

「え?ど、どどどうやって?どうやって…システムは反応しなかったのに…え、つか…なんで、外出許可がよく…」

「由亜さんの携帯電話。何処にあるかを調べてください」

あたしの言葉を聞いて、抜け出してきたと理解した藍さんはあたしの後ろに目を向けた。

「お嬢、帰るんだ」

ガッ、と背後からあたしの右手をラトアさんが握る。それだけでよかったはずだった。

あたしの手首が折れていれば。

折れてないとラトアさんは直ぐに気付く。動揺した。

だから振り上げたパグ・ナウは、安易にラトアさんを引き裂けた。

「っ!ちょ、ラトア!お嬢…っ!?」

ラトアさんが崩れ落ちる。あたしは次に藍さんに爪を向けた。

「アイツは由亜さんの携帯電話を持ってる、それは何処なんです?」

「……お嬢。駄目だって言われただろ」

「っ貴様!!」

傷が塞がったラトアさんが今度はあたしに飛び掛かる。吸血鬼に捩じ伏せられた。

「……!?」

だが、こっちには吸血鬼の天敵がいる。

「…退いてください、ラトア」
「椿っ、おまっ……うぐ！！」
「なっ、ラトア！？」

眼が合うなり、ラトアさんは耳を塞いだ。隙が出来たなら刺すだけ。
短剣二つを身体を貫かせ、床に食い込ませた。床に磔。
ナイフを出して、藍さんの首に突き付けた。

「早く…今すぐに…溝鼠を見付けろっ！！！」
「う〝ぁあっ！」

怒鳴りつければ、ラトアさんが痛みに悲鳴を上げる。あたし達には聴こえない悪魔の攻撃を受けてるようだ。

「お嬢っ、こんなこと駄目だ。お嬢、駄目だよ。幸樹達が心配する、帰らないと」
「藍さん……さっさとやってください」
「っ…。お嬢！帰れなくなるんだよ！？」
「さっさと見付けないとお前を殺すぞ」

脅しを吐き捨てる。
強張った藍さんは戸惑いながらもキーボードに手を伸ばした。カチャカチャとＧＰＳで由亜さんの携帯電話の位置を調べる。

「椿！そそのかされるな！声をっ…くそっ！」

磔になりながらもラトアさんが叫んだ。

「何を言われたかは知らんが出鱈目だ！信用するんじゃない！…ぐぁあっ！」

「ラトア！？」

また悪魔が攻撃をしたのか苦しみ出すラトアさん。全く現状がわからない藍さんは手を止めた。画面には地図が示してあり、赤い点滅が。見付けたようだ。

「ありがとうございました、藍さん。それとラトアさん、すみません。言っておきますがあたしは貴方方の敵にはなりません、ジェスタとそうゆう約束ですから」

あたしはキーボードを押して画面を変えながらラトアさんに言っておく。例え悪魔が吸血鬼に復讐を企んでも、吸血鬼の脅威にならないようにする。

「それでは――――藍さん、ラトアさん」

あたしは後ろから藍さんを抱き締めた。キュッと首を抱き締めて、矯める。数秒。数秒矯めてから、告げた。

「さようなら」

藍さんを気絶させ、あたしは赤い点滅の場所に向かう。ラトアさんの呼び掛けには答えず、去った。

バイクを盗んで辿り着いたのは、廃虚の建物。或いは建設を断念した建物。

窓ガラスは疎らに貼られていて階は七つ。区切られた空間に聳え立つそれは、罠には最適な舞台だ。

そこに指鼠が待ち構えている。

最後の決着をつけるためにだ。
クルリとカルドを回して握りを確かめてから、パグ・ナウの爪を出して、歩み出す。

「ククククッ、鼠をいたぶる時間だ」

悪魔が楽しげに笑ったが無視をした。
アイツを殺す。
それだけだ。
一階から探した。あの鼠を。一階にはいない。
二階に登る。二階にもいなかった。
お嬢、わかるだろ?復讐の意味を、幸樹は知ってるんだ。
わかってる。わかってるんだ
これは、あたしの復讐。
復讐だ。コレを称するのは復讐だけ。
空虚な眼で墓石を見つめていた幸樹さん。
わかってる。わかってるよ。わかってます。わかっててやってるんだ。
アイツを殺せないならあたしは百の人間を殺す。それでも何も感じないだろう。気がすまない。
もう一度あの幸樹さんを思い出す。テーブルで目を覚まして初めて他人に振る舞った料理を誉めてくれた朝。初仕事のお祝いに連れ回された日。お兄ちゃんと呼んだあの時。愛しそうに由亜さんを見つめた眼差し。優しげな微笑。そしてまた、空虚な横顔。
喉から込み上げた何かを歯を食いしばって飲み込む。
長い廊下を歩く。
長く長い廊下にあたしの足音だけが木霊していった。
非情にあたしの腕をへし折って見下した白瑠さん。
わかるでしょ。わかってるでしょ。わかってよ。
あたしは。あたしが怒りを覚えるなんて可笑しいって言いたいんで

しょ？わかってる。
白瑠さん、貴方は由亜さんの死なんて痛くも痒くもないでしょう。
わかってる。
あたしは貴方と同類だ。
あたし達はいつも奪う側。
殺して殺して無情に殺して非情に殺して冷酷に弄んで無邪気に引き裂く。
吸血鬼よりも血に飢えた殺戮者。
悪魔よりも非情に冷笑する殺戮者。
それでも、白瑠さん。
あたしは、許せない。
由亜さんを、由亜さんと過ごすこれからの時間を、幸樹さんの最愛の人を、あたたかい場所を、奪った指鼠を許せない。
指鼠を殺さなかったあたしを許せない。
殺す。殺す、殺す。
殺人鬼が殺戮者がするのは、人殺し。殺すんだ。
殺すしかない。
無情に衝動的に殺すし、仕事でのターゲットも殺す。
殺したい相手ならば、尚更殺す。
この怒りは殺戮衝動は、あの溝鼠に向けさせてくれ。――――ピピ。
赤外線を踏みつけた。最初の罠だ。
ピピピピピピ。
不快な音が鳴り響く。後ろにも、前にも、囲まれた。逃げられない。
避けられない。

「くそっ…」

ドカドカガガガガガッ！！
窓側に仕掛けられた爆弾が爆発する。爆風が窓側の壁を吹き飛ばし

た。
強烈な爆音は轟く。
その爆音のせいで鼓膜がイカれた。頭が痛い。キーィンという音にまとわりつかれて、壁が崩れる音が聴こえない。

「うっ……あ…ゴホッ！」

咄嗟に手榴弾を出して床に穴を開けて三階の爆発から逃れた。それでも手榴弾の爆風に身体はダメージを受けている。
しかし、休んでいる暇はない。
指鼠はカメラを仕掛けて確認しているはずだ。しらみ潰しに見付け出して、切り裂いて殺す。
壁にナイフを突き刺してそれを足場に三階に戻る。
鼓膜も正常に戻った。悪魔が治したのか、どっちでも構わない。
何よりも優先しないといけないのは、指鼠をいたぶることだ。
軽いストレッチに背中と腕を伸ばしたあと、身を屈めて。スタートダッシュをした。
廊下を全力で駆け出す。
――ピピピピピピ！
ドカンッ！
二発目の罠も爆弾。爆風は受けたが問題ない。走り続ける。
カチッと何かを踏みつけた。
針の天井が落ちてくる。それは前に飛び込んで避けた。

「トラップハウスかよ」

休まず、また駆け出す。
次は四階だ。
爆弾だけじゃなくトラップ作りも得意らしい。確か藍さんは多才だから気を付けろと言っていたっけ。

四階の罠は凄い。
ナイフや弓矢が飛んできた。あり得ない程の数だ。
物凄く歓迎をされている。
走りながらあたしはそれらを叩き落とした。
流石に息が切れる。五階に上る前に少し息を整えた。
五階には何がある？
五階には――――――――指鼠がいた。
銃口をあたしの頭に向けて数十メートル先に立っている。
あたしは咄嗟に屈んで銃弾を避けた。その動作と同時に短パンの間に入れていた銃を抜き取って構え撃つ。
指鼠は銃口に捉えられないようにその場から離れて再び発砲。
弾丸から逃れるためにあたしは階段に戻って対抗して発砲を続ける。

「来ないかと思ったぜ！くそ猫！！」
「来てやったんだ！有り難く思え！溝鼠！！」

銃撃戦は長くは続かない。
やがて弾がなくなり、指鼠が廊下を駆ける音だけがした。
逃がすか、あたしは直ぐに飛び出して追い掛ける。
カキンッ！
背中に向けてナイフを投擲すれば、振り返った指鼠は叩き落とした。
ジャンッ！と番犬の剣を振って出して、斬りかかる。指鼠は短剣で受け止めた。

「正々堂々じゃなかったのか！？」
「アンフェアをやらかしたのはてめぇだろ！！」

震動で手が麻痺するほど剣をぶつけ合う。怒り任せのぶつけ合い。
ガキィンッガキィンッ！
指鼠の顔には痛々しい縫い目があった。爆発の際に受けた傷だろう

か。左手の指はない。親指と人差し指しかないのは当然だ、あたしが切り落としたのだから。

「あら？子鼠ちゃん、指は何処においてきたのかしらっ？」

「けっ！どうした！？んなに鳴いて！誰かが死んだか！？ああん！？」

互いに挑発をして怒りを増幅させて剣を叩き落とす。

「ああ！由亜って女が死んだんだっけな！？」

「…ぅあああ！！」

力の限り体当たりをする勢いで叩き付ければ、指鼠が後退りをした。

押した！

よろめいた指鼠の首を目掛けて剣を突き出す。

――――――スッ。

指鼠は仰け反ってそれを避けて、指の少ない手で何かを目の前に放った。

導火線に火がついた小さなダイナマイト。

しまっ…。

ドガーンッ！

目の前で爆発。小さくても爆弾。あたしは吹き飛ばされ廊下に叩き付けられた。

勿論、一緒にいた指鼠も同じく吹っ飛んだ。

「ははははっ！！当然の報いだ！！あの男はおれの相棒を殺した！報いに恋人を殺した！どうだ！？紅色の黒猫！自分の恋人が死んだと思った時と同じくらい痛いか！？ああん！？」

指鼠は受け身がとれたのか、声を張り上げた。

頭を振って意識を繋ぎ止めて起き上がると指鼠の姿が消えている。

「逃げんのかっ！？溝鼠！」

「んなわけあるか、ぼけ！」と指鼠の声が聴こえた。

近くだ。

中央に部屋のドアノブがあった。部屋に逃げ込んだようだ。

立ち上がってそのドアの前に。

開けた瞬間に何かが飛び出るだろうから、警戒してドアノブを掴んだ。

バチンッ！！！！

電流が流されていたのか、感電してあたしはその場に倒れて気を失った。

「…――――」

意識はすぐに戻った。

しかし意識は虚ろで、身体が言うことを聞かない。

火傷を負った右手だけがピクピクと痙攣している。

「黒焦げにしてやるよ！猫の丸焼きを、アイツらにプレゼントしないとな！」

腹を蹴られて仰向けにされた。痛覚も回復していない為、感じない。

視点は定まらず見下す指鼠もまともに視えなかった。

――――バキッ。

「うっあぁぁ！！」

いきなり痛覚が蘇った。指鼠があたしの右足を踏みつけてへし折っ

たんだ。
　ゴキッ。
続いて左手もへし折る。
「ぅ……うぅ…」
痛みで更に意識が朦朧としてきた。
「あれ、デジャヴを感じるな。前にもお前をボコったっけ？」
笑いながら指鼠はあたしの左手を踏み潰した。
初めてコイツと接触した時と、同じだ。
ボコボコに殴られた。ボコボコに蹴られた。身動きが取れなくしたら、部屋に運ばれたっけ。
あの時と同じように、ズルズルとあたしを引きづって指鼠は部屋の中へと運んだ。
一面がコンクリートの部屋にパソコンが置かれた机と、前回と同じ拷問か解体道具が並んである。
　意識が、また途切れる。
意識を戻した時には、磔にされていた。部屋の真ん中に十字の鉄屑に拷問具で磔。
　目の前には指鼠。ナイフを持っていると分かっても、あたしに防ぐ術なんてなかった。
「うあっ！」
「お前の素性を調べた。山本椿」
腹部にナイフが深々と突き刺さる。
「お前本当に化け猫だな。突然現れやがった殺人鬼、紅色の黒猫。

頭蓋破壊屋に並ぶ存在だけあって怪物かよ、怪物カップルめ。電車内の客をぶっ殺しただけじゃなく、被害者面かよ。ははっ、殺すついでに化けの皮も剥いでやる」

「うっ……あぁ！」

腹からナイフが一度引き抜かれたが、もう一度突き刺された。

「おい、何人殺した？」

ぐちゃ、ともう一度刺される。

「電車で五十六人、駅で五人…九月から殺しの仕事をやり続けて…一体何人を殺した？半年もしない内に百、否二百か？それとも三百？お前は表に産まれたのは間違ってたな。産まれもっての裏現実者、殺人鬼、殺戮者。――化け物だなっ！」

「うぐぅ！！」

突き刺したナイフで抉られる。ドクドクと血が流れ落ちて足元に血溜まりができるのを虚ろな眼で視た。

「化け物のくせに、復讐か？ああ？化け猫！」

グサッ。グチュ。

「殺すしか能がねぇくせに、復讐かよ？おい、化け猫。聞いてんのか？てめえは誰だ？山本椿じゃねーよ。紅色の黒猫、殺しは肯定される裏現実の化け猫だ。んな化け猫が――一人の女殺されて鳴いてんじゃねぇよ！！」

ガンッと額に頭突きを喰らった。身体のダメージはそれくらいでは

楽にならない。腹部の刺傷は熱く血が流れていくのを感じる。

「……自分を棚上げか…この…鼠野郎」

命が削れていくのを感じながらも、あたしは言い返した。

ぐいっとナイフでまた刺される。

「言っただろ、地獄をみせてやるとな。お前をこれからいたぶってやるから楽しめ。せいぜい後悔しろ、おれに喧嘩を売ったことを。おれのコレクションをぶち壊したことをな」

「あっ…うぐっ！」

グチャ、グサッ、グリグリ。

腹を掻き回される。

「ゴフッ…う…」口から血が溢れだした。

「ああ、安心しろ。お前の死体はちゃーんとクラッチャー達に送ってやるよ。皮を剥いで丸焼きにして切り刻んで包んで送ってやる。あの微笑野郎は乗ってこなかったが、クラッチャーは乗るだろうなー」

「ぐっ…二人は……関係ねぇだろ……っ！てめえとあたしの問だっ…あぐっ！！」

「は？お前だけが狙いじゃねーよ。獲物を横取りしたクラッチャーも、相棒を殺した微笑野郎も……いたぶって殺してやる。…嗚呼、あともう一人か。正体はまだわかんねぇがハッカーがいるだろ。お前と一緒に地獄に送ってやる」

「ぅ……ぅう…――――」

白瑠さんに、幸樹さんに、藍さん。それから由亜さん。

仕事仲間が家族。同居人が家族。

家族。家族愛。
クリスマスの写真。
家族みたいな温かな写真。
温かい家。温かい場所。温かい日々。一緒に食事をしたテーブル。
一緒に料理を作ったキッチン。団欒したソファ。飲みあかして寝込んだあたしの部屋。
――――…あったかい家族。

「あ？…おい、くそ猫。くたばるには早いぞ。生きたまま焼いてやるから。傷口を先ず焼くか」

意識がまた途切れた。
指鼠はナイフを引き抜き、別の道具を取りに行こうとあたしに背を向ける。
その瞬間に――――フッと電気が消えた。
窓がないこの部屋は、一面真っ黒に染まる。

「ちっ！なんだ！？こんな時に！！」

暗中模索することも出来ずに指鼠は悪態をつく。
天井の電球がチカチカと光を放ったがすぐに消えた。その僅かな間に指鼠は道具を取ろうとして足を止める。

「は……？」

指鼠が視た先には――――十字の鉄屑しかない。
虫の息で拘束されていたあたしは、音もなくそこに消えていた。

「誰だ！？」

チカッと電気が一瞬部屋を照らす。
指鼠は他に誰かがいると推測してナイフを構えた。
チカチカと点滅する間に部屋を視回すが、誰もいない。
この部屋には人間が二人しかいないのだ。

「！！…お、お前っ！」

顔を上げてやっと指鼠はあたしを見付けた。
天井に貼り付くあたしを。
足をつけた天井を蹴って指鼠を白い短剣で刺して押し倒した。

「てめぇっ…！その眼はっ…！悪魔の契約者だなっ！？この前の弾丸もっ――」
「関係ねぇし、契約者でもねぇよ」
「うっぎゃああ！！」

掴まれた短剣を振り上げて吐き捨てた。振り下ろした短剣は指鼠の耳を切り落とす。
折れた腕も足も治っている。腹部の傷も塞がっていた。
人間は二人。悪魔が一匹。

「このっ、化け猫！！」
「化け猫さ、あたしは紅色の黒猫。紅色の眼を光らせる黒い化け猫だ！それがどうした！？」
「うがぁあ！！」

抵抗しようと突きだした右手にナイフを突き刺して床に貼り付ける。
左手も同じように床に貼り付けた。

「せいぜい後悔しろ。あたしに喧嘩を売ったこと、あたしをさっさ

と殺さなかったことを！あたしの家族を殺したことを！！」
「うがあああぁあっ！！」
左の残りの指を切り落とす。内蔵を傷付けない程度に腹を裂く。ぐちゃぐちゃに裂いて掻いた。
指鼠は悲鳴を上げながら「殺してやる！」と叫ぶ。
「誰を殺すだって！？ああ！？貴様にあたしの家族をこれ以上傷付かせるもんか！！誰も殺させない！！白瑠さんも藍さんも幸樹さんもっ！！あたしがてめぇを殺して終わりだっ！！！！」
白い刃の短剣を高く振り上げた。
――――――ポタッ。
いや、白い刃は真っ赤だ。
白い椿は真っ赤に染まっている。真っ赤だ。紅い紅い椿だ。
凛々しく咲き誇る椿花。
だめだよ、椿
師匠命令だ、椿。指鼠から手を引くんだ。幸樹が行かないなら、俺達も行かない
由亜は幸樹の恋人だ。アイツが行かないならオレ達が行く意味はない
お嬢、わかるだろ？復讐の意味を、幸樹は知ってるんだ
椿、行かないでください
貴女まで、失くしたくない
こうでもしなきゃ椿はとことんやる。わかってるだろ？偽者の件だって怒り任せで突っ走る。突っ走んないようにへし折らないと…本当に椿を失くす
椿、指鼠のことは忘れるんだ。罠を仕掛けて捕まるのを待ってるんだよ。餌に食い付くんじゃない
でもじゃない。まだ食い付くつもりなら――――もうあの家には帰

って来れないと思え

「……――――」

……白瑠さん。

俺達は違う。解るだろう？

後悔も罪悪感も感じない。これが俺達の“普通”であり“正常”なんだ。ムカつく奴は殺したい。他人だって殺したい。誰でもいいから殺したい。他人に言わせれば“異常者”だとしても俺達はもう、人を殺さずにはいられない。殺さなくちゃ生きていけない。解るだろう？自分が変わったと。解るだろう？

俺達は殺人鬼、殺戮衝動はいつだって襲いかかる

つまり、貴女は、白瑠と同じで常に裏だけ

ただの少女であり殺人鬼、それが貴女の素。つまりは表がない。

白瑠も表がない。

「……――――嗚呼……」

嫌いだったんですか？

嫌いだったよ

彼は簡単に言い退けた。軽く他人事みたいに答えた。

どんな家族でしたか？

うわべだけ幸せな家族だった

彼の家族について話したのは、それっきりだ。

…嗚呼、わかってないのは、あたしだった。

白瑠さんはわかってくれていた。だからこそ、あたしの腕をへし折って非情に見下したんだ。

わかってた。あたしと彼は似てるから。同類だから。

もうあの家には帰って来れないと思え。

そう言った白瑠さん。

いつもならあたしが「出ていく」と言っていたのに、それを言ったのはあたしの気持ちを自分のことのようにわかっていたからだ。きっと、白瑠さんはあの家に転がった時から、幸樹さんを家族のように思っていたんだろう。

だからあたしが出ていくと言う度に態度を変えて引き留めた。

あたしをあの家に連れてきた時点で、あたしは――白瑠さんにとって家族みたいなものだ。

血の繋がった家族を、愛せない同士。殺戮衝動にかられた殺人鬼同士。イカれたのが正常な同士。

白瑠さんも、思ってたじゃないか。

あったかい家族だと。

「……っ…」

あたしと同じくらい、コイツをぐちゃぐちゃにしたいと思ってるはずだ。

一つ崩れれば全てが狂い出す。

そんな家族を視てきた。

うわべだけ幸せな家族。

狂ったそれを視ていた白瑠さんは愛情を抱くこともなく、離れて異国の地に行った。そして殺戮を始め、狂った家族を自分の手で――。

手を止めたあたしをわけもわからず見上げるこの男に、崩されて狂わされた。

自分で殺したいはずだ。

殺したいはずだが、手を引くと言った。あたしの腕をへし折ってまで止めた。

あたしを愛してるくせに、宝物みたいに大事に抱き締めるくせに、あたしの腕をへし折って非情に見下した。

あたしは自分を傷付ける他人は嫌いだ。自分に害をもたらす奴は嫌

いだ。
あたしに嫌われてでも、白瑠さんは止めようとした。
わかってたんだ。
わかってくれてた。
彼は鏡を覗くようにあたしを理解していたから。
わかっていた。わかってたんだ。

「……はは っ」

なのに、あたしは。
悪魔に唆されて、指鼠と殺し合い。
親に反発する餓鬼みたいに、逆らってのこのこ来てしまった。

「あははっ――――はははは、くふっ、ふふふふ、あひゃひゃ、うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

あたしの笑い声が不気味に響き渡る

「!!?」
「あはははははははっ!うひゃあはははははははははははははっ!」

哄笑して、ガツンっと指鼠の頭をコンクリートに叩き付けた。

「何が化け物だ!?化け物じゃない!!人間だ!!家族を求めて、愛情を求めて、笑って怒って、生きてんだっ!!誰かを守って、誰かを愛してんだっ!!」

化け物なんかじゃない。
心を持った人間だ。人間なんだ。
あたしも、白瑠さんも。

誰かを想って守って愛して。
無情じゃなくて非情じゃなくて――――――――…。

「……狂言じゃねーか……化け猫…」

指鼠は、そう言った。
狂言だと、否定された。
また、笑ってしまう。

「ふ……ふふっ……」
「ぐあっ！」

グサリと肺に短剣を振り下ろす。引き抜いてはまた突き刺した。
グチャリグサリグチャグチャ。グチャリグサリグチャグチャ。グチャリグサリグチャグチャ。グチャリグサリグチャグチャ。グチャリグサリグチャグチャ。グチャリグサリグチャグチャ。
刺しては引き抜いて刺す。
狂言か。狂言かもしれない。
人だけじゃなく、自分自身を騙している芝居かもしれない。
わかってたんだよね、白瑠さん。
愛していた人を殺されたからって怒り狂うのは可笑しいって。
殺して殺して無情に殺して非情に殺して冷酷に弄んで無邪気に引き裂く。
吸血鬼よりも血に飢えた殺戮者。
悪魔よりも非情に冷笑する殺戮者。
一体あたしは、何人誰かの愛する人を殺したんだろうか。
わかってたんだよね。
この振り下ろす短剣は、無意味だってわかってたんだよね。
何も感じない。何も感じないんだ。
今まで殺してきたどの人間とも同じ。何も感じない。

怒りはおさまらない。気は晴れない。由亜さんが死んだことは変わらない。

その事実だけが、胸を締め付ける。痛い。痛い、痛い。痛い、痛い、痛い。

　心臓に突き刺す。何度も何度も何度も何度も、突き立てた。

心臓を微塵切りにするように、何度も刺していく。

何も感じない。

何も感じない。

何も変わらない。

何も終わらない。

　わかってたの？知ってたの？幸樹さん。

この復讐の末の空虚を、味わって知っていたのか。何も変わらない。

咲さんは生き返らない。無念を晴らしたかどうかさえ、わからない。

何も変わらない。

何も感じない。

何も終わらない。

「ぁ――――うあああぁああああああああああああああああぁああああああああああああああああああああああああぁぁあああぁああああああああああああああああああああああああああああぁぁああああああああぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああぁああああああああああああああああああああぁあああああああああああああああああああああぁぁああああああああああああぁあああああああっ！！！！」

悲鳴のように声を上げた。

死体の隣に転がって、涙をボロボロ流して赤ん坊のように泣き喚く。

今更、泣いた。

由亜さんが死んだと聞いても、墓を見ても、泣かなかった。
喜怒哀楽の哀よりも怒が込み上げて、自分を責め立て殺意だけがわいた。
何も感じない。
何も変わらない。
何も終わらない。

「あああああああああああぁあああああああああああああっ！！！」

絶叫も虚しくただ木霊していく。それでも絶叫し続ける。
悲鳴のように上げた。
戻らない。
直らない。
何も変わらない。何も感じない。何も変わらない。何も終わらない。
何も感じない。何も変わらない。何も感じない。何も終わらない。
何も変わらない。何も終わらない。何も感じない。何も変わらない。
何も終わらない。何も感じない。何も変わらない。何も終わらない。
何も感じない。何も変わらない。何も終わらない。何も感じない。
何も変わらない。何も終わらない。何も感じない。何も変わらない。
何も終わらない。何も感じない。何も変わらない。何も終わらない。
何も感じない。何も変わらない。何も終わらない。

「――――ハァ…ハァ……」

由亜さん。由亜さん。
やっぱりあたしが誰かを愛するなんて、出来ないんだ。
駄目なんだよ、由亜さん。
愛せない。あたしは愛を殺す側だ。奪う側。壊す側なんだよ。
愛する資格はない。

殺すしか能がない。
真っ赤な殺戮者。紅色にまみれた殺人鬼。
流す涙まで返り血で紅い雫になって落ちていく。

「…――――――――」

ずるずると重い身体を起こして廊下を歩く。階段を上がって、最上階に来た。屋上には行けなかった。階段は繋がってなかったんだ。
窓ガラスのない柱だけが並んだ壁から外を見下ろした。
真下にある地上。高い。
吸い込まれるようにそれを見つめた。
吹き抜ける風が黒い髪を靡かせる。冷たい風だ。
死にたくなった。自殺志願。
ぐちゃぐちゃに跡形もなく消えてしまいたい。
あたしが殺人鬼であることも、殺戮者であることも。人を殺さずにはいられない事実も。あたしが紅色の黒猫だってことも。あたしが山本椿だってことも。愛されずに産まれた事実も。
あらゆる全てから根こそぎ逃げ出したくなって、消し去りたくなった。
こんな思考さえ、木っ端微塵に消し去って欲しい。
存在を消したくない。消えてなくなりたい。跡形もなく消えてなくなりたい。存在さえ消えてしまいたい。
右足を踏み出す。
消えない。存在したことさえ消し去りたい。
何もない空中に。
消え去りたい。跡形もなく。存在したことすら。全て消えて、無くなりたい。
踏み込んだ。

「駄目だよ、椿。死ぬなんて、許さないよぉ」

ぐいっと後ろに引っ張られて尻をつく。
そこに白瑠さんが――――いない。

「……白瑠、さん……？」

呼んだ。でも、やっぱり彼はいない。

「白瑠さん。白瑠さん。白瑠さんっ。白瑠さんっ！白瑠さんっ！！白瑠さんっ！白瑠さんっ！！白瑠さんっ！白瑠さんっ！！白瑠さんっ！！！」

絶叫しても、返事もあの笑い声も聴こえない。
いつも、居てくれた彼がいない。
死にかければ現れてきた彼がいない。助けを求めなくとも助けに来た彼がいない。来てくれない。
もう部屋にいないと気付いて藍さんに連絡して指鼠の元に来ても可笑しくないのに。
来ない。来てくれない。
　もうあの家には帰って来れないと思えそう言った白瑠さんの言葉。

「……あぁ……冷たい」

コンクリートが冷たい。
冷たい冷たい冷たい。
冷たい。

冷たい。冷たい冷たい。冷たい。冷たい。
寒い寒い寒い寒い寒い。
寒い。寒い。寒い。寒い。

「あぁ………あぁぁ」

涙を溢していく。
冷たい。涙が凍ってしまいそうだ。寒い。
助けて。誰か、助けて。
助けて。
助けて。
助けて。
助けて。
誰かあたしの心を救って。
泣き喚いても、誰も――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――――――
誰も助けに来てはくれなかった。

ダン、ダン、ダン。
立派な木製の門を叩いて住人を呼ぶ。へとへとで寄り掛かりながら
拳で叩いた。

「…あれ――椿ちゃん」

出てきたのは、最悪なのか良かったのか。那拓神奈だった。
血塗れで寄り掛かるあたしを凝視して見つめる。

「…蓮真。蓮真を呼んで」

「……わかった」

短く言えば那拓神奈は羽織を脱いであたしにかけてから中に戻った。
…ふむ。何かされるかと思ったが空気を読んでくれたようだ。
その場に座り込んで呆然としながら待つ。

「椿っ！？」
「…蓮真ぁ」

私服の蓮真君が血相変えて飛び出してきた。

「お前、どうしたんだよ…？怪我したのか？おい、顔色が」
「蓮真ぁ……匿って」
「なっ……？」

甘えた声であたしの顔を覗く蓮真君に言う。蓮真君は戸惑ったがすぐに頷いてあたしを抱えた。
細いのによく運べるな、と思った。
　他の住人にバレないように窓から蓮真君の部屋に入る。
畳が敷き詰められた部屋。
足の短い机。学生服が壁に掛けられて、学生カバンが置かれてる。
木製のタンスもあって和風の匂いが漂う部屋だった。
「えっと…怪我の手当てだ。何処を怪我したんだ？椿…意識あるか？」
「……」
壁沿いに座って部屋を見渡せば蓮真君が、あたしの顔を覗いて問う。
まだ戸惑ってる様子だ。

「あれ……傷……ないな」

掌で触れて蓮真君は怪我を確認しようとしたが、腹部は服に血がついて穴が空いているだけ。

「なんだ、返り血なら返り血だって言えよ」

ほっとしたのか蓮真君は胸を撫で下ろした。壁に片手をついて片手であたしの腹を擦る。

黙っていたがハッとして蓮真君は手を放した。

「あ…えっと……やっぱり顔色が悪いな。なんかあったのか？仕事帰り？なんでまた僕の家に…」

「…迷惑だった？」

「いや、迷惑、じゃねーけど……神奈兄貴にしかバレてないから…多分大丈夫だけど…」

挙動不審なのは身内にあたしがバレることに不安を覚えているからのようだ。チラチラと襖を気にしている。

…嗚呼、そっか。彼にも家族がいるんだ。

「家族……か。いいな」

「ん？」

「この家に住みたい」

「そうか？」

「うん、結婚して」

「結婚か。……は？」

ちっ、頷かなかったか。

口をあんぐりと開けた蓮真君があたしを見る。

「お前……大丈夫か？」と本気で心配して顔を覗く。

「頭打った？レントゲン撮った方がいいぜ、顔色まじ悪い」
「蓮真君となら、結婚してもいい」
「……プロポーズなのか告白なのか、わかんねーんだけど」
「言われ慣れてない？結婚してって」
「初めて言われた」

完全に困ったように顔をひきつらせた蓮真君が可哀想なのでプロポーズは断念した。

「お前、まじで大丈夫かよ？冷たいぜ、手。布団出してやるから着替えろ。暫く居るんだろう？」
「……大丈夫じゃない……」

立ち上がった蓮真君を控え目に引き留めるようにボソリと呟く。

「…今、代償をくらってて……大丈夫じゃないんだ…」
「代償？」
「あたたかい場所にいた代償」

もう一度しゃがんであたしの話を聞いてくれるが彼にはちんぷんかんぷんだろう。ずいっと鼻が触れるぐらい顔を近付けた蓮真君。いつもの癖だ。

「だから身体が冷たいって言いたいの？」
「……うん、冷たい。冷たいんだ。あったかい場所にいたら冷たい場所に突き落とされる」

強烈な痛みが、苦しみが、襲いかかってる。失ってはまた手に入れる。それは時が重なるにつれて増幅していく。

失ってはまた手に入れる。
天国から地獄への繰り返し。傷は癒えないまま瘡蓋になっては増えていく。
予想していた以上に滅茶苦茶なった。
そして思い知らされる。
あたしに居場所なんて、何処にもない。
やっぱり、冷たいままがいいんだ。

「……ねぇ、蓮真君。家族は好き？」
「なんだよ、いきなり…」

困惑を通り越して呆れた様子で蓮真君が返す。
「別に、嫌いじゃない」と答えてあたしの後ろにある押し入れから布団を取り出した。

「椿は？」
「…あたし？」

あたしは。
胸ポケットにしまっていた写真の存在を思い出した。

「愛してる」
「…へぇ、愛してる、か」

蓮真君は特に何も言わない。
愛してるなんて狂言だ、なんて言わなかった。意外だとも、らしくないとも、言わない。

「結婚して」
「またかよ！」

今度は真っ赤な顔で振り向いた。…可愛い。

「ご両親に紹介を」

「もうやめろ！そんな冗談はやめろ！タオルと着替えを持ってくる！」

逃げるように蓮真君は部屋を出ていった。結婚を迫られたら怖じ気づくタイプなのかな。

「……冗談じゃないのに…」

ポツリと呟いて懐から紅い携帯電話を出す。

「嗚呼……短剣拾うの忘れた」

白い短剣。血溜まりの部屋から回収し忘れている。

白い椿が描かれたプレゼント。

…まぁ、いいや。

猫が描かれた短剣だけでいい。どうせこれからは“紅色の黒猫”としか呼ばれないのだから。

蓮真君とお揃いのキーホルダーを詰まんで電源の切った携帯電話を垂らす。

一件も着信はなかった。

「…――――――」

静かに眼を閉じる。

じゃらん、とキーホルダーは掌を滑り紅い携帯電話と一緒に重力に逆らわず落ちた。

……――――ボトッ。

「やっぱり椿ちゃんは情報屋じゃないだろ、殺し屋？」
「いやっ…ちょっと…やめてくれよ…！椿はまだ本調子じゃなくって…兄貴！入るな！」

蓮真君が神奈と共に戻ってきた。だけどあたしはもうそこにはいない。

「あれ？椿ちゃん、いないじゃん」
「え……椿？」

あたしは――――その日から姿を眩ませた。

ＥＮＤ

哀別の悲鳴（後書き）

『裏現実紅殺戮　愛情は狂言』
これにて完結です。
復讐をやってまた闇に堕ち、家出をして終わり。
どうやらこのシリーズにハッピーエンドは無理みたいです。
感想をくれる方々、ありがとうございます。残念ながら返事ができません、ご了承ください。しかし誠に嬉しいです。ありがとうございました。

続編の『裏現実紅殺戮　白と黒と紅』は来月にでも公開します。
家出をして一ヶ月後から物語が始まります。舞台は海外。
よろしければそちらもどうぞご覧ください。
『愛情は狂言』
ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8077n/

裏現実紅殺戮 愛情は狂言

2011年9月9日00時25分発行